国営伊那西部農業水利事業

—緊急発掘調査報告—

船窪・城畑・城平
宮林・山の根遺跡

1983

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

国営伊那西部農業水利事業

―緊急発掘調査報告―

船窪・城畑・城平
宮林・山の根遺跡

1983

伊　那　市　教　育　委　員　会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

序

船窪遺跡は伊那市ますみが丘，城畑遺跡は伊那市西町区大坊，城平，宮林遺跡は伊那市西春近山本，山の根遺跡は伊那市西春近山本，城にそれぞれあります。これらの遺跡は河岸段丘面や，山麓扇状地の扇頂部に位置し，以前より貴重な遺跡として知られていました。

この度，西部開発事業に伴なう，西部送水管事業で遺跡の一部が破壊されることになったため，工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は友野良一先生を団長に，調査員には上伊那に住み，考古学に知識の深い先生方にお願いし，昭和57年7月～12月の長期にかけて実施しました。これらの成果についてはこの報告書に譲ずることにします。

出土した土器，石器類は伊那市西部地域の考古学研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供したと考えられます。

この発掘調査が無事完了するについては関東農政局伊那西部農業水利事業所職員，地元土地改良区役員，地主をはじめとする多数の地元の方々の深い御理解，暖かい御援助によるものであり，ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては，調査団長をはじめとして多数の方々の御尽力によるものであり，重ねて謝意を表するものであります。

昭和58年3月

伊那市教育委員会

教育長　伊澤　一雄

まえがき（船窪・城畑・城平・宮林・山の根遺跡の環境）

位　　置

船窪遺跡は長野県伊那市大字伊那ますみが丘区船窪に，城畑遺跡は伊那市大字伊那西町区大坊に，城平遺跡は伊那市西春近山本に，宮林遺跡は伊那市西春近山本に，山の根遺跡は伊那市西春近山本・城にそれぞれ所在している。遺跡地の現況は船窪遺跡では畑作（一部は牧草，桑園），城畑遺跡では水田，牧草畑，城平遺跡では畑，山林，宮林遺跡では山林，桑畑，山の根遺跡では桑畑にそれぞれ利用されている。

遺跡地の存在する標高を測定すると大般次のようになる。船窪遺跡は790m～815m位，城畑遺跡は778m～787m位，城平遺跡は725m～755m位，宮林遺跡は730m～736m位，山の根遺跡は730m～750m位

遺跡の存在する地点は小黒川を境にして，南北に連らなっている。その連らなり方は北から船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の順であった。船窪・城畑両遺跡に至るまでの経路は二つの場合が最もわかりやすい考え方である。一つとしては国鉄飯田線伊那市駅で下車して，西へ200m位行った所を左折し，西駒ケ岳線を西へと3km程さかのぼっていくと，ますみが丘に達する。この集落を通って西へ500m程行くと，道路の真正面にますみが丘神社の鳥居がみえる。この鳥居の前を左折して小黒川へ向けて南下すると，船窪の集落が数軒立ち並んでいる。この集落の前が船窪遺跡である。船窪遺跡と接して南側が城畑遺跡である。遺跡地に到着するまでには目印となる公私の建物がいくつもある。これを記してみると，上伊那合同庁舎・荒井神社・伊那健康センター・伊那職業訓練所・弥生ケ丘高等学校・伊那中学校・春日神社・伊那家畜保健所・先明様である。

もう一つの道順としては伊那市街地より小沢川の流れに沿ってあけられた道路を西へ4km程行くと中央高速道路のハイウエイが眺められ，この河川にかかったコンクリートの橋梁が眼に映える。この橋の付近一帯に点在する集落が小沢である。小沢の中程にある中小沢橋を渡って，南へ段丘崖を登りつめると，目が開け，左手に伊那西小学校校舎がある。この学校の南側にさきほど述べたますみが丘神社がある。

城平・宮林・山の根遺跡に至る道順は国鉄飯田線伊那市駅を降りて，国道153号線を南へ2km程行くと，天竜川の支流である小黒川が西から東へ流れている。この小黒川は旧伊那町と，旧西春近村の境界線を成していた。この川を渡って最初の道路を右折すると北島屋工業所と言う製材所がある。この製材所の前の道を西へ向けて登っていく。この道路は天竜川と小黒川とによって形成された河岸段丘崖面に開らけているために急折したり，急公配である。この坂を登り切ってしまうと通称小出と言われている平坦面の穀倉地帯が開けている。この所に東西に幅広く直線道路が走っており，この道路を約2km程西へ行くと山本部落に到り，さらに中央高速道の下をくぐり抜けてつきあ

たった所が城平遺跡である。城平遺跡の南側が宮林遺跡である。山の根遺跡は城平遺跡より徒歩で南へ約10分程行った諏訪神社周辺に存在している。

地形・地質

伊那市の市街地から東に目を展ずれば南アルプスの連山が南北に縦走している。伊那市街地から良く眺望がきく南アルプスの山としては東駒ケ岳(2,966m)，鋸岳(2,670m)，仙丈ケ岳（3,033m）間ノ岳（3,189m),北岳（3,192m）等々があげられる。南アルプスは別名赤石山脈といわれ，この山脈の前山として伊那山脈が赤石山脈と同様に南北に縦走している。伊那山脈の主なる山々は守屋山・鉢伏山・三界山・高烏谷山・戸倉山・陣場形山等々である。

伊那山脈の岩相は領家変成岩類・領家花崗岩類や黒雲母粘板岩帯や縞状片麻岩帯等々から成り立っている。

同様に伊那市の市街地から西に目を展ずれば西駒ケ岳，別名木曽駒ケ岳（2,956m）に代表される中央アルプス（木曽山脈）が南北に山なみを連らねている。この山脈の終末が西春近では権現山，西箕輪では経ケ岳や権兵衛峠となっている。駒ケ岳の山頂では西に御岳山（3,063m），乗鞍岳（3,026m）が手にとるように眺められる。駒ケ岳の組成岩石は大部分が中世代の花崗岩や花崗閃緑岩より成り立つ，ところどころに氷河地形（カール）も残存している。経ケ岳の組成岩石は古生代のチヤート・砂岩・粘板岩・石灰岩・輝緑凝灰岩などから形造されている。

先に述べた二つの大きな山脈の間に形成された伊那谷は，二つの山脈と相並んで流れる天竜川によって縦谷状地形を形造し，東，西側から流れ出る大小様々な支流によって堆積作用・浸触作用・運搬作用の度重なるくりかえしによって，大小様々な扇状地・河岸段丘・溪谷が顕著に発達し，見事な造形美を描き出している。伊那市付近も西側では河岸段丘が五段，東側では８段と形成されている。河岸段丘の分類の仕方はロームの堆積状態によって分けるのが一般的である。

伊那市内の主なる段丘をあげてみると次のようになる。手良段丘・六道原段丘・卯ノ木段丘・福島段丘・低位段丘・その他である。火山灰の古い方から分類し，その諸特徴を記してみると次のようになる。〔伊那市史自然編による〕

古期テフラ層―　岩相　粗粒で，風化が著るしく露頭では多くの小断層に切られ，厚さ９m余，著しくスコリア質あるいは軽石質（浮石質）で，pm―Ⅰの下に不整合に存在する。古期テフラ層の露頭数が少ない辰野町荒神山の露頭の模式地も削りとられてしまい現在はない。この模式地の発見時代には，６枚の軽石層と１～２枚のスコリヤ質があった。

中期テフラ層―　岩相　伊那市立東部中学校地籍を模式地とする。全体的に著しく軽石質で，中期テフラ層総厚中540cmのうちで，全軽石（浮石）の厚さは220cmで厚さの⅛以上になる。模式地付近の六道原ではpm―１の稼行がすすんでいる。

軽石（浮石）は，上位よりpm―Ⅰ'；。pm―Ⅰ・pm―Ⅱ・pm―Ⅱ'・pm―Ⅲ浮石（軽石）を５枚確認することができる。軽石（浮石）の色調は，pm―Ⅰ'はピンク色である。pm―Ⅰは本地域では三峰川以北が白色，以南では次第に黄色になっていく。pm―Ⅱ浮石＝軽石は，黄褐色またはオレン

ジ色である。pm—Ⅱ′，浮石（軽石）は，黄褐色～濃いオレンジ色である。pm—Ⅲは，黄褐色または赤味がかった黄褐色である。

新期テフラ層— 岩相 伊那市立東部中学校の校庭の崖を模式地とする。色調のうえでは，新期・中期テフラ層の境界は明瞭であるが，特に顕著な古土壌はみとめられず，この色調を異にする凹凸面より下位部は上位部よりはるかに多くの植物の痕跡を残している。

新期テフラ層には，下位よりpm—Ⅳとpm—Ⅴの軽石＝浮石＝スコリヤ質の2枚がある。pm—Ⅳは特有の赤褐色である。pm—Ⅴは，青味がかったもの，赤褐色のもの黄色のもの等がいりまじっていて，下位のpm—Ⅳとは色調で簡単に区別ができる。

伊那市内の主なる礫層について述べてみると，段丘を形成する礫層と考えても良い。したがって段丘と同じ名称の礫層も数多く存在している。主なる礫層として天神山火砕岩層，手良礫層，平沢礫層，六道原礫層，福島礫層などがあげられる。

遺跡地付近は微地形・微地質に富んでいるので，各々の遺跡毎に述べていくことにする。船窪・城畑遺跡は南側は小黒川，北側は小沢川の影響を受けていると思われる。両遺跡の最深部には両河川の礫層が入り込み，その上にローム層が堆積している。そこで小黒川，小沢川の概略を「伊那市史自然編」によってみると次のようになる。『伊那市西部地域を縦断する水系で，木曽山地の将棊頭山に発し，東に流下し天竜川にそそいでいる。流域は，伊那市竜西地域の河川では広い方である。上流ではやや北東に流れるが，平坦地にでると東にむかって直流している。後背山地が近く，こう配は急傾斜である。特に上流流域は広く，急傾斜である。したがって，流路距離は，伊那市地域では長く，季節的な影響を特にうけている水系である。流量・流速の変化は激しい。そのため，水害の危険が内在している』

『小沢川— 木曽山地の南沢と北沢地籍に発し，東に流下し天竜川にそそいでいる。後背山地である木曽山地が近く，こう配も急で，流路距離もみじかく，したがって，流量・流速の変化もはげしい。特に，水田耕作終了後において西天竜用水の小沢川の放流は急激に流量も増し，流量・流速とも天竜川にそそぐ付近は危険をともなうくらいである』

城平遺跡は黒色土が深く，ローム層まで約1m20cm位あり，基盤自体は割合い安定していた。宮林遺跡は白山沢川と呼ばれる沢の北側にあり，この川はかっては氾濫が激しかったとみえて，各層にもわたって流入したあとがうかがわれた。ローム層面までの深さは1m50cm以上にも及んでいる。

山の根遺跡は南側が小洞という沢に面した南傾斜面に位置している。山麓扇状地の扇頂部に当り，山の押し出しが激烈をきわめたとみえて，礫層の堆積が厚く，ローム層に達するまでには何mあるか想像できない。

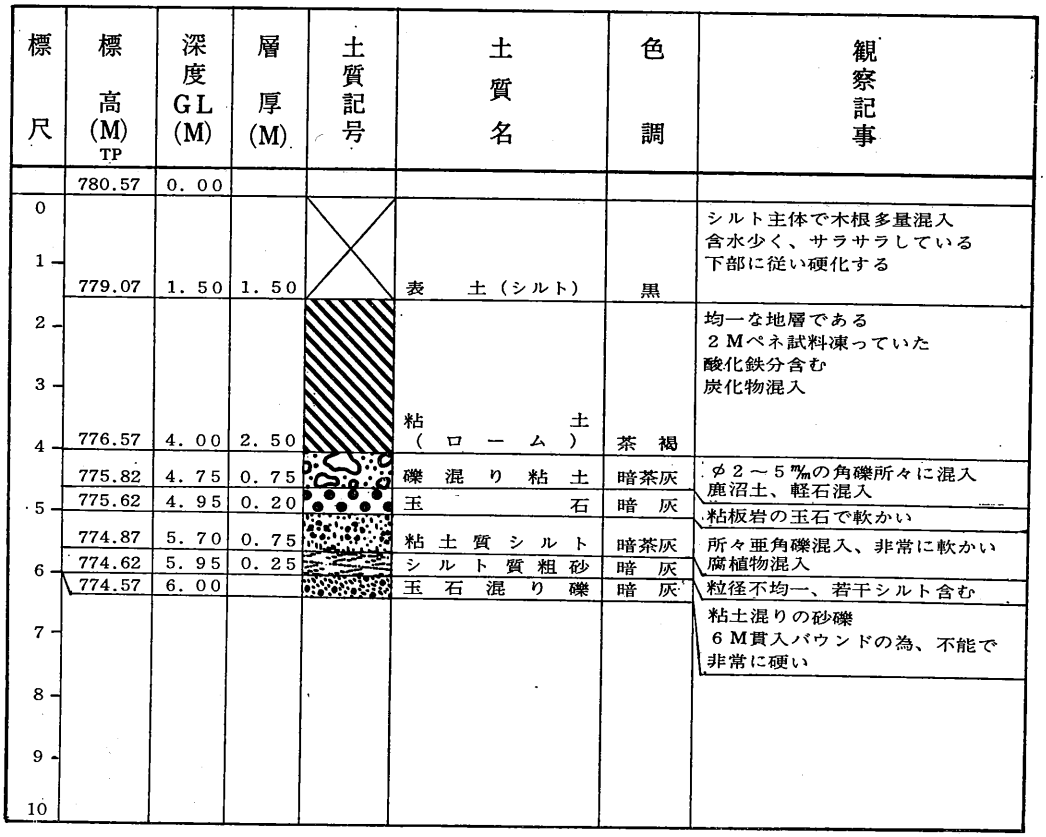
最後に次頁から城畑・船窪両遺跡のボーリング調査結果を掲載しておく，この資料提供は関東農政局伊那西部農業水利事業所によるものであることを記しておくと同時に感謝致す次第であります。

標尺	標高(M) TP	深度GL(M)	層厚(M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	818.82	0.00					
0	818.37	0.45	0.45		表土	黒褐灰	腐植物片の混えるローム質よりなる
1 2 3 4	814.62	4.20	3.75		粘土 (ローム)	茶褐灰	0.40Mの層の境い目は明瞭である スコリア、風化軽石、全体に少量混える　所々腐植物片混える 全体に着色一様、粘性のあるロームよりなり均質な地層である 水分中位 4.20Mの層の境い目に5cm位赤褐灰のローム互層する
5 6 7 8	811.02	7.80	3.60		玉石、転石混り礫 (玉石混り砂礫)	暗灰	φ30～250㎜位、円礫よりなる 全体にシルト含み水分少 平均に暗灰色の礫は硬質で花崗岩質の礫はやや風化され脆くなっているもの多し 7.16Mよりφ500㎜位の転石混える。水分少い、亜円型の礫多し 礫質は頁岩、粘板岩質が多く、硬質であるが、所々花崗岩質の玉石及び礫が混え風化され脆くなっているのが目立つ（現状にてマサ土化されている）
9 10	808.60	10.22			玉石、転石混り礫 (玉石混りシルト質礫)	暗灰	水分ややあるも帯水層はなし 礫間充填物は砂質シルトよりなりよく締っている着色は所々茶灰の砂質シルトを不規則に混え不一様な地層であるφ10～80㎜位が多く所々最大φ150㎜位の玉石も混える 小型の礫は亜円型多く大型の礫は円礫多し、礫質は頁岩、粘板岩質多く硬質である
11 12 13 14 15 16 17 18 19							

船窪遺跡北側土層柱状図（伊那西小学校付近）

標尺	標高 (M) TP	深度 GL (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	824.00	0.00					
0	823.55	0.45	0.45		表土	黒褐灰	上部、草根混えるローム質の表土よりなる
1 2 3 4	819.60	4.40	3.95		粘土（ローム）	茶褐灰	0.45M層の境い目は下部に従って茶褐灰のロームに変る傾向あるも明瞭をなす 全体に砂、軽石、スコリア片等混え砂は3M付近より多く混える 全体に粘性あり、軽石は風化されφ2～3㎜位で脆く指でつぶれる 軽石色は黄褐灰、赤褐灰よりなり円型である スコリアはφ1～2㎜位、亜円型をなし、硬質である 4M付近に帯水層を確認 水位を測ると4.05Mに認めるも、5Mまで無水掘りを行い水位を測ると、水位測定出きず現在6Mまで水位なし
5 6 7 8 9 10	813.92	10.08			玉石、転石混り礫（玉石混りシルト質礫）	暗灰	φ10～100㎜位亜円型の礫多し礫間充填物は水分やや含む砂質シルトよりなりよく締っている 礫質は頁岩、粘板岩質の礫多し 硬質である、最大φ600㎜ 着色は暗灰多く、所々茶灰の砂質シルトを不規則に混える不一様な地層である。水分は極少しめっている程度である φ30～200㎜位が多く所々最大φ600㎜位の軽石も混える 亜円型多く、全体に硬質である 礫間充填物は暗灰の砂質シルト多く所々不規則に茶灰の砂質シルトも混え不一様であるが平均によく締っている、水分はややしめっている程度で少い
11 12 13 14 15 16 17 18 19							

船窪遺跡北側土層柱状図（ますみが丘神社付近）



城畑遺跡南側土層柱状図（小黒川北岸段丘突端付近）

歴史的環境

ここでは歴史的にみてみることを主眼においた項目であることはいまさら言うに及ばないが，考古学的な遺跡については次の項目である周辺遺跡との関連に譲ることにして，ここでは文献史の上での今回発掘調査された遺跡の周辺の歴史を述べていくことにする。

伊那郡の名称が史料の上で初見されるのは正倉院御物の庸布に記された天平10年（738）の墨書銘で，「信濃国伊那郡小村郷交易布一段」と記されているものである。この墨書銘の歴史的な意義づけは奈良時代に伊那郡と小村郷が存在していたことである。

平安時代承平5年（935）に源順が選述した「倭名類聚鈔」という書物のなかに現在の伊那市に関係している郷名がみられる。この郷名としては伊那郡の中で福智と小村，諏訪郡では佐補，美和，弓良があげられる。

福智―「布久知」と読み，現在，伊那市富県に南福地，北福地が存在している。想像するに，この郷の範囲は北は三峰川，西は天竜川が境となり，あるいは河南，東伊那，中沢までも含んでいたかも知れない。

小村―「乎無良」と読む。天竜川の西側にあったと考えられているが，現在は諸説があって確た

る定説はない。最近では小村郷は上伊那ではなくて下伊那ではないかと言う異説も出始めている。

弓良一「返良」とも言われている。現在の伊那市手良付近一帯を中心とした地域で，南の境界は三峯川に接し，北は箕輪町付近，西は天竜川左岸に接していると考えられている。以上三郷について述べてきたが，今回発掘調査した地域は，小村郷の位置について諸説はあるが，一般的にみて，この郷のなかに含まれると思われる。

報告書の標題にかかげた5ヵ所の遺跡付近の中世史の変遷を記してみることにする。

(1) 甲斐源氏の伊那谷への侵入

甲斐源氏の武田太郎信義・一條次郎忠頼等は石橋山合戦の後，源頼朝を尋ねて駿河国へ行こうと考えたが，平家の方人が信濃国に勢力を張っているのを聞いて，治承4年（1180）9月10日に先ず軍を諏訪に進めた。諏訪の庵沢に至って，ここで陣をひいた。深夜この忠頼の陣に年若き1人の女が来て次のように言いました。この言った内容については『市村咸人全集第四巻』には下記のように記してある。

「みづからは諏訪大祝篤光の妻である。夫は源家の武運を祈らんため，既に3ヶ日の間社頭に参籠して居たが，只今夢想あり，梶の葉の模様ついたる直垂を着用し，葦毛の馬にまたがりたる武者1騎，源氏に味方せんとて西方に馳せ去った。是れ偏に大明神の示現にして，明神が源氏を助け給ふのである。この事夫より申上ぐべき筈であるが，只今神前に侍するの間代りて参上したのである」

忠頼は明神の霊験あらたかなるを強く感じ，剣一腰，腹巻一領を取って，彼女に与えた。兵を伊那谷へ進め，菅冠者友則のいる駒ケ根市大田切城を襲った。菅冠者友則はこれを聞いて一度も戦わないで，自分の居館に火をつけて焼き，自殺した。信義・忠頼は軍を収めて根上河原に陣し，簡単菅冠者を討滅できたことを祝い，さらにこの大勝は神の加護によるものであると確信し，上社に平出・宮所両郷を，下社に辰野，岡谷両郷を寄進にて甲斐に凱旋したのである。

(2) 犬房丸伝説

曽我兄弟の仇討ちの的になったのが工藤祐経である。この祐経の子が犬房丸である。この犬房丸は父が殺されて，なげき悲しみのあまりに，捕縛されている曽我五郎に向かって鉄扇にて額を討ってしまった。これを見ていた頼朝のいかりに触れて，犬房丸は七島のある伊那の地に流刑になったというのが犬房丸伝説である。この伝説は青森県八戸市，宮崎県日向市にも前述したのと類似した伝説が残存している。この伝説の定説はない。

(3) 西春近に於ける工藤氏

犬房丸伝説から尾を引いている工藤氏は西春近に落ち着き，工藤氏を名乗っていたが，師能の時に小井弓に住んだ理由から小井弓の名をとって小井弓氏を名乗る。小井弓氏はその後室町中期頃諏訪神社の神氏に従って，大方諏訪の地に移住する。この時に移住しなかった諸士が「伊那武鑑根元記」に登場し，工藤姓を名乗っている土豪達であろうと考えられる。彼等は戦国末期高遠城の家来であったが，高遠城滅亡後は民間に降るとこの古記録には記されている。

(4) 吾妻鏡にみられる小井弓氏

鎌倉時代に書れた「吾妻鏡」のなかに小井弓氏に関係した事柄が六ヵ所にわたって掲載されてい

る。これらを時代的に列記してみると次のようになる。

安貞3年（1229）正月3日

貞永2年（天福元年）（1233）正月2日

嘉禎3年（1237）正月3日

暦仁元年（1238）正月3日

仁治元年（1240）正月3日

仁治2年（1241）正月3日

(5) 工藤文書・小井弖文書について

前項で述べた工藤氏あるいは小井弖氏についてかかれた文書を工藤文書あるいは小井弖文書と呼んでいる。現在は五通残っており，諏訪市在住矢島彦治氏の所蔵となっている。これら5通内容は譲状，争論，裁許状であって，伊那市西春近を含めた伊那市全域を知る中世史料としては極めて貴重である。これらを古い順に羅列してみると次のようになる。

◎建長3年（1251）2月5日付の藤原能綱が嫡子師能に与えた譲状

◎建長3年（1251）2月6日付の藤原能綱が庶子宮熊わういに与えた譲状

◎建長3年（1251）2月5日付の藤原能綱の譲状より，時の鎌倉幕府はその嫡子工藤師能に対し，建長3年12月14日付で所領安堵の下文を出した安堵状

◎建長4年（1252）8月7日付の小井弖兄弟所領相論裁許状信濃国春近領小井弖弥二郎師能と，舎弟宮熊が代馬保信と相論，小井弖二吉郷内の田の事，北条時頼之を裁す。

◎正応元年（1288）11月3日付の幕府小井弖道覚（忠綱）の訴を斥けて盛綱には例の如く弁済せしむ。これに対し幕府は北条貞時の名における下知文を下している。

(6) 中先代の乱及び大徳王寺城の合戦

この二つの大きな乱及び合戦は信濃中世史研究の上で欠かすことのできない大きな出来事である。よってどの解説書にも概略については述べられているので今回は省略する。ここでは影響について述べることにする。

中先代の乱― 小井弖氏は北条氏と親密関係にあったために，北条時行挙兵の時は何んの文献にも記されていないが，おそらく参戦したのであろう。

大徳王寺城の合戦い― 諏訪の神家の党として小井弖氏があげられる。従ってこの戦争に参加した事実は当然と考えてよかろう。

(7) 大塔合戦と西春近

合戦の内容については今回は省略する。この合戦に小笠原軍として加わわった兵士として，『大塔合戦記』に下牧尾張守，小井弖薩摩守五郎の名がみられる。

(8) 結城合戦と西春近

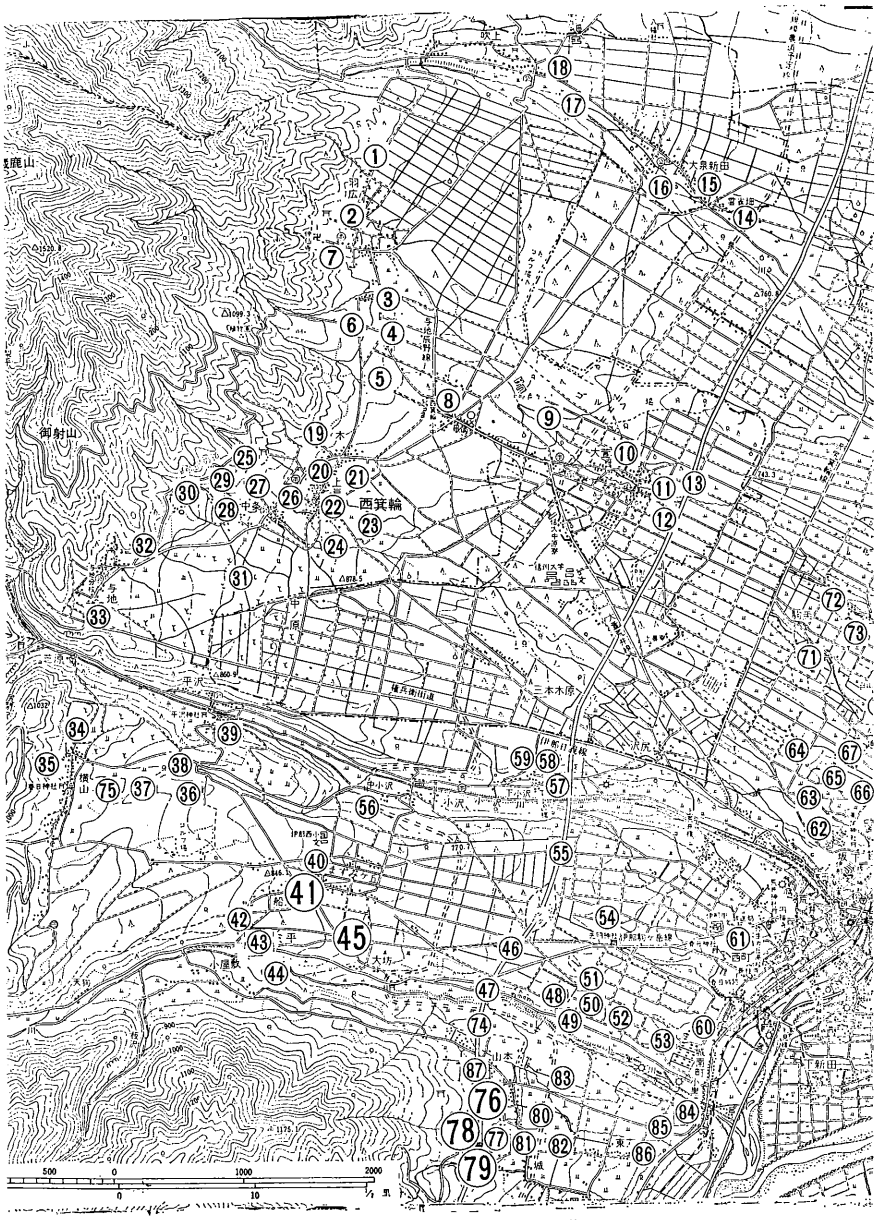
合戦の内容については今回は省略する。この戦いの事柄を記したのに「結城陣番帳」がある。このなかに24番「小井忌（弖）殿」の名がみられる。

（飯塚政美）

周辺遺跡との関連

船窪・城畑・城平・宮林・山の根遺跡を含めた伊那市竜西北部地区で現在確認されている遺跡は87カ所を数える。その分布状態は次頁の伊那市竜西北部地区遺跡分布図に明示してある。これらの遺跡の内訳を簡潔に羅列すると次のようになる。羅列の仕方は分布図の番号順に原則として従うことにする。

遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
北割遺跡	西箕輪羽広	扇状地	(縄) 中期竪穴住居4 勝坂式，加曽利E式，打石斧，磨石斧，凹石，石匙，十字形土製品 (弥) 中島式 (昭51年発掘)
田代 〃	〃 〃	扇端	(縄) 五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，打石斧，磨石斧
古屋敷 〃	〃 〃	扇状地	(縄) 中期土壙1 勝坂式，加曽利E式，打石斧，磨石斧 (弥) 中島式 (中) 柱穴 (昭50年発掘)
金鋳場 〃	〃 〃	扇端	(縄) 五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，打石斧，石匙，敲石斧 (平) 竪穴住居13 土師器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，鞴羽口，鉄鏃，鉄滓 (昭51.53年発掘)
財木遺跡	〃 〃	扇状地	(縄) 中期初頭小竪穴 五領ヶ台式，梨久保式，勝坂式，加曽利B式，凹石，石皿 (昭51年発掘)
蔵鹿山麓 〃	〃 〃	山麓	(先) 石核
経ヶ岳山麓 〃	〃 〃	〃	(平) 和鏡
西箕輪小学校北	〃 大萱	扇端	(平) 土師器
大萱西 〃	〃 〃	台地	(先) 尖頭器 (縄) 加曽利E式 (昭48年発掘)
伊那養護学校	〃 〃	〃	(先) 石核
熊野神社	〃 〃	〃	(縄) 加曽利E式



伊那市竜西北部地区遺跡分布図

遺跡の名称

1	北　割	19	殿屋敷	37	おぐし沢	55	城　楽	73	大清水
2	田　代	20	天庄１	33	丸山清水	56	小沢原	74	山本田代
3	古屋敷	21	上　戸	39	穴　沢	57	小沢神社	75	関　畑
4	金鋳場	22	天庄２	40	ますみケ丘	58	月見松経塚	**76**	**城　平**
5	財　木	23	溝　畑	**41**	**船　窪**	59	月見松	77	常輪寺址
6	蔵鹿山麓	24	下の原	42	鼠平２	60	ウグイス原団地	**78**	**宮　林**
7	経ケ岳山麓	25	堂　洞	43	鼠平１	61	上の山	**79**	**山の根**
8	西箕輪小学校	26	富士垣外	44	上手原	62	高　尾	80	山　本
9	大萱西	27	宮垣外	**45**	**城　畑**	63	鳥居原	81	常輪寺下
10	伊那養護学校	28	堀の内	46	ますみケ丘	64	石　塚	82	上　村
11	熊野神社	29	上の原	47	赤　坂	65	今　泉	83	北　条
12	富士塚	30	小花岡	48	伊勢並	66	原垣外	84	上島下
13	在　家	31	中の原	49	八人塚古墳	67	かんぜん	85	上　島
14	高　根	32	与地山寺	50	狐塚南古墳	68	御園東部	86	東方Ｂ
15	久保畑	33	与地原	51	狐塚北古墳	69	御園南部	87	城平上
16	塚畑高根	34	北　方	52	山の神	70	宮の前		
17	中道南	35	矢塚畑	53	小黒南原	71	清水洞		
18	桜　畑	36	八人塚	54	富士塚	72	牧ケ原		

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
富士塚遺跡	西箕輪大萱	段　丘	(弥) 磨石鏃
在　家　〃	〃　〃	〃	(縄) 加曽利E式 (平) 土師器，須恵器
高　根　〃	〃 大泉新田	台　地	(縄) 勝坂式，加曽利E式 (弥) 中島式
久保田　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期土器 (平) 土師器，須恵器，灰釉陶器
塚田高根　〃	〃　〃	段　丘	(縄) 勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，石鏃，打石斧，敲石斧，黒曜石 (弥) 土器
中道南　〃	〃　〃	台　地	(縄) 加曽利E式，打石斧
桜畑遺跡	〃　〃	段　丘	(縄) 加曽利E式，石鏃，打石斧，磨石斧，敲石斧，石皿，釣針状石器，石棒，土偶　中期初頭竪穴住居1 (平) 布目瓦 (昭55年発掘)
殿屋敷　〃	〃　梨ノ木	扇状地	(縄) 加曽利E式，打石斧，磨石斧，有孔大珠
天庄Ⅰ遺跡	〃　中条	〃	(縄) 五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，打石斧，磨石斧 (平) 土師器，須恵器
上　戸　〃	〃　上戸	〃	(縄) 中期土器
天庄Ⅱ　〃	〃　中条	〃	(縄) 中期竪穴住居2 木島式，黒浜式，中期土器，安行式，大洞式，樫王式，五貫森式，打石斧，磨石，横刃形石器，凹石 (昭54年発掘)
溝　畑　〃	〃　〃	〃	(奈) 土師器，須恵器
下の原　〃	〃　〃	台　地	(縄) 中期土器
堂　洞　〃	〃　〃	扇状地	(平) 土師器，須恵器
富士垣外　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期土器
宮垣外　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期竪穴住居2，土壙10 五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，打石斧，磨石斧，砥石，石棒，黒曜石 (弥) 竪穴住居1 後期土器 (奈) 竪穴住居1 土師器，須恵器 (平) 竪穴住居2，竪穴1，柱穴群1 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭54年発掘)

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
堀の内　〃	西箕輪中条	扇状地	(縄) 茅山式，北白川下層式，中期土器，打石斧，磨石斧，石棒，石錘 (中) 空堀 (近) 建物址 (昭54年発掘)
上の原　〃	〃　〃	〃	(平) 土師器，須恵器
小花岡　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期竪穴住居1，土壙2 中期初頭型式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，石鏃，打石斧，横刃形石器，石棒 (平) 土師器，須恵器 (昭54年発掘)
中の原　〃	〃　〃	舌状台地	(縄) 中期土器，打石斧 (弥) 磨石鏃 (平) 竪穴住居2 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭50年発掘)
与地山手　〃	〃　与地	扇状地	(縄) 中期土器
与地原　〃	〃　〃	〃	(縄) ロームマウンド1 加曽利E式，石鏃，打石斧 (近) 土壙 (昭51年発掘)
北　方　〃	伊那　横山	扇状地	(縄) 中期土器
矢塚畑　〃	〃　〃	山　麓	(縄) 石鏃
八人塚　〃	〃　〃	段　丘	(縄) 中期竪穴住居7，土壙1 中期初頭型式，勝坂式，加曽利E式，石鏃，打石斧，磨石斧，石匙，石錐 (昭53年発掘)
おぐし沢　〃	〃　〃	台　地	(縄) 茅山式，勝坂式，加曽利E式，磨石斧，礫器，棒状石器，石匙，砥石 (平) 竪穴住居1，土壙 土師器，灰釉陶器 (中) 土壙 内耳土器 (昭51年発掘)
丸山清水　〃	〃　平沢	段　丘	(縄) 竪穴住居20，ロームマウンド1，土壙17 梨久保式，平出ⅢA式，藤内式，井戸尻式，曽利式，打石斧，磨石，磨石斧，横刃形石器，棒状石器，石刀，石錘 (平) 竪穴住居3 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭52年発掘)
穴　沢　〃	〃　横山	台　地	(縄) 勝坂式，加曽利E式

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
ますみが丘上遺跡	伊那・小黒原	台　地	（縄）中期土器，石器
船　窪　〃	〃　船窪	〃	（縄）中期土器 （中）陶器
鼠平Ⅱ　〃	〃　鼠平	段　丘	（縄）中期土器 （平）土師器，須恵器，灰釉陶器
鼠平Ⅰ　〃	〃　〃	〃	（先）ナイフ形石器，尖頭器 （縄）加曽利Ｅ式，晩期土器，石鏃，打石斧，敲石斧，凹石，石匙，石冠，玉，土偶 （弥）磨石鏃
上手原　〃	〃　大坊	台　地	（縄）中期土器
城　畑　〃	〃	〃	（縄）前期土器，中期初頭型式，勝坂式，加曽利Ｅ式，石鏃，打石斧，敲石斧，敲石，石皿，石匙
ますみが丘　〃	〃　小黒原	台　地	（縄）中期土器，石鏃，打石斧 （中）溝状址 （昭48年発掘）
赤　坂　〃	〃　〃	段　丘	（縄）中期土壙 木島式，中期土器，石鏃，打石斧，石匙，削器 （昭48年発掘）
伊勢並　〃	〃　〃	〃	（先）尖頭器，剝片石器 （縄）中期竪穴住居１ 格子目押型文土器，斜縄文土器，天神山式，木島式，加曽利Ｅ式，石鏃，石槍，爪形掻器，打石斧，片刃石斧，磨石，敲石，石匙，石錘，滑石製有孔玉 （弥）中期土器，有孔磨石鏃，石庖丁 （平）土師器，須恵器，灰釉陶器，青銅鏡 （昭38年発掘）
八人塚古墳	西町・小黒原	段　丘	（古）円(径19.3,高2.0),横 直刀３，刀子２，鉄鏃，管玉２，丸玉３，須恵器
狐塚南　〃	〃　〃	〃	（古）円(径24.4,高3.0),横 鉄鏃，刀子，轡，金環，玉，杏葉３，土師器，須恵器
狐塚北　〃	西町　〃	段　丘	（古）円(径14.4,高3.0),横
山の神　〃	伊那　〃	〃	（縄）土壙 早期土器，加曽利Ｅ式，打石斧，磨石斧，玉，土錘 （弥）土器 （平）土師器，須恵器，灰釉陶器 （中）陶器(天目) （昭50年発掘）

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
小黒南原遺跡	伊那・西町	台　地	(縄) 中期初頭型式，加曽利E式，石鏃，打石斧，磨石斧，石匙，土錘，円石
富士塚　〃	〃　小黒原	段　丘	(近) 塚
城　楽　〃	〃　〃	〃	(縄) 前期末土壙1，後期土壙1，ロームマウンド1 楕円押型文土器，下島式，堀ノ内式，石鏃，打石斧，石錘 (近) 井戸 (原田旧井址) (昭48年発掘)
小沢原　〃	〃　小沢	〃	(縄) 中期土器，打石斧
小沢神社遺跡	〃　〃	〃	(縄) 中期土器，石棒
月見松1号経塚	〃　〃	台　地	(古) 円(径7.8,高1.0)
〃　3号〃	〃　〃	〃	(古) 円
月見松遺跡	〃　下小沢	丘　陵	(先) 細石刃核，有舌尖頭器 (縄) 前期竪穴住居1，中期竪穴住居103，土壙901 諸磯C式，平出ⅢA式，梨久保式，勝坂式，加曽利E式，加曽利B式，石鏃，打石斧，磨石斧，石匙，石錐，石皿，磨石，敲石，凹石，石錘，石棒，土製円板，土偶，ドングリ (平) 竪穴住居8 土師器，須恵器，灰釉陶器，鉄鎌，刀子 (中) 城跡，火葬墓3 古銭 (昭43 48 51年発掘)
ウグイス原　〃	〃　西町	台　地	(平) 土師器
上の山　〃	〃　〃	〃	(縄) 勝坂式，打石斧 (平) 土師器，須恵器，灰釉陶器
高　尾　〃	〃　山寺	段　丘	(縄) 前期竪穴住居1 押型文土器，茅山式，北白川下層式，花積下層式，関山式，黒浜式，諸磯A・B・C式，石鏃，打石斧，石匙 (昭46年発掘)
鳥居原　〃	〃　〃	丘　陵	(縄) 五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，打石斧，磨石斧，敲石斧，有頭石棒 (古) 須恵器 (平) 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭39年発掘)
石　塚　〃	〃　〃	〃	(縄) 勝坂式，加曽利E式，石鏃，打石斧，局部磨製石斧，石匙，石錘，敲石斧

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
今　泉　遺　跡	〃　山寺	丘　陵	(縄) 押型文土器，撚糸文土器，茅山式，黒浜式，諸磯B・C式，五領ヶ台式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，晩期土器，打石斧，敲石斧，石匙，石錐，石錘 (平) 土師器，須恵器 (昭53.51年発掘)
原垣外　〃	〃　〃	〃	(縄) 加曽利E式，打石斧，磨石斧，石錘 (平) 土師器，須恵器，灰釉陶器
カンゼン　〃	〃　山寺	〃	(縄) 石鏃，打石斧，磨石斧，石錐 (平) 須恵器
御園東部　〃	〃　御園	〃	(縄) 中期土器
御園南部　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期土器 (平) 土師器，須恵器，灰釉陶器
宮の前　〃	〃　〃	丘　陵	(先) ナイフ形石器 (縄) 勝坂式，加曽利E式，石鏃，打石斧，石皿，磨石斧，敲石斧，鑿形磨石斧，石錐，石匙，石棒 (弥) 土器 (古) 須恵器 (平) 土師器，須恵器
清水洞　〃	〃　〃	段　丘	(縄) 楕円押型文土器，中期初頭型式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式，晩期土器，石鏃，打石斧，石皿，磨石斧，敲石斧，石匙，石錐，石錘 (弥) 土器 (古) 土師器，須恵器 (平) 須恵吾
牧ヶ原　〃	伊那・御園	丘　陵	(先) ナイフ形石器，尖頭器，掻器，ドリル石刃 (昭38年発掘)
大清水　〃	〃　〃	〃	(縄) 中期土器
山本田代　〃	西春近・山本	段　丘	(縄) 中期初頭型式，後期土器，打石斧，磨石斧 (平) 竪穴住居6，小竪穴 土師器，須恵器，灰釉陶器，鉄鏃，刀子，鉸具，鉄滓 (中) 土鍋，陶器(黄瀬戸，天目) (近) 陶器，青銅製品 (昭48年発掘)

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
関畑遺跡	伊那横山	台　地	(縄) 中期土器
城平　〃	西春近山本	扇状地	(縄) 竪穴住居1 中期末・後・晩期土器，磨石，石棒 (平) 竪穴住居8 土師器，須恵器，灰釉陶器，砥石，刀子 (中) 地下倉3，小竪穴2，墓壙4 内耳土器，陶器(黄瀬戸，天目，備前)，青磁，石臼，砥石，刀子，ピンセット状鉄製品，釘，火打金具，古銭 (昭47年発掘) (近) 寺院址，井戸址
常輪寺跡	〃　〃	〃	(中) 寺跡
宮林　〃	〃　城	〃	(縄) 押型文土器，加曽利E式，打石斧，焼石
山の根　〃	〃　〃	〃	(縄) 前期土壙，中期竪穴住居2，土壙1，粕畑式，諸磯C式，加曽利E式，後期土器，打石斧，砥石，黒曜石片，クルミ (弥) 竪穴住居1 中島式 (平) 竪穴住居4，小竪穴1 土師器，須恵器，灰釉陶器，銅製鋺 (中) 竪穴 内耳土器，天目茶碗 (昭47年発掘)
山本　〃	西春近・山本	台　地	(縄) 中・後期土器，打石斧 (弥) 土器
常輪寺下　〃	〃　〃	扇状地	(縄) 中期竪穴住居18，土壙7 梨久保式，五領ヶ台式，平出ⅢA式，阿玉台式，勝坂式，加曽利E式，大洞A・C_2式 (奈) 竪穴住居1 土師器，須恵器 (平) 竪穴住居1 土師器，須恵器，灰釉陶器 (中) 柱穴群 陶器(常滑，中津川，古瀬戸，美濃，黄瀬戸)，青磁，鞴羽口 (昭49年発掘)
上村　〃	〃　上村	段　丘	(縄) 中期土器，打石斧，敲打器 (弥) 中島式

遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構　・　遺　物
北　条　遺　跡	西春近・山本	段　丘	(縄) 中期竪穴住居8，中期土壙4，配石1　勝坂式，加曽利E式，石斧，打石斧，磨石，凹石，磨石斧，剝片石器，砥石，棒状石器，石錘 (奈) 竪穴住居1 土師器，須恵器，陶硯 (平) 竪穴住居2 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭49年発掘)
上島下　〃	〃　上島	〃	(縄) 黒浜式
上　島　〃	〃　〃	〃	(先) 剝片 (縄) 前期竪穴住居2，小竪穴2 木島式，北白川下層式，黒浜式，諸磯A・B・C式，大歳山式，打石斧，磨石，敲石，石皿，礫器，横刃形石器，棒状石器 (平) 竪穴住居1，小竪穴1 土師器，須恵器，灰釉陶器 (昭48年発掘)
東方B　〃	〃　東方	〃	(縄) 中期土器，打石斧
城平上　〃	〃　山本	扇状地	(縄) 中期土器 (平) 土師器，須恵器 (昭47年発掘)

以上87カ所の遺跡のうちで極だった遺跡としては月見松遺跡があげられる。この遺跡の概略について『伊那市の文化財』によれば次のように記してある。『月見松遺跡は昭和45年11月21日伊那市史跡に指定された。全国でも屈指の，縄文中期を主体とした大遺跡である。その立地は小沢川左岸段丘上にあり，遺跡の東端を中央道が，また北端を旧権兵衛街道が通過している。天竜川・三峰川により形成された河岸段丘は，伊那谷でも伊那市を中心に最も広く，その大地も安定している。ここに所在する月見松遺跡は，その規模の大きさ，出土品の量の豊かさから早くから注目された』いままでに昭和43年度に開田事業により第1次調査を，昭和48年度に中央高速道路により第2次調査を，昭和51年度に開田事業により第3次調査をそれぞれ実施した。過去3回の調査によって検出された遺構は縄文時代・平安時代の竪穴住居址111軒，土壙886基，その他，竪穴，土壙，集石遺構等々数多いものであった。第3次調査によって検出された住居址を簡単な表にまとめてみると次頁のようになる。第3次調査によって検出された遺構に付随した遺物を次々頁より掲載します。

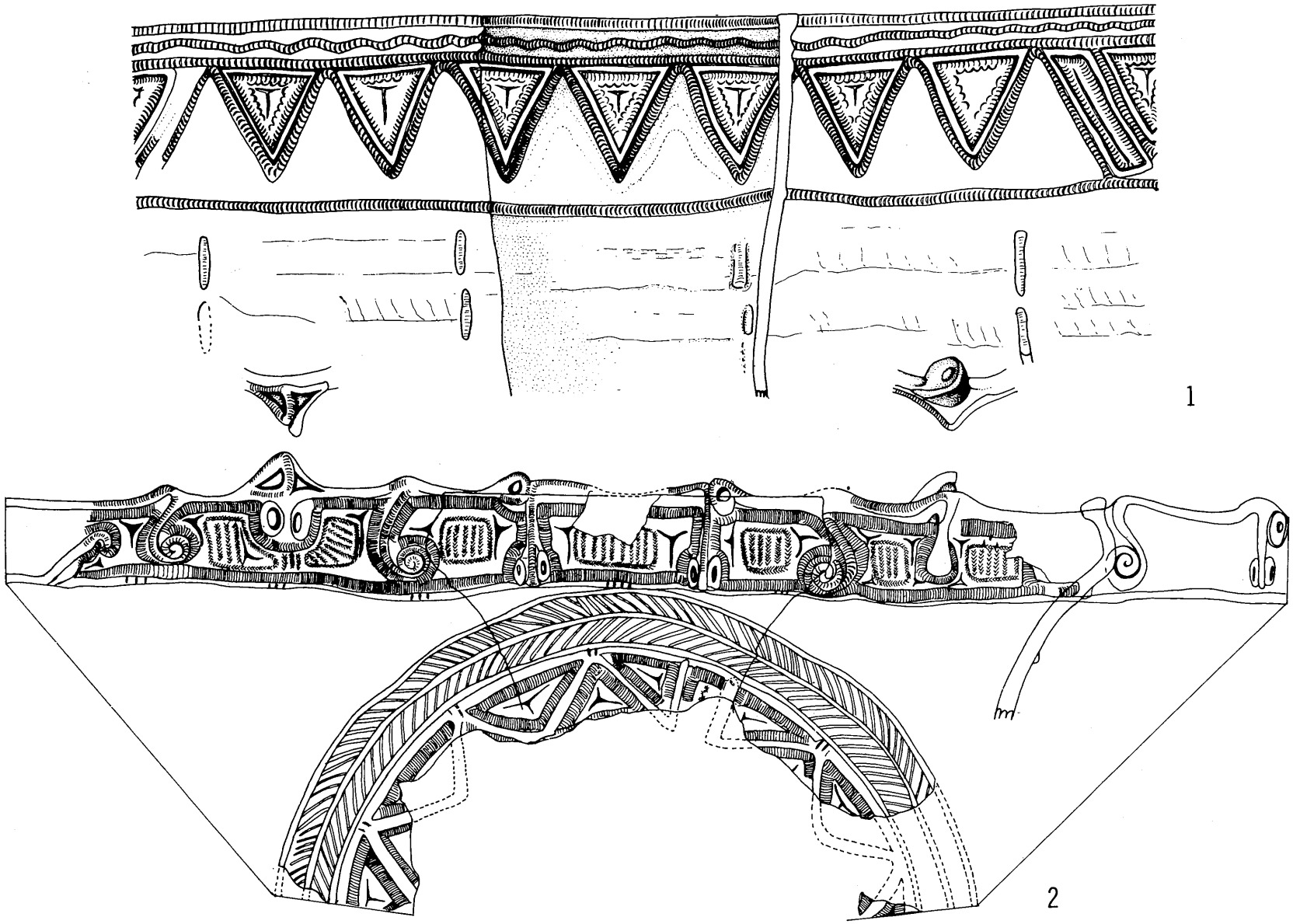
住 居 址 要 目 一 覧 表

住居址番号	プラン	規模(m) 南北	規模(m) 東西	炉	比定時期
70	円	4.6	4.8	石囲炉	曽利Ⅰ
71	楕円	4.0	4.5	石囲炉	新　道
72	円	5.7	5.7	石囲炉	井戸尻Ⅲ
73	円	4.6	4.4	石囲炉	井戸尻Ⅲ
74	円?	?	?	不　詳	井戸尻Ⅲ
75	円?	?	?	地床炉	諸磯C
76	円	?	?	地床炉	井戸尻Ⅱ
77	円	4.9	4.7	石囲炉 地床炉	井戸尻Ⅲ
78	楕円	4.3	2.3	埋甕炉	新　道
79	円	?	?	石囲炉	藤内Ⅰ
80	長円?	4.0	3.5	埋甕炉	九兵衛尾根Ⅱ
81	円	4.4	4.7	石囲炉	井戸尻Ⅲ
82	円	5.0	?	地床炉	藤内Ⅰ
83	円	?	3.5	不　詳	新　道
84	円	4.5	不明	石囲炉	新　道
85	円	5.9	5.9	地床炉	井戸尻Ⅲ
86	楕円	4.0	4.8	石囲炉	藤内Ⅰ
87	円	5.3	?	石囲炉	藤内Ⅱ
88	円	5.1	?	地床炉	藤内Ⅱ
89	円	5.0	5.0	石囲炉	井戸尻Ⅲ
90	円	?	?	不　詳	藤内Ⅱ
91	円	5.25	?	地床炉	新　道
92	円	5.0	5.3	石囲炉	藤内Ⅱ
93	円	3.5	3.5	石囲炉	藤内Ⅰ
94	円	3.5	3.5	地床炉	梨久保?
95	円	3.6	3.5	地床炉	新　道
96	円	3.4	3.5	地床炉	井戸尻Ⅱ
97	楕円	4.0	5.0	石囲炉	井戸尻Ⅱ
98	円	5.03	5.07	石囲炉	曽利Ⅰ
99	円	3.5	?	埋甕炉	九兵尾根Ⅰ
100	円?	?	?	石囲炉	井戸尻Ⅰ

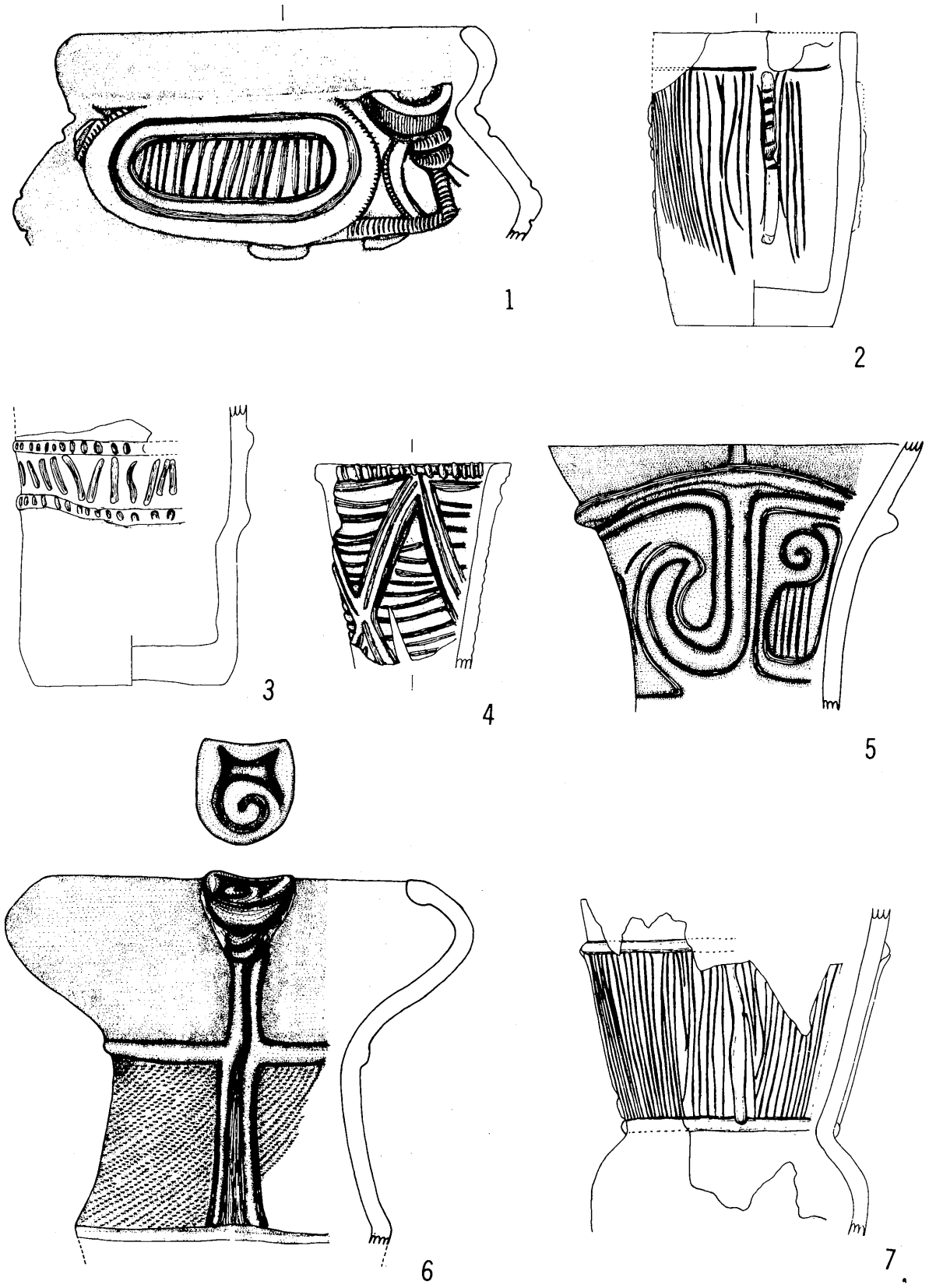
住居址番号	プラン	規模(m) 南北	規模(m) 東西	炉	比定時期
101	円	5.68	5.56	石囲炉	曽利Ⅰ
102	円	5.0	4.35	石囲炉	井戸尻Ⅲ
103	円	4.0	4.0	地床炉	新　道
104	円	4.2	4.06	石囲炉	不　詳
105	長方	3.65	2.02	石　組 粘土カマド	国分Ⅲ
106	不正長円	5.8	4.25	石囲炉 地床炉	井戸尻Ⅱ
107	円?	?	?	不　詳	不　詳
108	円	5.0	?	石囲炉	井戸尻Ⅱ
109	円	?	?	石囲炉	藤内Ⅰ
110	円	4.9	4.5	石囲炉	井戸尻Ⅰ
111	円	3.4	?	石囲炉	月見松Ⅰ

参考文献

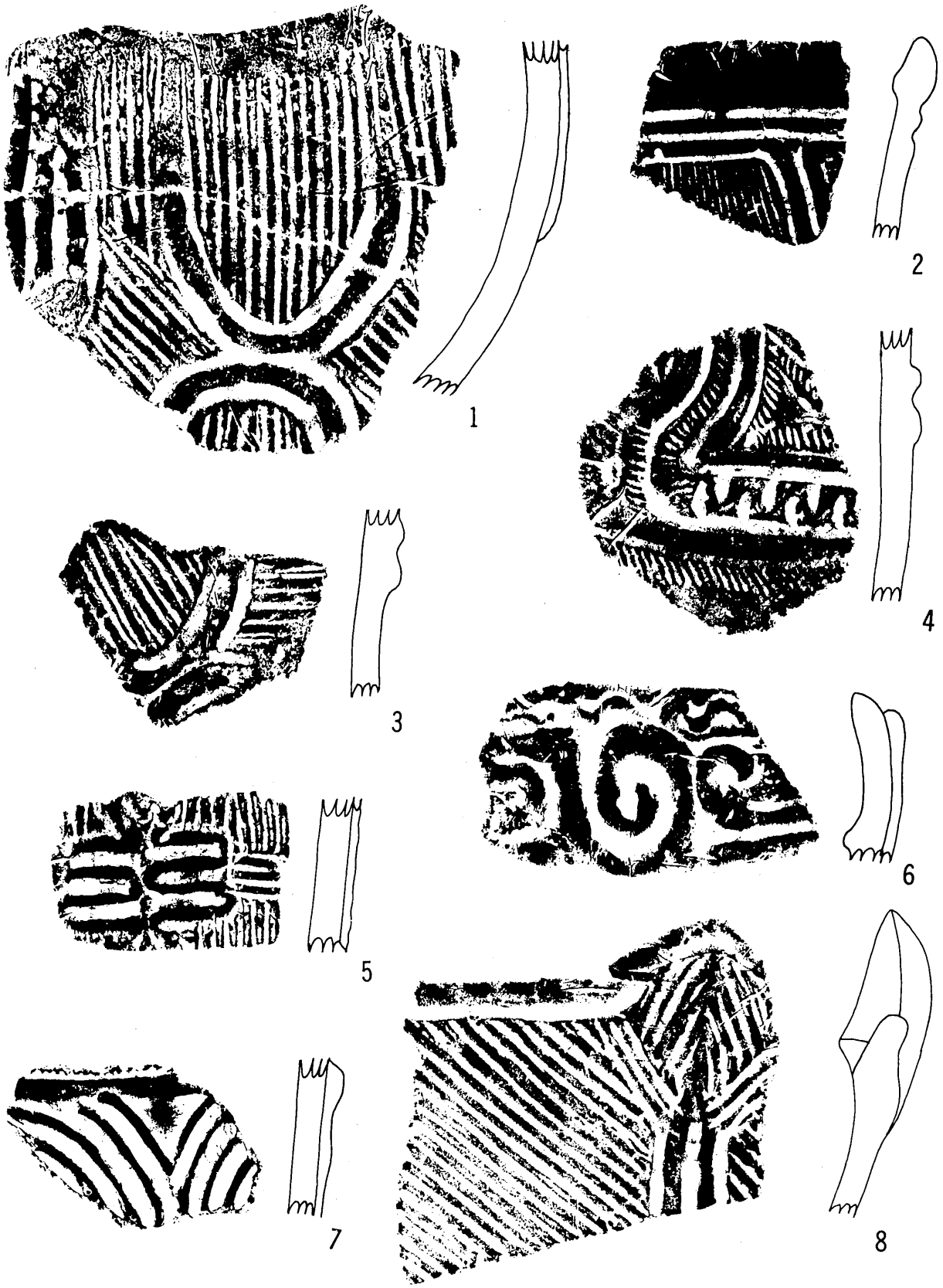
- 長野県史（考古資料編）
  長野県史刊行会刊
- 月見松遺跡第Ⅲ次緊急発掘調査報告書
  伊那市教育委員会刊
- 伊那市の文化財
  伊那市教育委員会刊
- 伊那路
  上伊那郷土研究会刊



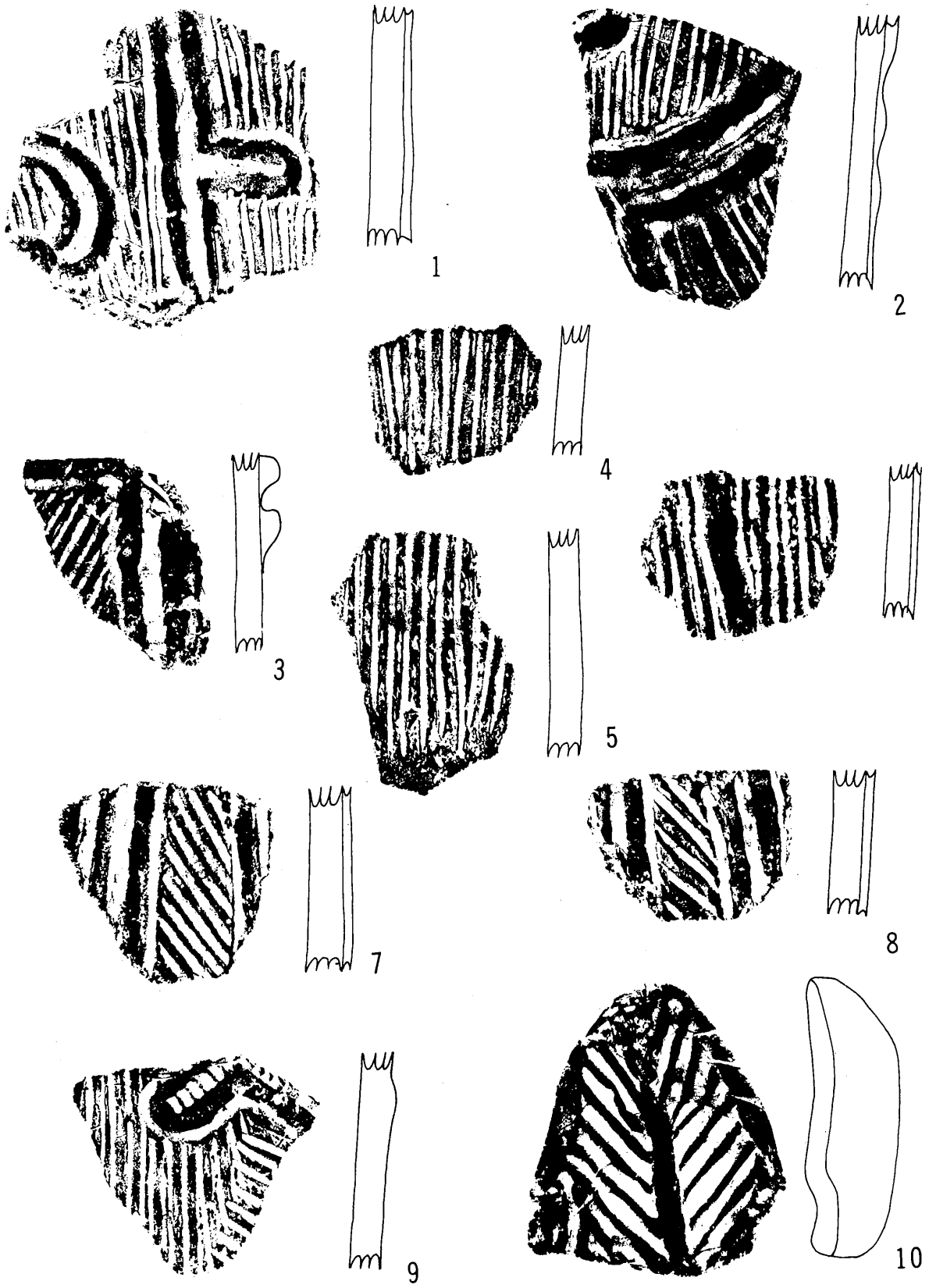
第2図　1　78号住居址出土　2　95号住居址出土　縮尺¼



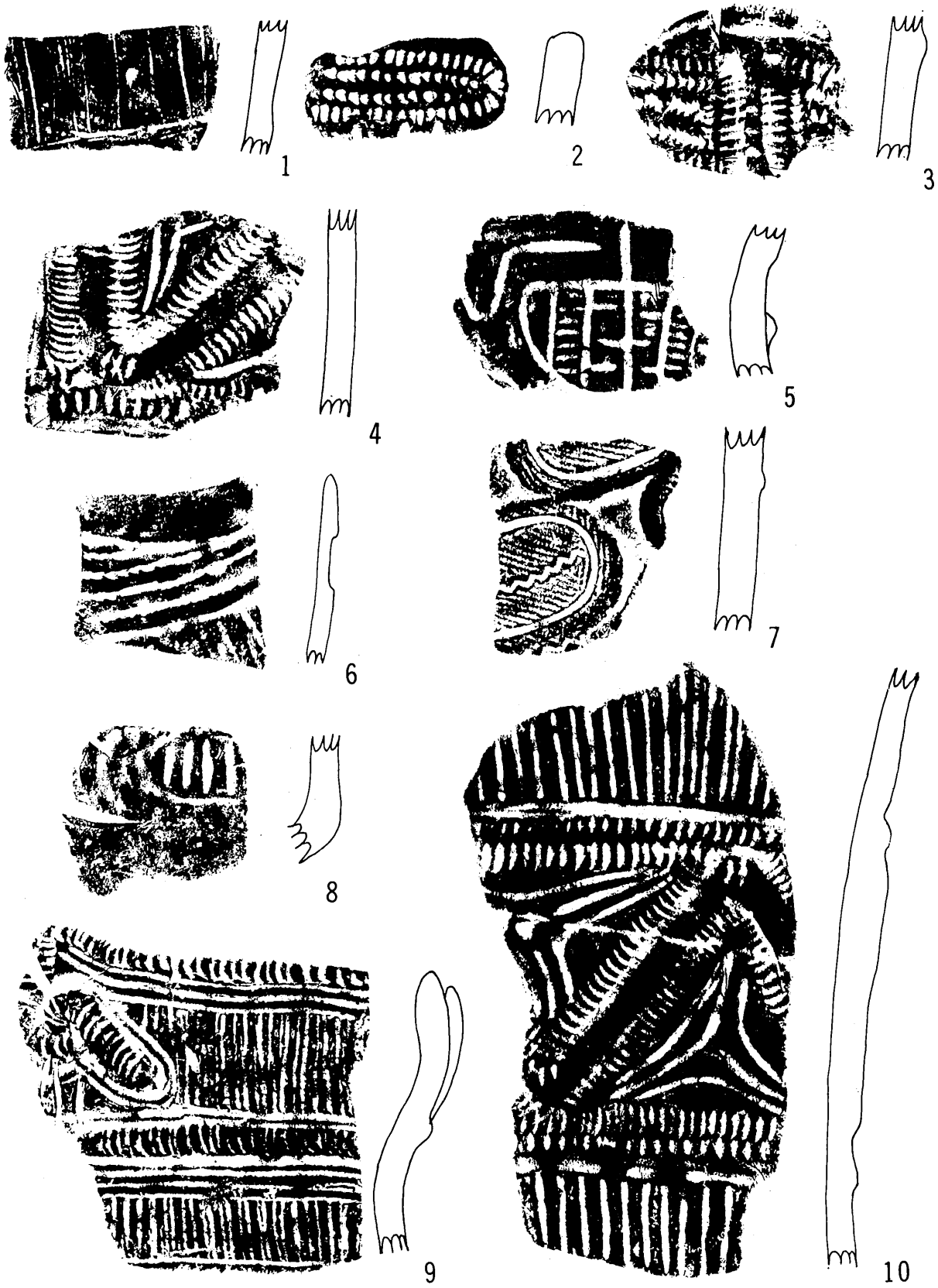
第3図　85号住居址出土　5　88号住居址出土　縮尺⅓



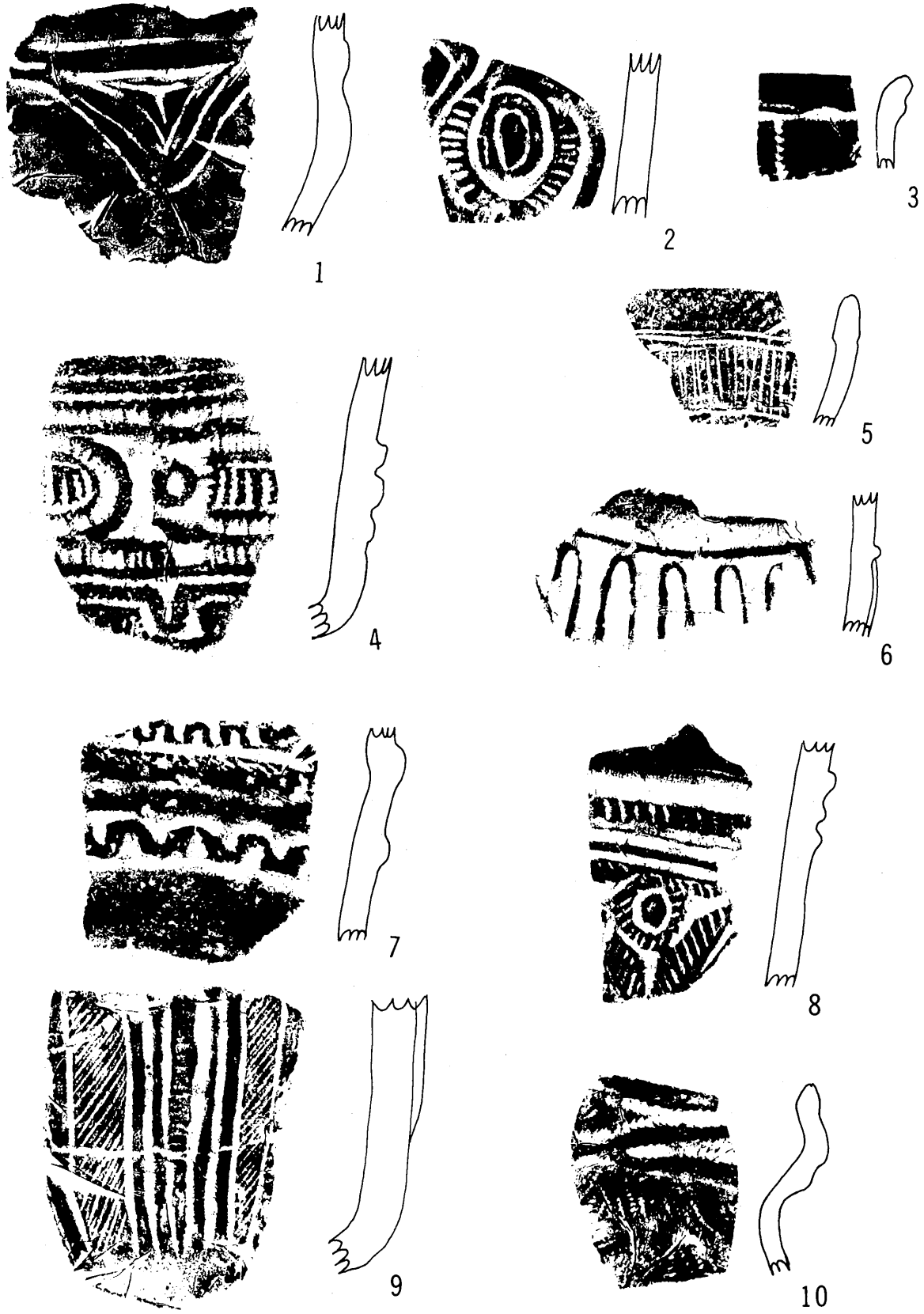
第4図　70号住居址出土　縮尺½



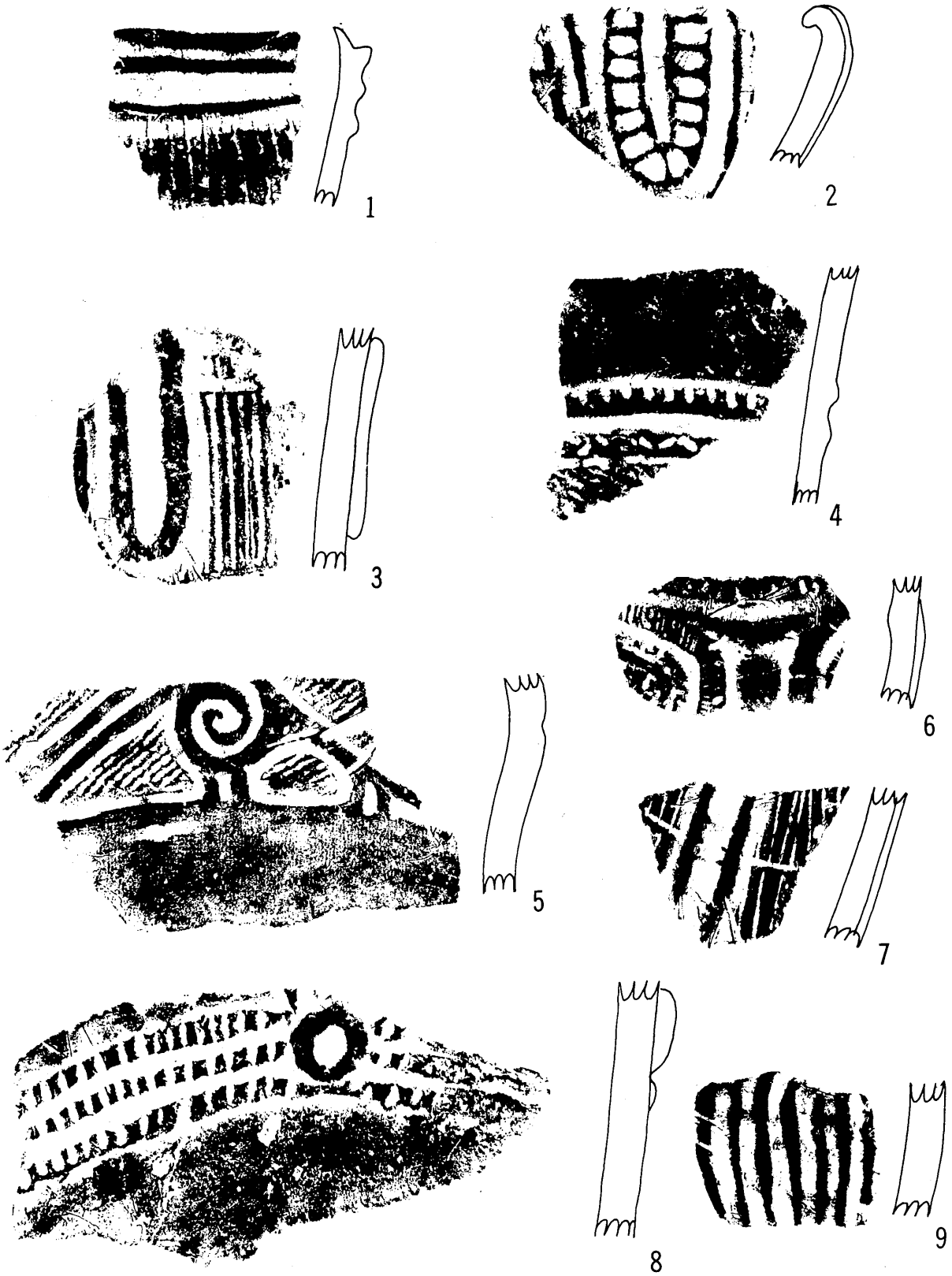
第5図　70号住居址出土　縮尺½



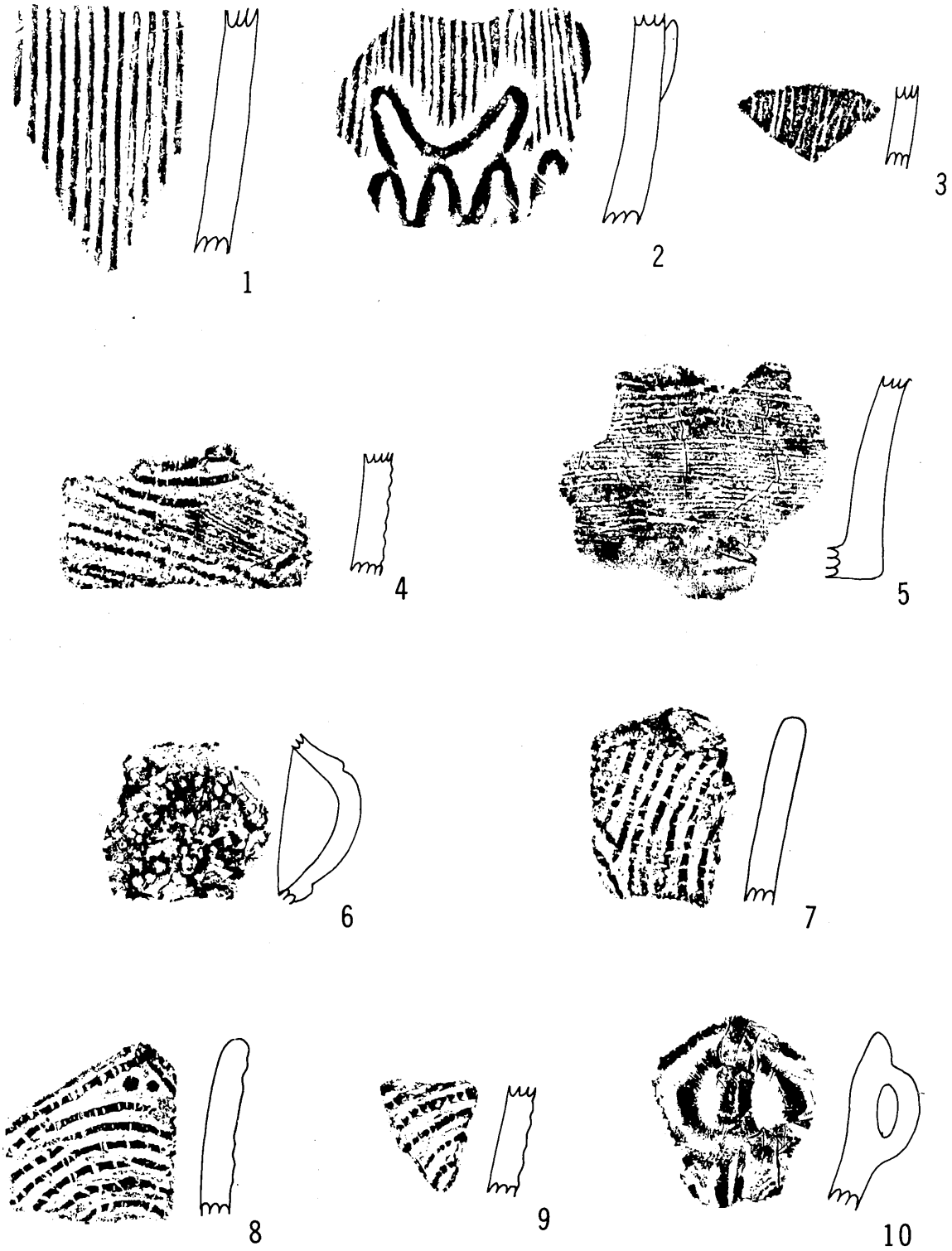
第6図　5のみ72号住居址出土　他はすべて71号住居址出土　縮尺½



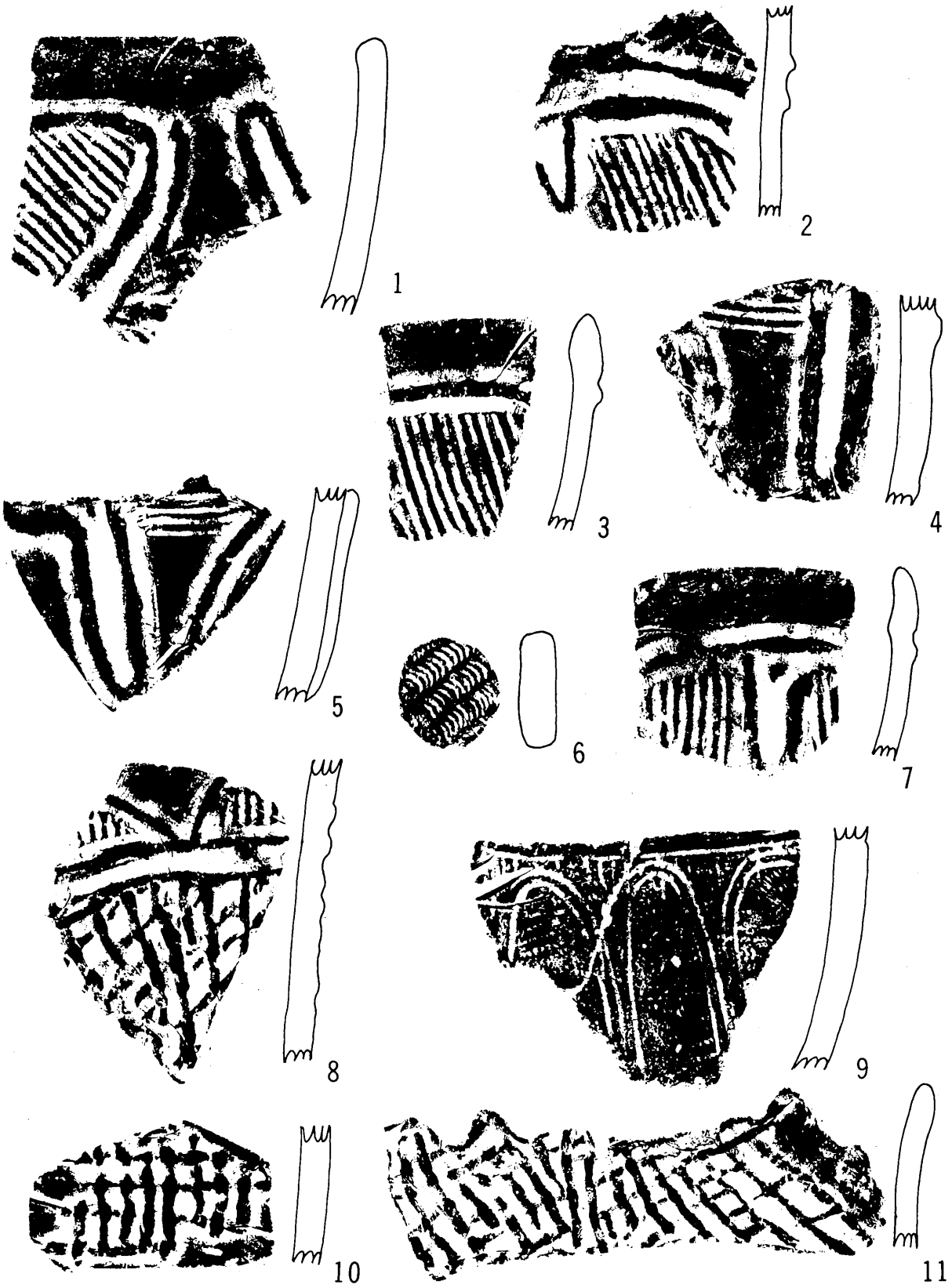
第7図　72号住居址出土　縮尺½



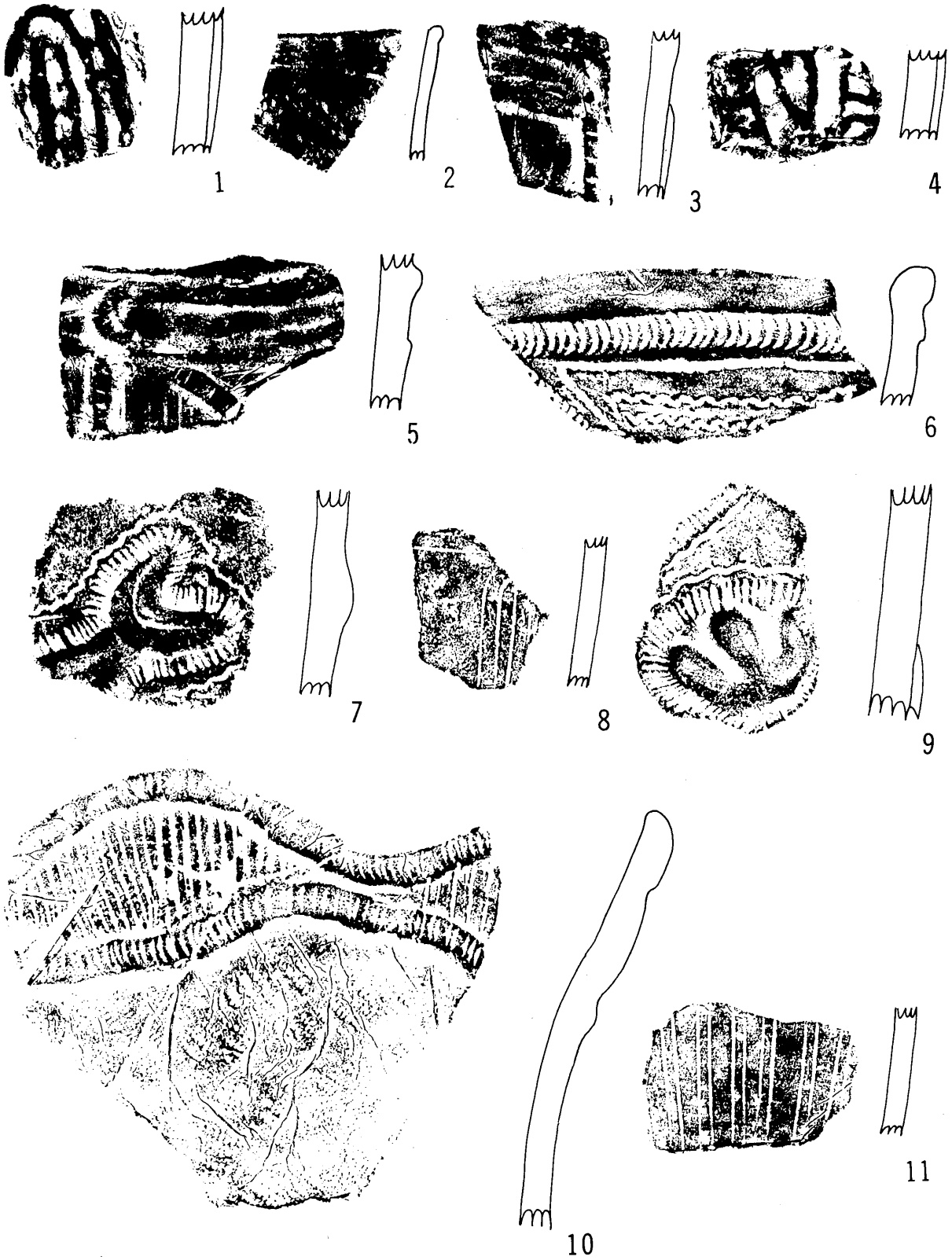
第8図　73号住居址出土　縮尺½



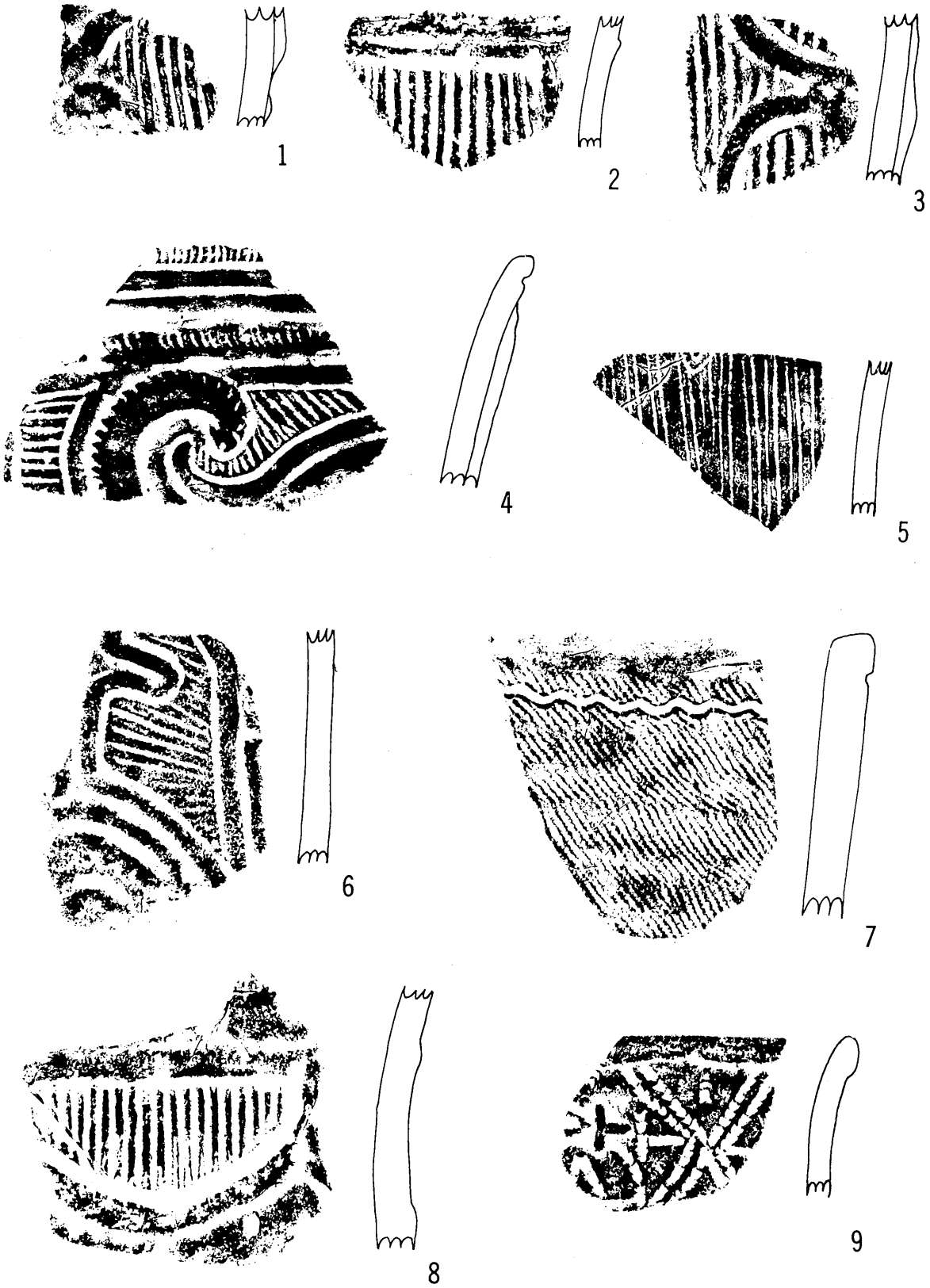
第9図　1～2　74号住居址出土　3～10　75号住居址出土　縮尺½



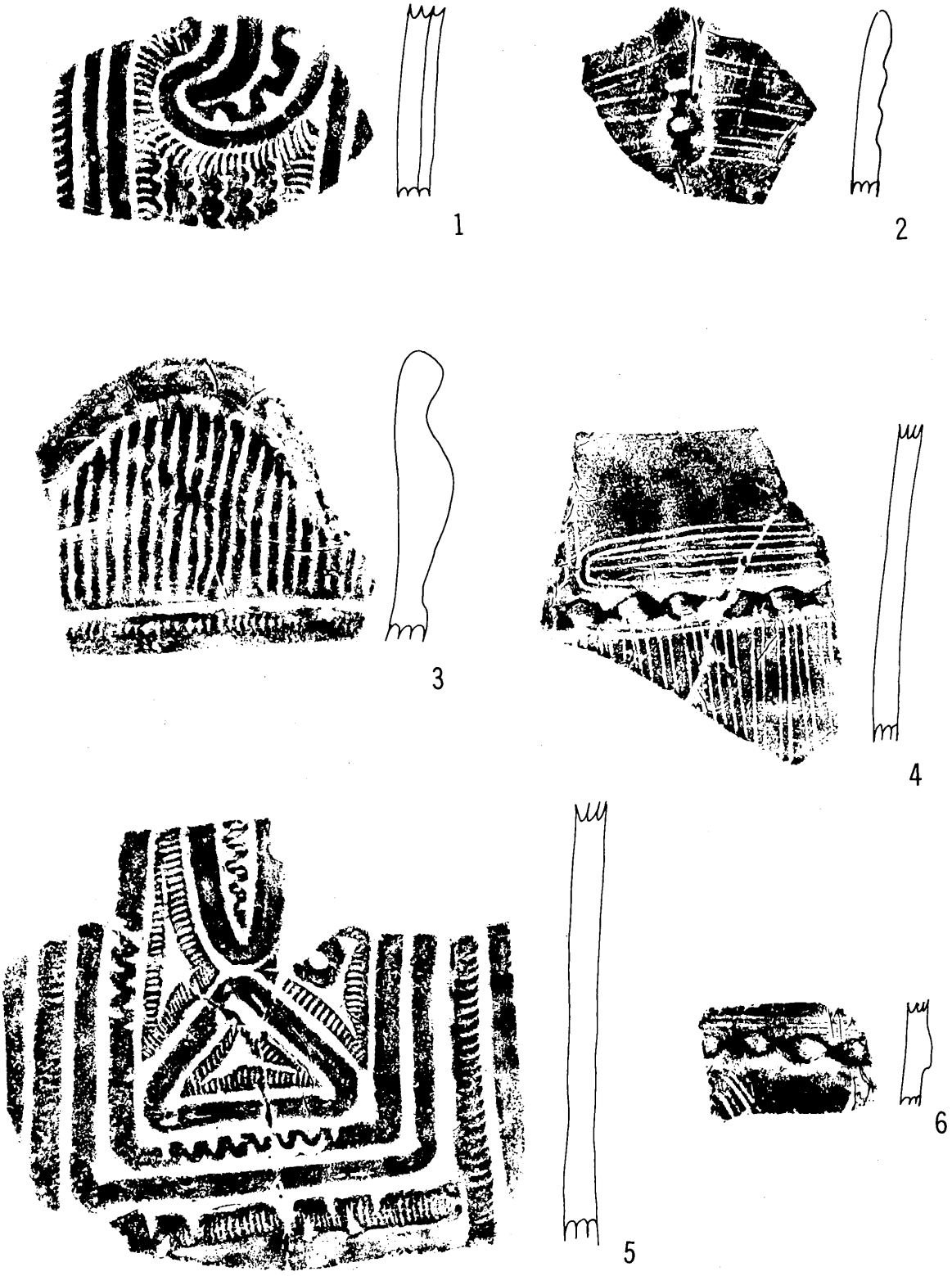
第10図　76号住居址出土　縮尺½



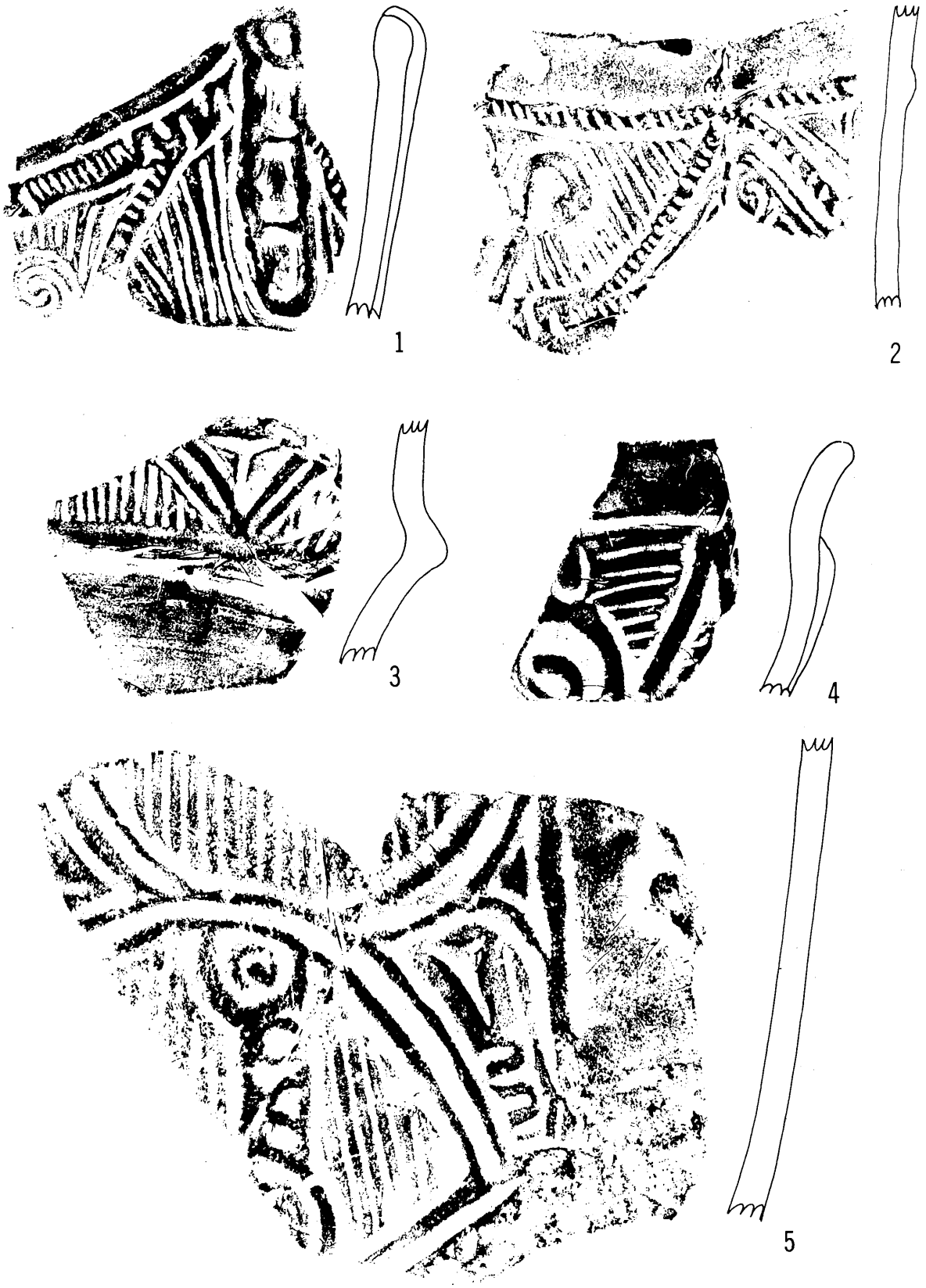
第11図　1～5　77号住居址出土　6～11　78号住居址出土　縮尺½



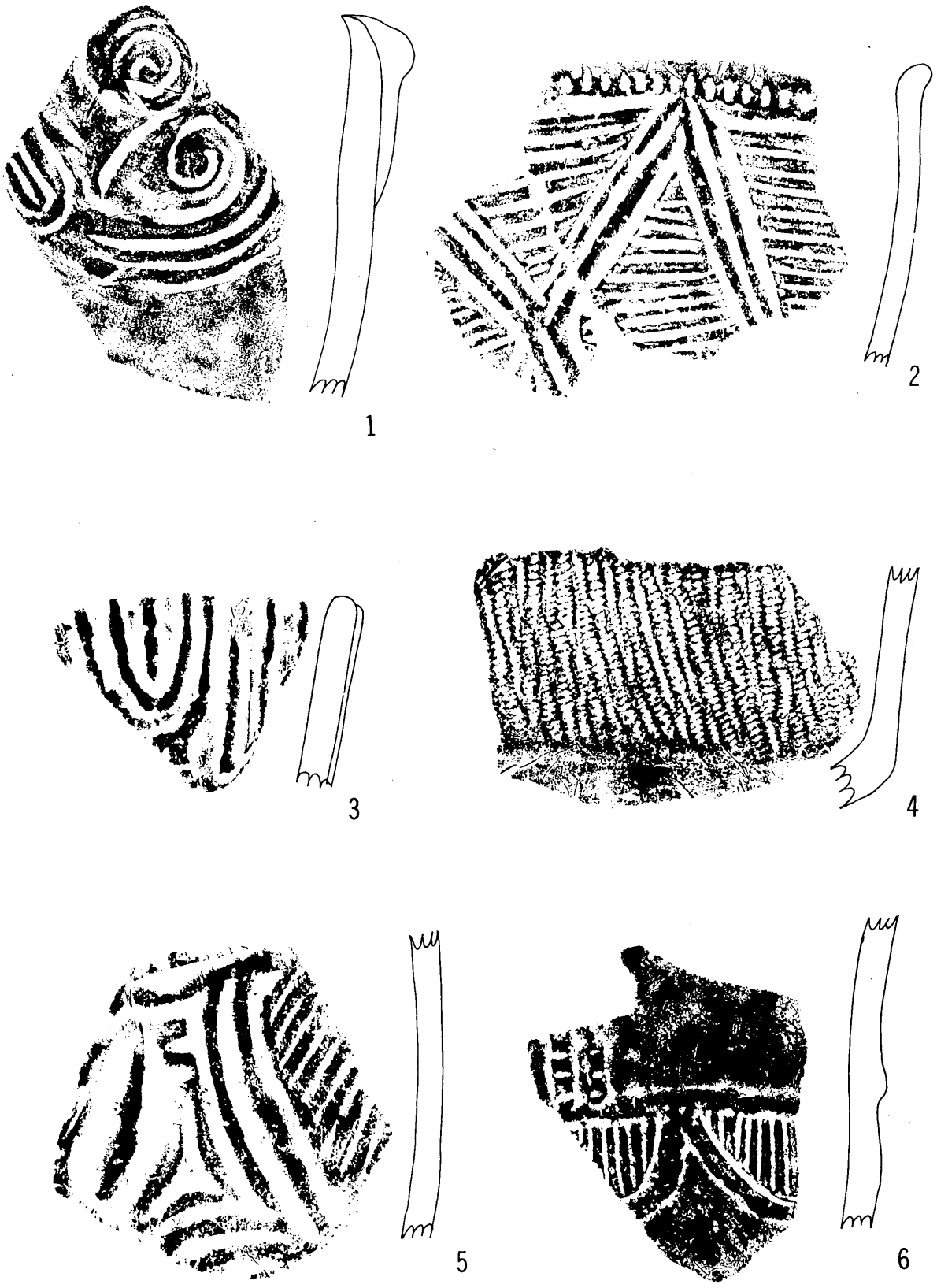
第12図　1～3　81号住居址出土　4～9　82号住居址出土　縮尺½



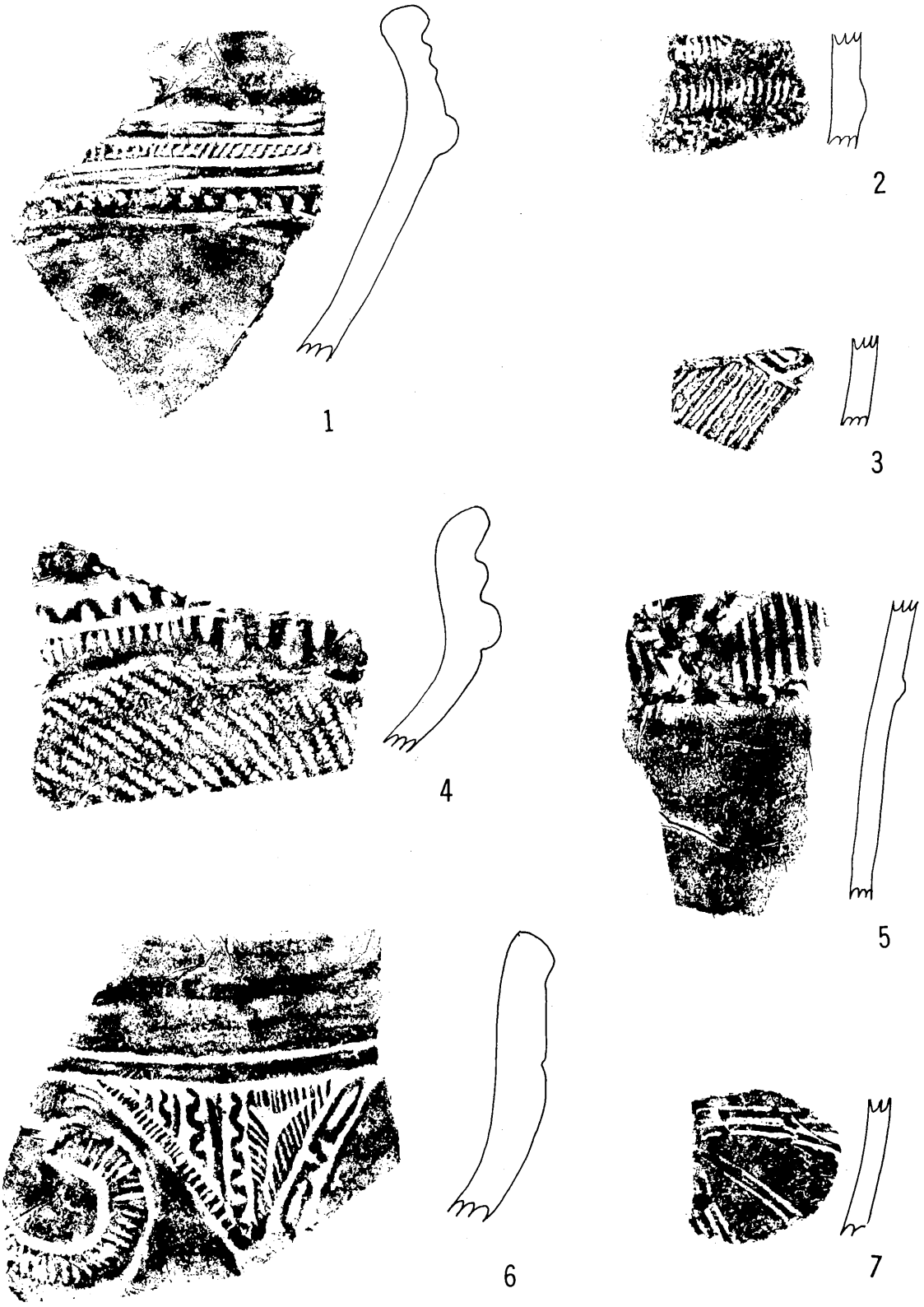
第13図　82号住居址出土　縮尺½



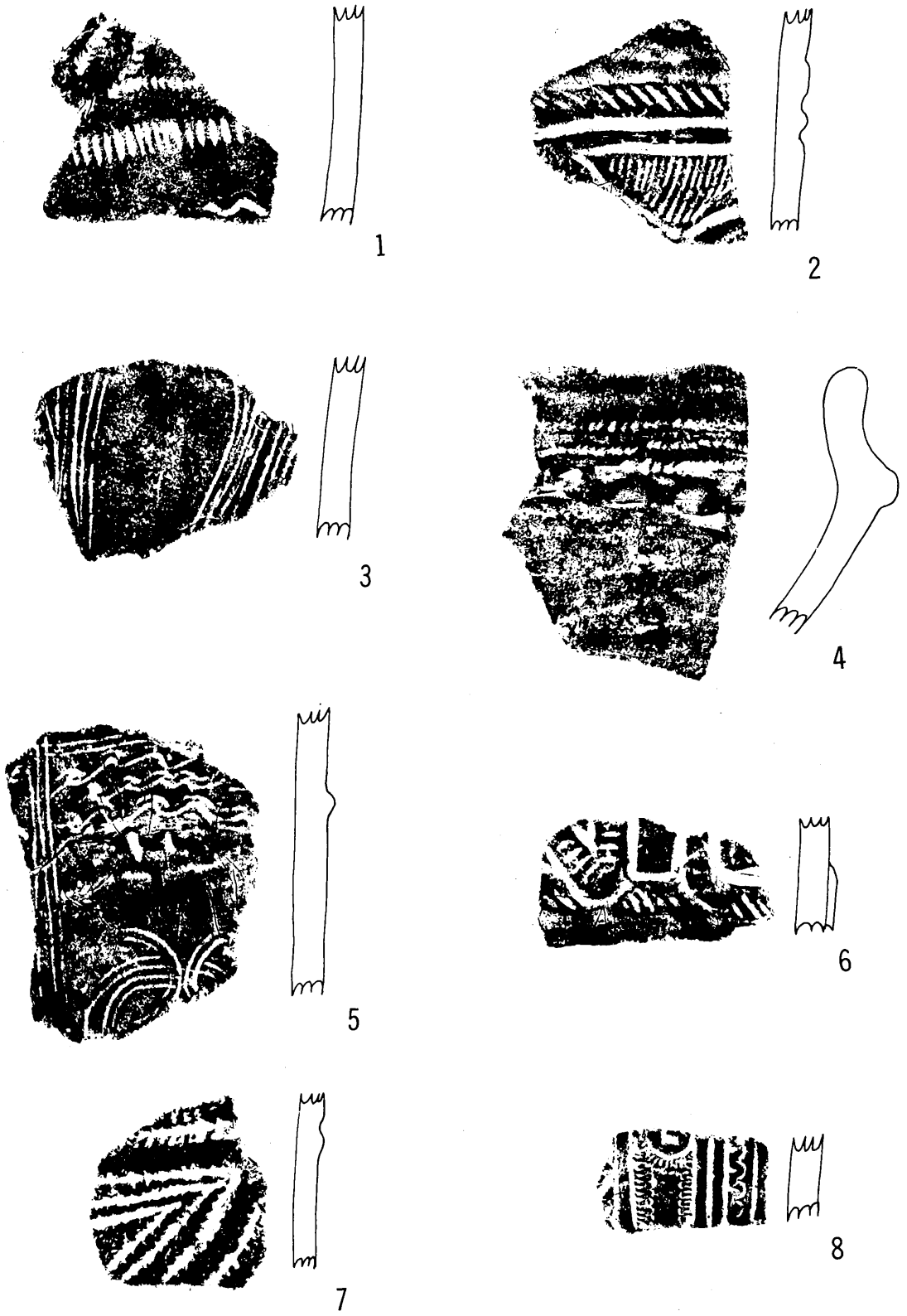
第14図　85号住居址出土　縮尺½



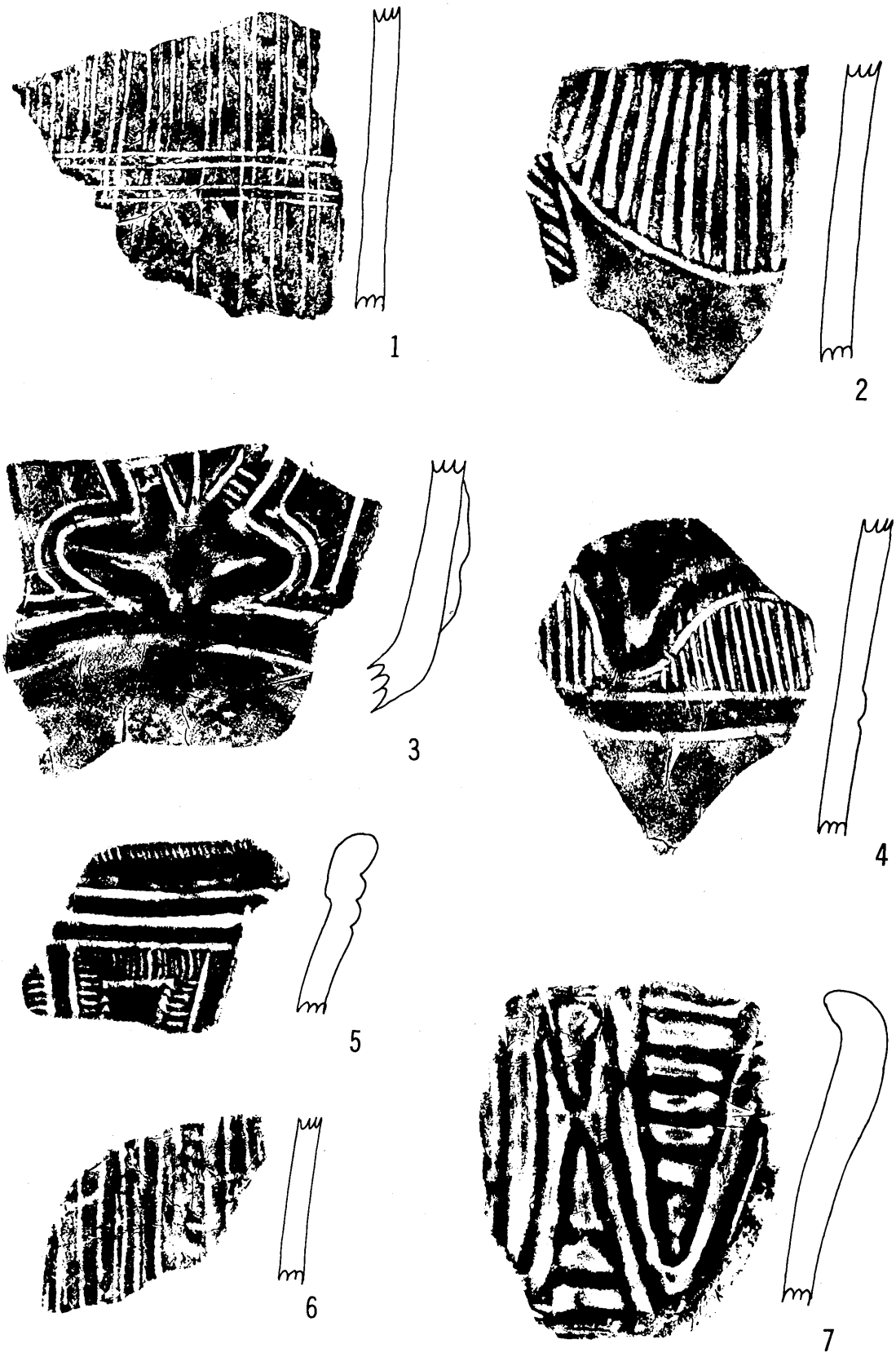
第15図　85号住居址出土　縮尺½



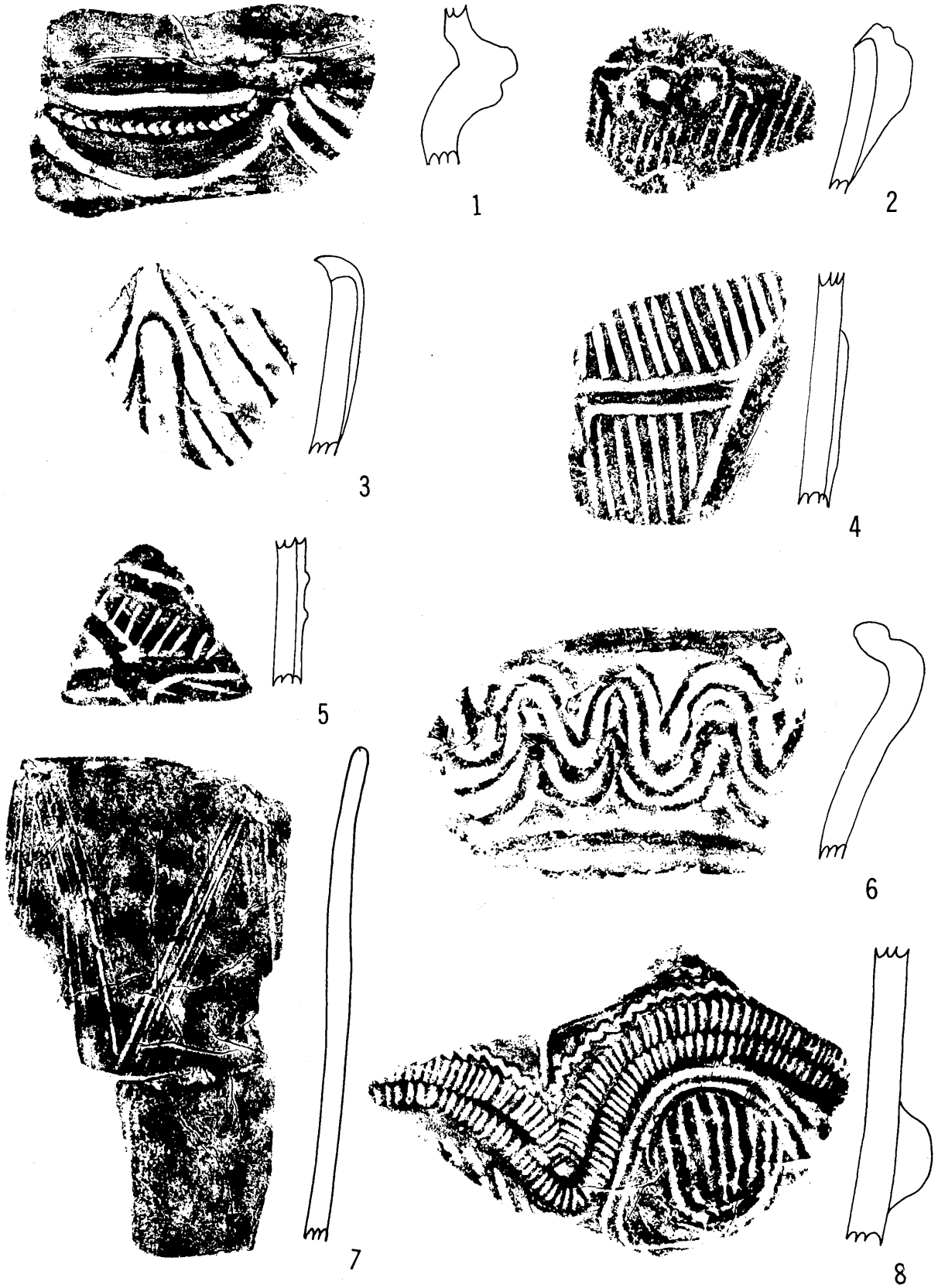
第16図　86号住居址出土　縮尺½



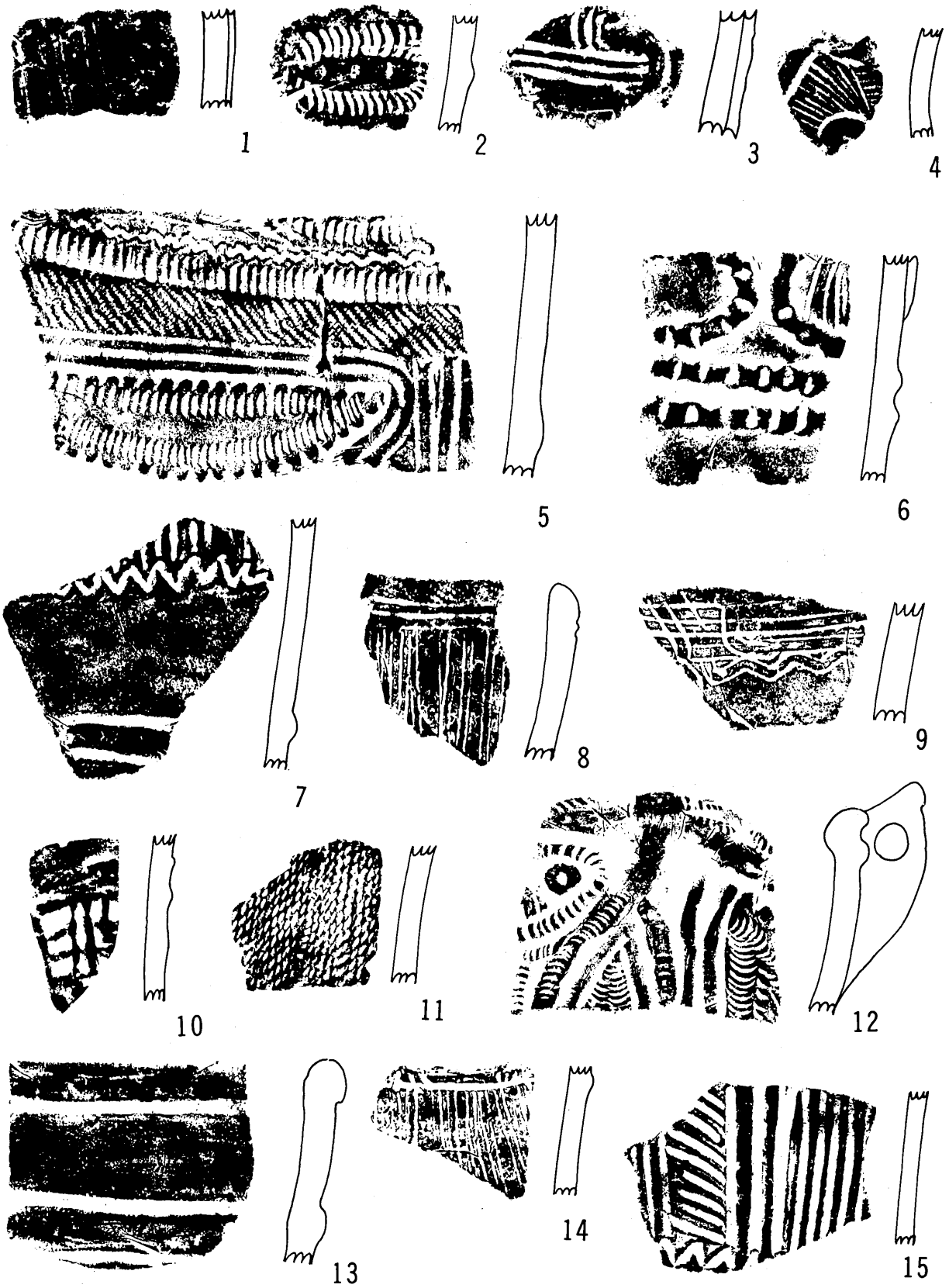
第17図　87号住居址出土　縮尺½



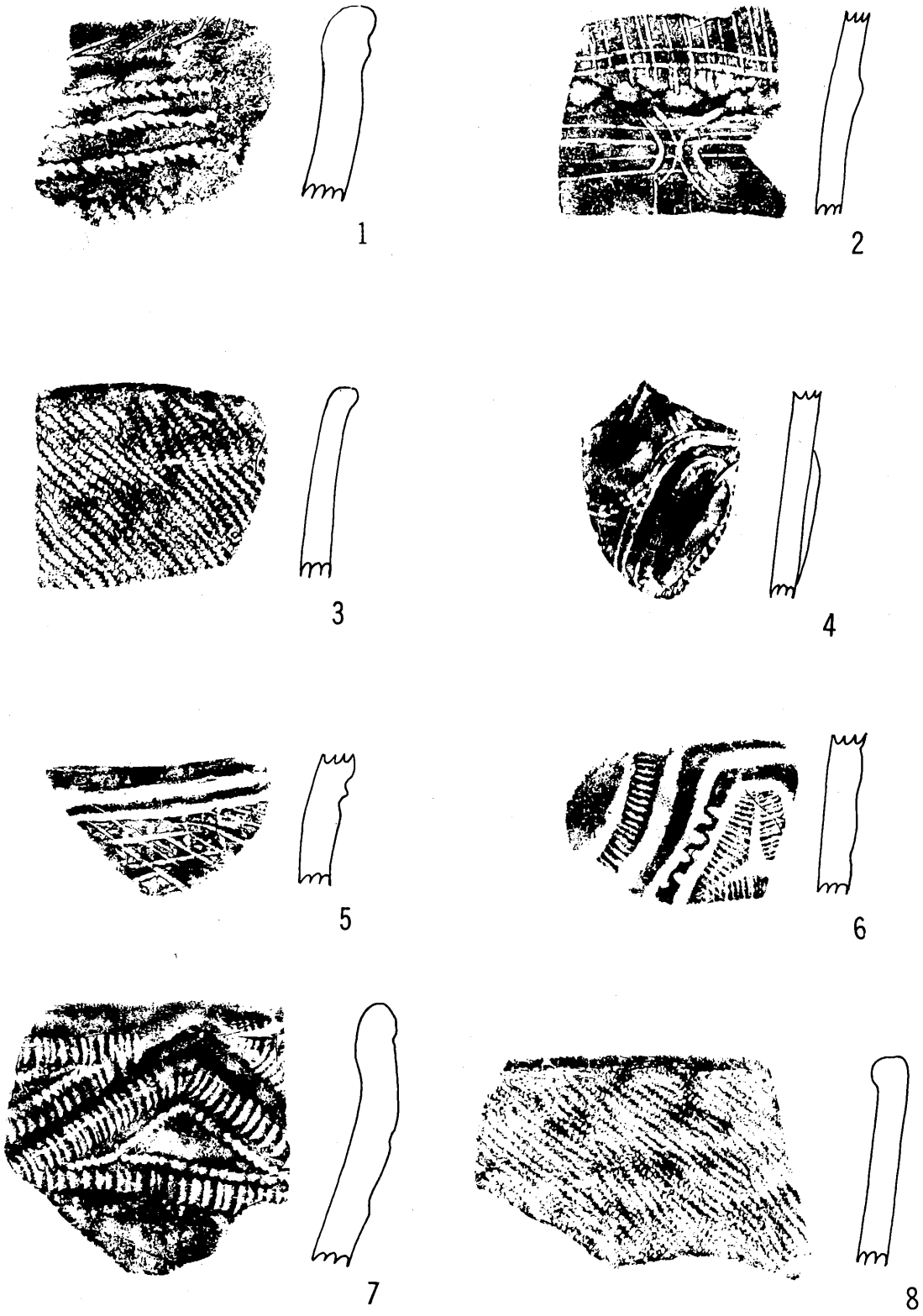
第18図　1～6　88号住居址出土　7　89号住居址出土　縮尺½



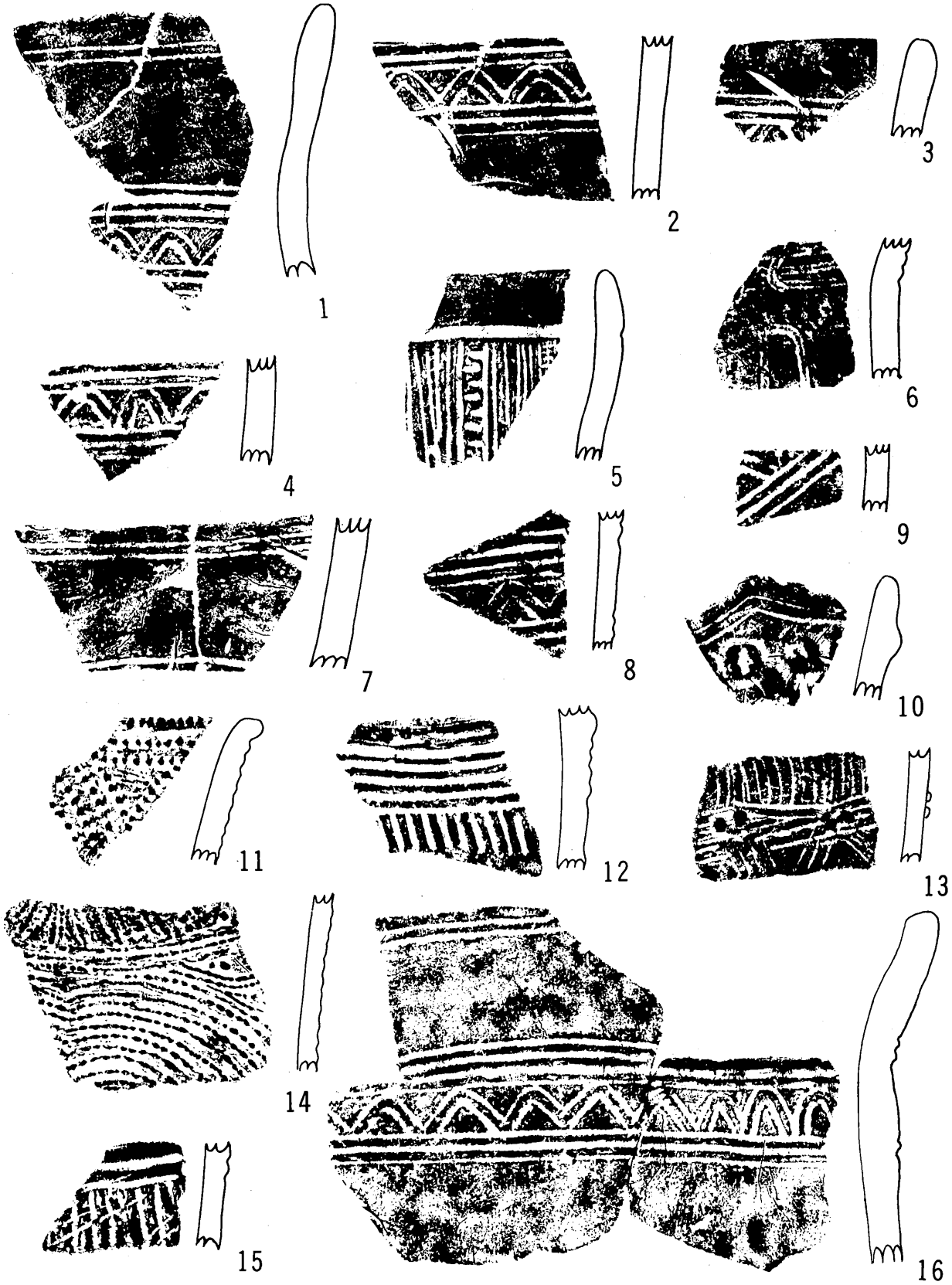
第19図　1～6　89号住居址出土　7・8　90号住居址出土　縮尺½



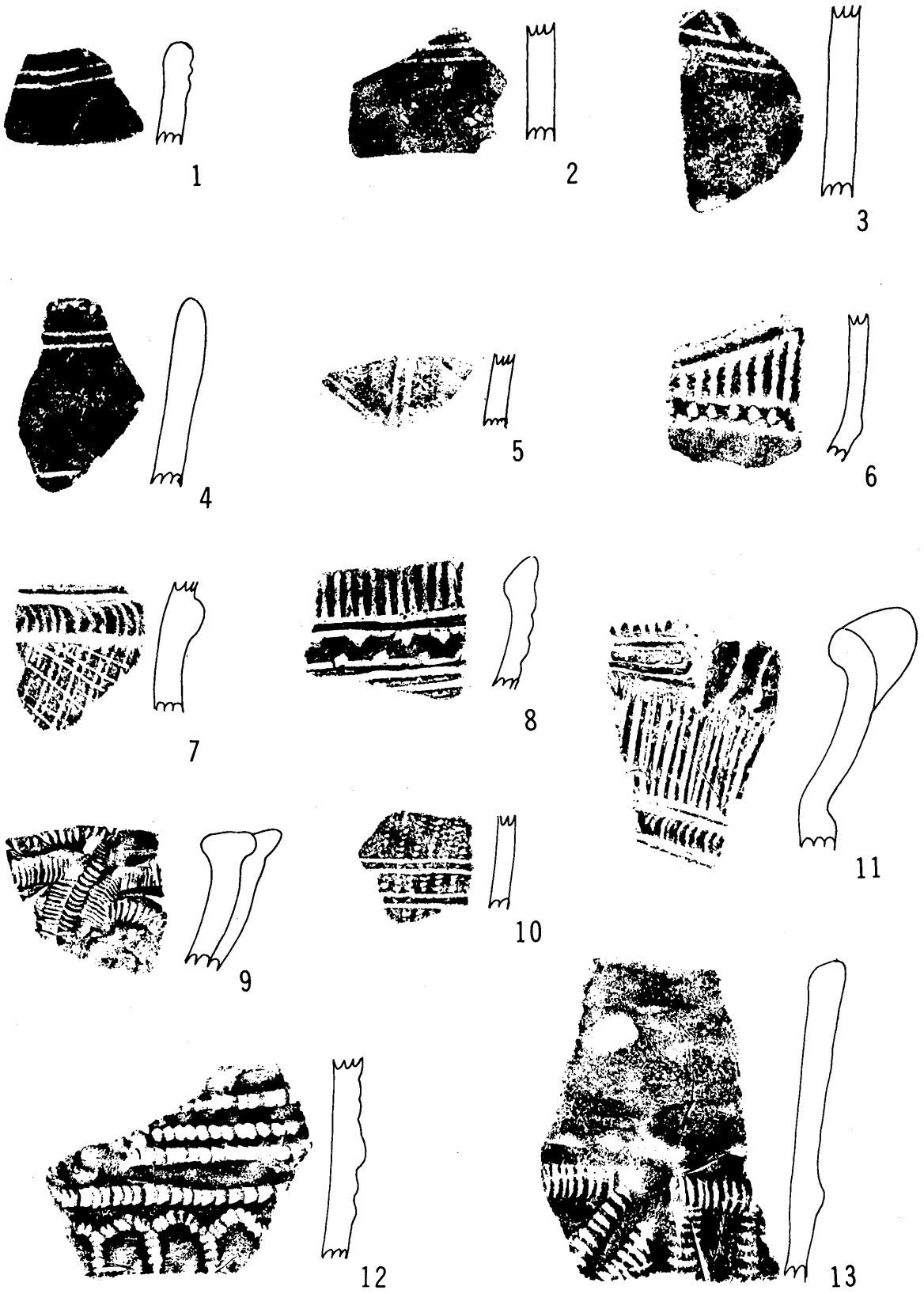
第20図　1～5　91号住居址出土　6～15　92号住居址出土　縮尺½



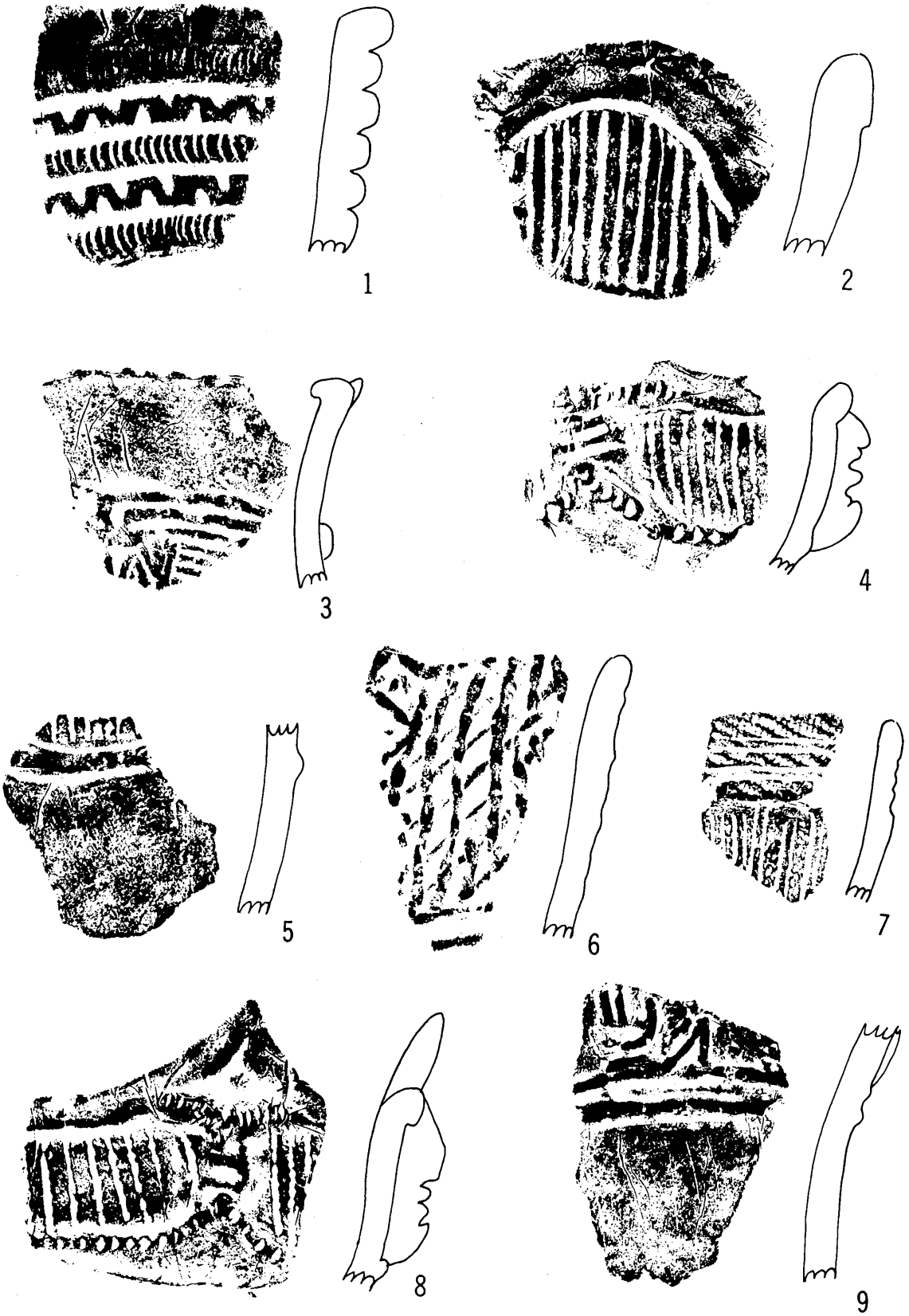
第21図　93号住居址出土　縮尺½



第22図　94号住居址出土　縮尺½

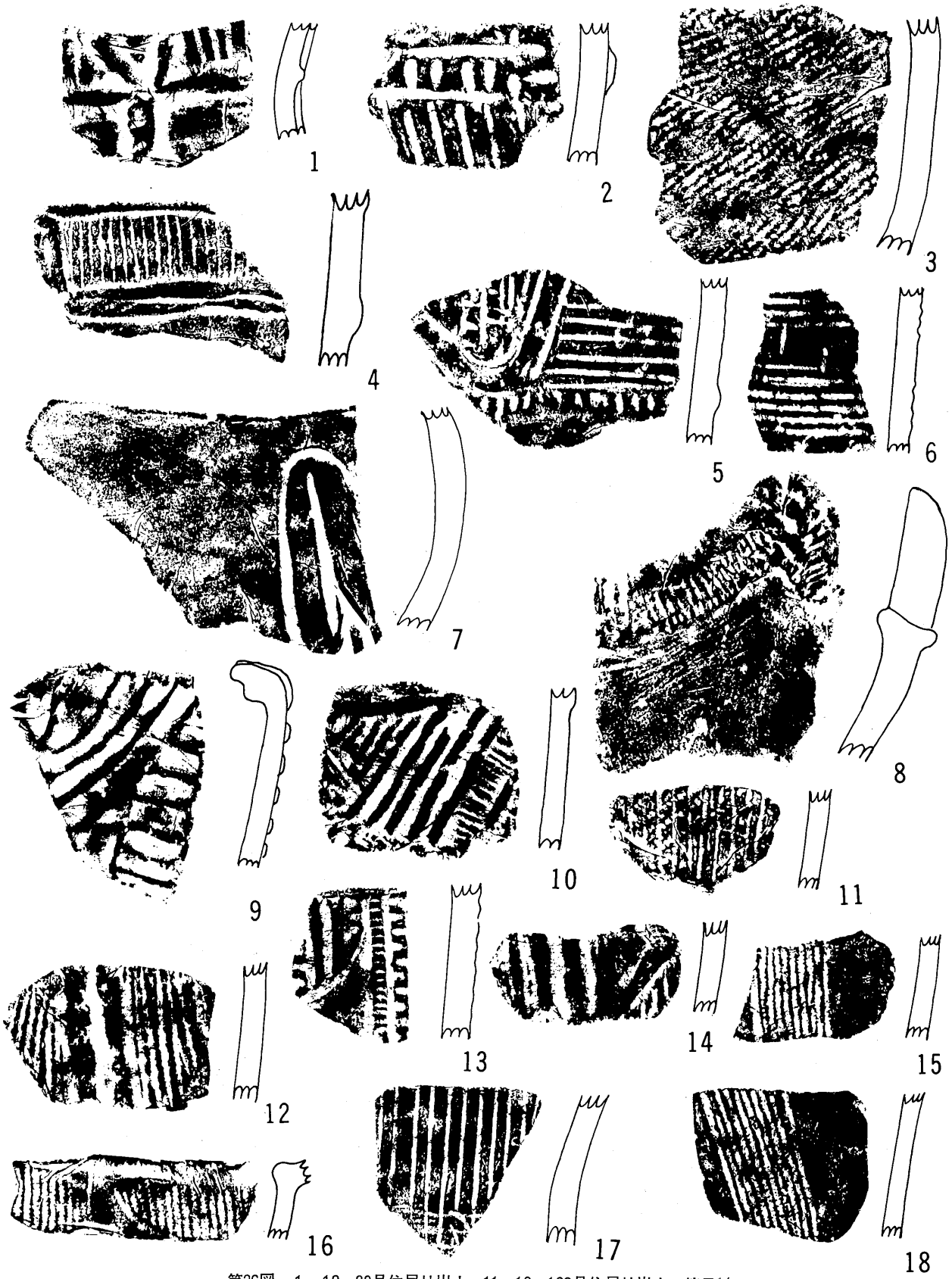


第23図　1～5　94号住居址出土　6～13　95号住居址出土　縮尺½

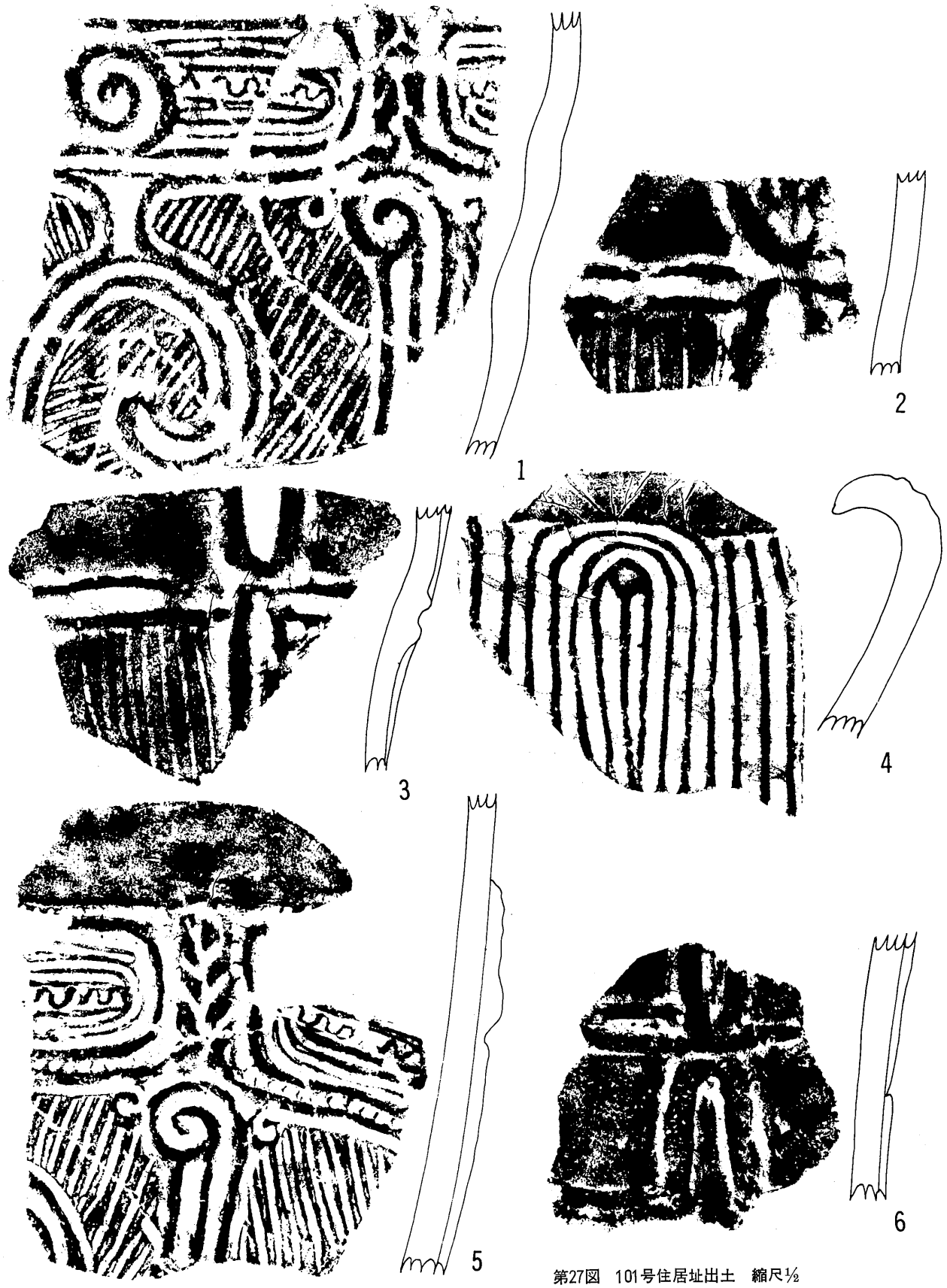


第24図　96号住居址出土　縮尺½

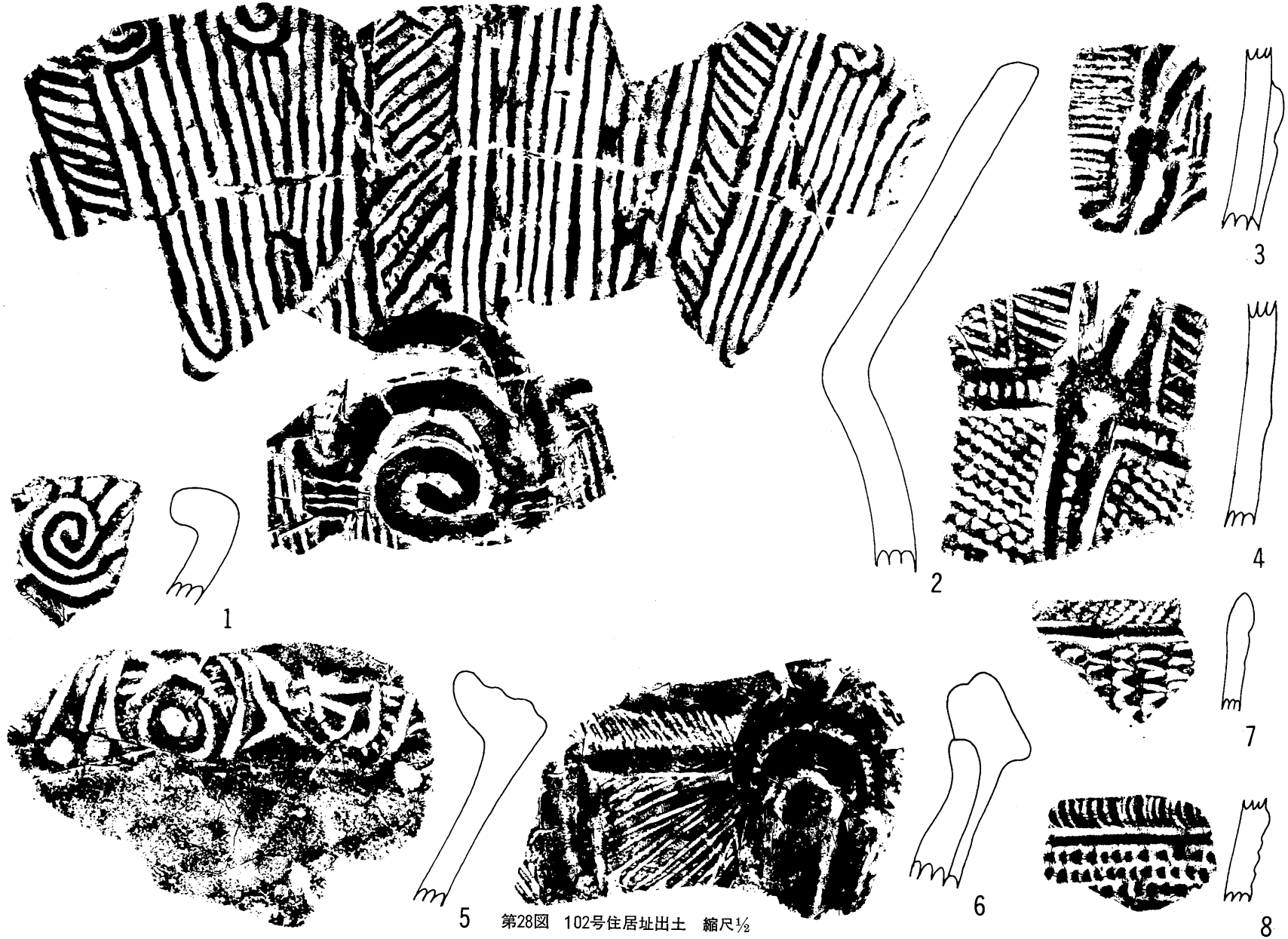
第25図　1～6　97号住居址出土　7～11　98号住居址出土　縮尺½



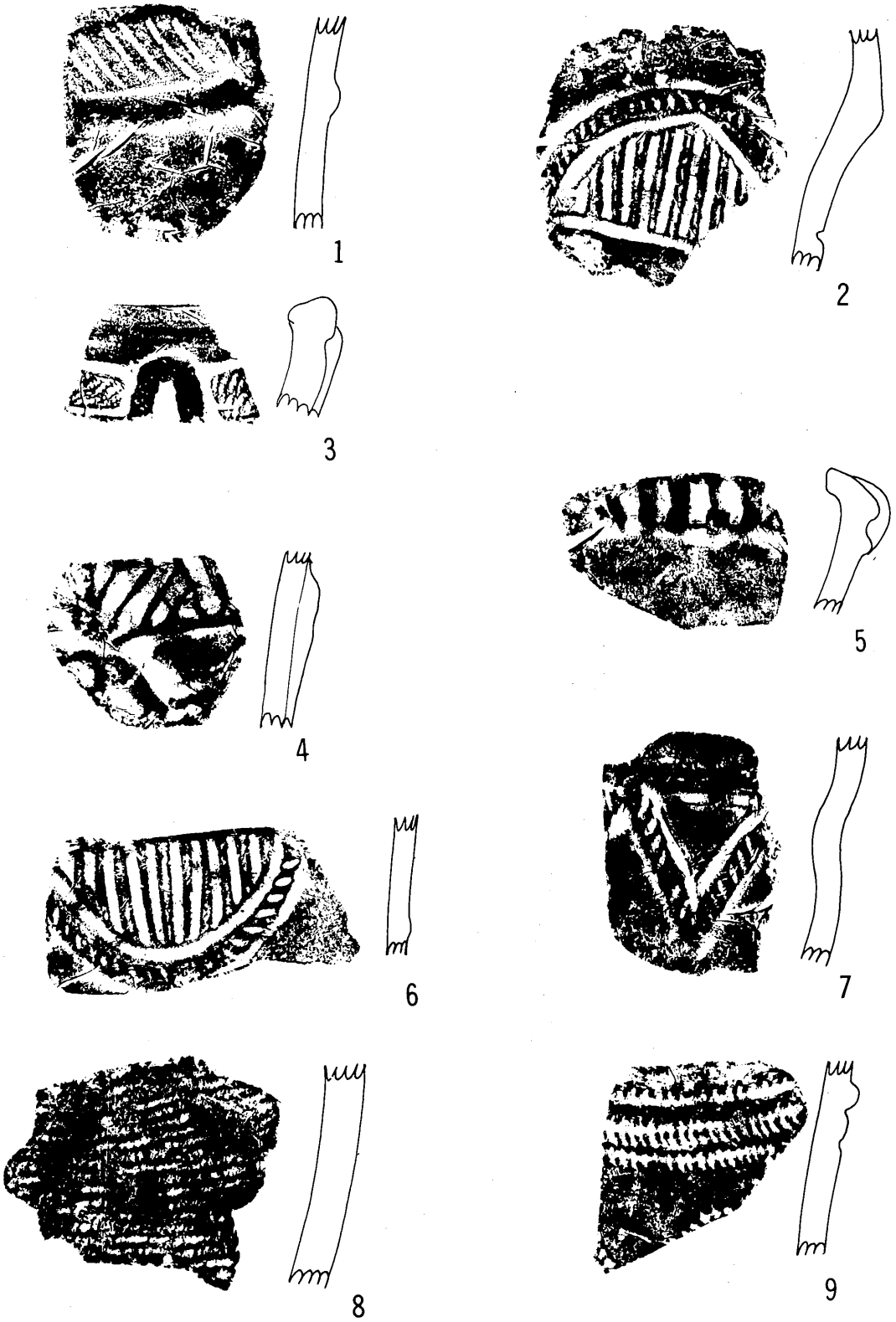
第26図　1～10　99号住居址出土　11～18　100号住居址出土　縮尺½



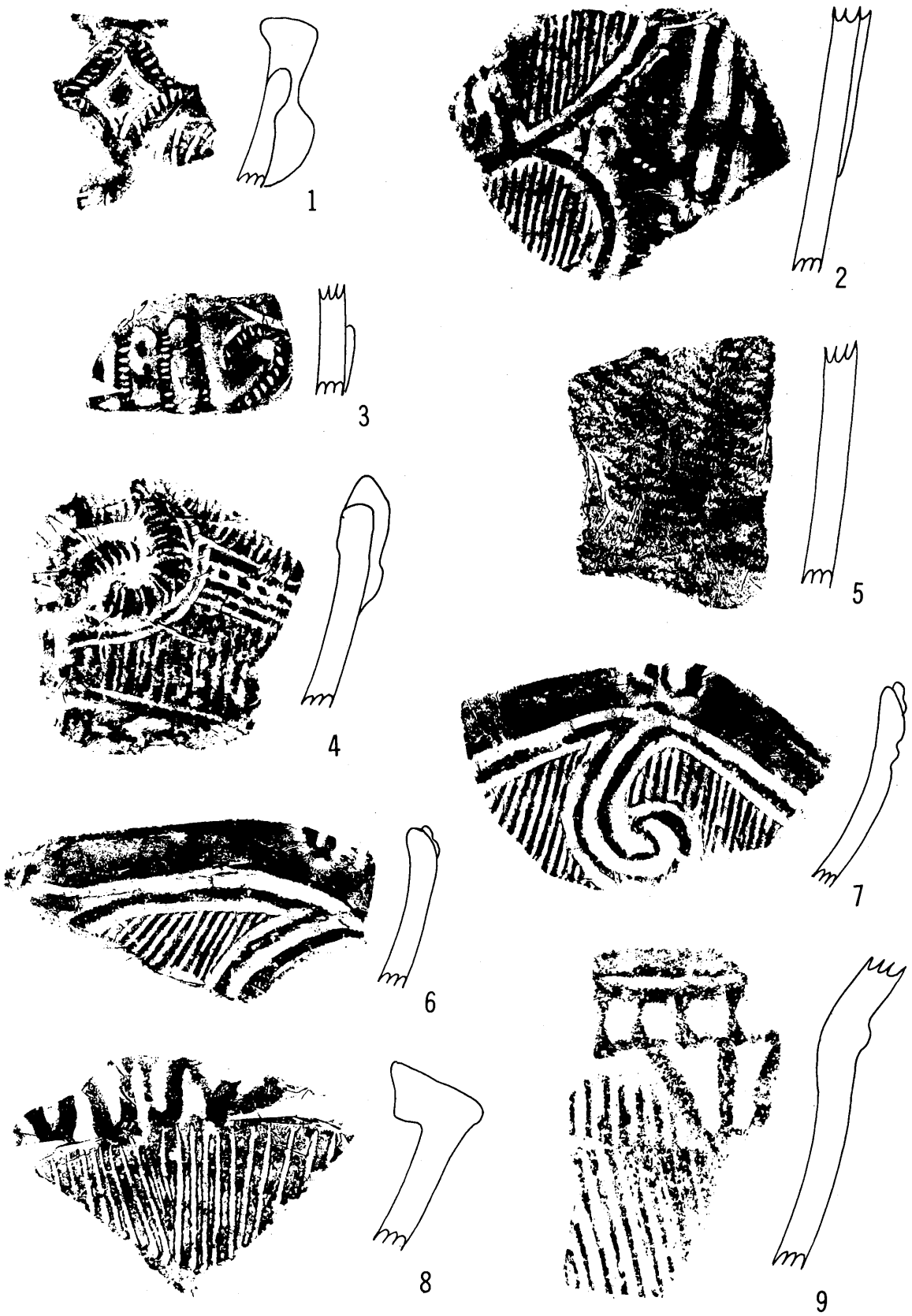
第27図　101号住居址出土　縮尺½



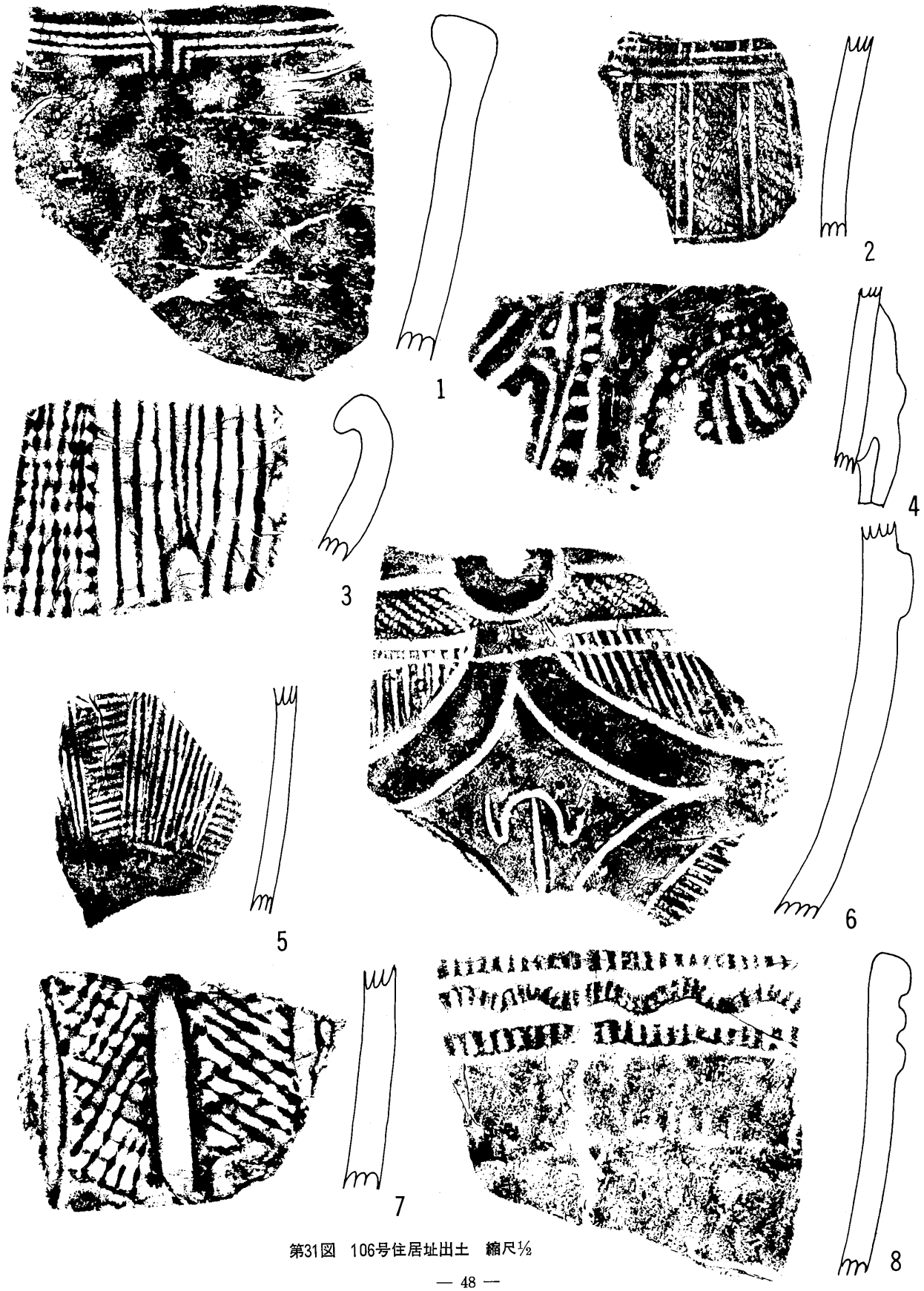
第28図　102号住居址出土　縮尺½



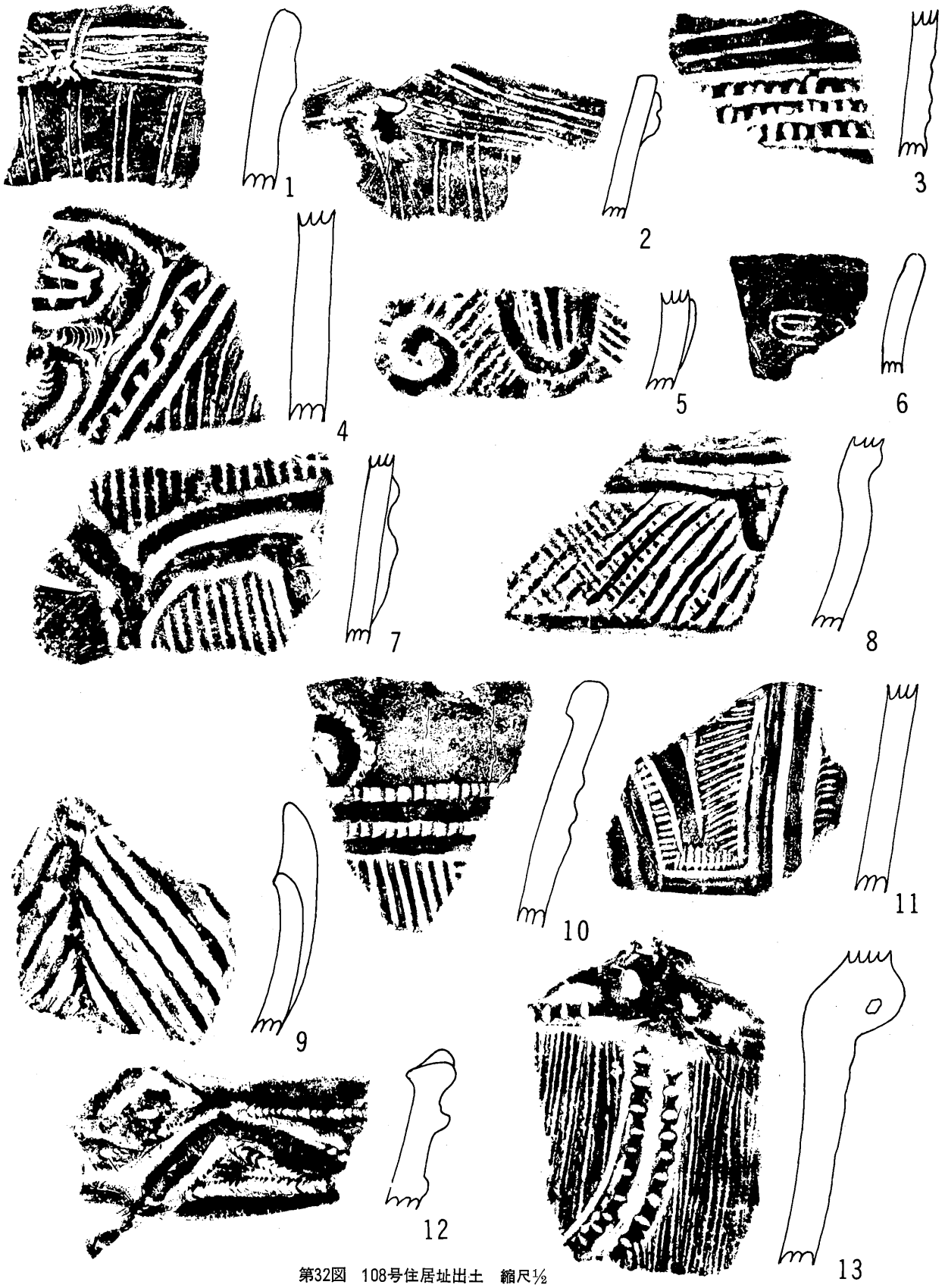
第29図　103号住居址出土　縮尺½



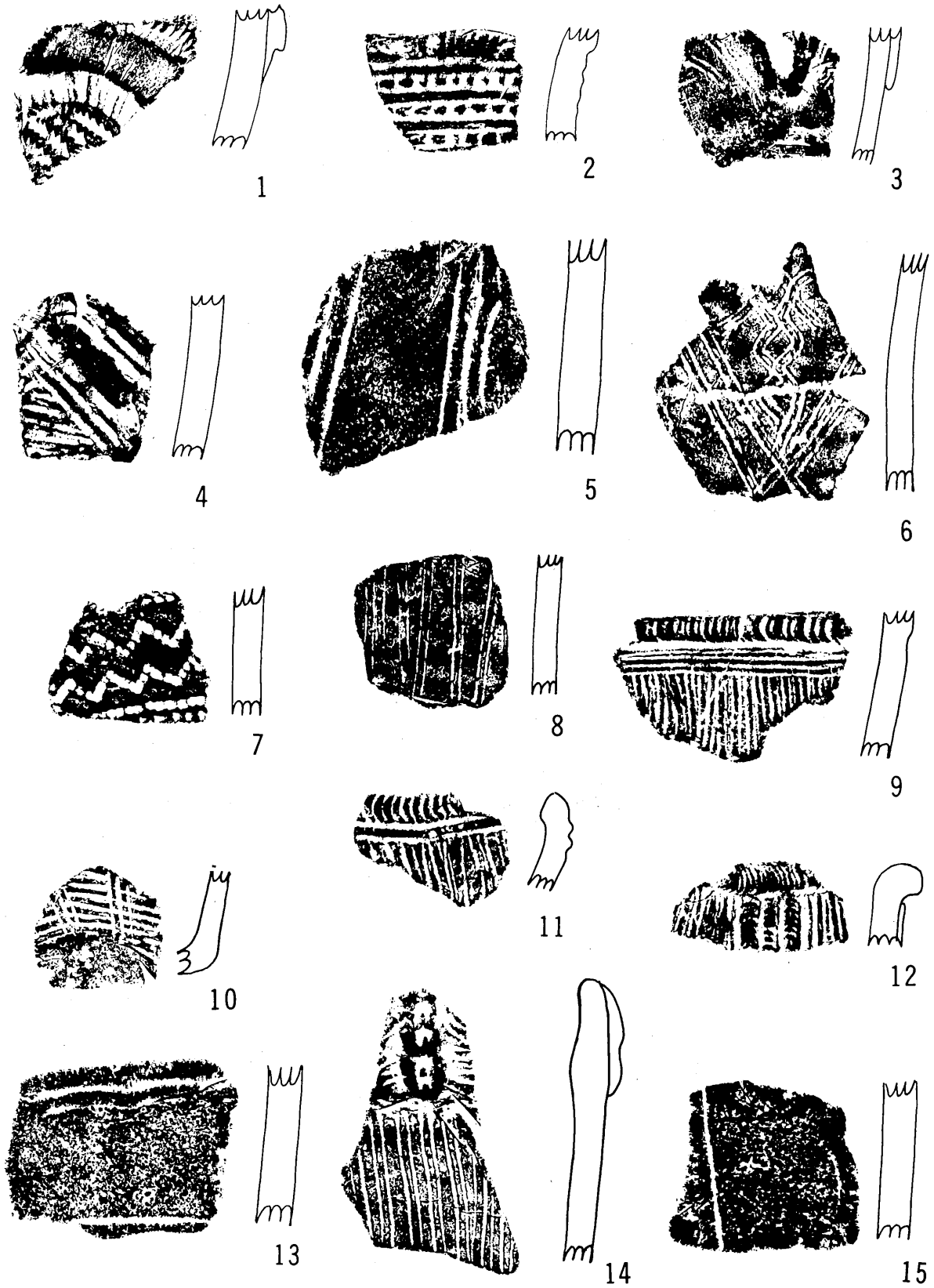
第30図　104号住居址出土　縮尺½



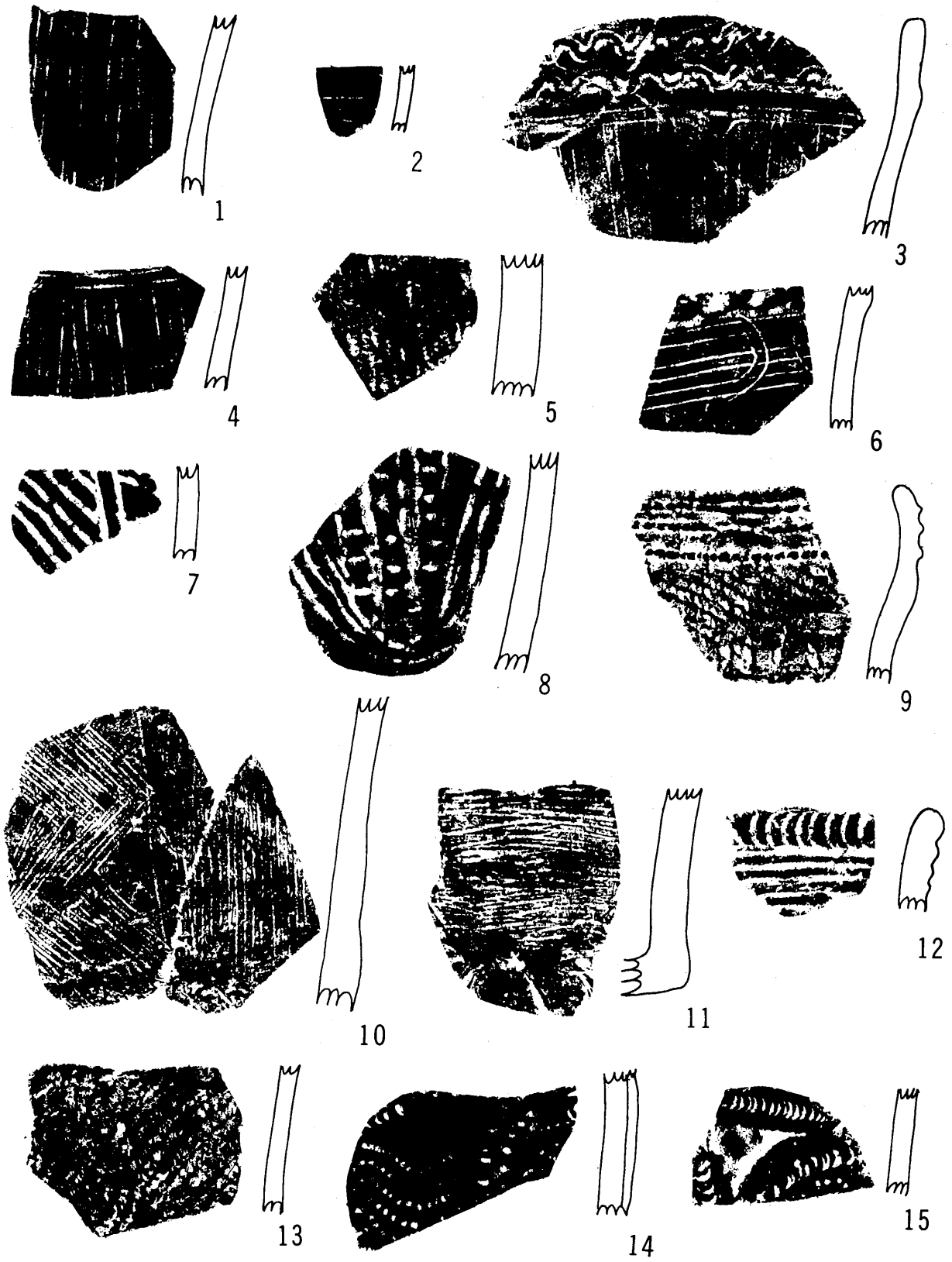
第31図　106号住居址出土　縮尺½



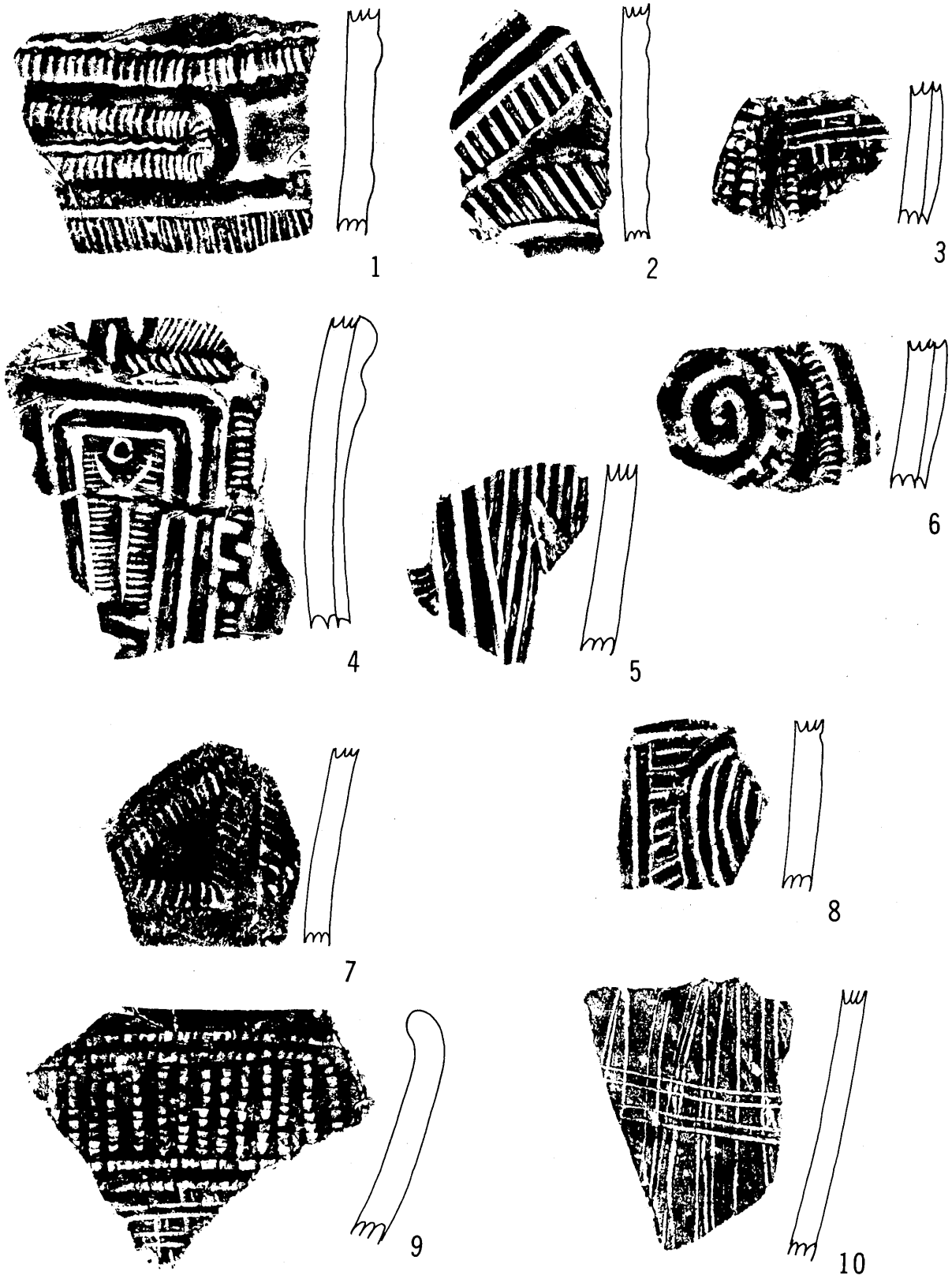
第32図　108号住居址出土　縮尺½



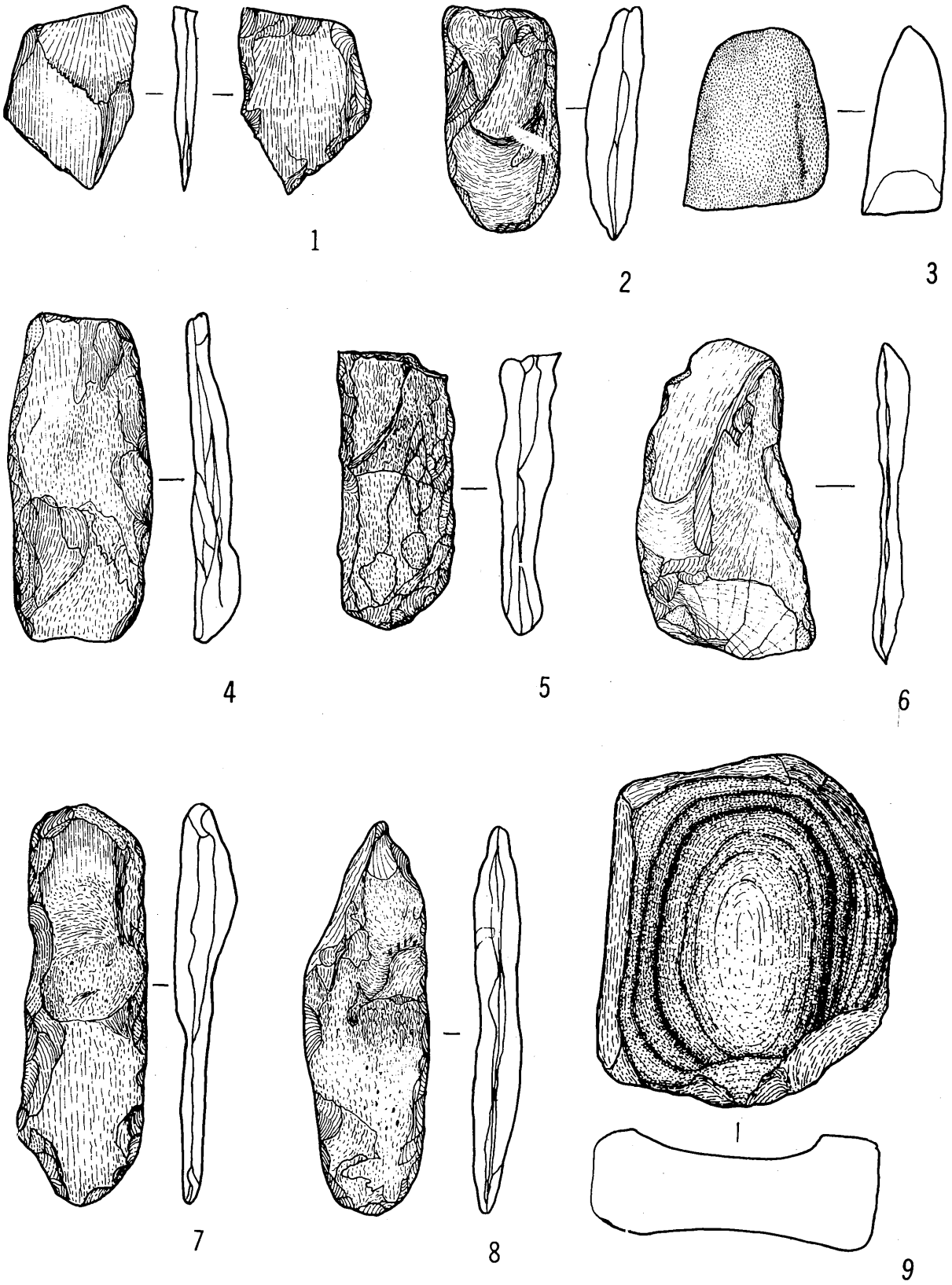
第33図　1～4　110号住居址出土　5～15　111号住居址出土　縮尺½



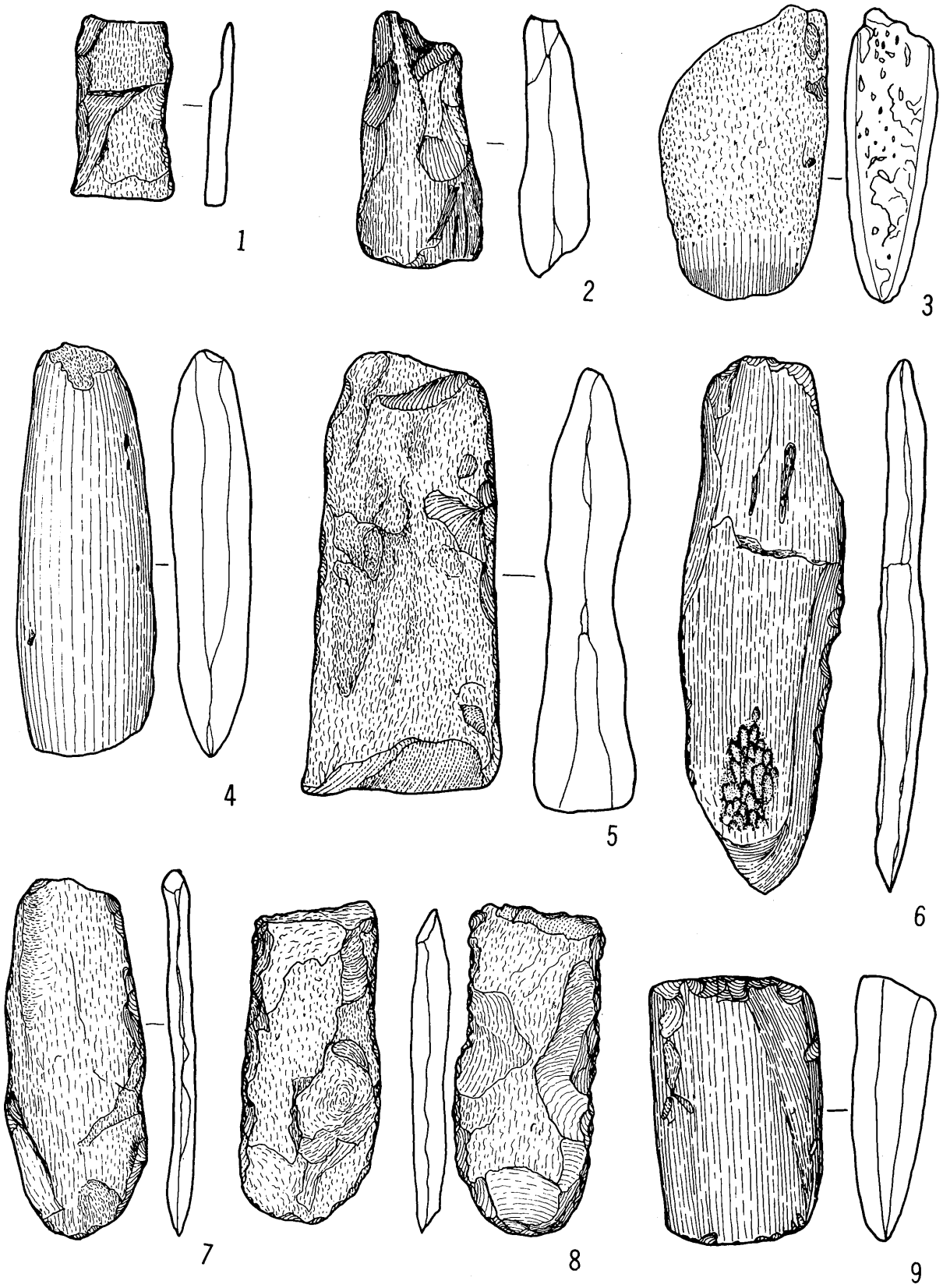
第34図　1～6　231号土坑出土　7・8　452号土坑出土
9～13　680号土坑出土　14・15　762号土坑出土　縮尺½



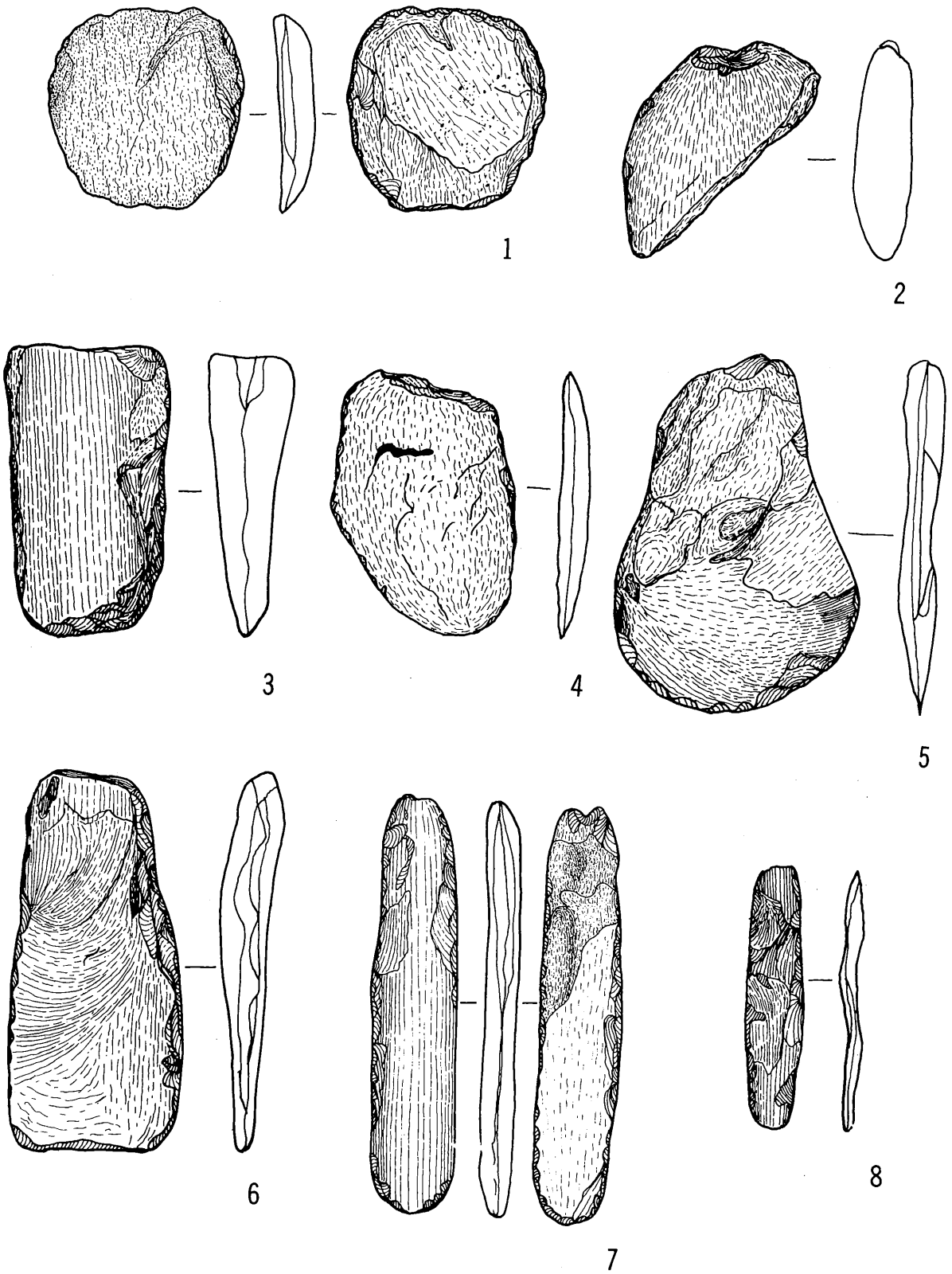
第35図　1　756号土坑出土　2～6　802号土坑出土
7～10　806号土坑出土　縮尺½



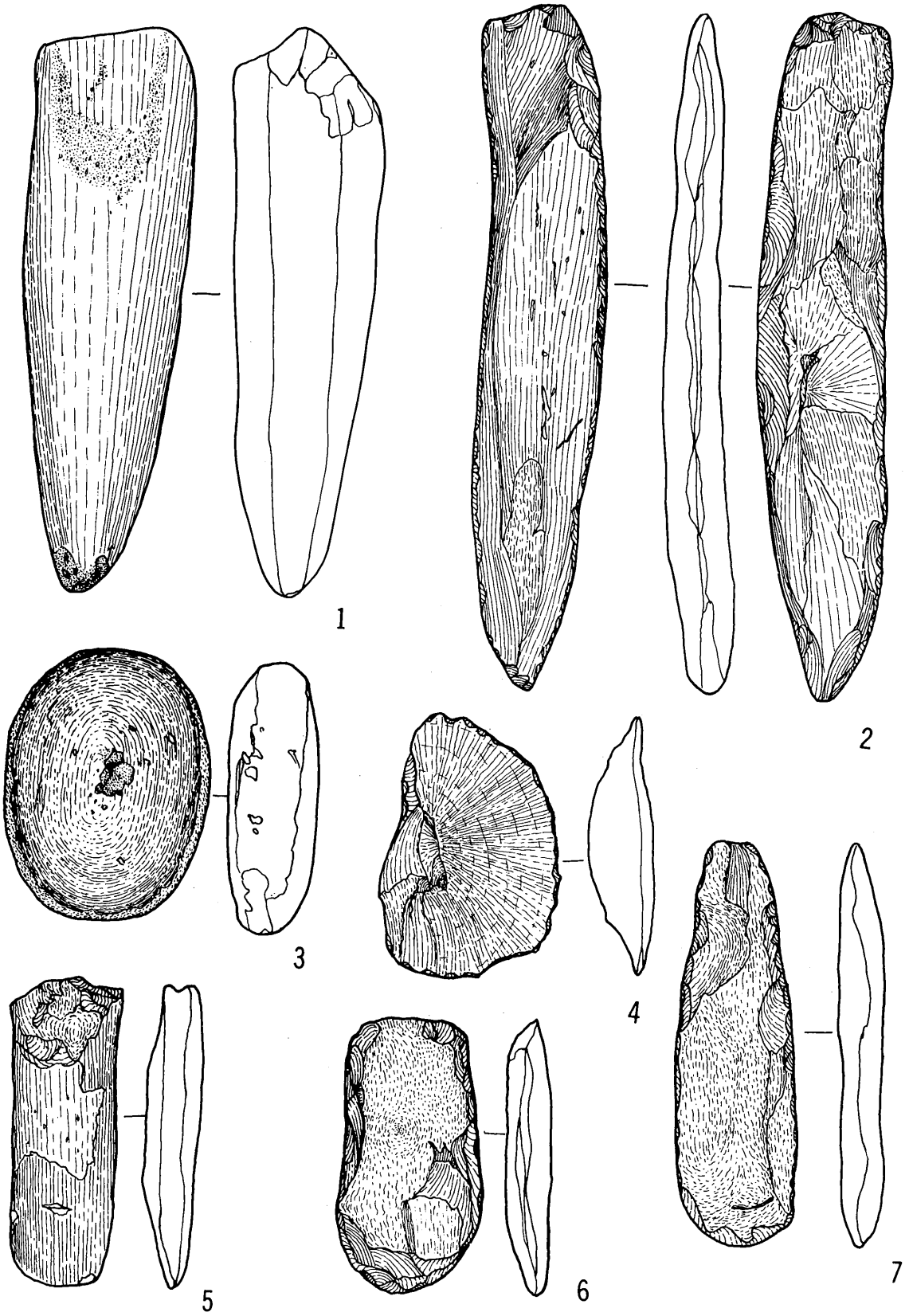
第36図　70号住居址出土　縮尺½　9　のみ¼



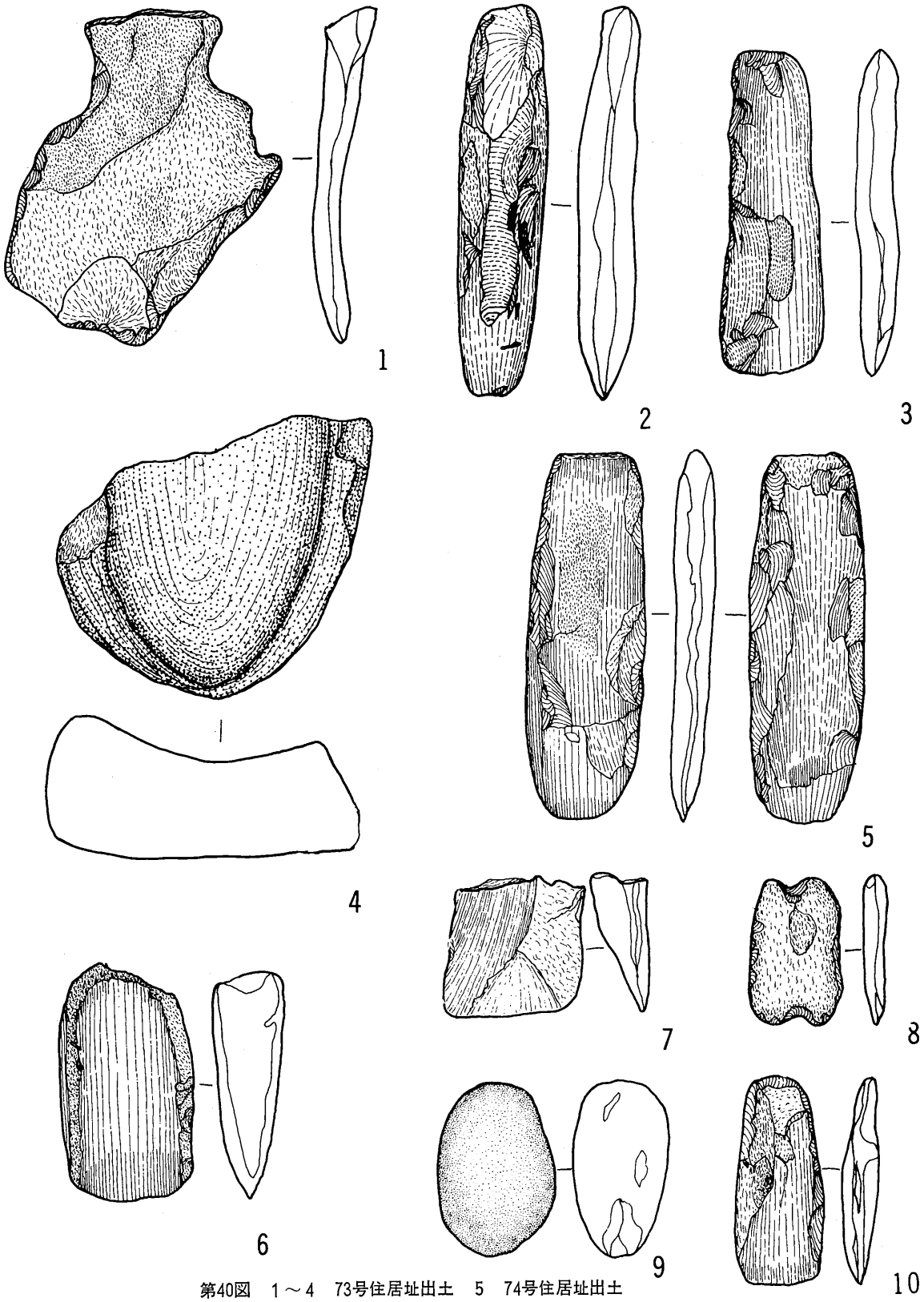
第37図　1～7　71号住居址出土　8・9　72号住居址出土　縮尺½



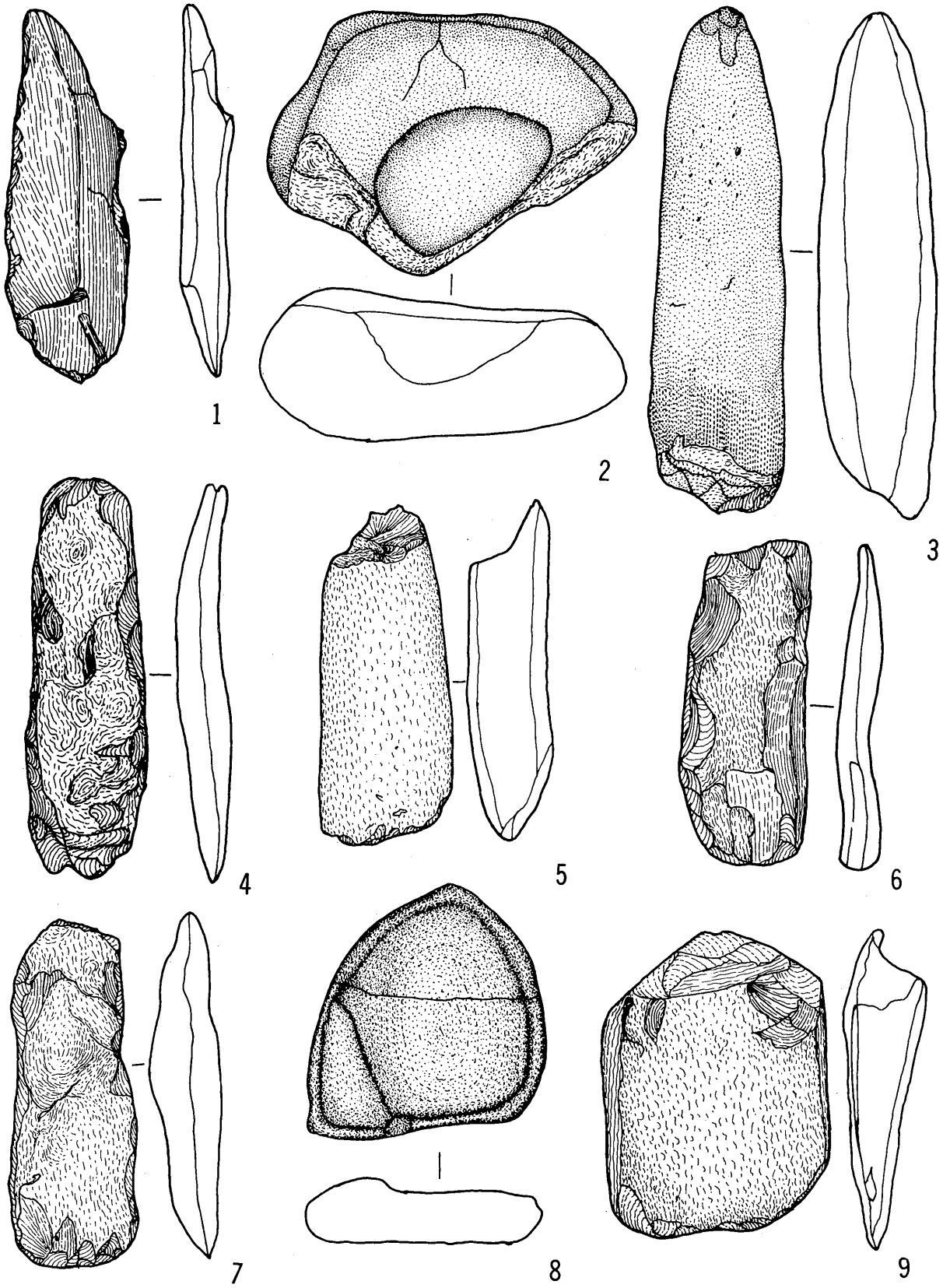
第38図　72号住居址出土　縮尺½



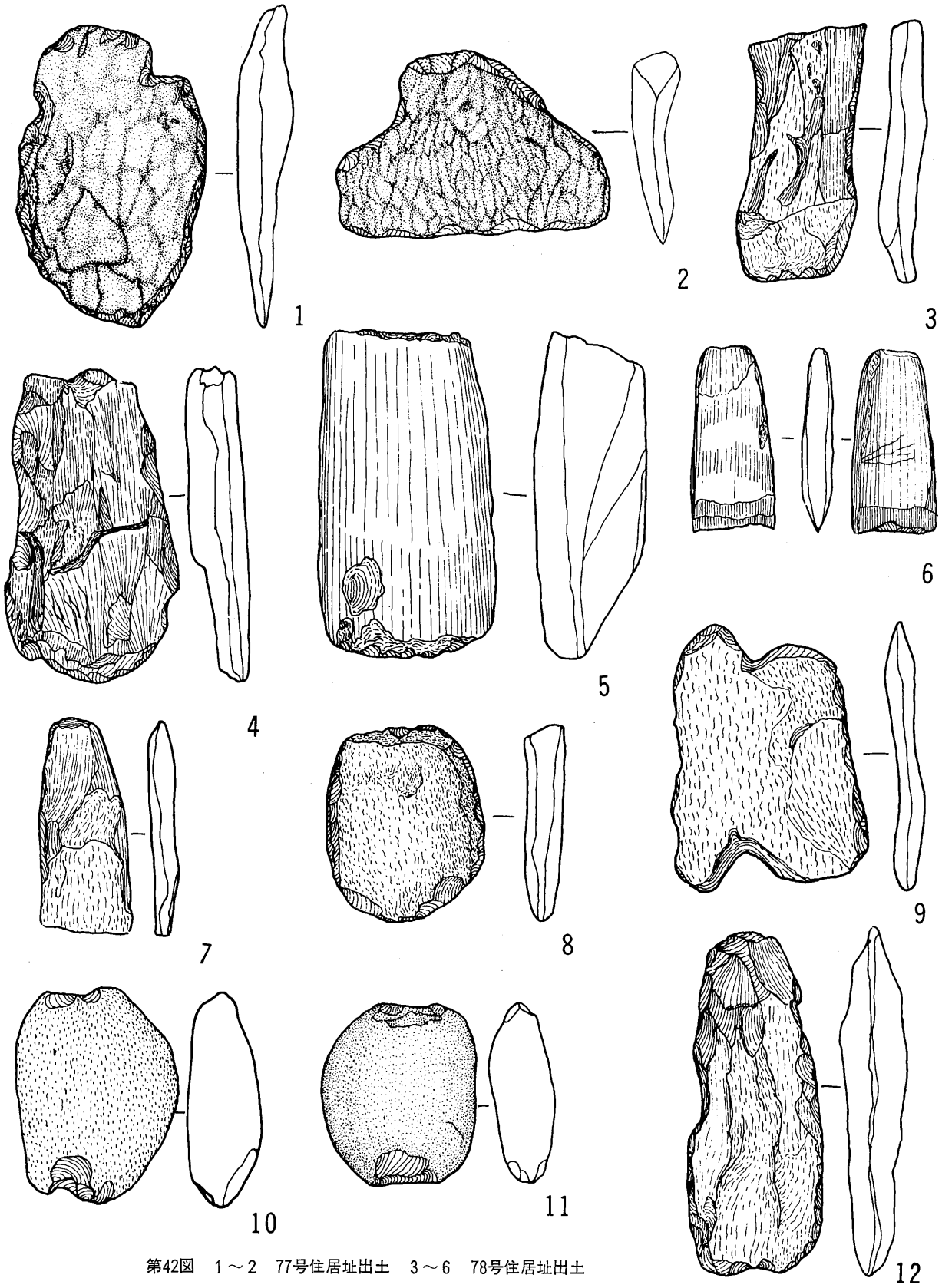
第39図　1～2　72号住居址出土　3～7　73号住居址出土　縮尺½



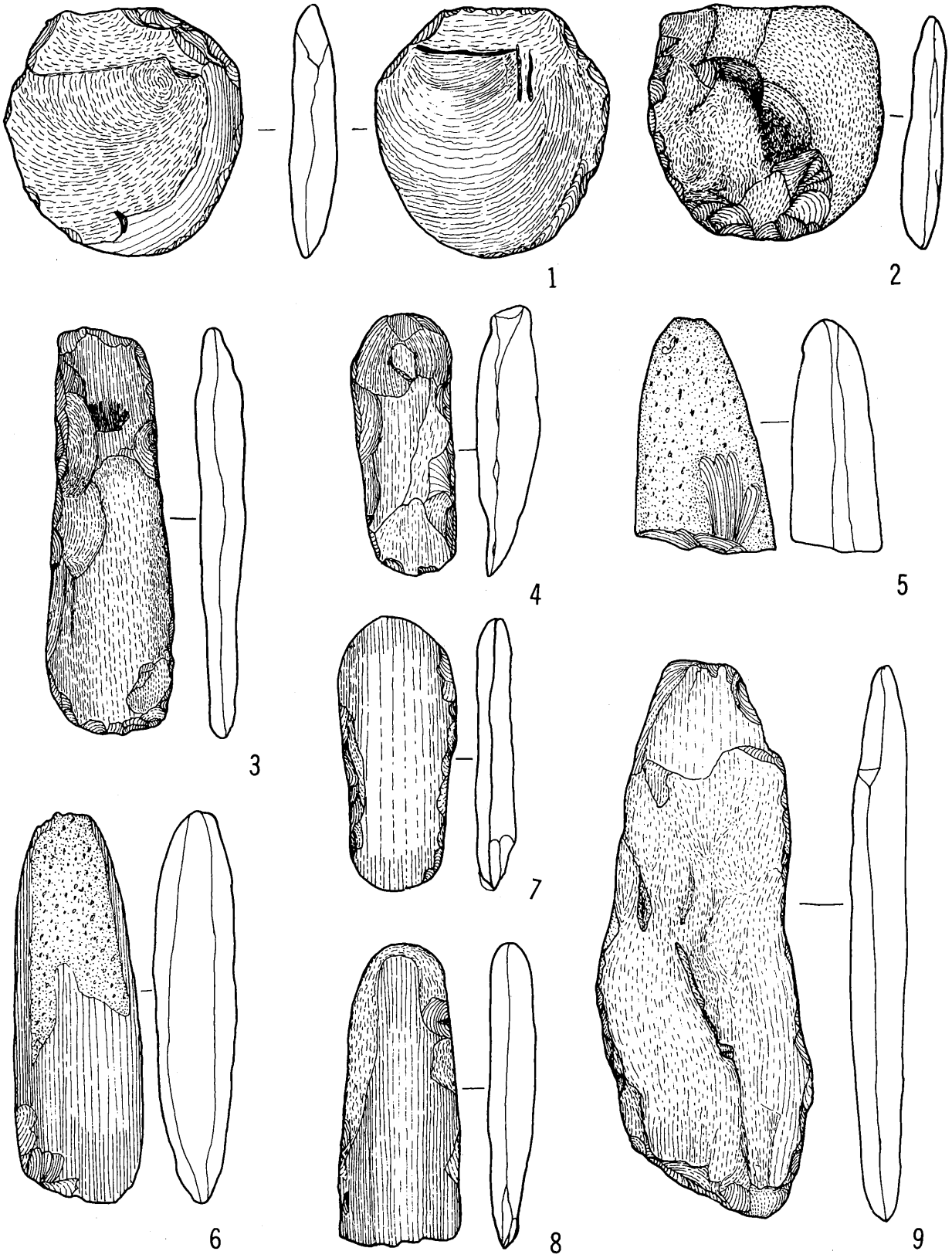
第40図　1～4　73号住居址出土　5　74号住居址出土
6　75号住居址出土　7～10　76号住居址出土　縮尺½
4　のみ¼



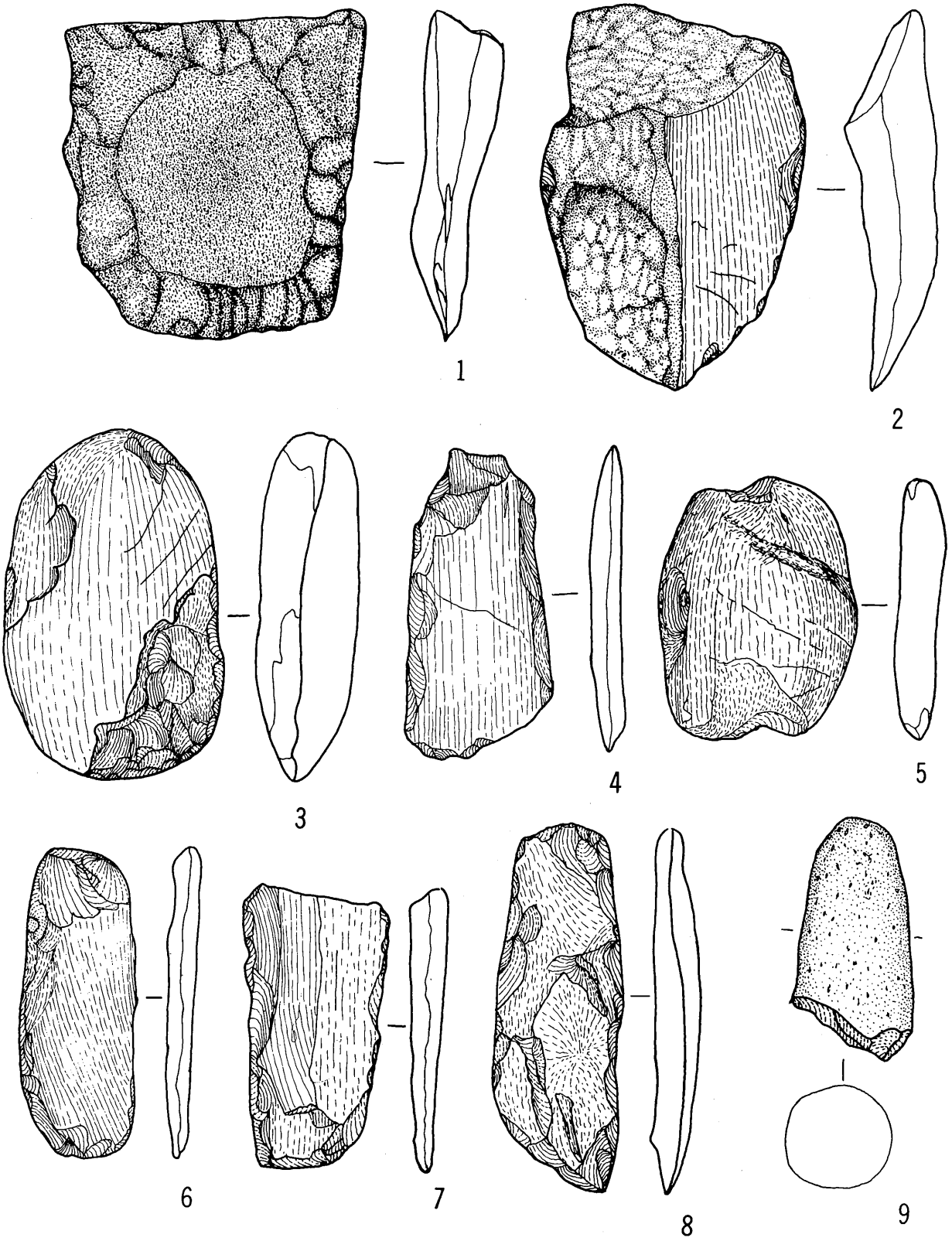
第41図　1～6　76号住居址出土　7～9　77号住居址出土　縮尺½　2・8　は¼



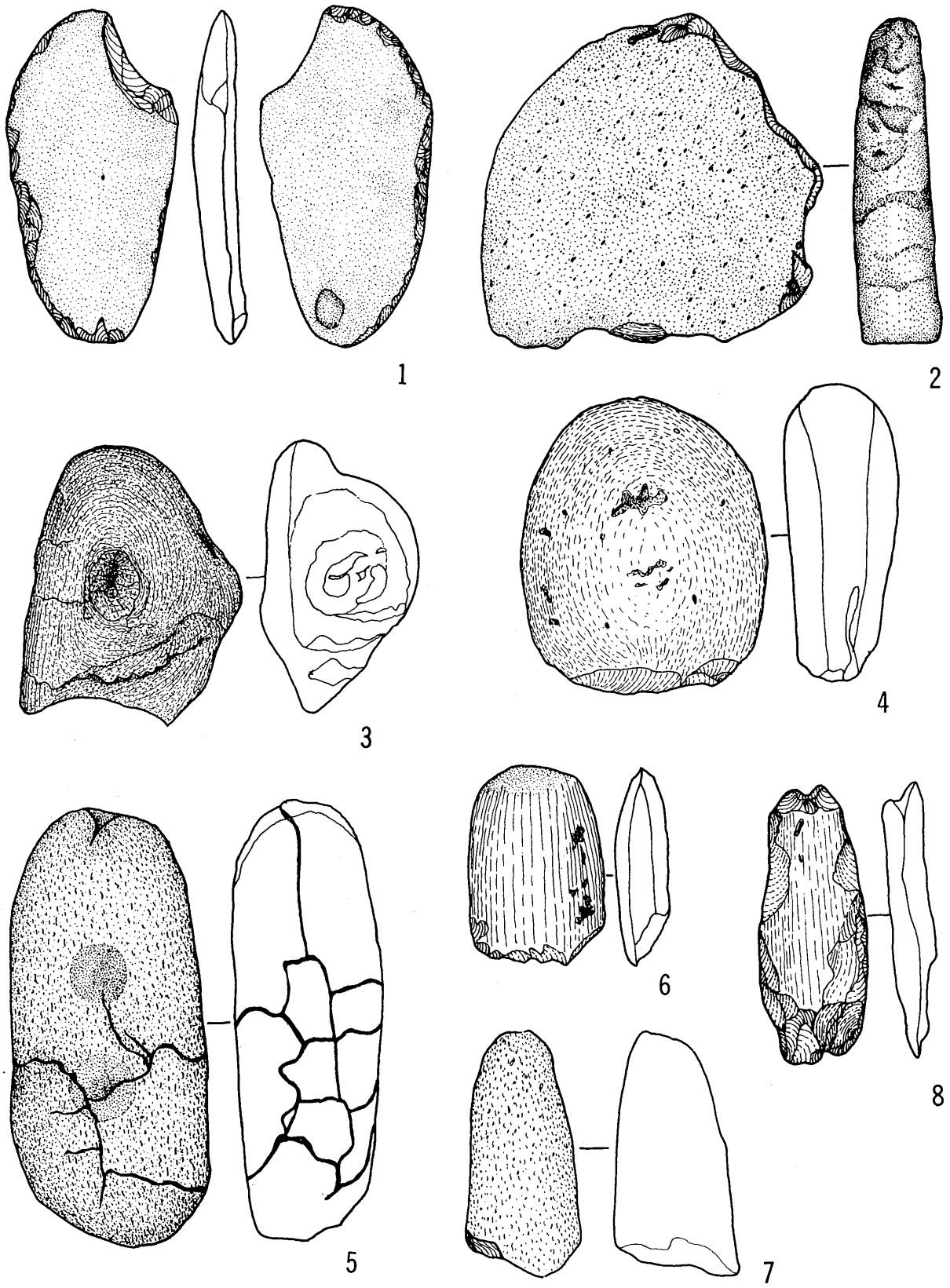
第42図　1～2　77号住居址出土　3～6　78号住居址出土
7～8　79号住居址出土　9～12　80号住居址出土　縮尺½



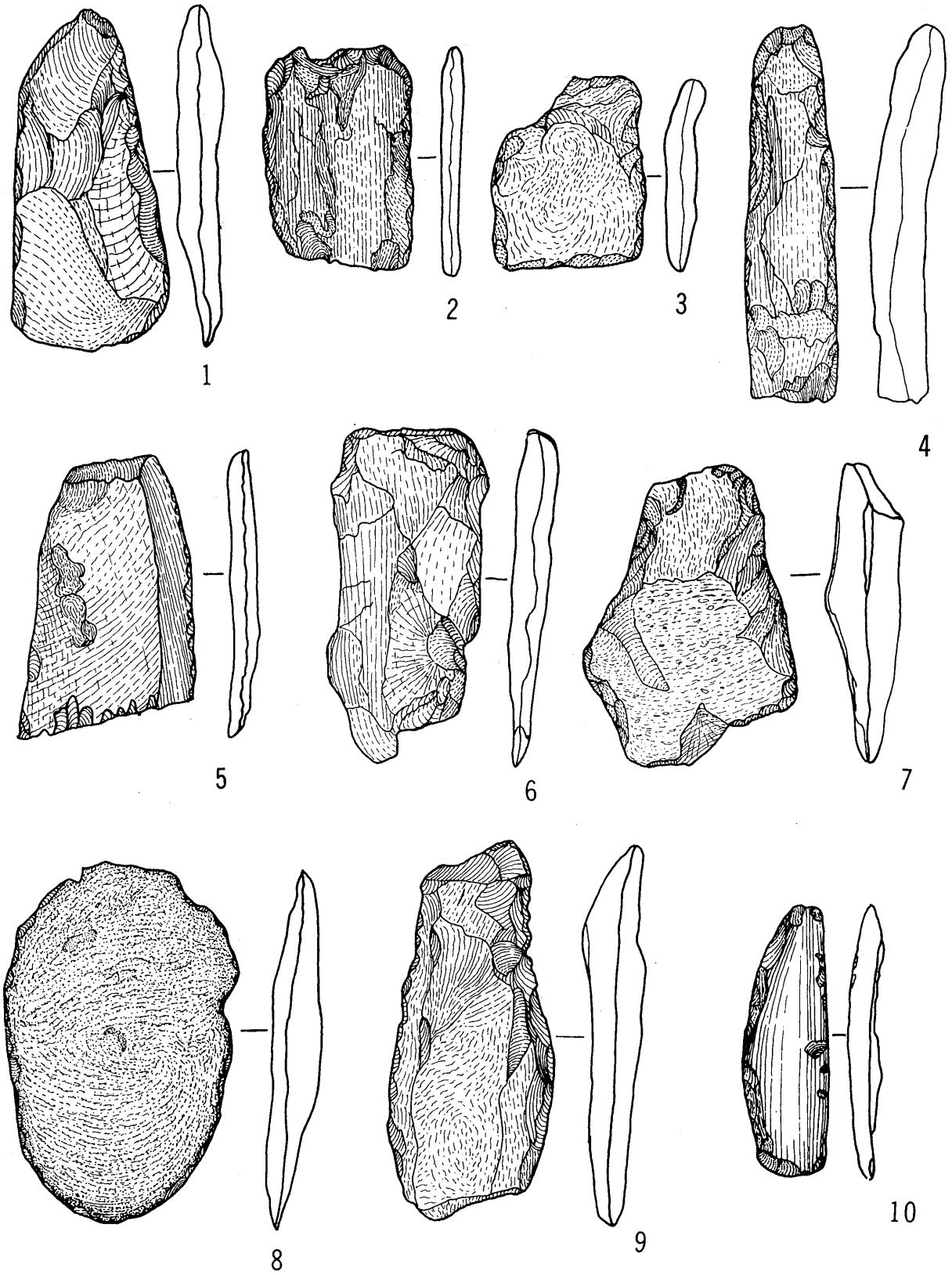
第43図　1　81号住居址出土　2～9　82号住居址出土　縮尺½



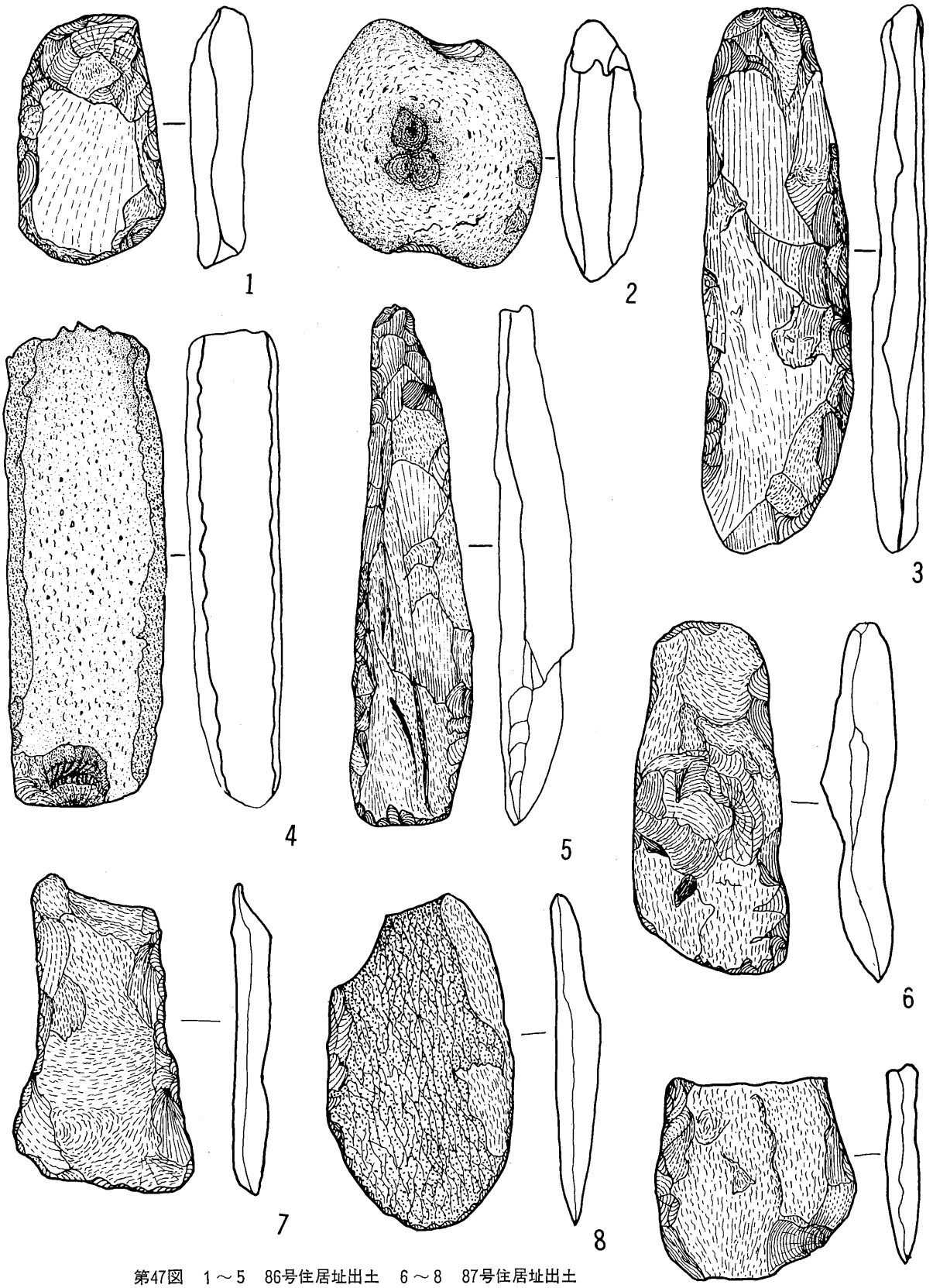
第44図　1　82号住居址出土　2～5　84号住居址出土
6～9　85号住居址出土　縮尺½



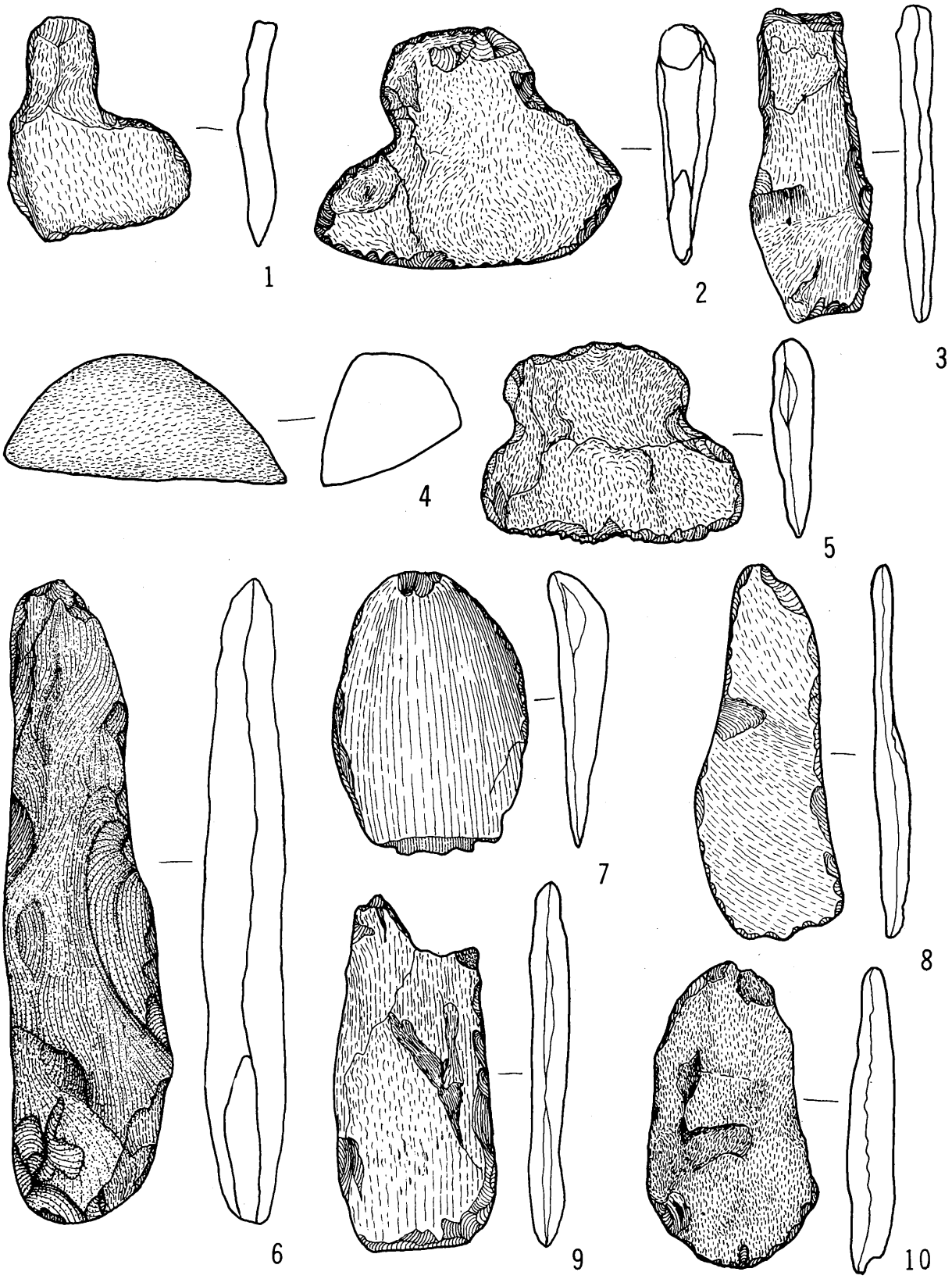
第45図　85号住居址出土　縮尺½



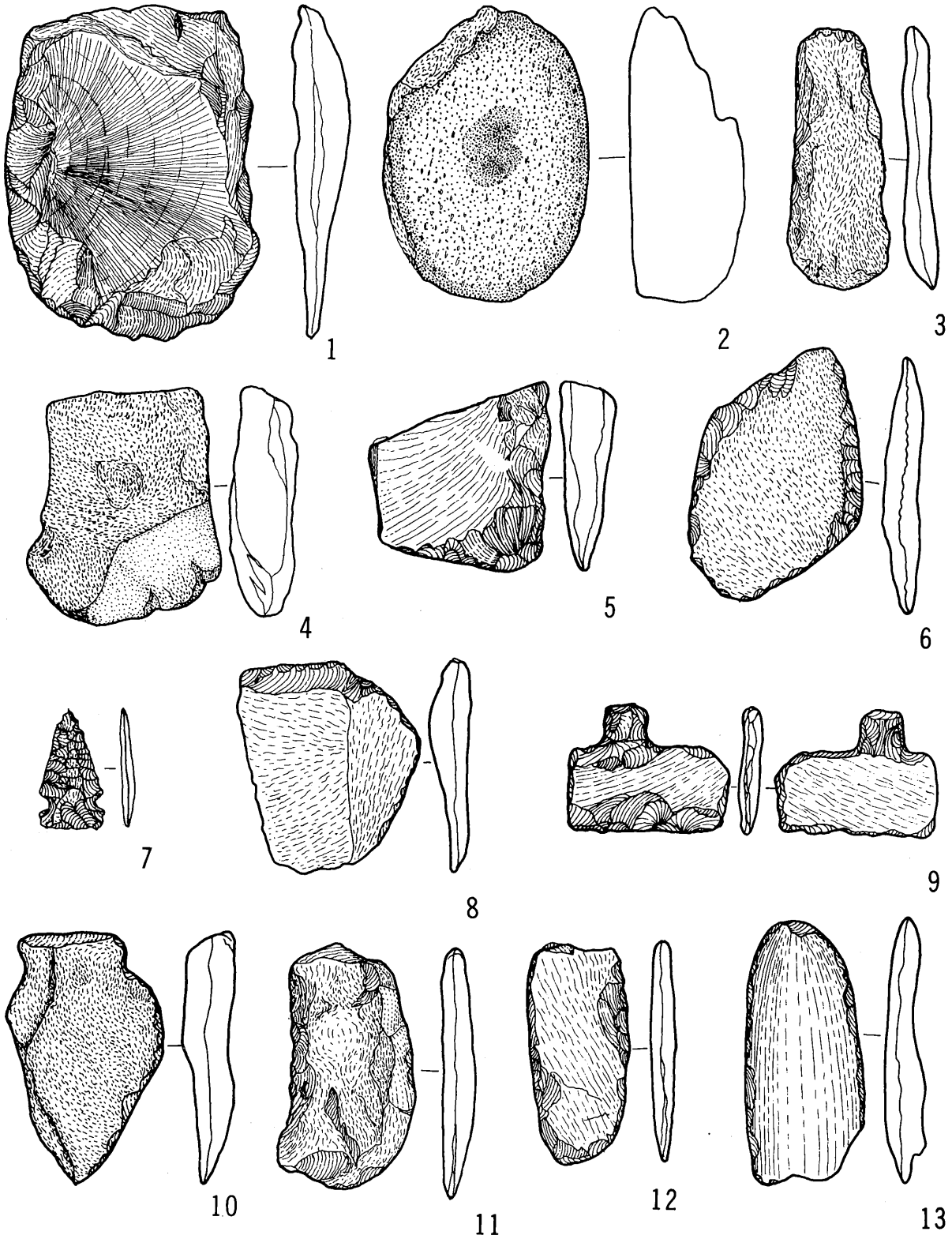
第46図　1～6　85号住居址出土　7～10　86号住居址出土　縮尺½



第47図　1～5　86号住居址出土　6～8　87号住居址出土
9　88号住居址出土　縮尺½



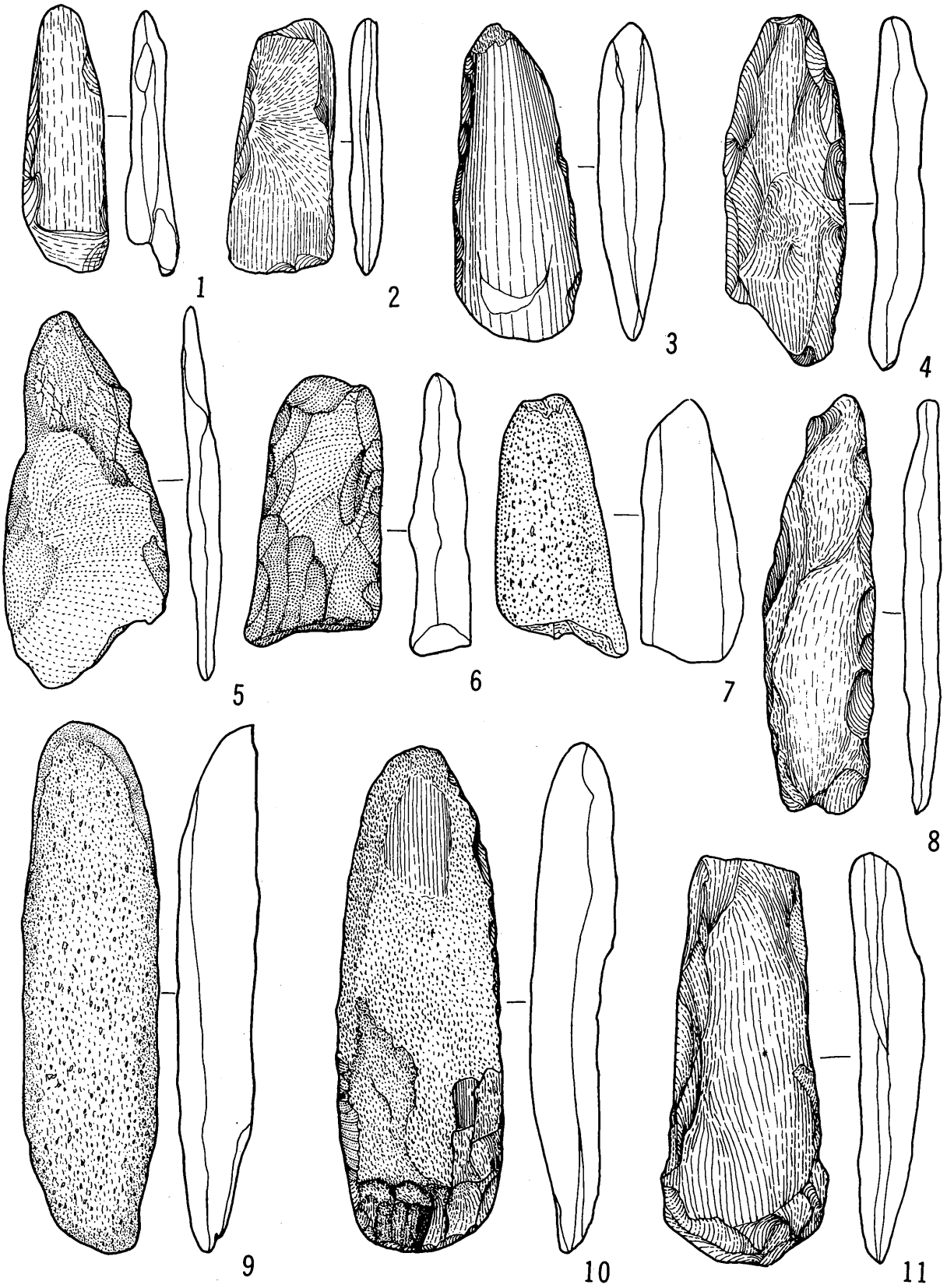
第48図　1～6　87号住居址出土　7～10　88号住居址出土　縮尺½



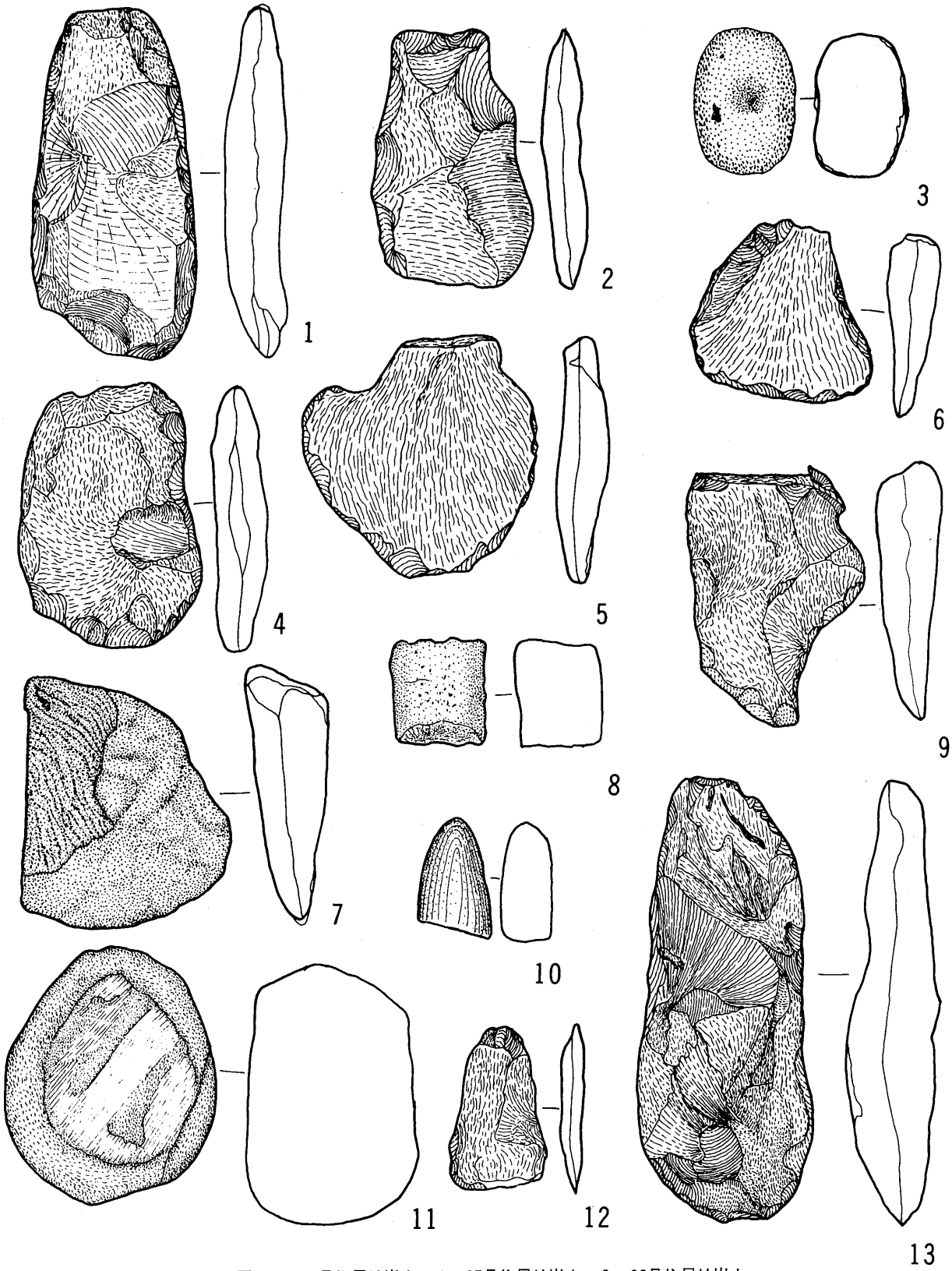
第49図　1～2　88号住居址出土　3～6　89号住居址出土

7　90号住居址出土　8　92号住居址出土

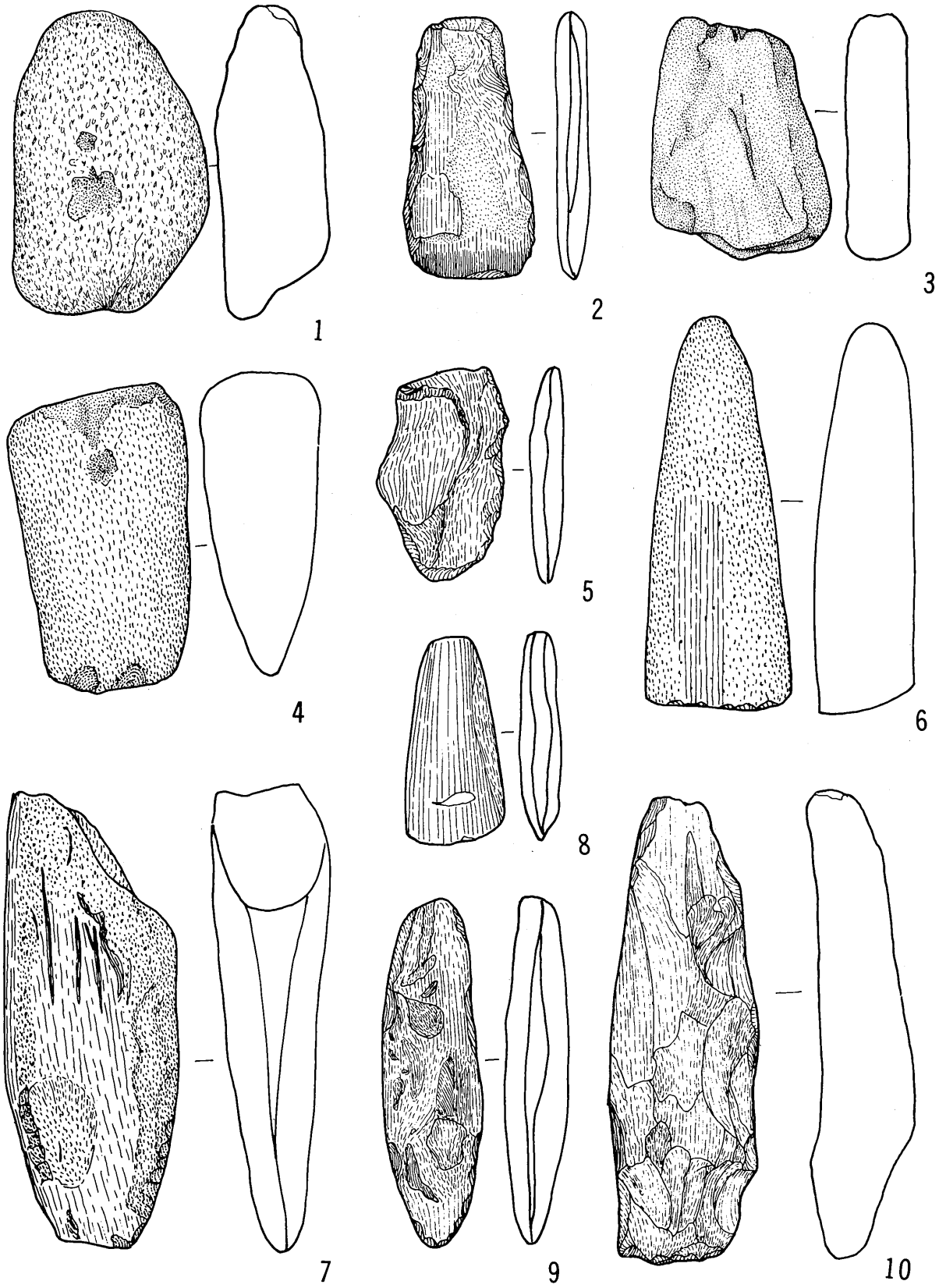
9～13　93号住居址出土　縮尺½



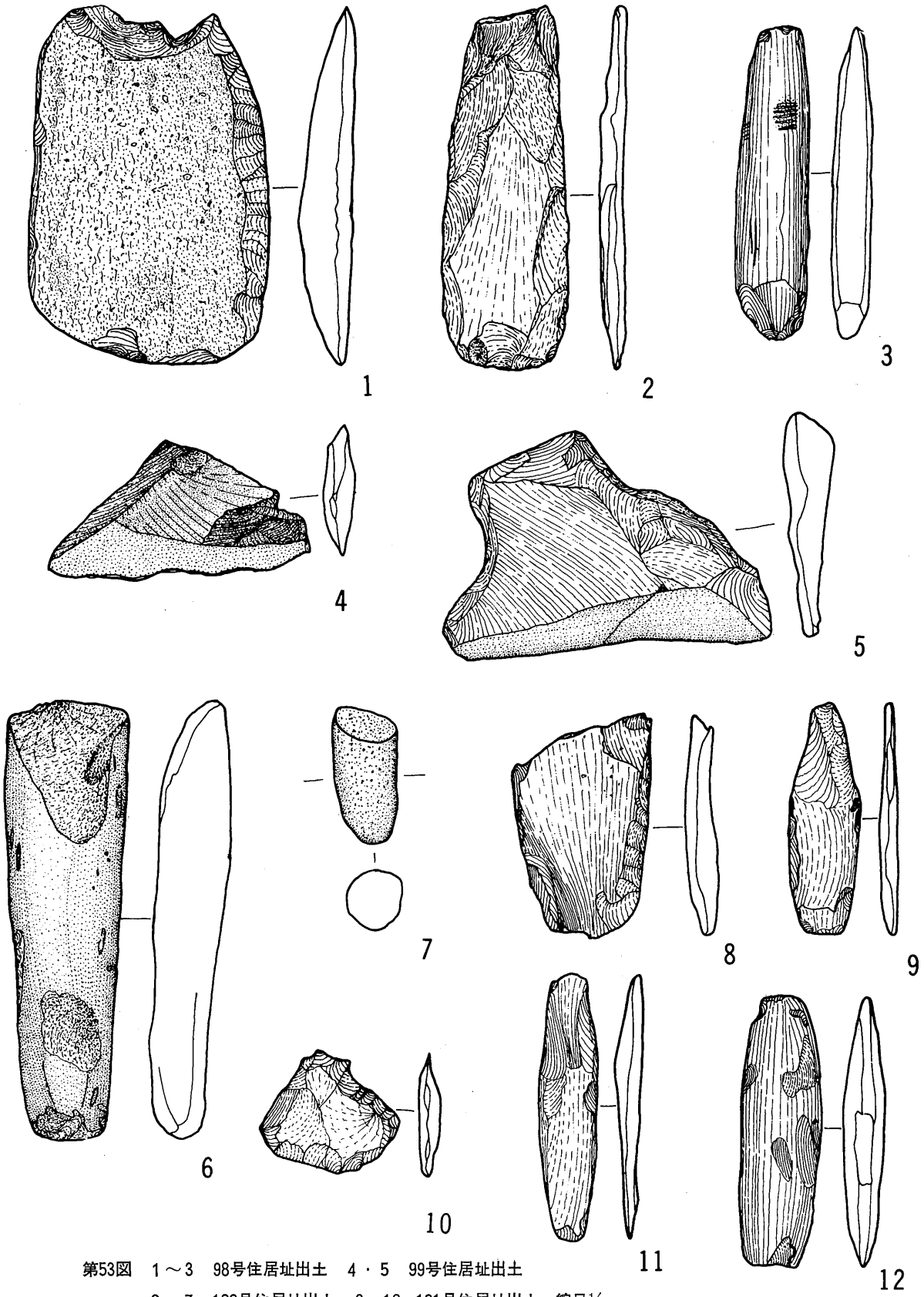
第50図　93号住居址出土　縮尺½



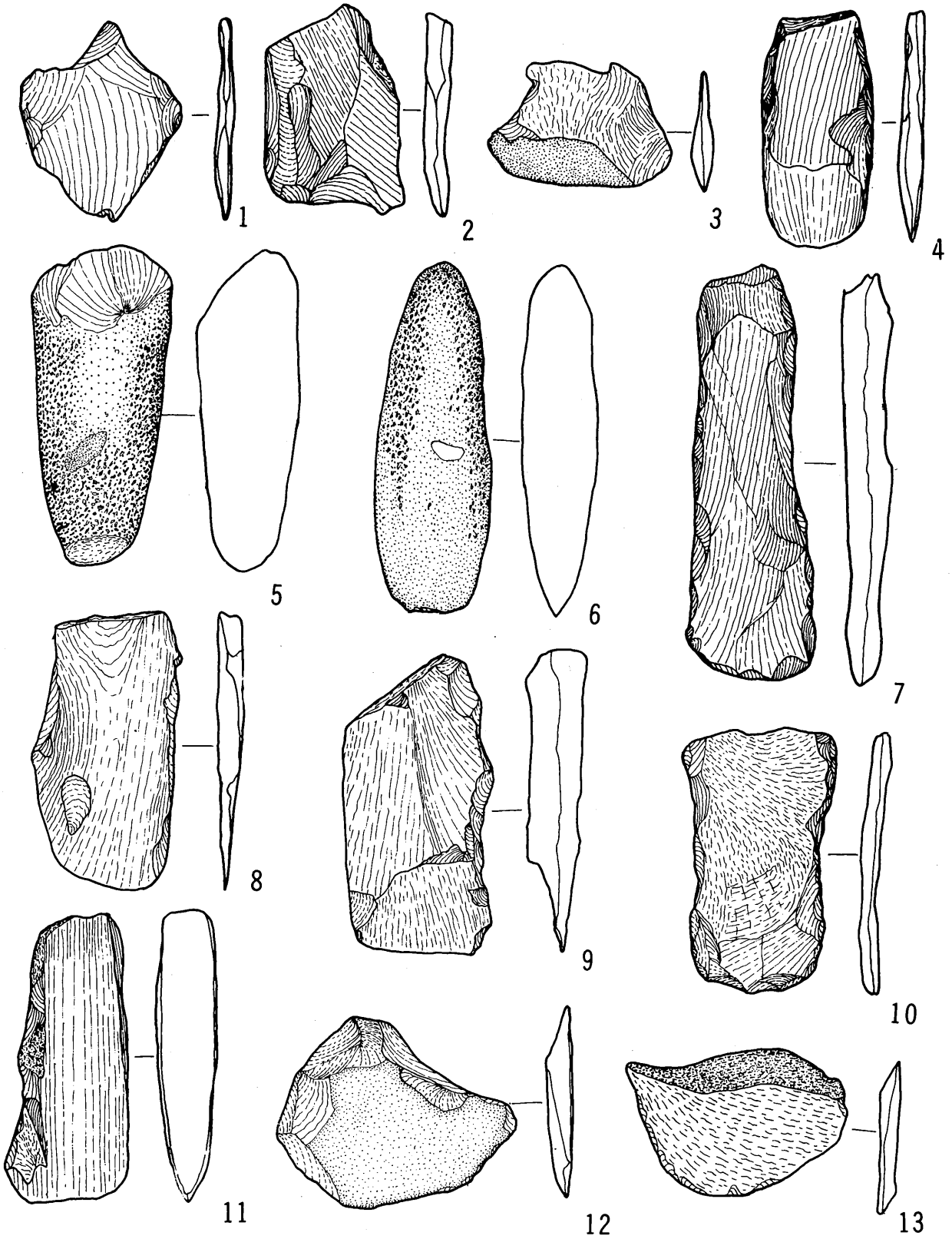
第51図　1　93号住居址出土　2　95号住居址出土　3　96号住居址出土
4～13　97号住居址出土　縮尺½



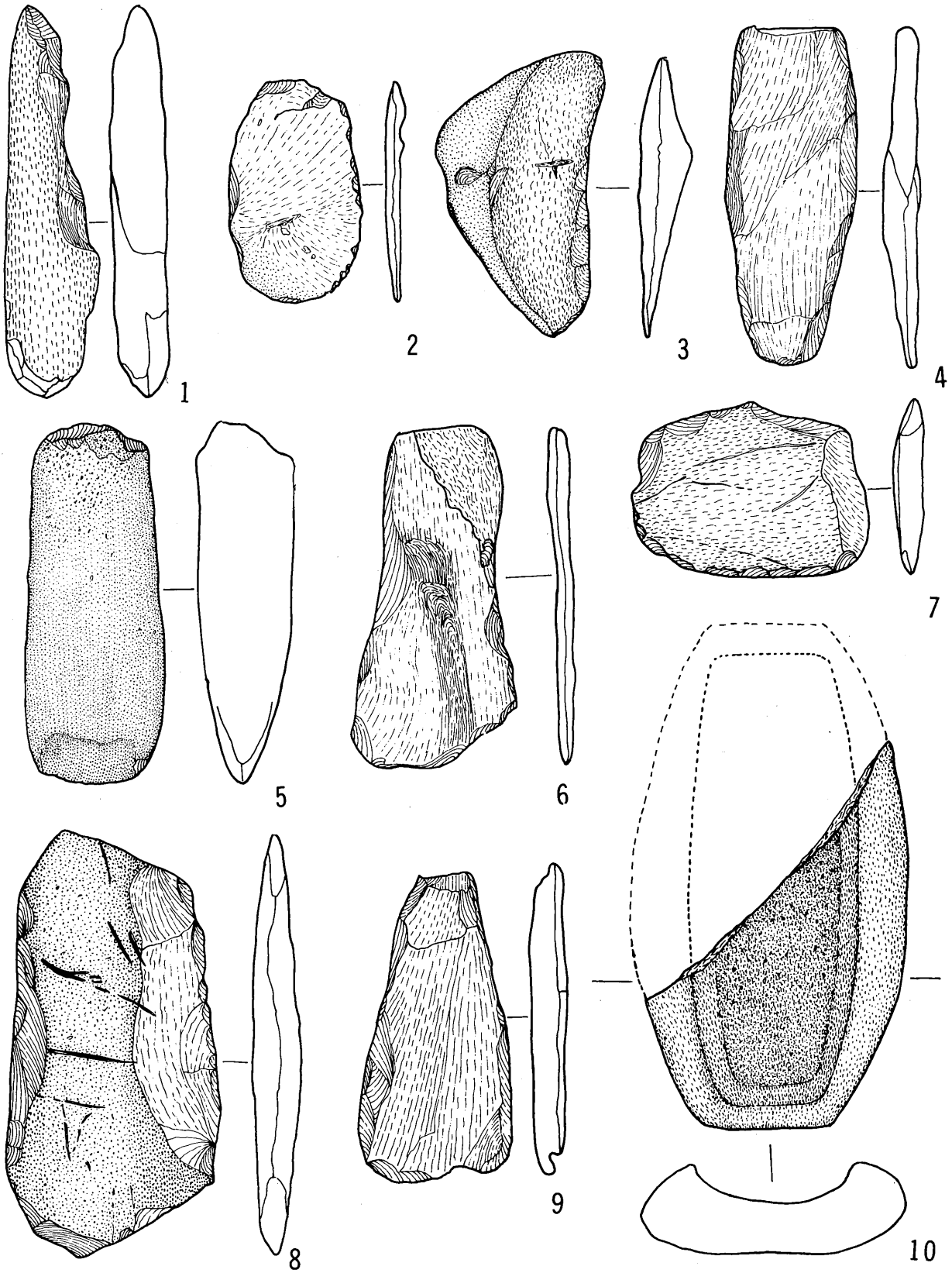
第52図　97号住居址出土　縮尺½



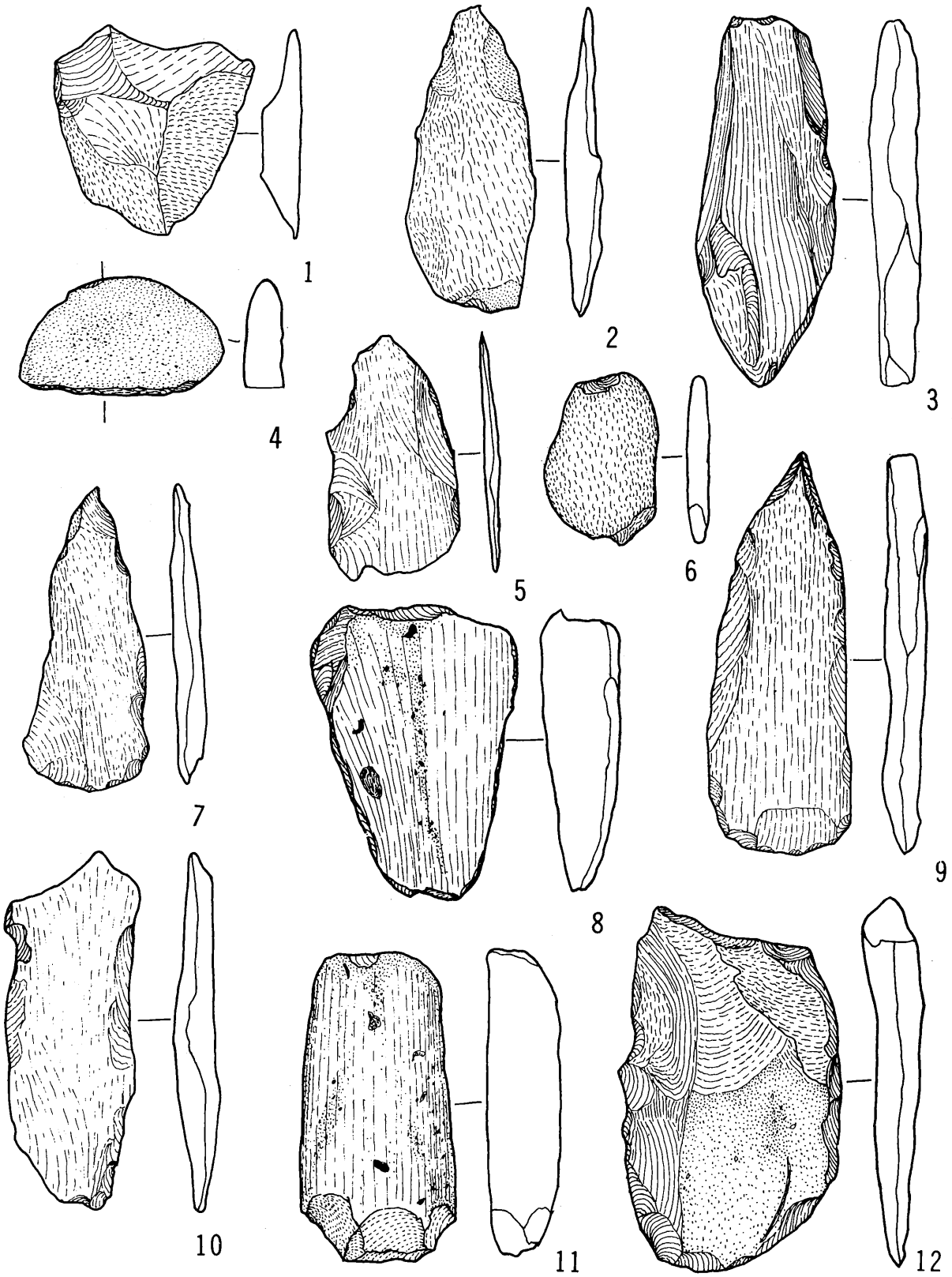
第53図　1～3　98号住居址出土　4・5　99号住居址出土
6・7　100号住居址出土　8～12　101号住居址出土　縮尺½



第54図　1～7　102号住居址出土　8　103号住居址出土
9～13　104号住居址出土　縮尺½

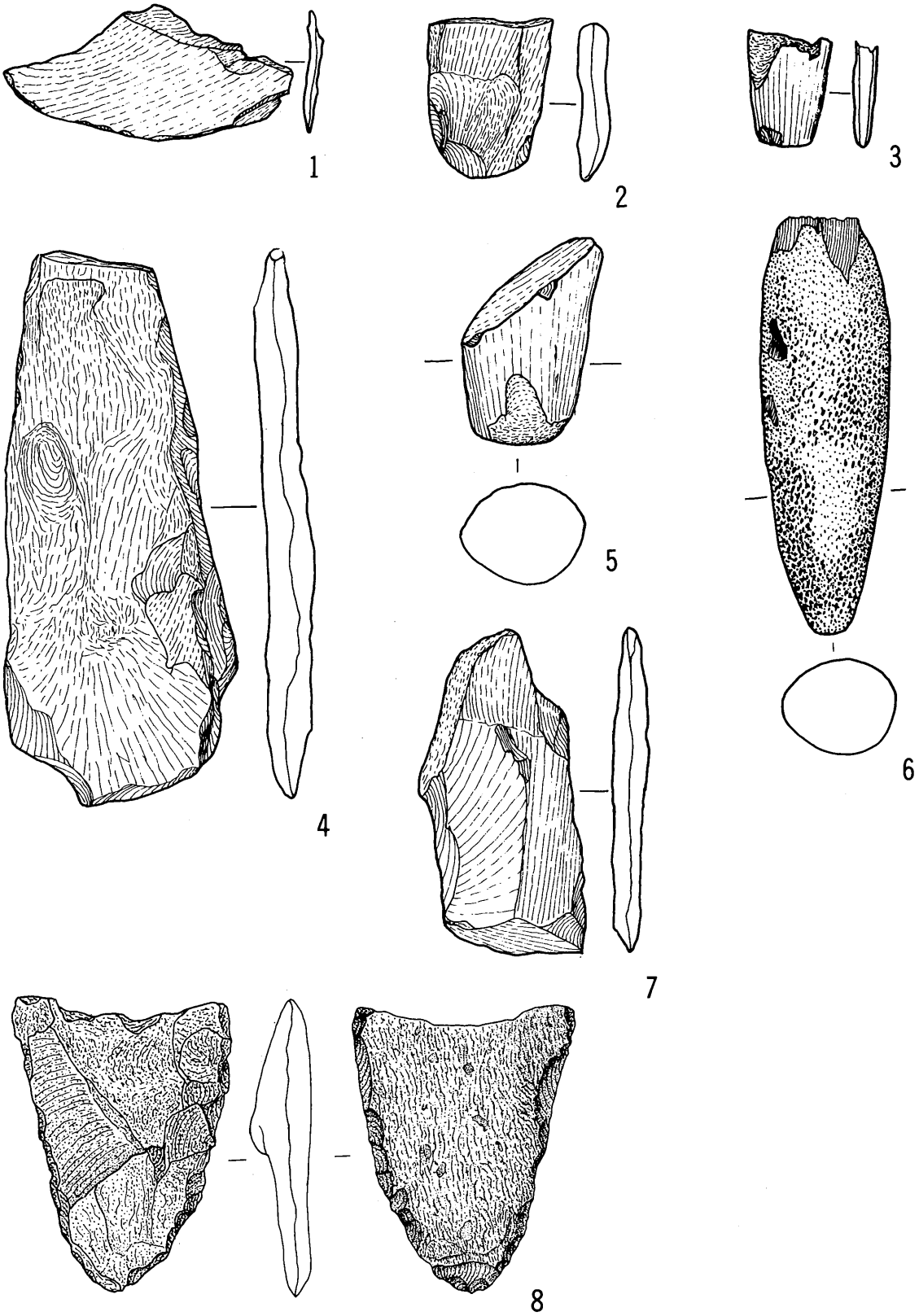


第55図　1～3　104号住居址出土　4～10　106号住居址出土　縮尺½　10　のみ¼



第56図　1　106号住居址出土　2　107号住居址出土

3～5　108号住居　6～12　109号住居址出土　縮尺½



第57図　1～7　109号住居址出土　8　表面採集　縮尺½

凡　　例

1　今回の発掘調査は西部開発に伴う，西部送水管事業で，第４次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2　この調査は，西部送水管事業に伴う緊急発掘で，事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3　本調査は，昭和57年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4　本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美　友野良一

◎図版作製者

- 遺構及び地形実測図　小池孝
- 土器拓影　小池孝，飯塚政美
- 土器実測　小池孝
- 土器実測　小池孝

◎写真撮影

- 発掘及び遺構　飯塚政美，小木曽清
- 遺　　物　友野良一

5　本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

船窪遺跡

目　　次

目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（5）

第1節　発掘調査の経緯……（5）
第2節　調査の組織……（5）
第3節　発掘日誌……（6）

第Ⅱ章　層　　位……（9）

第Ⅲ章　遺　　構……（10）

第1節　溝状遺構……（10）

第Ⅳ章　遺　　物……（14）

第1節　土　　器……（14）
第2節　磁　　器……（14）

第Ⅴ章　ま と め……（16）

挿　図　目　次

第１図　土層及び土層柱状図……（９）
第２図　地形及び遺構配置図……（11）
第３図　第１号溝状遺構実測図……（13）
第４図　第１号溝状遺構断面図……（13）
第５図　土器拓影……（14）
第６図　磁器実測図……（15）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　土　　層
図版３　グリット発掘状況
図版４　遺　　構
図版５　遺物出土状況
図版６　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちよくしています。伊那市においては，西箕輪，西春近・伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。

本年度は船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和56年８月31日　長野県教育委員会文化課関指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和57年５月18日　夜，ますみが丘公民館にて関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員が地主に対し，遺跡発掘調査の意義を説明し，調査に協力をお願いする。同夜は地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月４日　夜ますみが丘公民館に於いて，前回５月18日に説明した旨を地主が納得できるように丁寧に解説する。前回同様に，同夜も地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月15日　夜，ますみが丘公民館にて，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席して，地主側に同意を求める。同夜地主の同意が得られる。

昭和57年６月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が船窪遺跡に該当する２人の地主宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

昭和57年６月30日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で〔埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書〕を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第２節　調査の組織

船窪遺跡発掘調査会

調査委員会

委　員　長　伊沢　一雄　　伊那市教育委員会教育長

副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委　　員	赤羽　映士	伊那市教育委員長
調査事務局	三沢　昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉　俊彦	〃　社会教育課長
〃	柘植　　晃	〃　社会教育課長補佐
〃	武田　則昭	〃　社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃　社会教育主事

発掘調査団

団　　長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚　政美	日本考古学協会会員
〃	小木曽　清	宮田村考古学友の会会長
〃	小池　　孝	日本考古学協会会員

第3節　発掘日誌

昭和57年6月30日　晴　明日からの発掘調査実施のために作業員，団長，調査員に密な連絡をとり，発掘調査に万全を期すようにした。午後，念のために，関東農政局伊那西部農業水利事業所担当職員と連絡をとりあう。

昭和57年7月1日　晴
本日よりたいぼうの発掘調査である。西箕輪羽広にある伊那市考古資料館にて道具の点検，整備，修理を実施する。

昭和57年7月2日　晴
伊那市考古資料館より船窪遺跡の現場へ発掘器材を運搬する。テントは南北に細長く二張り建てる。建てる際に，幅4mと限られた範囲内だったので一工夫が必要であった。テント建ては午前中一杯かかって終了する。

発掘風景

午後はグリットを設定する。グリットは用地内の東側に基準線を設け，それによって決めることにした。その決め方は南北に1～27，東西にA～Bとする。用地内が南北に細長いので南区と北区にわける。本日のグリット設定地区は南区と命名する。グリットは1辺が2m×2m，面積4m²とする。夕方までかかってグリットの杭を打ち終えた。

昭和57年7月3日　晴　A1～A7まではテントを設営してしまったので，グリット掘りはテントを移動して最後に掘ることにする。従って，テントの北側，A8より掘り始じめる。本日はA12，A14，A16，A18，B13，B15，B17のグリットを掘る。

発掘面積が限定されているので，一松状に掘り下げていく。掘り下げていくレベルは近くの鼠平遺跡はプレの時代であるため，ひょっとすると，この船窪遺跡もプレが出土するかも知れないと思い，ハードローム層まで掘り下げる。Aラインは道路拡幅の時に削ずりとられたとみえて，掘り下げていくと攪乱部分があった。

昭和57年7月5日　晴　B17の褐色土層面より縄文中期土器片が出土した。土器の出土した褐色土層面には炭化物が少量検出された。このような状況であったので，B17，B18，B19の三グリットを丁寧に掘り下げていく。Bラインの東壁のセクション図の作製。

昭和57年7月6日　晴　前日，土器の出土したグリット付近の拡張及び掘り下げを実施する。掘り下げていくと焼土が検出されたが，遺構や遺物は何も発見されなかった。今まで掘り下げたAラインの東壁断面図を作製。

昭和57年7月7日　晴時々雨　当初地主との約束通り，今まで掘ったグリットの埋めもどしを実施する。

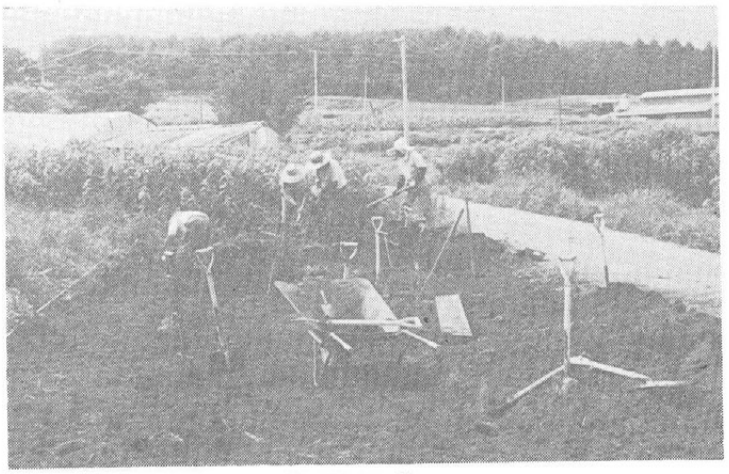
昭和57年7月8日　晴時々曇　前日と同様な作業を実施する。A8より北側，つまりテントを建てた場所より北側の全測図を作製する。

昭和57年7月9日　雨時々曇　本日は朝のうちは雨降りだったので，発掘作業は中止し，今までの図面整理や反省会を行う。

昭和57年7月10日　晴　今まで掘ったグリットの埋め戻しを実施する。北側の北区に決定した地区の掘り下げを行うが，ローム層まで極めて浅くて30cm位であった。

北区の全測図を作製する。

昭和57年7月12日　晴時々雨，前日掘ったⅡ区の埋め戻しを行う。テントの北側，南区A27付近のグリットの掘り下げを実施する。道路敷の下に黒い落ち込みを発見する。



発掘風景

昭和57年７月13日　A27付近の東側に前日発見された黒い落ち込みが南北に走っていた。この落ち込みのプランを確認するために拡張を始めるとともに，この遺構を第１号溝状遺構と命名する。

付近の人に聞くと江戸時代末期に，小黒川の近くに横穴を掘って，それを水源にして水を引いた井筋を掘ったことがあると聞されている。あるいは，それではないかとのことであった。

この遺構はところどころに凹地があり，水が流れたとみえて砂の堆積があった。底面より有田焼の藍色染付磁器片が出土した。この陶器製作年代より，この井筋は江戸時代末期ころ開さくされたものと思われた。

昭和57年７月16日　晴時々雨　12日に発見された井筋のプランを確認するために南へと拡張する。井筋の完掘を実施し，写真撮影の準備をする。小雨が降って来て，撮影には不適当なので，シートをかけて汚れないようにして，天気の良好な日には写真が撮影できるようにした。午後２時頃から雨が強くなってきたので，テントのなかで土器洗浄をする。

昭和57年７月17日　雨　本日は雨降りだったので，現場のテントの中で図面整理をする。

昭和57年７月19日　雨　土器洗浄と注記を行う。

昭和57年７月22日　晴　溝状遺構（井筋）の完掘，清掃，写真撮影終了，溝状遺構の平面及び断面実測。

昭和57年７月23日　晴　溝状遺構の南側と北側の東西のセクション図作製，溝状遺構の埋め戻し。

昭和57年７月28日　晴時々曇　テントの下を掘り下げる。

昭和57年７月29日　晴時々曇　前日掘ったグリットの埋めもどし。

昭和57年７月30日　晴時々曇　現場のあとかたづけを実施する。

昭和57年８月10日　現場の点検を行う。

昭和57年12月～昭和58年２月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和58年３月　報告書を刊行する。

（飯塚政美）

第Ⅱ章　層　　位

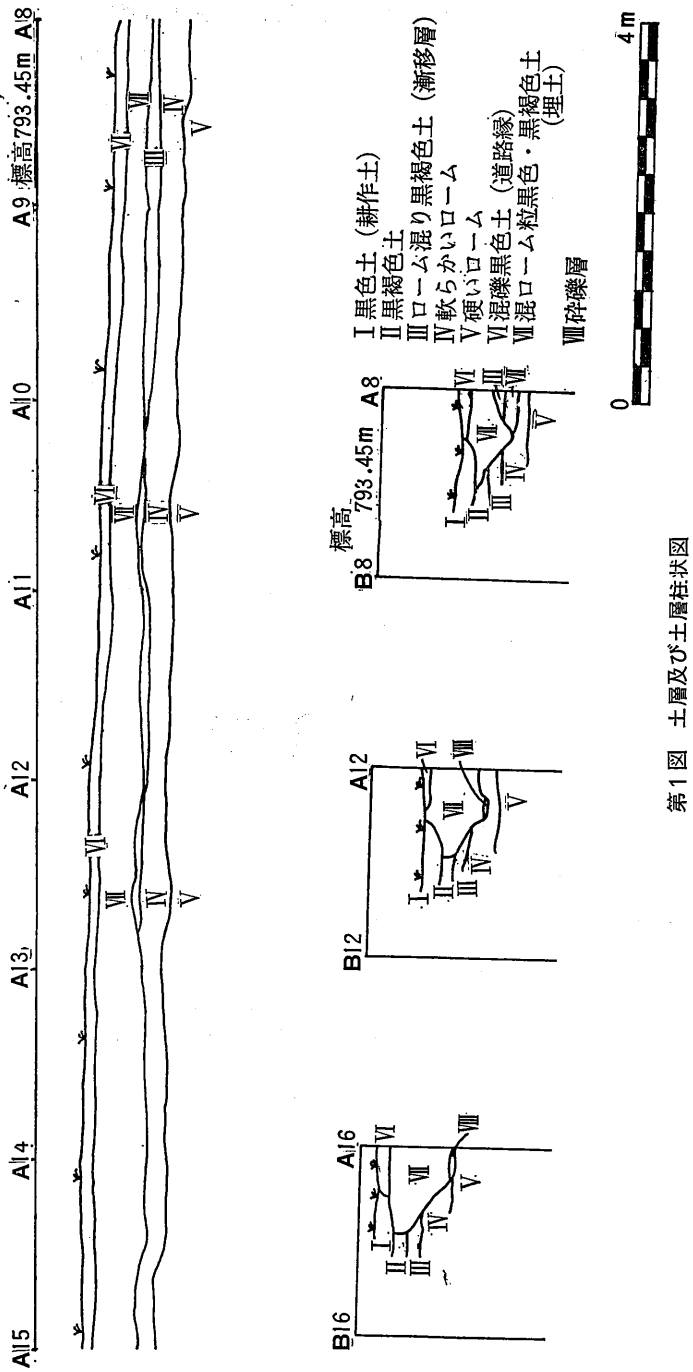
本遺跡中の層位は割合に単純な姿で，検出された。その理由としては，この遺跡は割合に平坦地で自然的条件に左右されることが少なく，割合に規則的な層序関係を呈していた。

層序関係を第１図にもとづいて述べてみると下記のようになる。第Ⅰ層―黒色土（耕作土），第Ⅱ層―黒褐色土，第Ⅲ層―ローム混り黒褐色土（漸移層），第Ⅳ層―軟らかいローム層（ソフトローム層，第Ⅴ章―硬いローム層（ハードローム層），第Ⅵ層―混礫黒色土（道路縁），第Ⅶ層―混ローム粒黒色・黒褐色土（埋土），第Ⅷ層―砂礫層であった。

以上，述べてきた，８層について特徴を記してみることにする。第Ⅰ層は耕作土であったが，畑の手入れが良好とみえて，充分なる有機質を含んだ黒色を呈していた第Ⅱ層は極めて粒子が細かく，粘性に富んでいた。第Ⅲ層は漸移層であるから当然，このような色調を呈していた。第Ⅵ層―道路の拡幅時に混入した土層であろう。

第Ⅶ層は道路を掘った時に混じった一種の攪乱土的な埋土であろう。第Ⅷ層の一部には後で述べる溝状遺構の砂礫土層が流入したものと考えられる。

（飯塚政美）



第１図　土層及び土層柱状図

第Ⅲ章　遺　　構

今回の発掘調査で検出された遺構は溝状遺構１基だけであった。なにしろ幅４ｍと限ぎられた場所だけによほど的中しない限り，遺構検出は極めて困難であるという見解を持った。ただ，遺物は少量ではあるが検出されているので，もう少し，広範囲の調査を実施したならば遺構検出の可能性はかなり期待が持てると思われる。

第１節　溝状遺構

第１号溝状遺構　（第３～４図，図版４）

本遺構は，表土面から50㎝位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築した溝である。その構築方向は南北に細長く伸びている。東西幅30～40㎝位であるが，南北は前述した状況であるので不明である。このことは後で述べるが，この溝の用途について重大な課題が隠されていると思われる。

壁面上部はソフトローム層から，壁面下部及び底部はハードローム層より成り立っており，構築面のレベルは一般の遺構と変化はない。壁面はやや外傾し，凹凸が多くなっている。これは構築時には丁寧な仕上げをしたことと推測できるが，その後，水が通ったおりに，徐々に削り取られていって，現在の姿になったものと思われる。

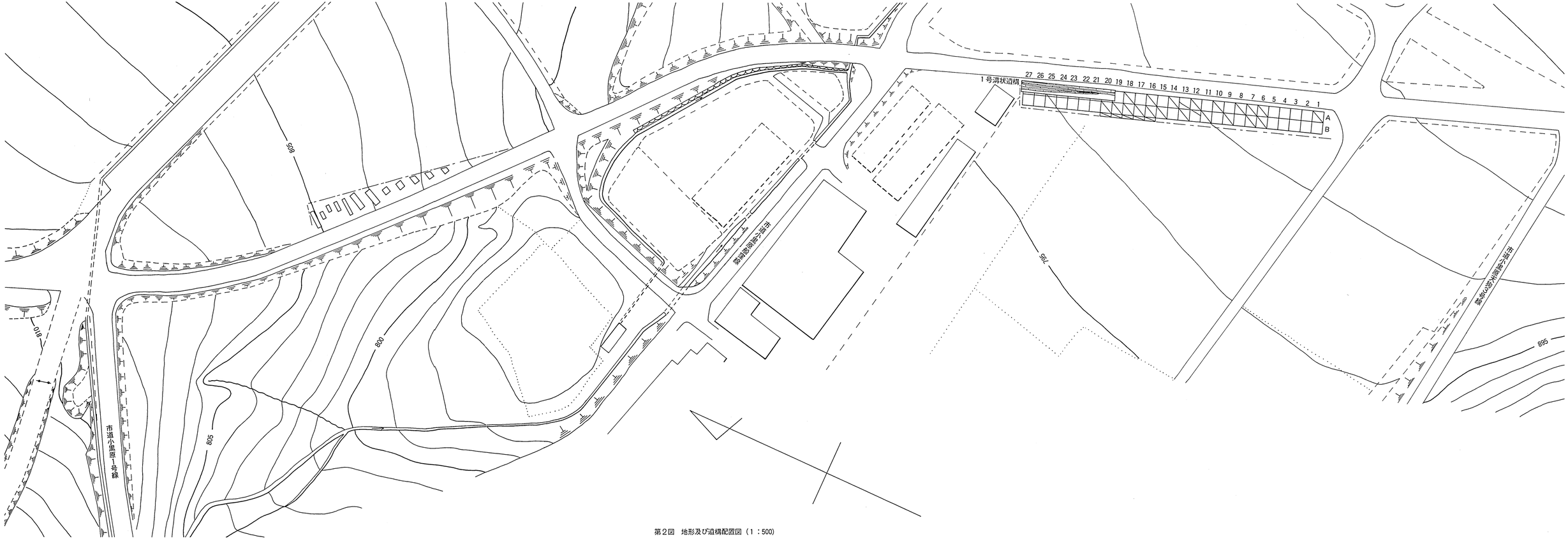
床面はところどころに凹地が多く，全般的には変化に富んでいる。この凹地には多量の砂の堆積がみられた。現況の姿については壁のところで前述したような過程をたどってきたのであろう。床面の傾斜は北から南へ続いており，従って，水の流れも当然北から南であったことは明瞭である。底面は水流速度の減速の為にわずかではあるがまがっていた。

遺物は床面近くより江戸末期か，明治初期頃の有田焼の染付磁器片が出土している。従って，この溝の開さくは前述した時期と推定しても良いと思われる。

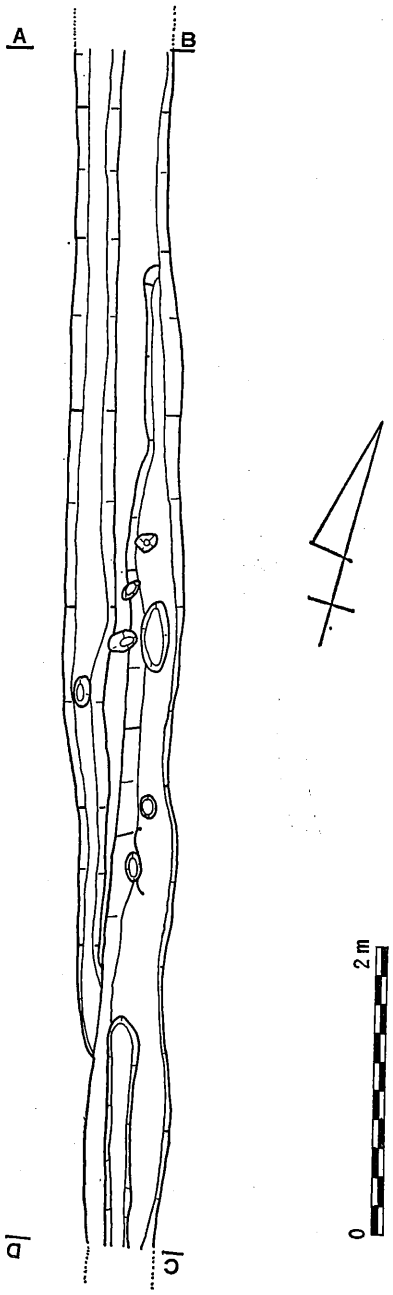
聞くところによると幕末頃に，水田の井を引いたことが，この船窪部落に伝承されているとのことである。あるいはこの溝がその時の井筋の跡かも知れない。いずれにしても，この部落草分に大いに役立ったものと推測できると思われる。

溝の付近及び溝の中に混入していた土層は上から耕作土，黒褐色土，混ローム黒褐色土（漸移層），軟らかいローム，硬いローム，混ローム粒（少）黒色土，黒色土，混ローム粒（多）黒色土，混ローム粒（少）黒褐色土，混ローム粒（多）黒褐色土，混黒褐色土ローム，混礫黒色土であった。

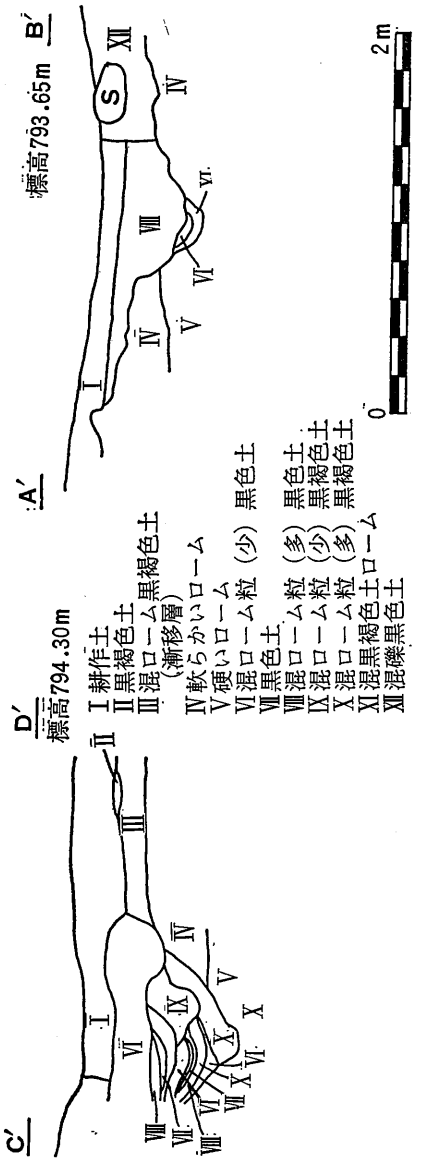
（飯塚政美）



第2図　地形及び道構配置図（1：500）



第3図　第1号溝状遺構実測図



第4図　第1号溝状遺構断面図

第Ⅳ章 遺　　物

第1節 土　　器（第5図，図版6）

本発掘調査で出土した土器は，ここに掲載したわずか5片であった。

第5図（1～2）は縄文中期初頭相当土器である。焼成は概して普通であり，（1）は黒褐色，（2）は明黄褐色を呈している。（1）は胎土に雲母を（2）は長石を含んでいる。（1）は破片上部と下部に太い沈線で交互状に文様をつけ，破片中部には上下に二本沈線を横走させ，それらの間に刻目を施してある。

（2）は竹管状工具によって沈線を縦状させてあり，沈線と沈線との間隔は割合に規則的になっている。

第5図（3～4）は縄文中期中葉に相当する土器である。総じて焼成は悪く，黄褐色（3），黒褐色（4）を呈する。壁面の焼成は極めて悪く，胎土に微量の長石（3），雲母（4）を含んでいる。

文様構成は沈線のなかに小さな爪形文を施してあるもの（3），ただし（3）は爪形文が浅い為に拓影では不明瞭である。（4）は沈線を若干蛇行状に横位に走らせ，その上に太く，粗大な爪形文を連続的に付け添えてある。

第5図（5）は縄文後期初頭の称名寺式に対比されるべき土器と思われる。器厚は0.9cm～1cmと厚手を示し，破片上部は黒色，下部は赤褐色を呈している。胎土に長石粒を含み，割合にかたくしまっている。内壁には調整痕が横位に入っている。称名寺式土器に良くみられる波状口縁を示している。

文様は無文地に太い沈線をワラビ手状に付け，器面を飾っている。

第5図　土器拓影

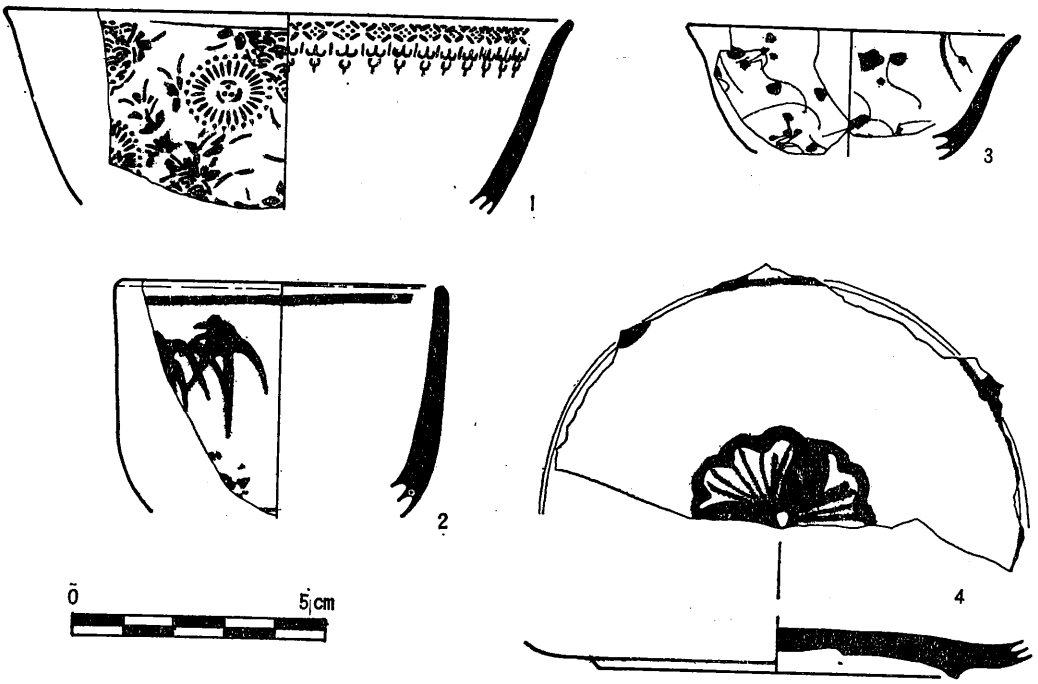
第2節 磁　　器（第6図，図版6）

第6図に掲載した磁器は4片とも全て，第1号溝状遺構内の底部より出土した。4片とも全て，小さな破片であったが図上復元が可能であったので，実測図の姿で登載させたわけである。

器型からみてみると，茶碗形のもの（1，3），湯呑形のもの（1），皿形のもの（4）である。文様のデザインは（1，3）は花図柄風，（2）は竹葉図柄風，（4）は菊花文図柄風と思われる。

藍色の染付であり，江戸末期から明治初期頃の作と推測できよう。産地は九州の有田地方と思われる。

（飯塚政美）



第6図　磁器実測図

第V章　ま　と　め

今回の発掘調査は前述したように幅４ｍと言うベルト状の調査であったために，期待した程の成果はあがらなくて終ってしまった。

遺構としては溝状遺構だけであった。その規模や様相，状態については前述したので，それについては今回は省略し，むしろこの遺構の歴史的意義づけについて述べてみることにする。

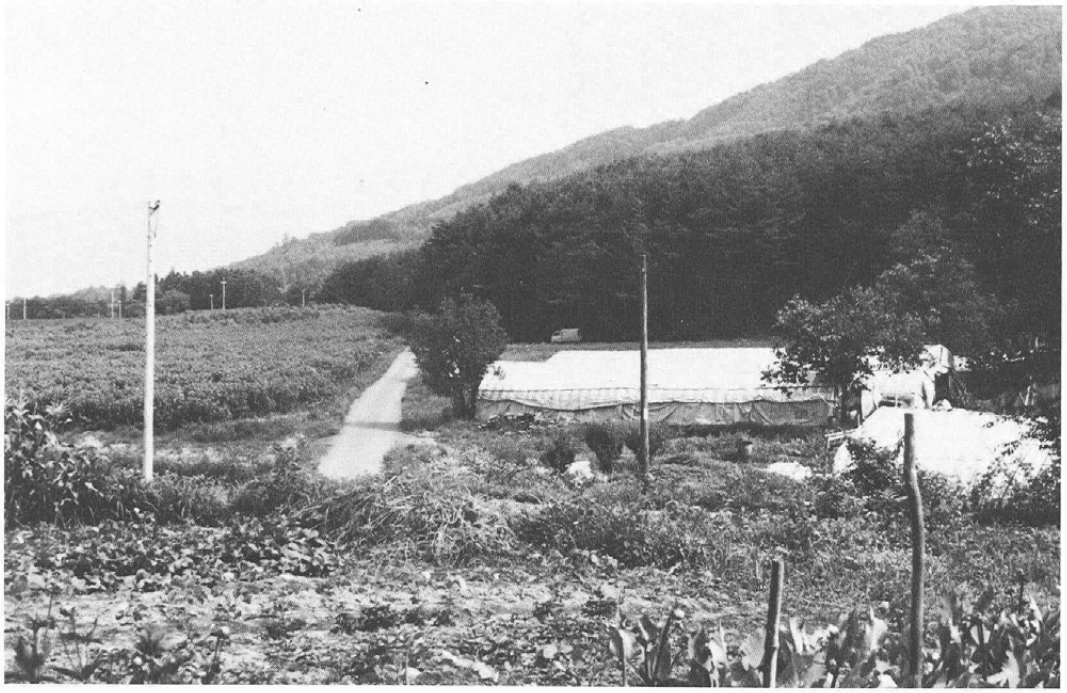
遺跡地の存在する付近一帯は水利の便が悪く，住民達は難渋していた。そこで江戸時代初期高遠藩鳥居侯が井を開いたのが最初であると古記録に残されている。これは旧原田井と呼ばれ，昭和48年度に中央道発掘調査の折りに発見された。これにヒントを得てこの度発見された溝状遺構が構築されたのであろう。この遺構のなかから有田焼の染付磁器が検出された。この遺物が混入する場合は二つのケースが考えられる。一つは溝は何んでも捨てるという風潮がある。もう一つはかってはこの溝を流れた水は澄みきっていたものと思われる。そこで，日常雑器を洗うのに利用していたのではないか。洗う時に何かの調子で落してこれしてしまったのが，そのまま沈んでしまったのではないか。いずれにしても構築目的は水田開発に利用したのであろう。構築時は江戸時代末期から明治時代初期であろうと思われる。

土器拓影に掲載したのはは縄文中期初頭梨久保式，縄文中期中葉勝坂式，縄文中期後葉加曽利E式，縄文後期初頭称名寺式であると思われる。

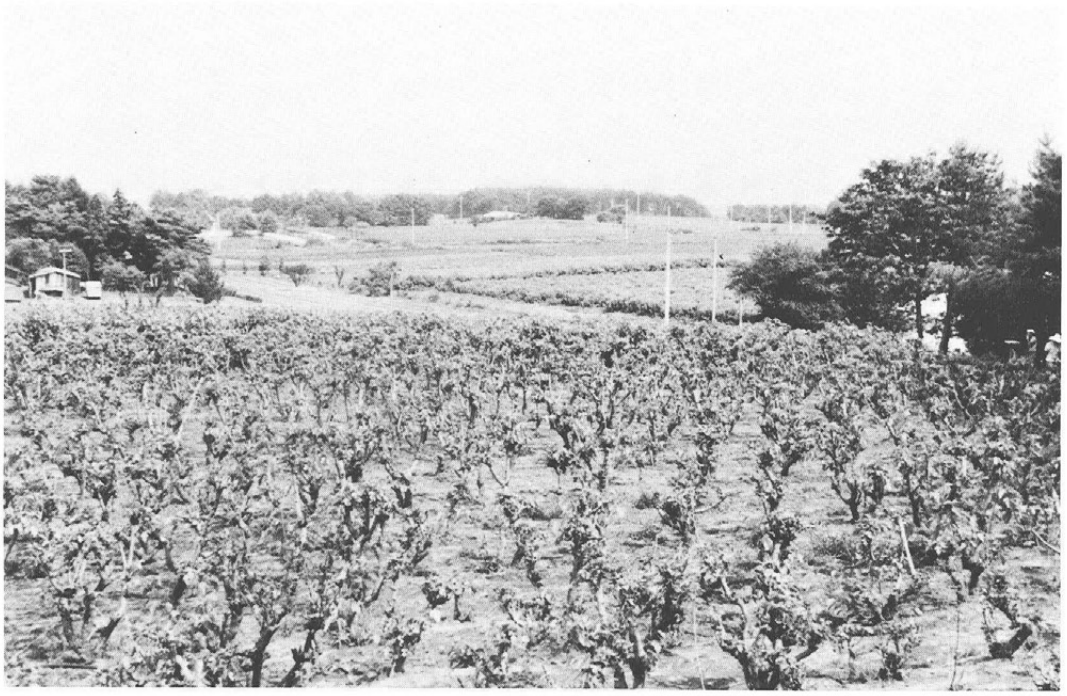
（飲塚政美）

図　　版

図版1　遺跡全景

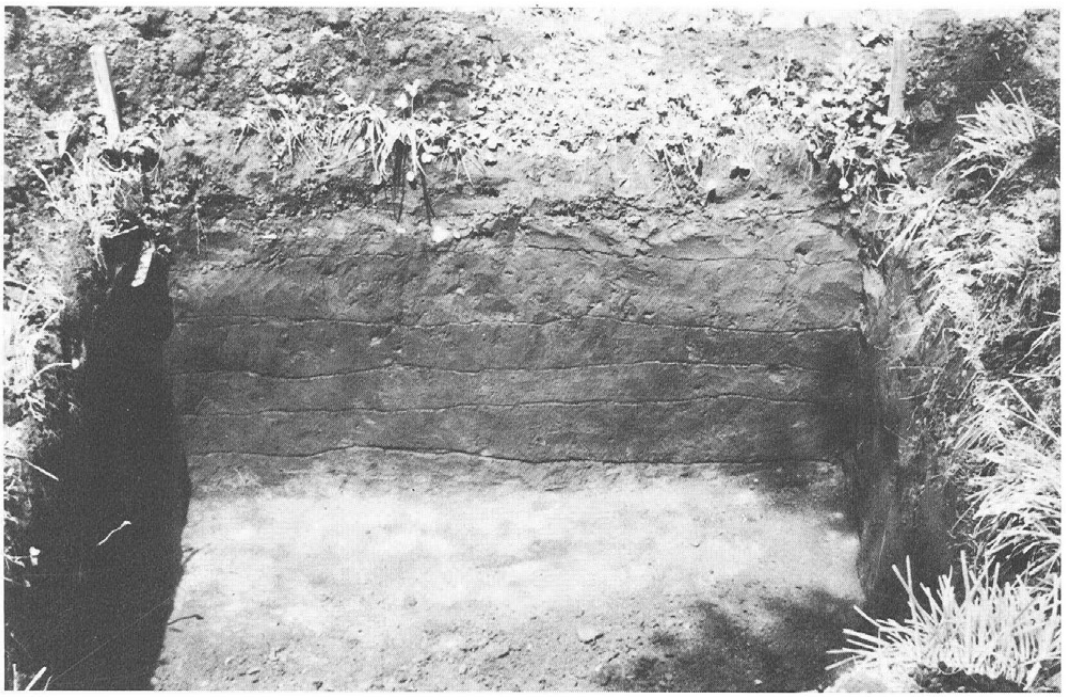


遺跡地遠景（北側より眺む）



遺跡地遠景（北側より眺む）

図版2　土　層

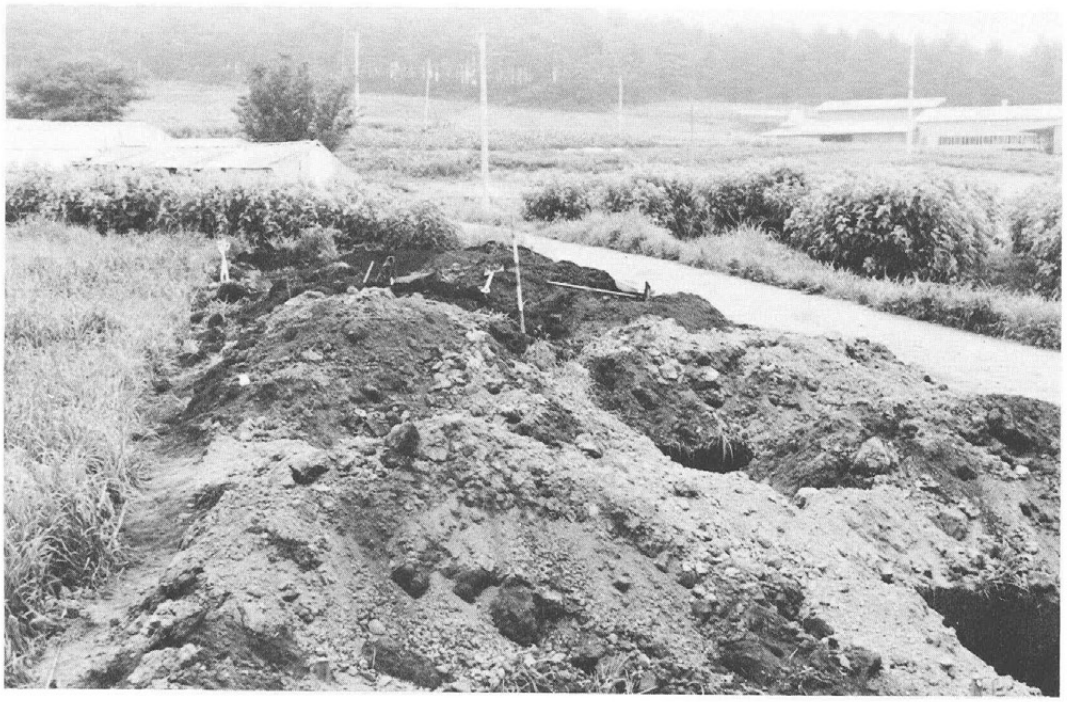


土層

土層

図版3　グリッド発掘状況

グリッド発掘状況（南側から北側へ）



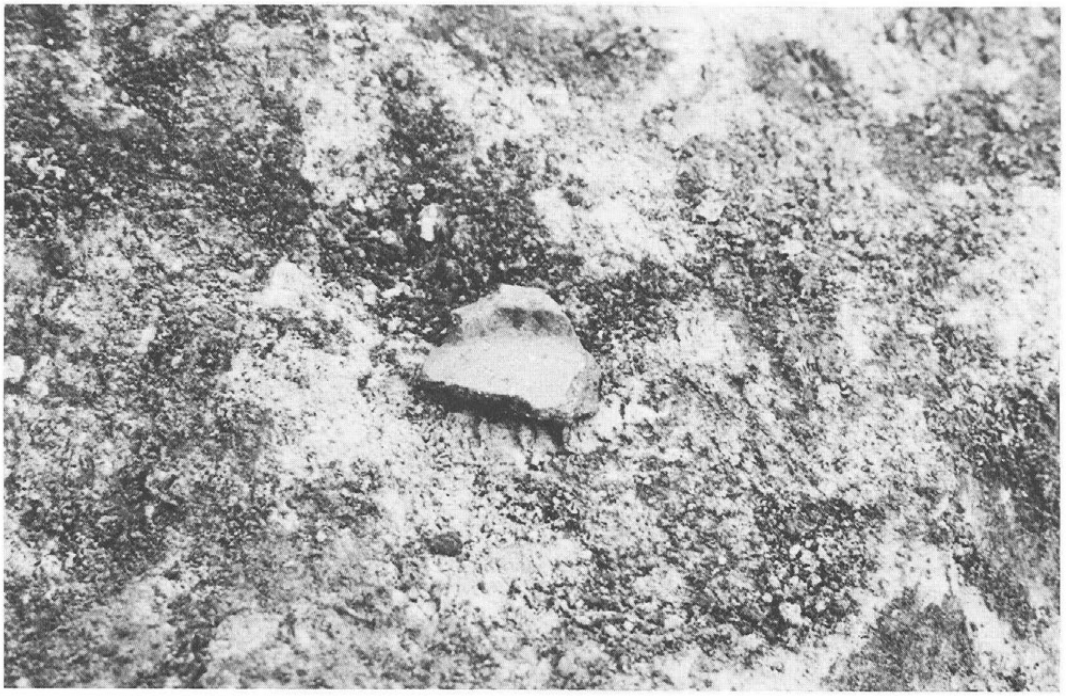
グリッド発掘終了後

第1号溝状遺構（北側から眺む）

第1号溝状遺構（南側から眺む）

図版5　遺物出土状況

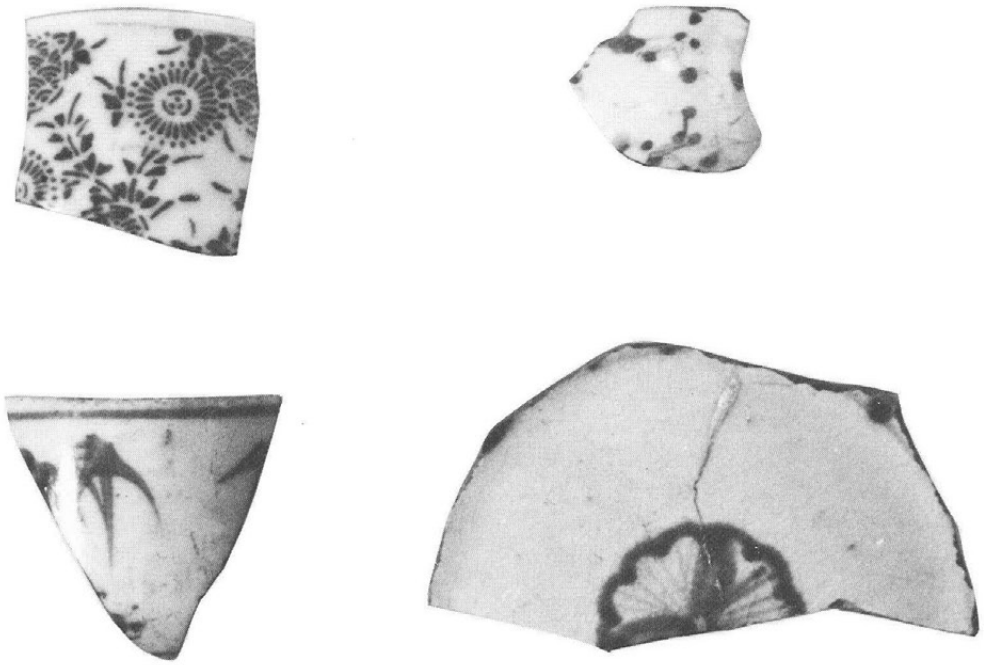
土器出土状況



土器出土状況

図版6 出土遺物

出土土器



出土磁器

城畑遺跡

目　　次

目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（5）

第1節　発掘調査の経緯……（5）
第2節　調査の組織……（5）
第3節　発掘日誌……（6）

第Ⅱ章　層　　位……（8）

第Ⅲ章　遺　　構……（8）

第Ⅳ章　遺　　物……（13）

第1節　土　　器……（13）
第2節　石　　器……（18）

第Ⅴ章　まとめ……（19）

挿図目次

第1図　地層図……(9)
第2図　地形及びグリット配置図……(11)
第3図　土器拓影及び実測図……(14)
第4図　土器拓影及び実測図……(16)
第5図　土器拓影……(17)
第6図　石器実測図……(18)
第7図　石器実測図……(19)

図版目次

図版1　遺跡全景
図版2　土　層
図版3　グリット発掘状況
図版4　遺物出土状況
図版5　出土遺物
図版6　出土遺物
図版7　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちよくしています。伊那市においては，西箕輪，西春近，伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。

本年度は船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和56年８月31日　長野県教育委員会文化課関指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和57年５月18日　夜　ますみが丘公民館にて関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員が地主に対し，遺跡発掘調査の意義を説明し，調査に協力をお願いする。同夜は地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月４日　夜　ますみが丘公民館に於いて，前回５月18日に説明した旨を地主が納得できるように丁寧に解説する。前回同様に，同夜も地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月15日　夜　ますみが丘公民館にて，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席して，地主側に同意を求める。同夜地主の同意が得られる。

昭和57年６月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が城畑遺跡に該当する３人の地主宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

昭和57年６月30日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第２節　調査の組織

城畑遺跡発掘調査会

調査委員会

委　員　長　伊沢　一雄　　伊那市教育委員会教育長

副委員長　福沢総一郎　　伊那市文化財審議委員会委員長
委　　員　赤羽　映土　　伊那市教育委員長
調査事務局　三沢　昭吾　　伊那市教育委員会教育次長
〃　　石倉　俊彦　　〃　　社会教育課長
〃　　柘植　　晃　　〃　　社会教育課長補佐
〃　　武田　則昭　　〃　　社会教育係長
〃　　沖村喜久江　　〃　　社会教育主事

発掘調査団

団　　長　友野　良一　　日本考古学協会会員
副団長　根津　清志　　長野県考古学会会員
〃　　御子柴泰正　　〃
調査員　飯塚　政美　　日本考古学協会会員
〃　　小木曽　清　　宮田村考古学友の会会長
〃　　小池　　孝　　日本考古学協会会員

第3節　発掘日誌

昭和57年7月14日　晴　本日より仕事の都合上城畑遺跡へ入る。城畑遺跡は船窪遺跡の現地点（発掘地点）より南へ約500m行った所にある。船窪遺跡同様幅4mと限定されているので，それに従ってグリットを設定し，掘り始じめていく。グリットは南から北へ1～23，東から西へA～Bと決める。A1，A3付近より縄文中期土器片が出土する。この二つのグリット付近はローム層まで深さが1m位に達していた。このような状態であった為に，土量が多く，置く場合にことかく為に，まず最初にAラインから掘り進めていく。

昭和57年7月15日　晴　昨日同様，城畑遺跡の発掘調査を進める。Aラインを北へ，北へと掘り進めていくに従って，ローム層までの深さはやや浅くなっていく模様である。夕方までに限定されたAラインの最終グリットまで掘り終ったので，Bラインを掘り進めていく。

遺物は十三菩提式，大歳山式土器片の出土がみられた。出土した遺物のうち8割近くが縄文前期土器片であった。この段階で城畑遺跡の価値評価が高くなったものと思われる。

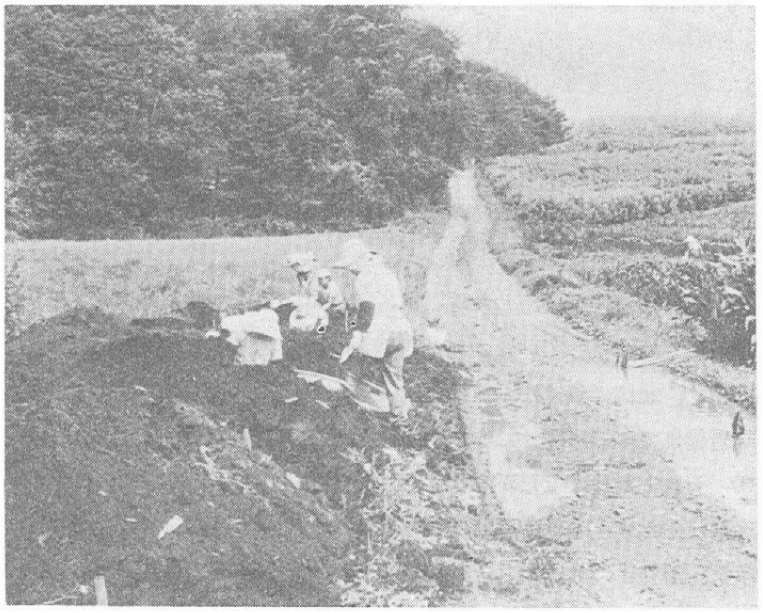
昭和57年7月20日　曇時々晴　Bラインのグリット掘りを北へ，北へと掘り進めていく。どのグリットからも若干ではあるが縄文前期終末期土器片，縄文中期土器片が出土した。

本日，出土した土器片のなかに伊那市内では類例の少ない船元式土器片がみられた。この土器は瀬戸内海，岡山県地方が中心であり，今から五千年位も前に如何にして伊那市に入ってきたのか，いまさらながら文化の伝播性，浸透性におどろいた。この土器のことについて作業員の各位に説明すると，「貴重な土器が出てきてよかったねえ」という返答があった。時期的には土用に入ると言うのに，気温が上昇せず，農作物に被害が出そうであった。発掘を進めていると近くの農家の人達が関心を持って見にきてくれる。ありがたい。

昭和57年7月21日　晴
前日に引きつづきBラインのグリット掘りを実施する。本日の出土品で極だったのは磨製石斧であった。Aライン東壁のセクション図を作製する。

昭和57年7月22日　晴
Bラインを北へ北へと掘り進めていく。Aライン東壁の残りのセクションを実測する。

昭和57年7月24日　晴のち雨　Bラインを北へ北へと掘り進め，一応Bラインの最後のグリットまで完掘を終了する。午後は雨が降ってきたので，土器洗浄を行う。



発掘風景

昭和57年7月26日　雨　雨のため，城畑遺跡で出土したいままでの遺物の洗浄及び注記を手分けで行う。

昭和57年7月27日　晴時々曇　城畑遺跡のいままで掘ったグリットの埋めもどしを行って現況に復した。

昭和57年7月31日　晴　グリット棒を抜いたりしてあとかたづけをする。器材をトラックにて他の現場へ運搬する。

昭和57年8月10日　現場の点検

昭和57年12月～昭和58年2月　遺構の図面整理，遺構の図面作製，遺物の実測，原稿執筆，報告書の作製，編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和57年3月　報告書刊行　（飯塚政美）

第Ⅱ章　層　　位

城畑遺跡の調査は幅４ｍと限定された範囲の調査であった。従って，断面は割合に全グリットが通っている個所を選定して，実測を行った。それが第１図地層図であり，その範囲はＡ１グリットからＡ23グリットまでである。

今回発掘調査を実施した地区は，割合に安定していた地質であったとみえて，層位関係も割合に規則正しく堆積していた。ローム層までの深さは基盤が北から南へ傾斜していた為に，南側は割合に深く，北側は浅くなっていた。

岩盤までの層序関係はまえがきの地形・地質の項に，城畑遺跡付近土層柱状図を掲載してあるので，それと対比させながら検討を加えて下さい。

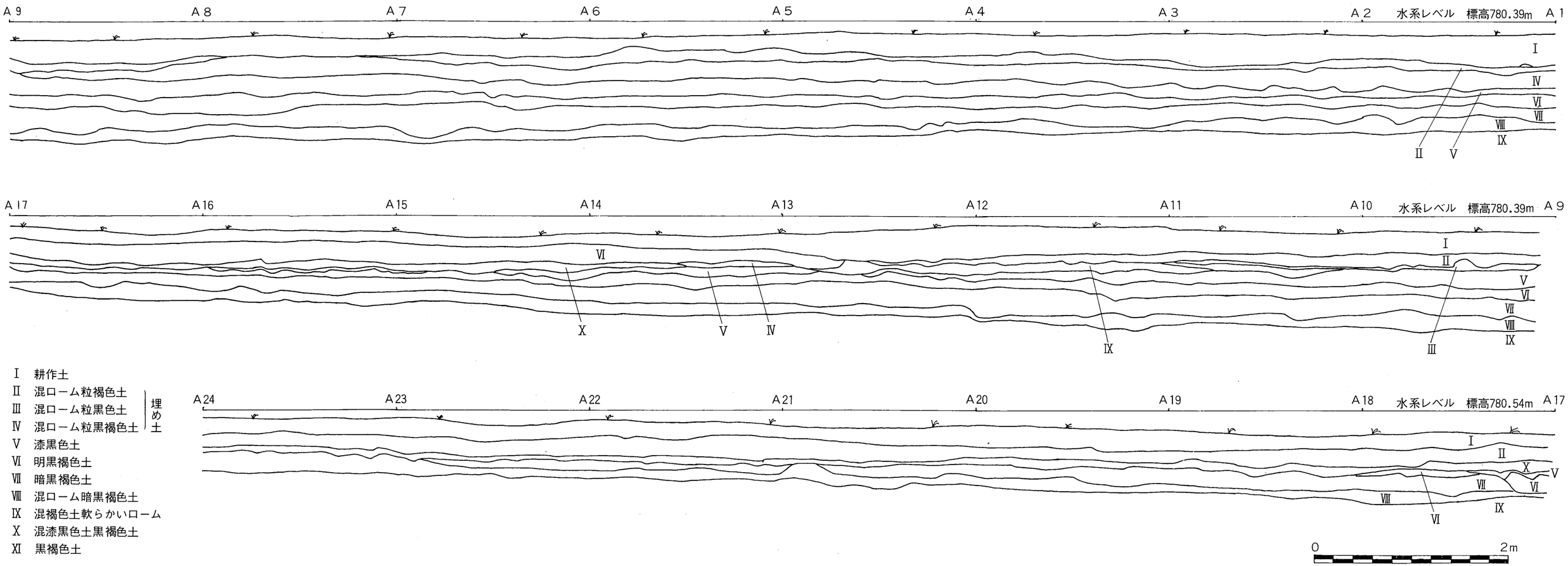
前述したグリット内の基本的層序を列記すると次のようになる。

Ⅰ―耕作土，Ⅱ―混ローム粒褐色土，Ⅲ―混ローム粒黒色土，Ⅳ―混ローム粒黒褐色土，Ⅴ―漆黒色土，Ⅵ―明黒褐色土，Ⅶ―暗黒褐色土，Ⅷ―混ローム暗黒褐色土，Ⅸ―黒褐色土（軟らかいローム），Ⅹ―混漆黒色土黒褐色土，Ⅺ―黒褐色土である。

このⅥ，Ⅶ，Ⅷの中からは，かなりの量の縄文前期土器片，縄文中期土器片が出土している。今回は遺構は検出されなかったが，仮り存在したとするならば，Ⅷ層かⅨ層を掘り込んで構築されたものと考えられる。

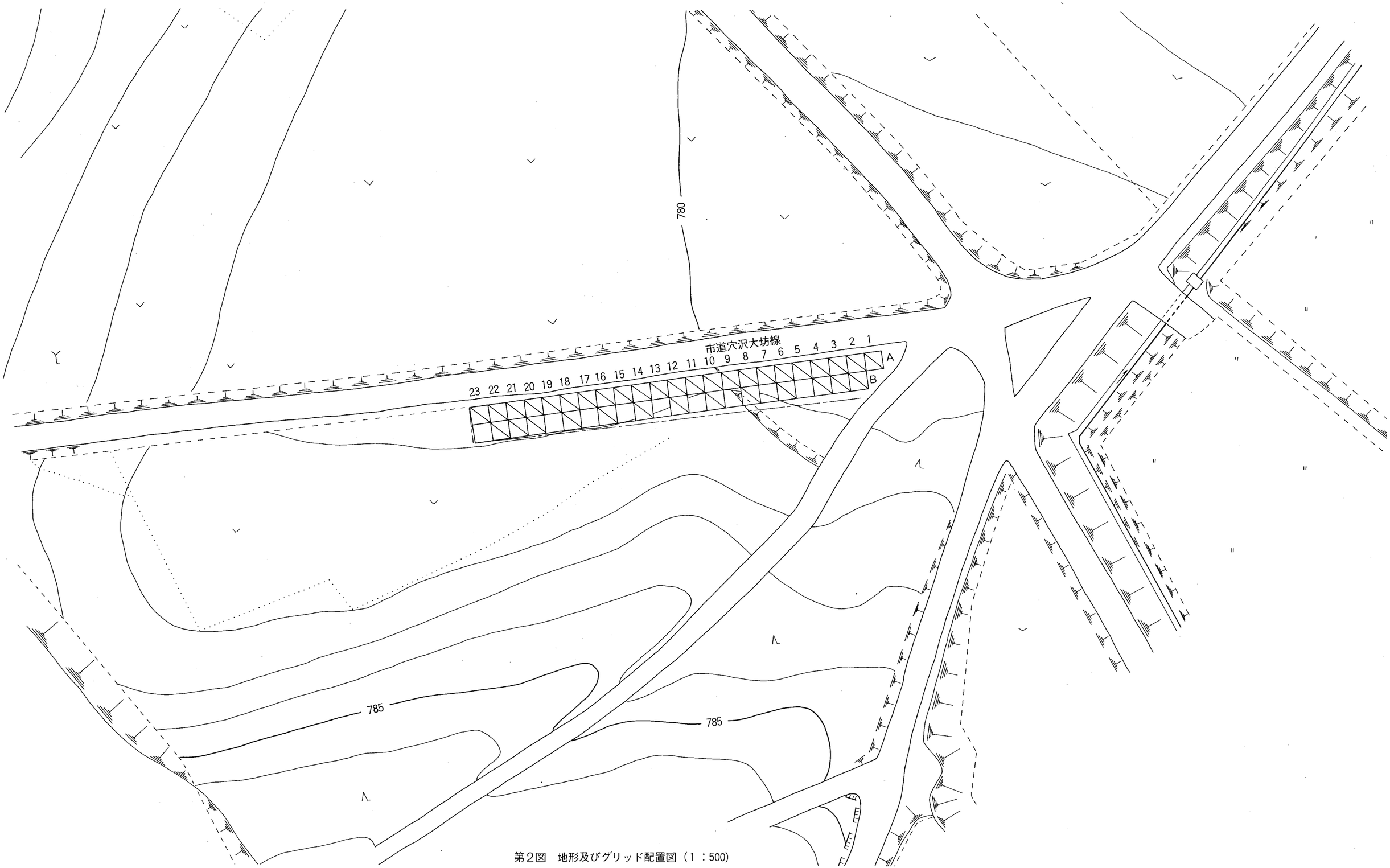
第Ⅲ章　遺　　構

今回の調査地区は限られた範囲内の調査だったので，遺構は何も検出されなかった。この一帯を広範囲で発掘調査を実施したならば伊那市内では類例の少ない縄文前期終末期の遺構が発見されることはまちがいないことと思われる。



I　耕作土
II　混ローム粒褐色土
III　混ローム粒黒色土
IV　混ローム粒黒褐色土
（II〜IV：埋め土）
V　漆黒色土
VI　明黒褐色土
VII　暗黒褐色土
VIII　混ローム暗黒褐色土
IX　混褐色土軟らかいローム
X　混漆黒色土黒褐色土
XI　黒褐色土

第1図　地層図



第２図　地形及びグリッド配置図（１：500）

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器（第3～5図，図版5～7）

第3図（1～5）は諸磯b式に対比されたものを一まとめにした。本土器はここにのせた5例の出土だけである。焼成は割合に良好であり，色調は概して明褐色系を呈し，胎土に多量の雲母や長石粒が含まれる。器厚は7㎜～10㎜と厚手に属している。（1～2）は共に平縁の口縁部破片であり，（1）はわずかに，（2）はかなりの角度でそれぞれ外反している。（5）は平底を呈する破片である。文様はいずれも斜縄文が地文となっている。

第3図（6，11～12，14～15）は大歳山式に位置づけられるものである。焼成は悪く，色調は黒茶褐色を示し，胎土に少量の長石を含んでいる。内壁の仕上は極めて悪く，ザラザラしている。（6）は平縁口縁で，5㎜の面取りがある。表面の破片上部は無文地に細い粘土紐を横位に貼り付け，下部は縄文をつけてある。（11～12，14～15）は斜縄文地に細い粘土紐を縦に貼り付けてある。さらに（14）には粘土紐の上にわずかに円形状に押捺した跡が認められる。（12）の粘土紐の貼り付け方は粘土紐自体を円形状に意匠風につけてある。

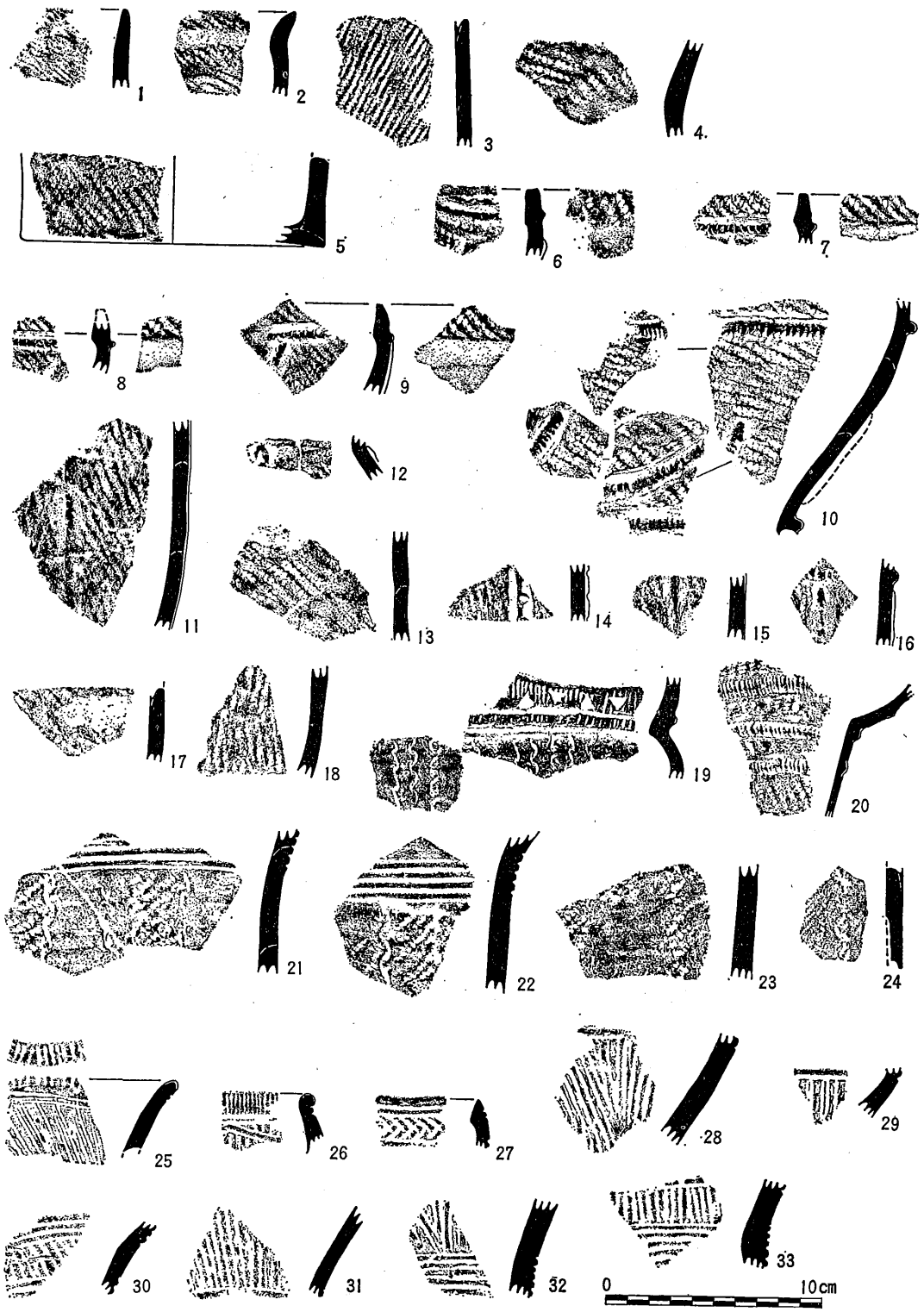
第3図（7～10，13，16～18）の土器は縄文前期終末期に編年づけられている十三菩提式の一派と考えられる。焼成は普通であるものの黒褐色系や茶褐色系をとり，器厚は5㎜～7㎜と中厚手に属している。文様の特徴としては斜縄文を地文とし，その上に，細いソーメン状の粘土紐を直線状，曲線状に貼付けてあり，その上にこまかく連続爪形文をつけてある。（7～10，16），（7～9）は前述した外に内面の口縁上部付近に斜線文を施してある。（7～9）は口唇部を面取り，わずかに外反する口縁部破片である。（13，17～18）は斜縄文だけの文様であるが，文様や胎土の状態からして，この一群と考えてよいものと思われる。この破片の付く破片のどこかにはソーメン状の粘土紐がつくものと思われる。

第3図（19，21～24）は結節のS字状文がつけられている一群である。色調は黒褐色（19），（23），赤褐色（21～22）を呈し，焼成は悪く内面がザラザラしている。（21～23），（19）は内面は丁寧に仕上げてあり，かたくしまっている感じである。この4片全てに多量が雲母が含まれており，肉眼でもキラキラ光ってみえた。

（19）は上部に縦位の沈線を間隔を密に走らせ，それらのなかに三角形状の押捺刺突文を三角形が交互に出るように4カ所にわたってつけてある。中央部には低い隆帯を横位に貼り付け，その上に刻目をつけてある。下部は結節のS字状文を縦位につけてある。文様自体は三種類に分けられ，バライティーに富んでいた。

（21～22）は上部に狭く，深い沈線を横位に数条走らせ，下部は結節のS字状文を垂下させてある。（23）は斜縄文を地文とし，一部結節のS字状文がみられる。

（20）は瀬戸内海沿岸，特に岡山県を中心に派生した船元式土器の類似土器と考えられる。焼成は極めて良好で，明黒褐色を呈している。器厚は0.5㎝内外と，薄手である。この薄手の特徴は関


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

第3図　土　器　拓　影

西系土器全般に相通じている。

文様構成は斜線文と連続爪形文の反復である。

第3図（27～33），第4図（34～53）は半載竹管による平行沈線文が無数に入った一群をまとめておく。色調は黒褐色，黄褐色系統が大部分であり，焼成も良好で，胎土中に長石，雲母等々の鉱物を含んでいた。

沈線文の施文方向を分類し，それぞれに該当する土器片の番号を列記すると次のようになる。沈線が細く，斜目に配走してあるもの（25，31，38，48，50～53），沈線が太く，斜目に入っているもの（28，29），沈線が縦位と横位が割合に規則的に施文されているもの（32～33，41～42，44～46），沈線が籠目状に施されているもの（26～27，30，39），沈線がわずかに波状を呈し，その波状が縦位のもの（43），横位のもの（34），沈線が鋭角を成しているもの（35～36），沈線がハシゴ状になっているもの（37），沈線が斜目に交互しているもの（47）等々になる。

（54）は小型の土器である。黒褐色を呈し，焼成は中位である。文様は沈線を縦位や横位に組み合わせてデザイン化し，さらにその効果を増すために部分的に刻目を施してある。

（55～56）は無文地柄の上に沈線をつけ，そのなかに刻目を入れてあるもの。沈線のつけ方で（55）は横位に，（56）はわずかに弧状に配してある。（55）は口縁部破片であってほとんど口縁は立っている。口唇部の内側は斜目にけずりとって，整形をしてある。

色調は黒褐色（55），明赤褐色（56）で，焼成は普通である。縄文中期中葉と思われる。

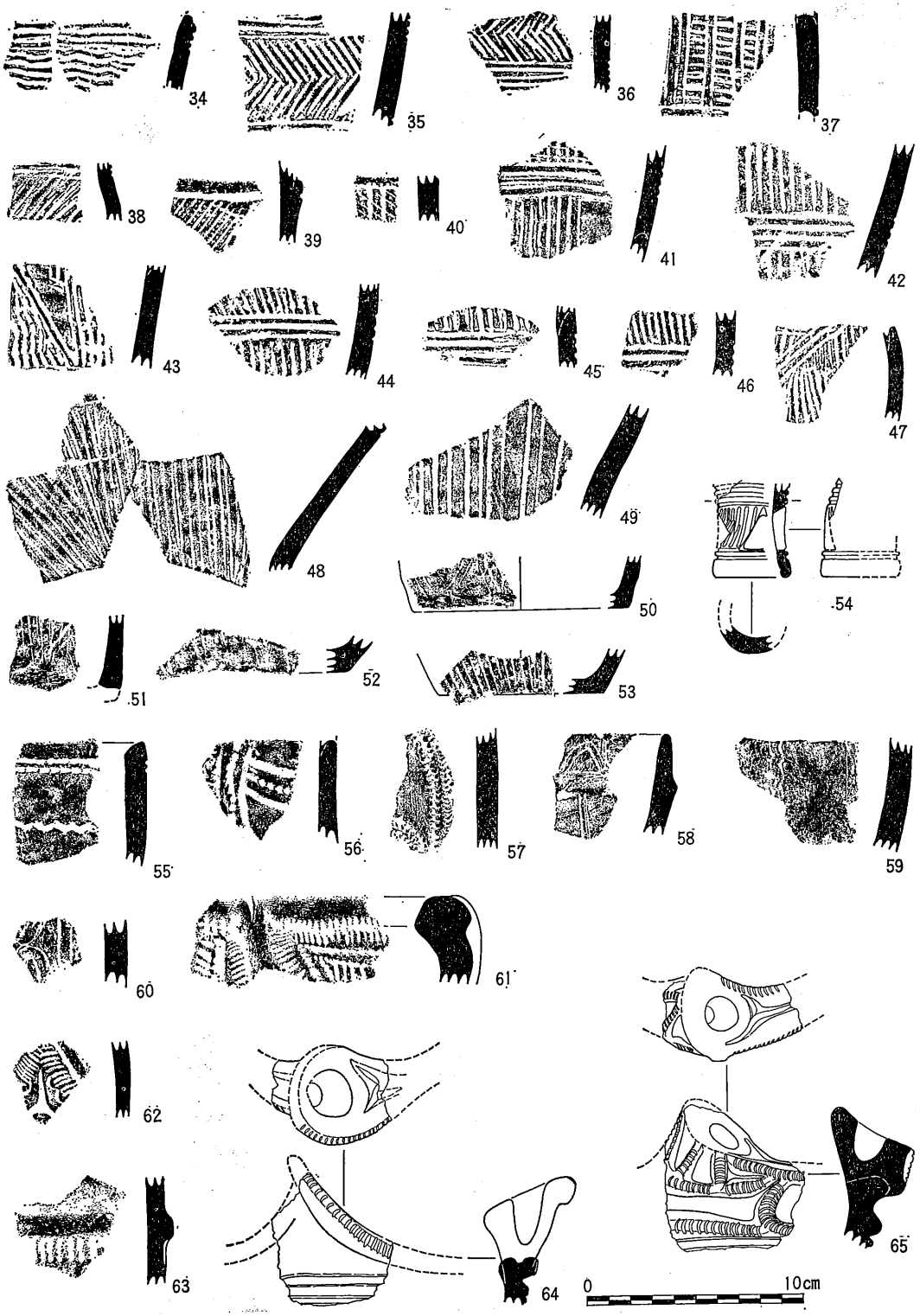
（57）は無文地に割合滑めらかな爪形文をつけてある。赤褐色を呈し，焼成は良好である。縄文中期中葉と思われる。

（58～60）は無文地に沈線を縦位や波状に施してあるもの。文様自体は割合に簡素である。（58）と（60）は同一個体と考えられる。その理由として，胎土及び文様構成が良く類似している。色調は明黄褐色（58，60），黒褐色（59）を帯び，焼成は良好である。セットになって出土する土器が無いのではっきりとした時代決定はできないが，一般的に縄文中期初頭から縄文中期前半頃に位置づけられている。

（61～63）は無文地あるいは隆帯の縁に沿って大きな爪形文がつけ加えられているもの（61）は口縁が極端に肥厚し，豪放性をかもし出している。色調は全て黄褐色を呈し，焼成は良好となっている。縄文中期中葉の土器と思われる。

（64～65）は縄文中期中葉頃，編年で言う勝坂期に盛行する蛇頭把手の一種である。両把手とも中空になっており，把手の複雑性を増すとともに，その装飾性を高めている。文様は表面に隆帯をつけ，その上に連続爪形文を加飾して，蛇に似せる為の工夫をしている。蛇頭は把手のなかの文様にはみられないが，いままでの類例品から察して，たぶんマムシを図案化したものと考えられる。完型品であったならばみごたえのする土器の一つであろう。

縄文中期の把手には蛇，蛙，ミミズク，顔面等々があるが，その意匠文としての価値性は蛇頭把手が最右翼と思われ，縄文中期中葉の繁栄文化をしのばせてくれる。縄文中期の人々はマムシの毒性をおそれ，また，その強さを信じ，これらを一種の神としてあがめまつりしたことであろう。南方では蛇を農業の神としてまっている場所が良くみられるとのことである。



第４図　土器拓影及び実測図

第5図（66，69）は縦位の区画文を造形している土器の一種である。信州で言う藤内期の土器の主たる特徴点の一つとなっている。色調は赤褐色（66），明黄褐色（69）を呈し，焼成は良好である。

（67，71）は隆帯が高く，その上に刻目をつけてあるもの。縄文中期中葉頃と思われる。

（68，73～76）は勝坂期の新しい時期に出現する櫛形文の一種を持ち備えた土器と思われる。櫛形文とは隆帯によって，櫛形状に区画し，その中に沈線を施し，人間が髪を整える時に使用する櫛の姿に模倣させたものと考えられている。

色調は黒褐色，赤褐色，明黄褐色とバラバラであったが，焼成は普通であった。

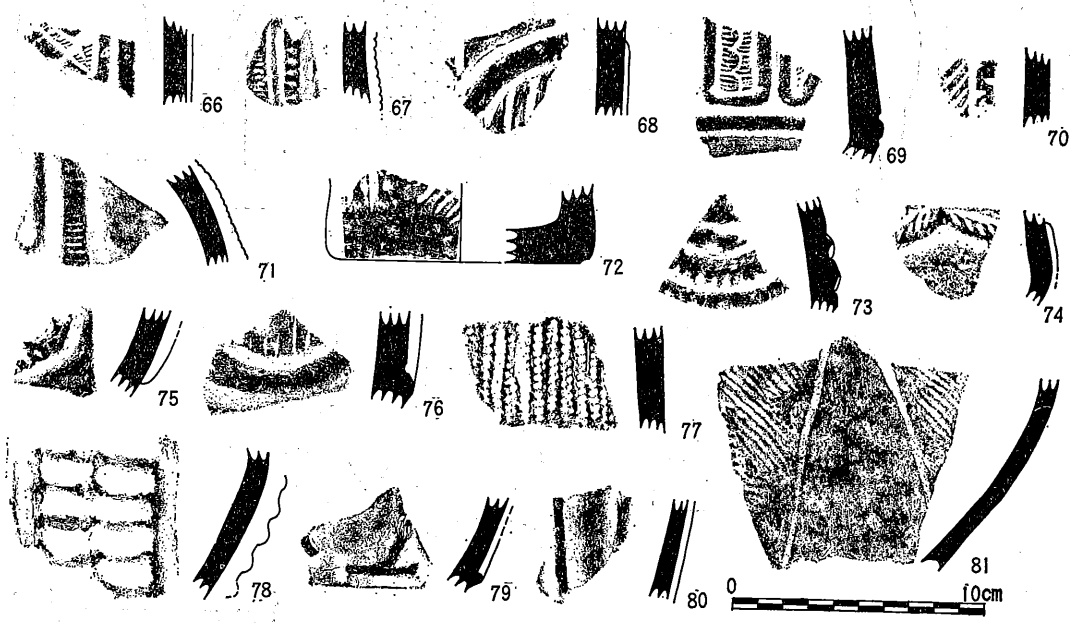
（77）は荒い斜縄文をつけてあるもので，勝坂期の中頃から終り頃によくみられる屈折底を持つ土器の一部と推測できよう。赤褐色を呈し，焼成は中位で，少量の長石粒を含んでいる。

（78～80）は無文地に太く，高い隆帯をつけてあるもので，加曽利E期の古い方にみられる文様の一つであろう。(78)の隆帯は豪そうで貼り付けた部分は高く盛り上り，その両脇は一段下がり，全体的には大波のような姿になっている。

色調は赤褐色（78），明黄褐色（79～80）を呈し，焼成は悪く（78），良好（79～80）であった。（78）の土器片には多量の雲母が混入し，キラキラ光沢を放っていた。

（81）は磨消手法のみられる土器片であり，磨消の仕方からみて縄文後期初頭堀ノ内式と思われる。磨消は沈線によって斜目に無文地と縄文地を区分けしている。

色調は黒褐色を呈し，焼成は中位である。外面全体にわたって良く，煮沸器に使用されとみえて，炭化物が付着していた。



第5図　土　器　拓　影

第2節　石　　器（第6～7図，図版7）

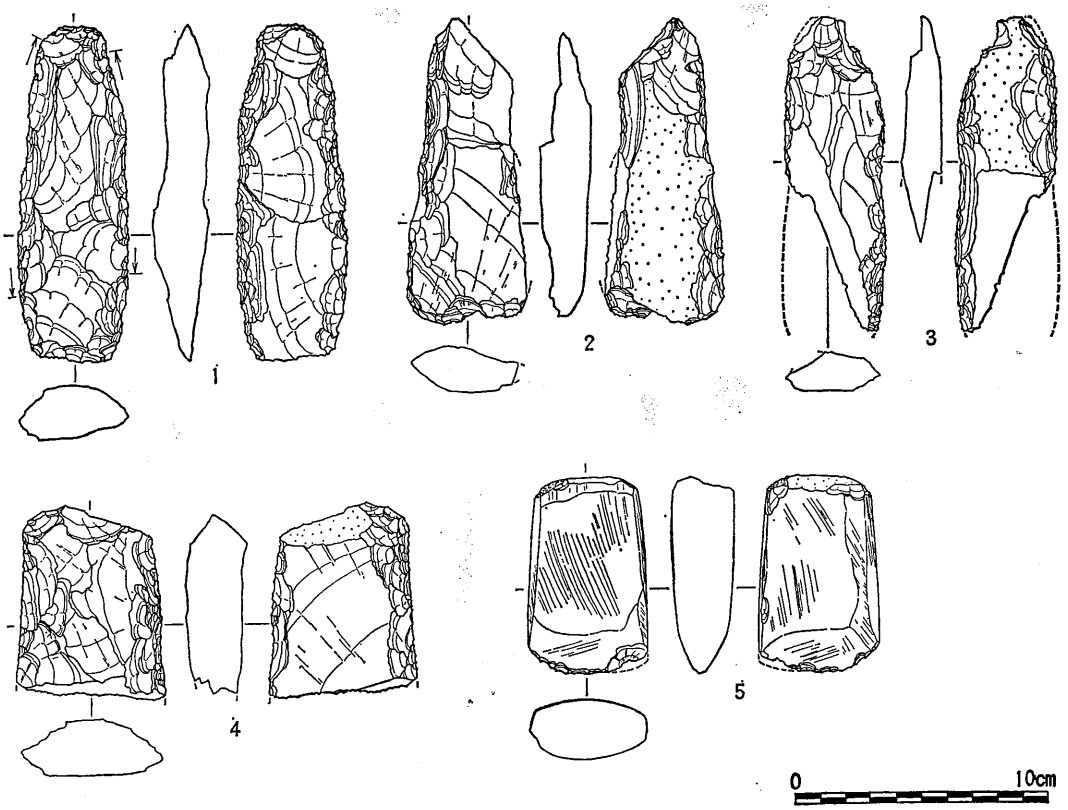
本遺跡出土の石器は総計8点あり，その内訳は打製石斧4，磨製石斧1，スクレイパー2，石匙1である。

石匙8は黒耀石製で，ほぼ完型である。つまみに対して刃部が平行になっており，刃部の作出は極めて雑である。

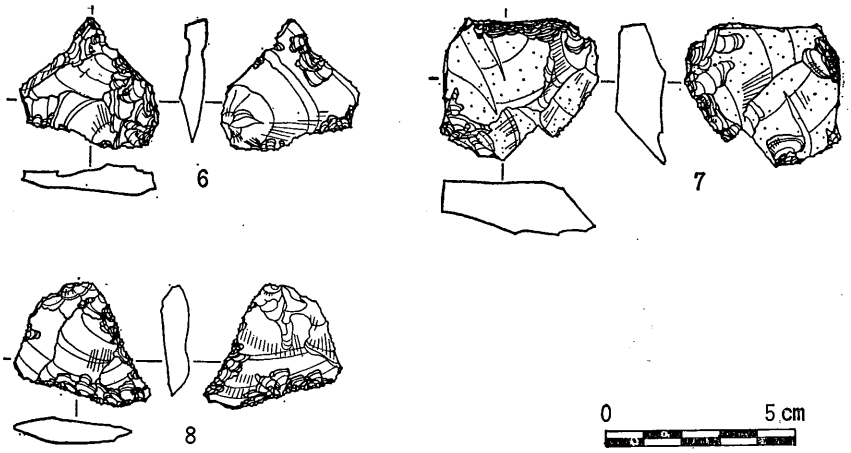
スクレーパー7，8は直刃を，7は一部分ノッチ状の刃部を有する。(7)は比較的厚い剝片を，（8）は比較的簿い剝片を使用している。2つとも黒耀石製である。

打製石斧1，2，3，4は割合に原石面を残し，上部を除いて周辺に数多くの打撃を加え，丁寧な刃部調整を行っている。（1～2）は完型品であるが，（3～4）は部分的に欠損している。（1，3）は短冊形，（2，4）は下部がわずかに開く撥形を呈している。石材は砂岩（1，4），頁岩（2），粘板岩（3）であった。

磨製石斧5は現長7.2cmで頭部を欠損している。研磨は両縁，胴中央，刃部とも斜目になされている。刃部はよく使用したものとみえて，刃こぼれが目立ち，さらに磨耗の程度が顕著であった。蛇紋岩を使用し，定角式の磨製石斧である。　　（飯塚政美）



第6図　石器実測図



第7図　石器実測図

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査では遺構は何も検出されなかった。その理由の一つとしては幅4mと限られた範囲だったためであることは明らかである。従って，この章で迷べることもたいしてないので，出土した遺物について迷べてみることにする。

土器について前述した編年について触れてみると次のようになる。大歳山式土器が今までに出土した伊那市内の主たる遺跡の所在地と遺跡名を記してみると下記のようになる。上島遺跡―西春近上島，東方A遺跡―西春近東方，小出城（城南）遺跡―西春近城，浜射場遺跡―西春近宮の原，中村遺跡―西春近中村，下島。これらの遺跡は十三菩提式土器も一緒に混じって出土しており，関東系文化と関西系文化が縄文前期末期に同時に伊那谷へ伝播したことを物語ってくれる。

船元式土器の出土は伊那市内では今回が初めてであって，今後，縄文中期初頭に於ける中国地方の文化流入経路について参考になる資料となろう。

その他の土器として編年学的にみてみると梨久保式，下小野式，勝坂式，加曽利E式，堀ノ内式がある。

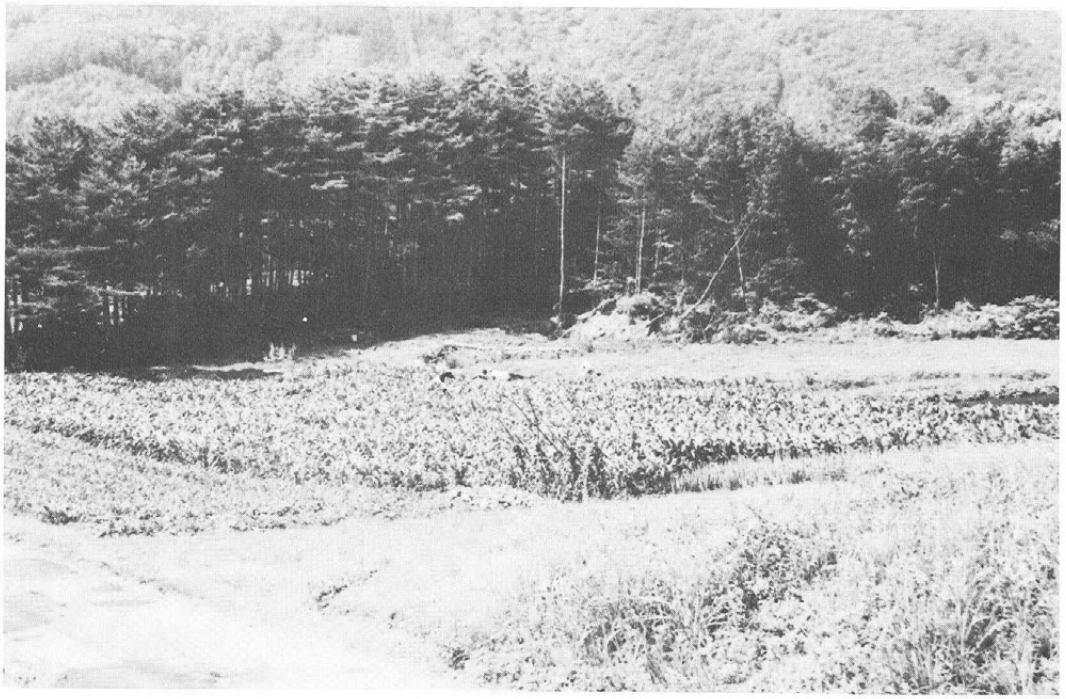
以上，記してきたように限定された範囲の発掘調査であったにもかかわらず，多量の土器が出土している点からみて，周囲にはかなりの数の住居址が存在していることは事実であろう。

（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺跡全景

遺跡地遠景（南側より眺む）



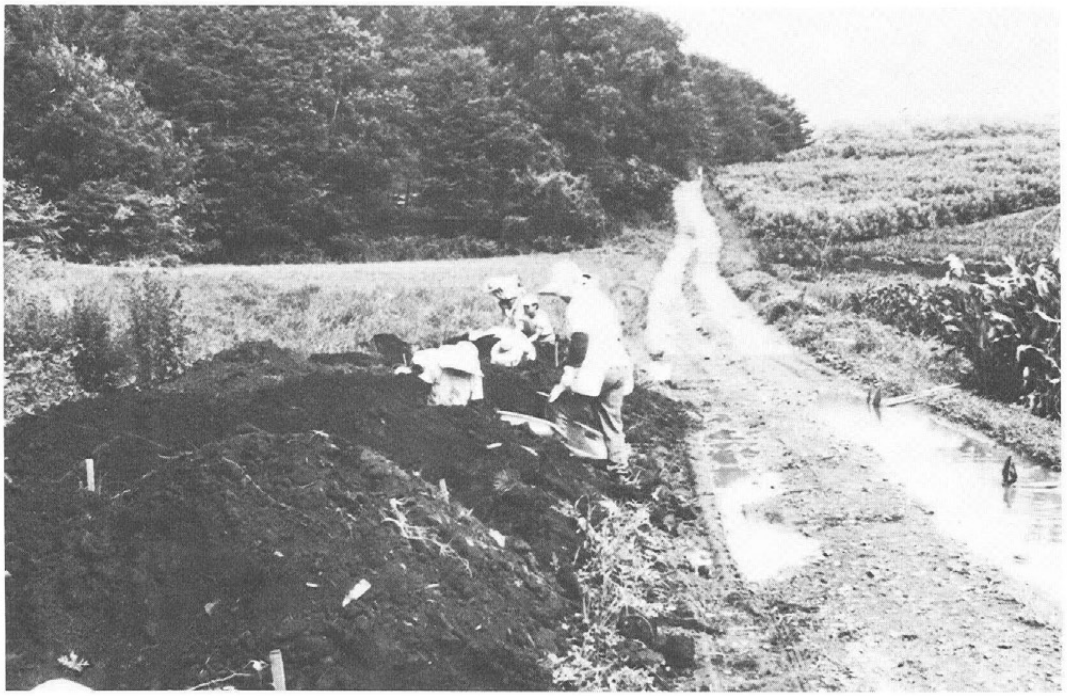
遺跡地遠景（東側より眺む）

図版2　土　層

土層

土層

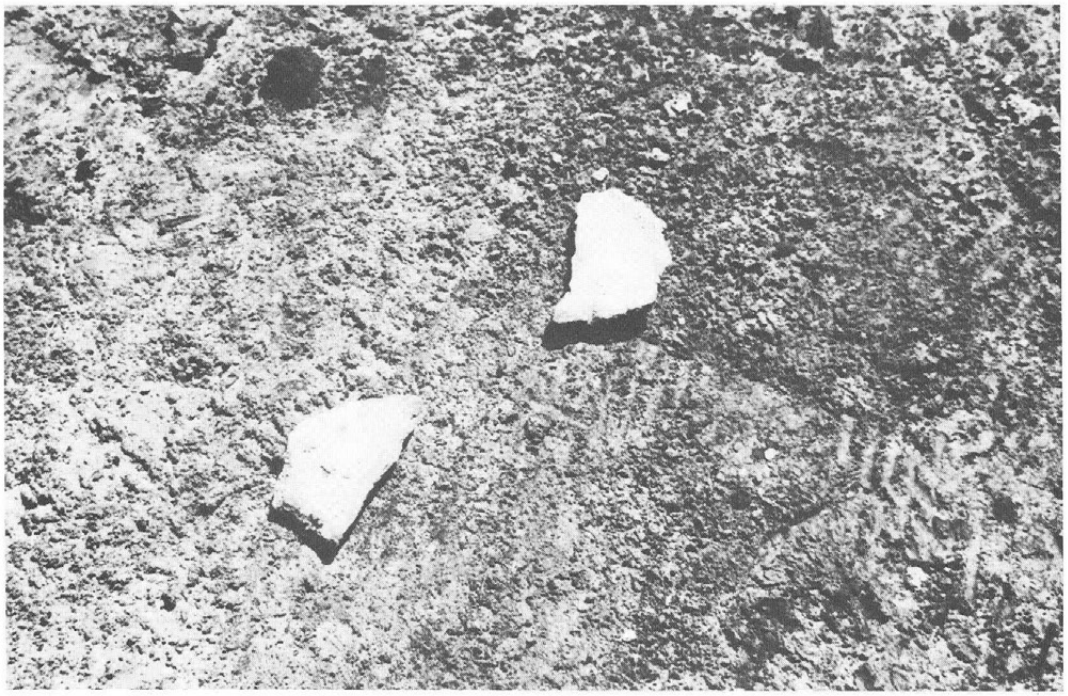
図版3　グリッド発掘状況



グリッド発掘状況（南側より眺む）

グリッド発掘終了（北側より眺む）

図版4　遺物出土状況

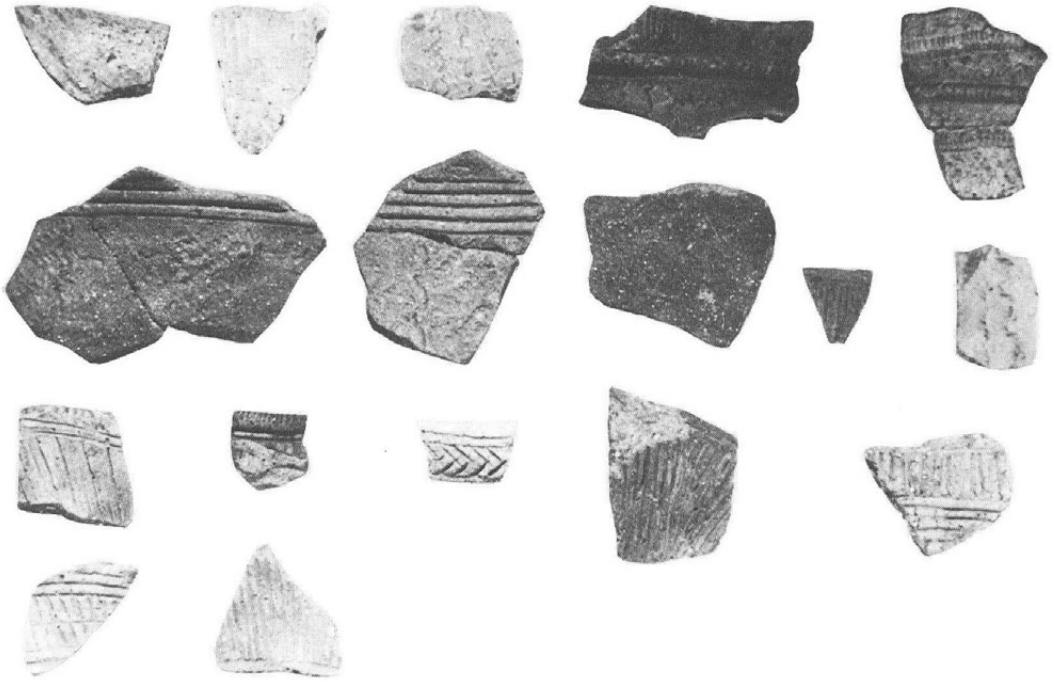


土器出土状況

石器出土状況

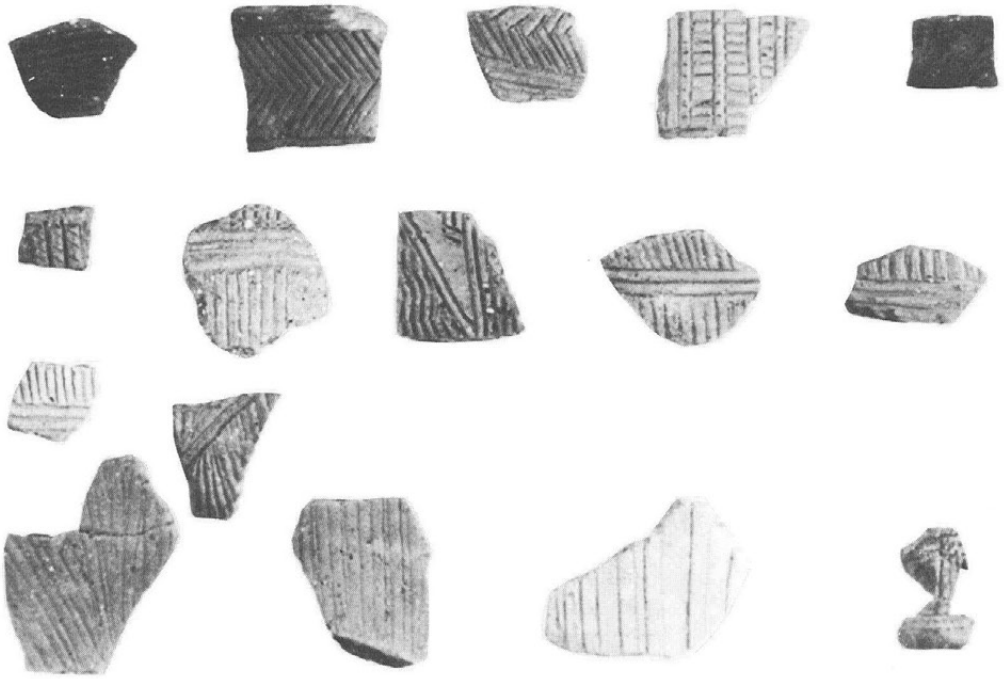
図版5　出土遺物

出土土器

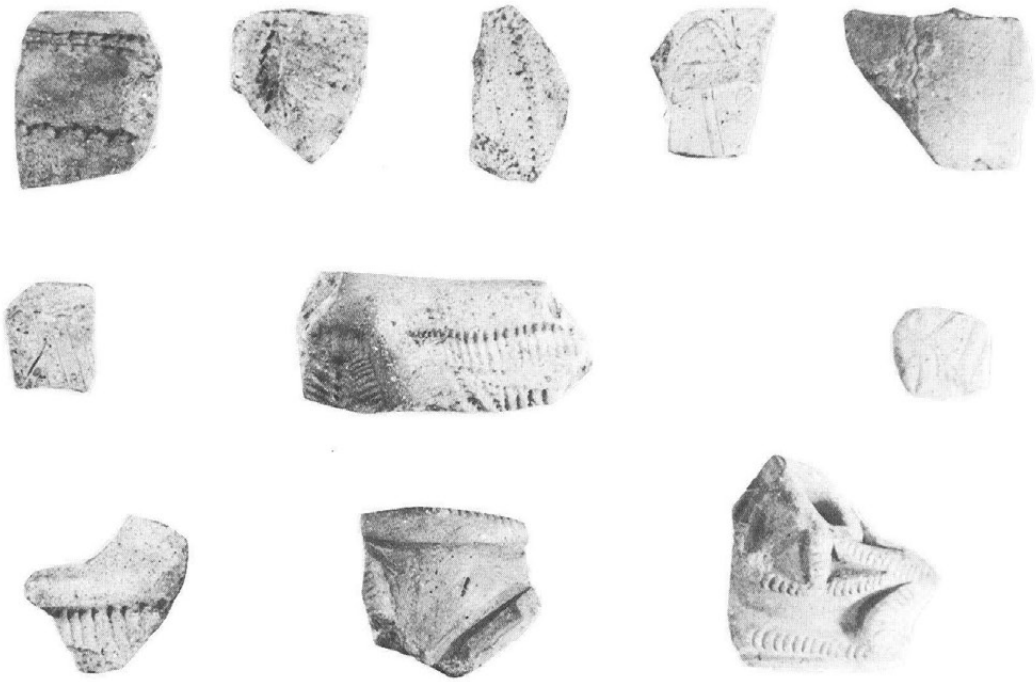


出土土器

図版6 出土遺物



出土土器



出土土器

図版7 出土遺物

出土土器

出土石器

城平遺跡

目　次

目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（5）

第1節　発掘調査の経緯……（5）
第2節　調査の組織……（6）
第3節　発掘日誌……（6）

第Ⅱ章　層　　位……（9）

第Ⅲ章　遺　　構……（11）

第1節　ロームマウンド……（13）
第2節　配石址……（14）
第3節　井戸址……（15）

第Ⅳ章　遺　　物……（16）

第1節　内耳土器及び土器……（16）
第2節　陶磁器……（17）
第3節　石　器……（18）

第Ⅴ章　まとめ……（20）

挿　図　目　次

第１図　Ⅰ区土層柱状図……（９）
第２図　Ⅰ区土層柱状図……（９）
第３図　Ⅱ区土層柱状図……(10)
第４図　Ⅳ区土層図……(10)
第５図　地形及び遺構配置図……(11)
第６図　第１号・２号ロームマウンド実測図……(13)
第７図　配石址実測図……(14)
第８図　井戸址実測図……(15)
第９図　内耳土器実測図……(16)
第10図　土器及び陶磁器実測図……(18)
第11図　石器実測図……(19)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　土　　層
図版３　グリット発掘状況
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺物出土状況
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしています。伊那市においては，西箕輪．西春近，伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。

本年度は船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和56年８月31日　長野県教育委員会文化課関指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和57年５月18日　夜，ますみが丘公民館にて関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員が地主に対し，遺跡発掘調査の意義を説明し，調査に協力をお願いする。同夜は地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月４日　夜，ますみが丘公民館に於いて，前回５月18日に説明した旨を地主が納得できるように丁寧に解説する。前回同様に，同夜も地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月15日　夜，ますみが丘公民館にて，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席して，地主側に同意を求める。同夜地主の同意が得られる。

昭和57年６月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が船窪遺跡・城畑遺跡に該当する５人の地主宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

昭和57年６月30日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和57年８月26日　山本会所にて，城平・宮林・山の根遺跡に該当する地権者に説明を行う。同夜，地主の承諾を得る。

昭和57年10月25日　地主の承諾書をいただく。この承諾書をいただく時に地権者の要求をできるだけ受け入れるようにこころがけた。具体的には農作物の収穫をおえてから発掘調査を開始すること。また，現況復帰の時にできるだけ耕作土を上において，下の土と混合しないようにする等々のことであった。

第2節　調査の組織

城平遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	赤羽映土	伊那市教育委員長	
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長	
〃	石倉俊彦	〃	社会教育課長
〃	柘植晃	〃	社会教育課長補佐
〃	武田則昭	〃	社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃	社会教育主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	日本考古学協会会員
〃	小木曽清	宮田村考古学友の会会長
〃	小池孝	日本考古学協会会員

第3節　発掘日誌

昭和57年10月28日　晴　いままでに船窪・城畑・鳥井田・横吹・城の腰等々の遺跡発掘調査を実施してきたので，道具の痛みもはなはだしく，今後の作業が順調に進むように道具の修理をする。

昭和57年10月29日　晴　昨日同様に道具の修理をしたり，器材の点検をし，消耗品を拾い出し，その補充をする。

昭和57年10月30日　晴　発掘器材のうち，実際に掘るのに使用する道具を良く切れたり，良く掘れるように，研磨器を使って研ぎ出す。明後日，運搬が楽にできるように紐で結んでおく。

昭和57年11月1日　雨　本日は雨降りであったが明日からの発掘調査の綿密なる打ち合せを一日にかけて行う。この城平遺跡の特徴を把握し，その調査方針について充分なる討論をかわす。

昭和57年11月2日　晴　本日は前の現場であった西春近諏訪形城の腰遺跡からトラックにて，西春近山本城平遺跡へ発掘器材一式を運搬する。テントは用地内には建てなくて，近くの個人所有地に建てさせてもらうことにした。この所有地はいずれは宅地にするとのことできちんと整地してあり，テントを建てるのには極めて好条件であった。テントは南北に長く三張り建てた。入口は南側と北側に設け，南側のそれは道具用に用いることにした。午後3時頃テント張りは終了する。

明日からの作業のためにグリット設定を行う。パイプを付設する場所はまがっているので通しの

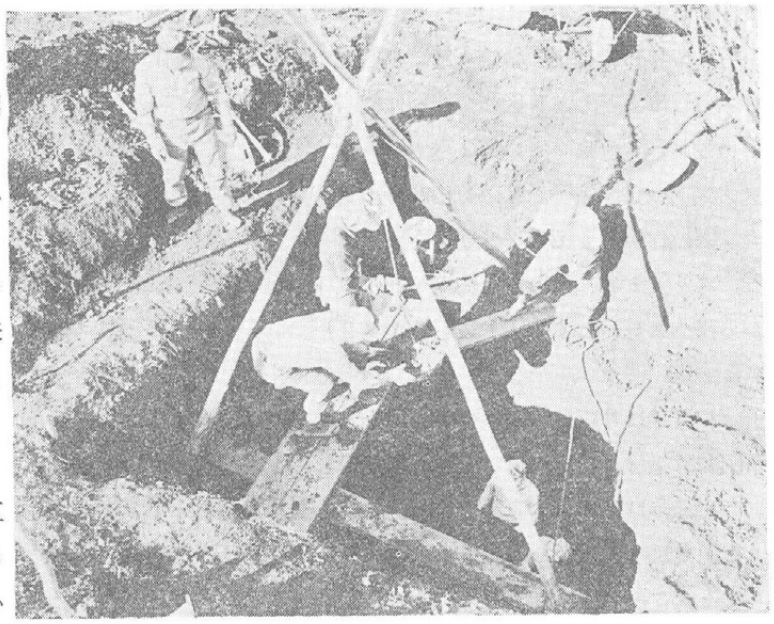
グリット名でつけるわけにはいかないので区ごとにわける。一番南側の山林をⅠ区とし，東から西へA～D，南から北へ1～24とする。一辺2m×2m，面積4m²である。

昭和57年11月4日　晴　昨日設定したⅠ区A1グリットより掘りはじめる。耕土は深く，しかも山つきであったので，層位は各層にわたって堆積していた。遺物は土器片がわずかに1片出土したのみであり，堆積土中であったので，どこからか運ばれてきたものと思われた。

昭和57年11月5日　晴のち雨　午前中は前日に引きつづいてⅠ区のグリット掘りを北へ北へと進めていくが，遺物の出土は何もなかった。

午後は雨が降ってきたので，今後の調査方針を従来と異った方法で進めようと検討しなおす。

昭和57年11月6日　晴　Ⅰ区を全て掘り尽す。Ⅱ区は現在作物をつくってあるので掘るわけにはいかないのであとまわしにしてⅢ区にグリットを設定する。Ⅲ区のグリット名のつけ方はⅠ区と同様にする。Ⅲ区を掘り始めてみたが土器は数片出土したのみであった。



発　掘　風　景

昭和57年11月8日　晴　Ⅲ区のグリットを掘り進めていくとA4付近に落ち込みがみられた。この落ち込みは古い時期に人為的に埋められたものと思われ，攪乱土層になっていた。あとでは，この遺構は井戸であると判明したが，この時点では何んだかかいもく見当もつかなかった。B18付近にマウンドが発見され，第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドと命名し，拡張していくと，付近より内耳土器片が出土した。

昭和57年11月9日　曇時々雨　井戸址の拡張をする。付近より天目茶碗，中世内耳土器片が出土した。第Ⅳ区のグリットを設定，グリット名はⅠ～Ⅲ区と同様にする。Ⅳ区は地盤が西から東へ傾斜しており，Ⅳ区A5グリットまではローム層までに2m程あった。これらは地盤に準じている。

昭和57年11月10日　雨　いままで出土した遺物の洗浄を行う。

昭和57年11月11日　雨　いままで出土した遺物の洗浄を行う。

昭和57年11月12日　雨　前日，前々日二日がかりで洗浄した遺物の注記を行う。

昭和57年11月13日　晴　井戸址と思われる遺構を掘り下げていくと，攪乱土は掘れども，掘れども充満しており，井戸址への確信が強まってきた。夕方までに井戸址の底面に達した。底面上には水を澄ませる為に玉石が並べてあった。遺物の出土は何もなかった。状態及び構築方法からして近

世後半の井戸と思われた。Ⅲ区の東西のセクションをとる。

昭和57年11月15日　晴　井戸址を完掘する。この井戸址の底面には水が浸透してきている。Ⅳ区の西側の方を掘り進めていく。Ⅰ区の南北のセクションをとるⅠ区の全測図作製

昭和57年11月16日　曇時々晴　Ⅰ区とⅢ区の埋めもどし，Ⅲ区の全測図作製，第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンンドの実測完了。Ⅳ区の南北のセクショ図の作製，Ⅱ区のグリットを設定する。グリット名は南から北へ1～26，東から西へA～Bとする。1辺を2m×2mとする。

発　掘　風　景

昭和57年11月17日　雨　今まで出土した土器の洗浄及び注記を行う。

昭和57年11月18日　晴　Ⅱ区を掘り始じめる。Ⅳ区の東西セクションをとる。

昭和57年11月19日　Ⅱ区を北へ，北へと掘り進めていく。夕方までにこの区に設定されたグリットを掘り尽す。Ⅱ区の南北セクションをとる。Ⅳ区の西側のところに配石が検出され第1号配石址とする。この遺構はこの近くにあった堂に関係するものと思われた。

昭和57年11月20日　晴　Ⅱ区の埋め戻し，Ⅳ区の全測図作製

昭和57年11月22日　晴後雨　井戸址の全体が撮影できるように掘り下げ，清掃を行う。Ⅲ区の第1号，2号ロームマウンドの断面図を作製する。第1号配石址の実測。午後は遺物の洗浄を実施する。

昭和57年11月24日　晴時々雨　第1号配石の実測と写真撮影を終える。第1号，2号ロームマウンドの写真撮影を終了する。

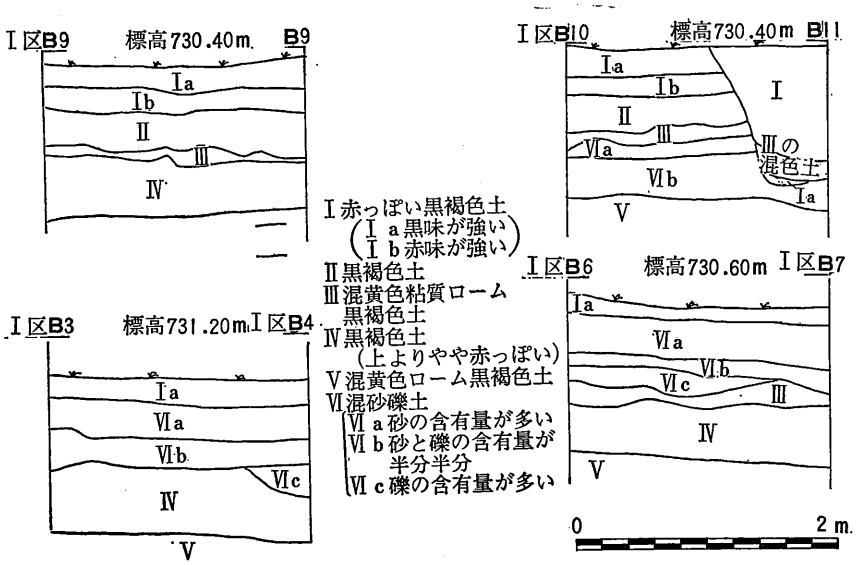
昭和57年11月25日　晴　Ⅳ区の東側と第1号配石の埋め戻し，Ⅳ区西側の東西セクションをとる。井戸址の実測及び写真撮影を終える。Ⅱ区の全測図作製

昭和57年11月26日　晴　井戸址の埋めもどし，グリット棒を抜き，あとかたづけをする。

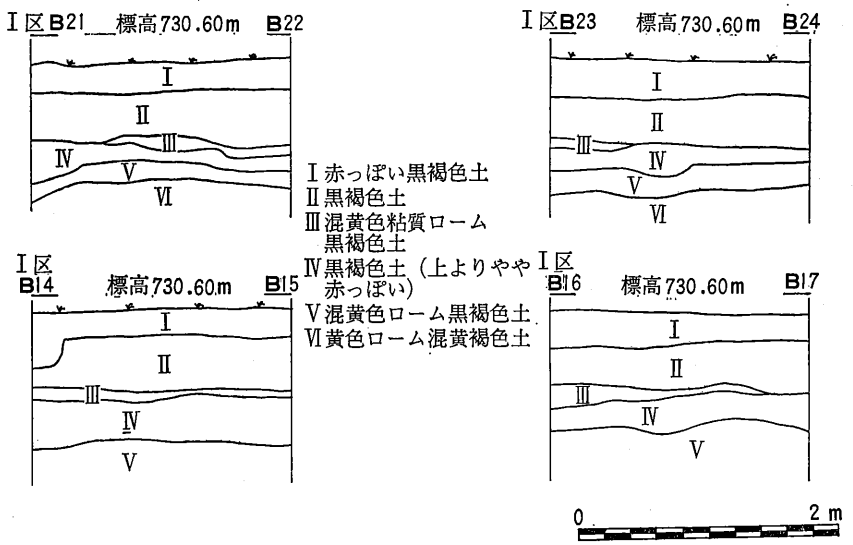
（飯塚政美）

第Ⅱ章　層　　位

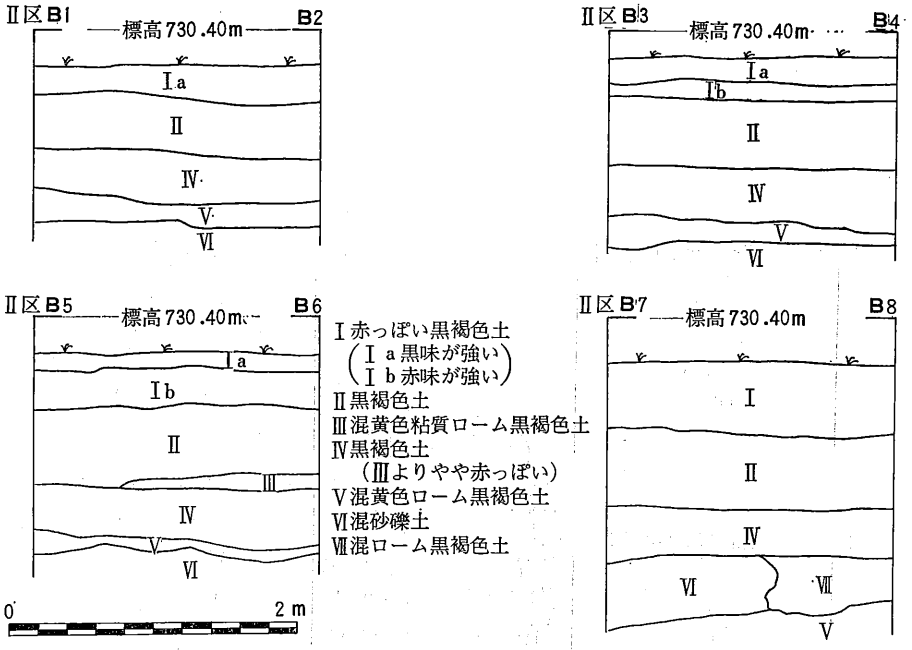
層位はグリット設定の都合上，区に分けて掲載する。あるいは掘る都合上，断面図にしたものと，柱状図にしたものとがある。



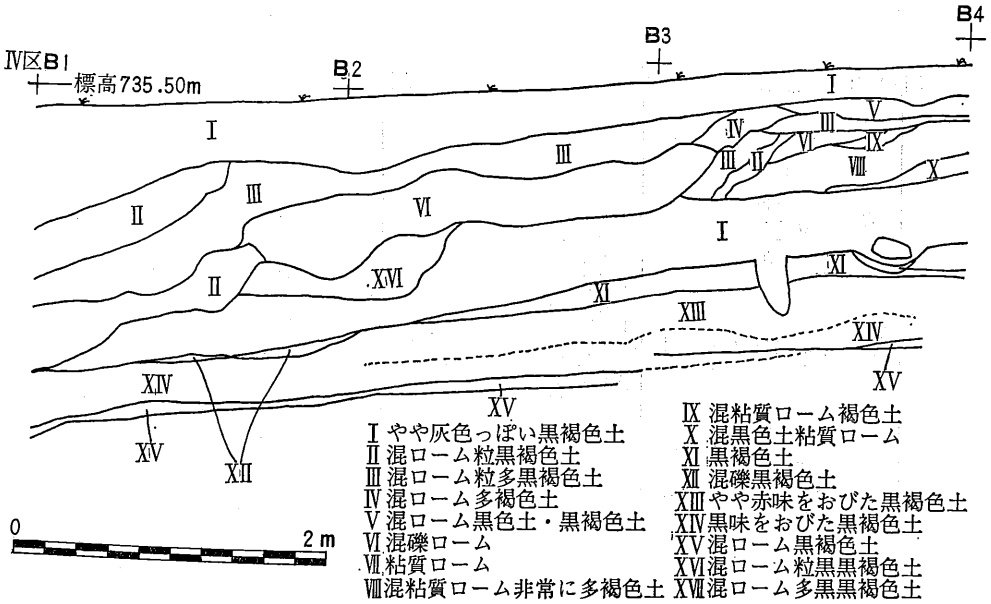
第1図　Ⅰ区土層柱状図



第2図　Ⅰ区土層柱状図



第3図　Ⅱ　区　土　層　柱　状　図



第4図　Ⅳ　区　土　層　図

第5図　地形及び遺構配置図（1：500）

第1節　ロームマウンド

第1号ロームマウンド（第6図，図版4）

本遺構はⅢ区のB18～B19グリットに検出されたマウンドであった。このマウンドの構築されたローム層面まで約1mあり，この基盤は西から東へかなりの角度で傾斜していた。このマウンドは南側で第2号ロームマウンドに接していた。

規模は南北1m60cm，東西1m25cm程を測定でき，周囲及び墳頂はやや堅くなっていた。墳頂は大体平坦であり，東へは段がつき，西側はなだらかに傾斜していた。

この遺構の周囲には，ロームマウンドにしばしばみられる溝は検出されなかった。そのような状態であったのでマウンドとしては貧弱な感じがした。南側の所に墳頂よりやや上層面に粘板岩が4個検出されたが，これは本ロームマウンドに関係するものか，第2号ロームマウンドに関係するものかは全く不明である。

遺物は何も出土せず，幾かなる時代かは不明である。

第2号ロームマウンド（第6図，図版4）

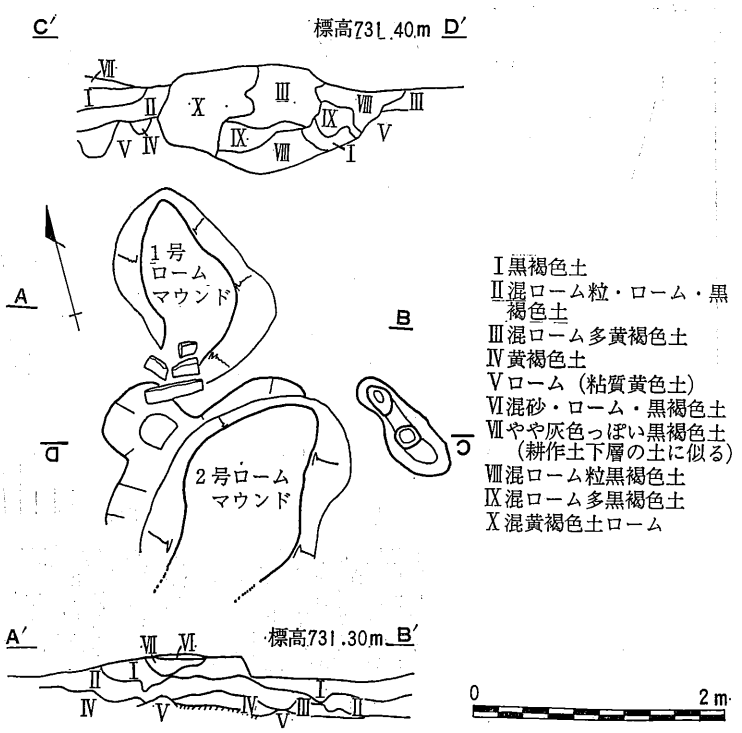
本遺構はⅢ区のC18～C19グリットにかけて，しかも北側は第1号ロームマウンドに接して検出された遺構である。基盤及びローム層面までの状況は第1号ロームマウンドと変化はない。

規模は南北不明（南側は用地外の為発掘調査不可能）東西は1m80cm程を有していた。周囲はやや軟弱で崩落しやすかったが，墳頂はかたくしまっていた。

墳頂はやや凹凸状を呈し東側はややカーブを描きながら段を，西側は内側へ弯曲をするようなかっこうで段をそれぞれ持っていた。

周囲には溝がきれいに回わっており，そのなかに黒色土が充満していた。

遺物は何も出土せず時代決定は当然ながら不可能である。



第6図　第1号・2号ロームマウンド実測図

第2節　配　石　址（第7図，図版4）

本遺構は今回発掘調査実施地区のうちで，最も西側のⅣ区A11～B13グリット付近に検出された配石址である。用地が限定されているので，第8図の掲載した部分だけの調査に終わってしまったが，全面発掘を実施したならば，石の広がり範囲はもう少し拡大されると推測できえよう。

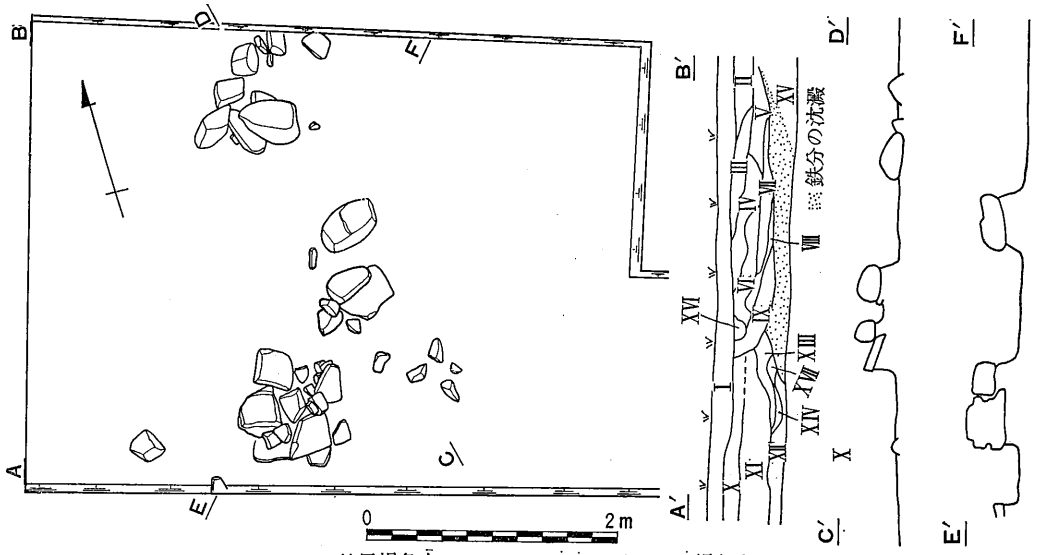
配石の存在した面は表土面より60cm位下った灰黒色土，黒褐色土層面であった。石の存在する範囲は現状では南北3m50cm，東西2m60cm位を測定できる。一応配石という遺構名を付けてみたわけであるが，その観察をしてみると，石は割合部分的に集中しているようにみられる。

石の大きさは拳大程から一抱え程もあるが割合に均一化されていた。大きな石を上に敷きつめ，下面には小さな石を敷いてあり，想像するに基礎石のようすがうかがわれるように思えた。

石の上面レベルを測定してみるに大般一定しており，建物を建てるのに十分ではないか。石質は粘板岩が大部分であり，なかには若干花崗岩も含まれていた。石のなかには赤く焼けて変色したものや，炭化物が相当量付着しており，なにか祭祀的な建物が考えられる。

近くの部落の人々に聞くと，この付近は古堂という小字名がついていたり，昔，尼寺が存在したと伝承されているとのことであった。

遺物は配石址の周辺より内耳土器片，室町後期古瀬戸灰釉陶器片が若干出土した。以上のことから察して本遺構は室町末期から江戸時代初期頃の尼寺の基礎石ではないだろうか。

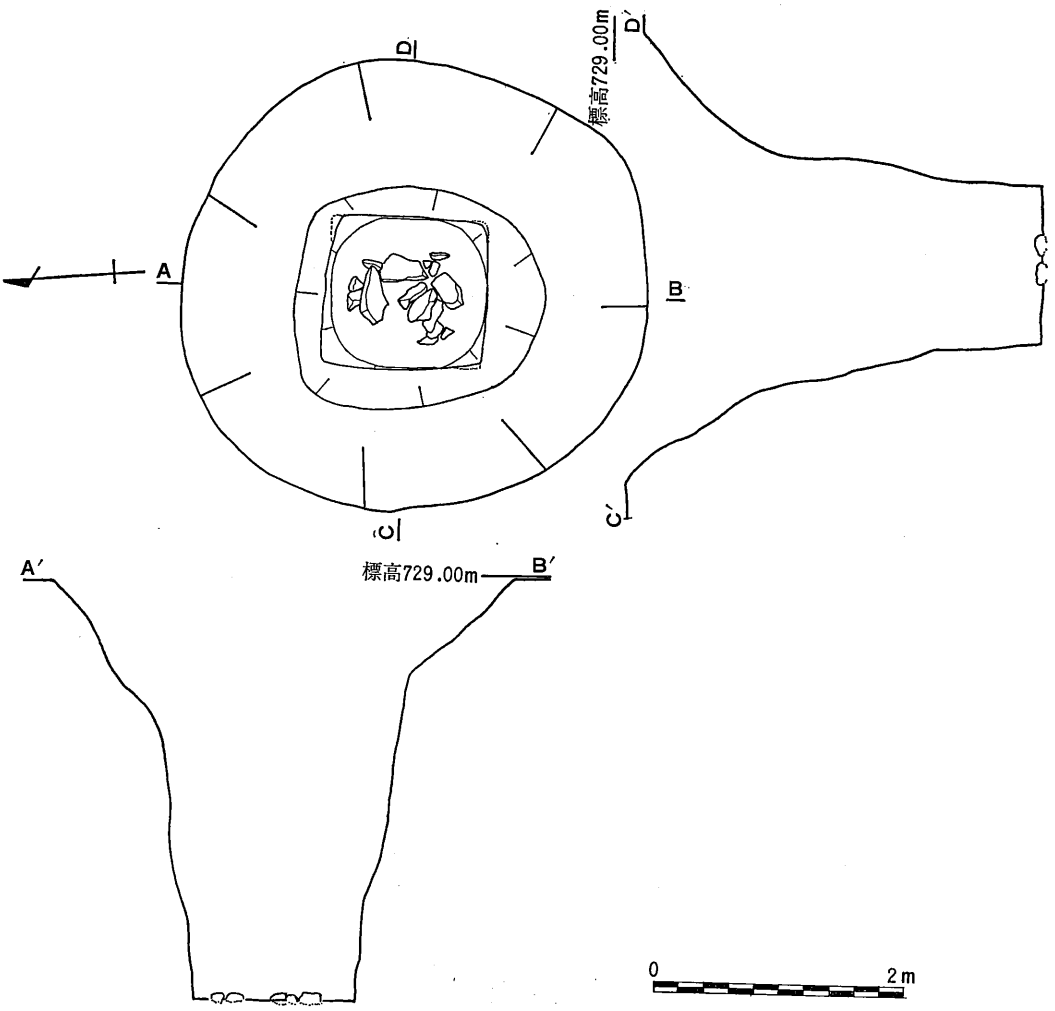


第7図　配　石　址　実　測　図

第3節　井　戸　址（第8図，図版5）

本遺構は表土面から1m位下ったローム層面を掘り込んだ井戸である。この井戸の覆土はある時期に人為的に埋めたとみえて，攪乱土が埋っていた。平面プランは上面は円形状に，底面は隅丸正方形状に成り，それぞれの規模は前者では南北3m70cm，東西3m55cm，後者では一辺1m23cmを測る。深さは3m50cm位である。壁面上部はソフトローム層，中部から下部にかけてハードローム層から成り，凹凸していた。ハードローム層の壁面にはノミの跡がみられた。底面は前述したように方形状になっており，使用時には木枠を組み込んだあったと推測できる。埋める時に木枠を抜いたのであろう。底面の石は水を澄ませるために入れたのであろう。遺物としては鉄製品が1点出土している。構築方法からみて江戸時代後期頃だと推測できる。

（飯塚政美）



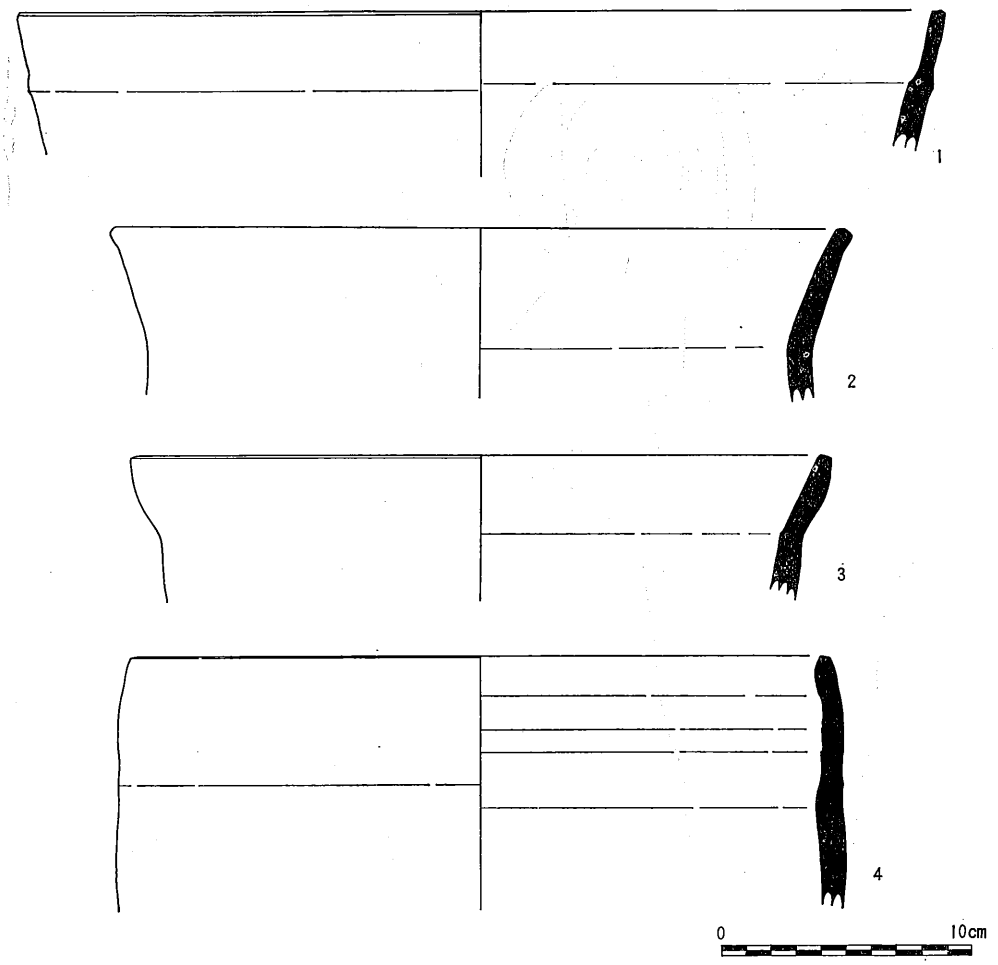
第8図　井　戸　址　実　測　図

第Ⅳ章　遺　　物

本遺跡からは中世以前の遺物，中世の遺物そして近世の遺物が出土している。それらの遺物の内訳は第１節　内耳土器及び土器，第２節　陶磁器，第３節　石器とし，各図毎に基づいて説明を加えていくことにする。

第１節　内耳土器及び土器（第９～10図，図版７～８）

第９図（１～４）は全て内耳土器片である。口縁部破片の為に図上復元が可能であったので実測図を作製した。（１）はⅣ区Ｂ１よりの出土であり，口縁径36.９㎝を計る。（２）はⅣ区Ｂ12よりの出土であり，口縁径29.５㎝を計る。（３）はⅣ区Ｂ１よりの出土であり，口縁径27.9㎝を計る。（４）はⅣ区Ａ２よりの出土であり，口縁径28.1㎝を計る。



第９図　内　耳　土　器　実　測　図

色調は黒色（1～3），赤褐色（4）を呈している。（1～3）の外面には多量の炭化物の付着がみられた。（1～3）は深さからして中世後半，（4）は中世前半に位置づけられるのではないか。

第10図（1）は縄文土器底部破片である。底部は網代底になっており，荒い目のようである。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好で，少量の雲母を含んでいる。縄文後期に位置づけられると思われる。

第2節　陶　磁　器（第10図，図版7～8）

第10図（2）は灰釉陶器の杯であろう。猿投産と思われ，11世紀前半頃と推測できよう。

（3～4）は鎌倉後期の陶器片であろう。（3）は古瀬戸灰釉四耳壺，（4）は古瀬戸灰釉こね鉢である。（3）の底部は付高台で形成されている。

（5）は中国産宋青磁である。器種は細片のため不明である。

（6）は室町前期頃の古瀬戸天目茶碗の口縁部破片である。天目釉の出方が美しい優品である。

（7～8）は古瀬戸鉄釉茶碗の口縁部破片である。（7）は純然たる鉄色を彩しているのに対し，（8）は一部飴釉がみられる。（7）は室町中期，（8）は室町後期の作と思われる。

（9）は古瀬戸灰釉平茶碗の破片であり，室町中期頃に位置づけられる。

(10) は小型菊皿の底部破片であろう。内面に菊の花弁を明瞭に印刻してあり，釉薬の厚く，光沢を放っている。底部は付高台で，重焼きの跡がみられる。この皿を編年的に見てみるならば室町後期古瀬戸灰釉菊皿と思われる。

(11) は大型鉢の底部破片であろう。内面に巴型文を印刻し，この文の間に貫入の跡がみられる。付け高台で，糸切り底になっている。室町後期頃の産で，古瀬戸灰釉大型鉢であろう。

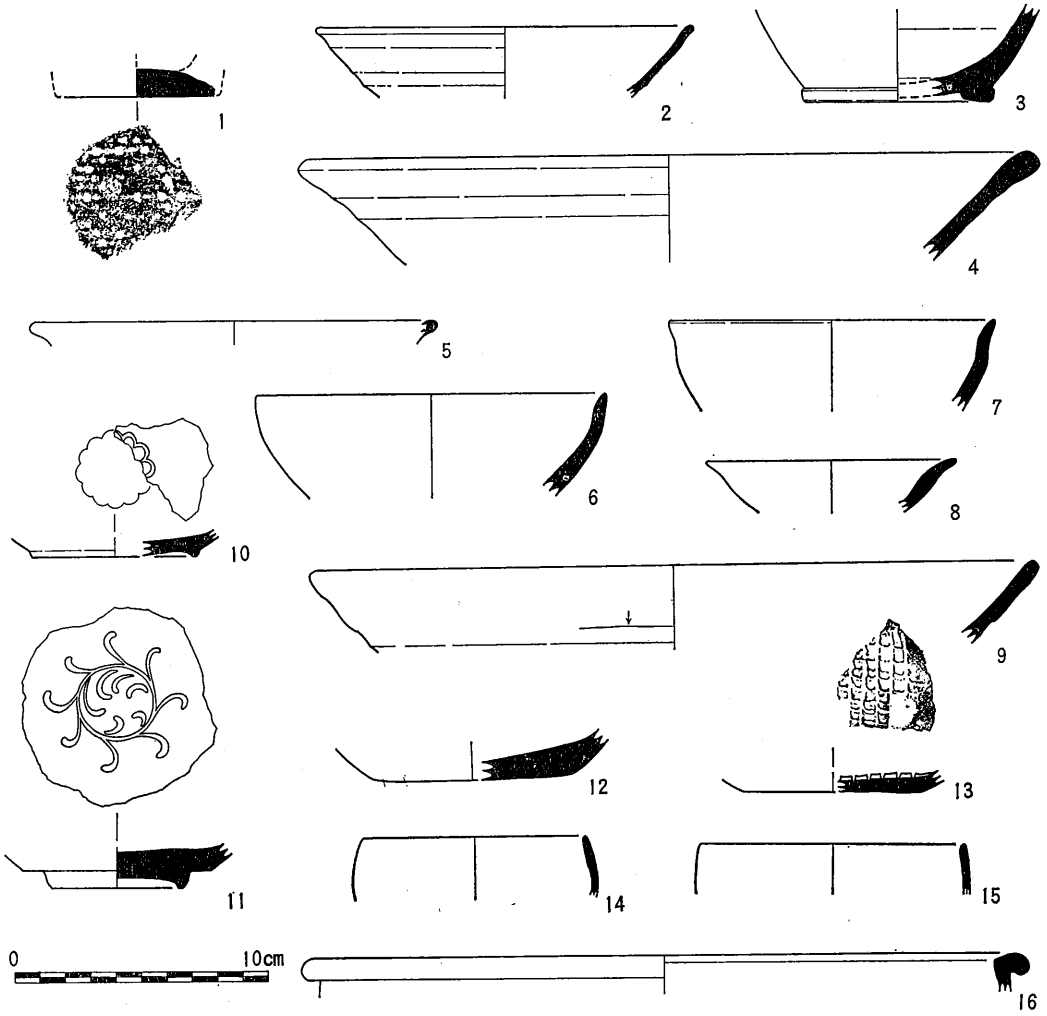
(12) は室町後期古瀬戸灰釉の一派と思われるが，その器種は不明である。

(13) は室町後期古瀬戸灰釉おろし皿の底部であり，底部は糸切り底になっている。

(14～15) は近世初期の湯呑茶碗と思われる。同じく瀬戸産であろう。

(16) は近世初期の鉢と思われる。瀬戸産であろう。

（飯塚政美）



第10図　土器及び陶磁器実測図

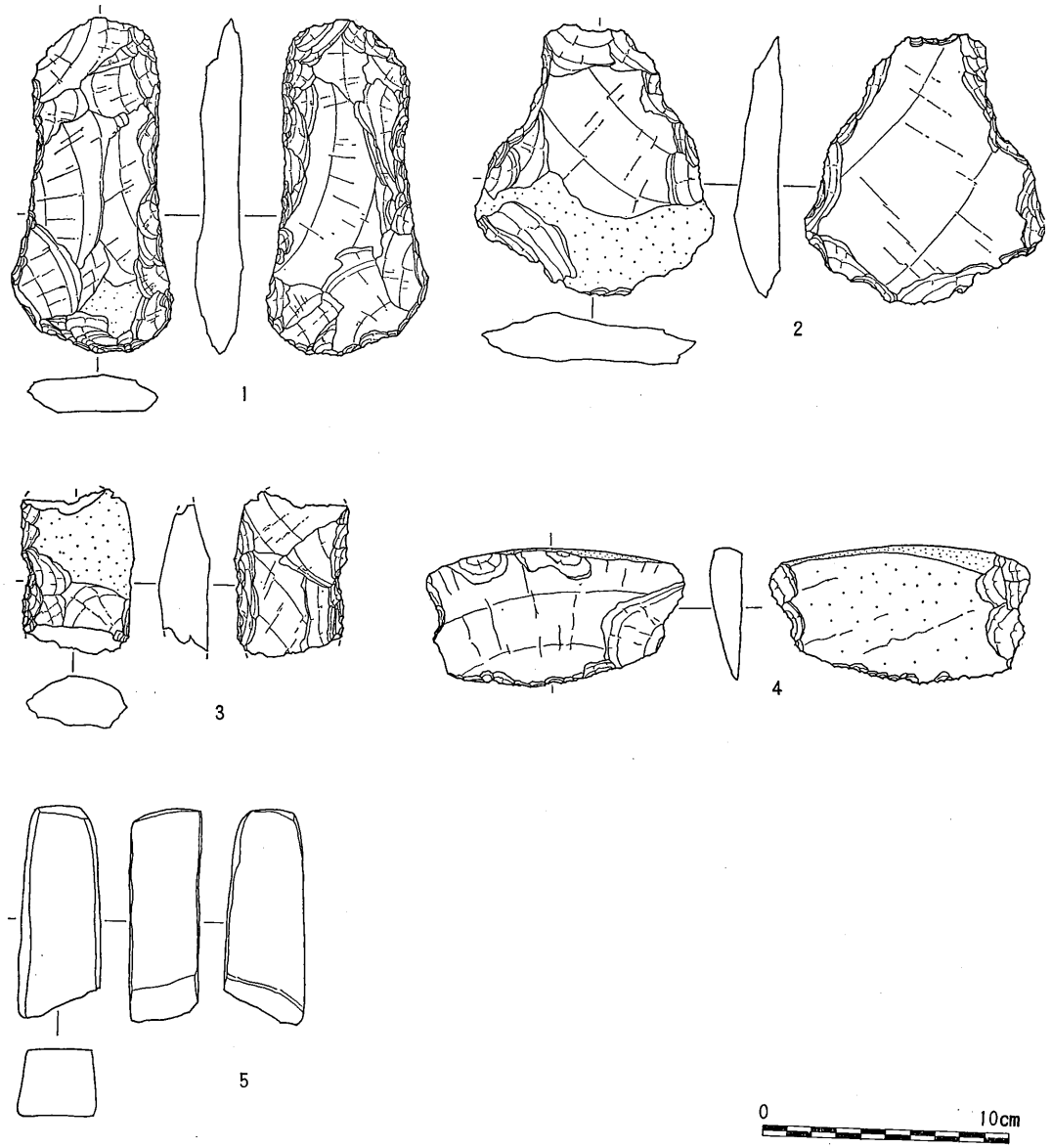
第3節　石　　器（第11図，図版8）

今回の調査で，打製石斧3，横刃型石器1，砥石1が出土した。（1～3）は打製石斧である。（1～2）は割合に薄い石を用いて製作してあるのに対し，（3）は割合に部厚い石を用いてある。（1）は刃部の調整が周囲に及び丁寧に製作してある。（2～3）は雑な調整である。（1～2）は撥形，（3）は短冊形を呈し，（1）は粘板岩，（2～3）は砂岩を用いてある。

（4）は横刃型石器である。調整は雑で，わずかに刃部を残しているだけである。砂岩を用いている。

（5）は四角形の砥石である。良く磨かれた良品のもので，部分的に使用痕が認められる。蛇紋岩系の石を使用している。砥石の状態からして近世に近い時期のものと思われる。この砥石の出土地点は前述した配石址の近くである点からしても，時期的に一致する。

（飯塚政美）



第11図　石　器　実　測　図

第V章 ま と め

城平遺跡は名の示すように，今回発掘調査を実施した西方200 m位のところに中世の山城が存在しこの付近を城平と呼んでいる。当初，発掘調査の期待はこの山城に関した何かの遺構が検出されるのではないかとのことであった。ちなみに，昭和47年度に実施した中央道発掘調査の時には中世の地下倉・窖址，陶磁器類，古銭等々が相当量出土している。

今回の調査で検出された遺構はロームマウンド2基，配石址1基，井戸址1基であった。ロームマウンドは一般的に言われているのよりも不定形であり，遺物は何も出土せず，その実態は把握できなかった。

配石址は付近の小字名や伝承より察して尼寺の跡と考えるのが妥当と思われ，その創立年代は出土遺物より室町末期から江戸時代初期頃と推測できる。この尼寺は近くにある常輪寺の末寺と思う。この尼寺はその後，山本部落の中心地に移され，最近まで水月庵と言われ，地域住民の信仰の対象となっていた。

この水月庵は取りこわされ，その跡地は現代は山本部落の会所になっている。この会所の一室にこの庵の本尊であったと思われる仏像が安置されている。この仏像の裏側には伝恵心僧都作と銘がある。

井戸址は構築方法あるいは形態からして江戸時代後期の可能性が濃厚である。近くの家に「井戸」と言う屋号がついていることからしても，この近くでは割合に浅くて水が出ていたことがわかる。江戸時代後期と言えば高遠藩が新田開発を盛んに実施した時期であり，従って，あるいは，この井戸はそれに利用されたのかも知れないが，明らかなことはわからない。

出土遺物より察して，前述した城平の城は鎌倉時代にその初源を求めることができえよう。全般的にみて，本遺跡の中心地はもう少し，東側によったところであろう。

（飯塚政美）

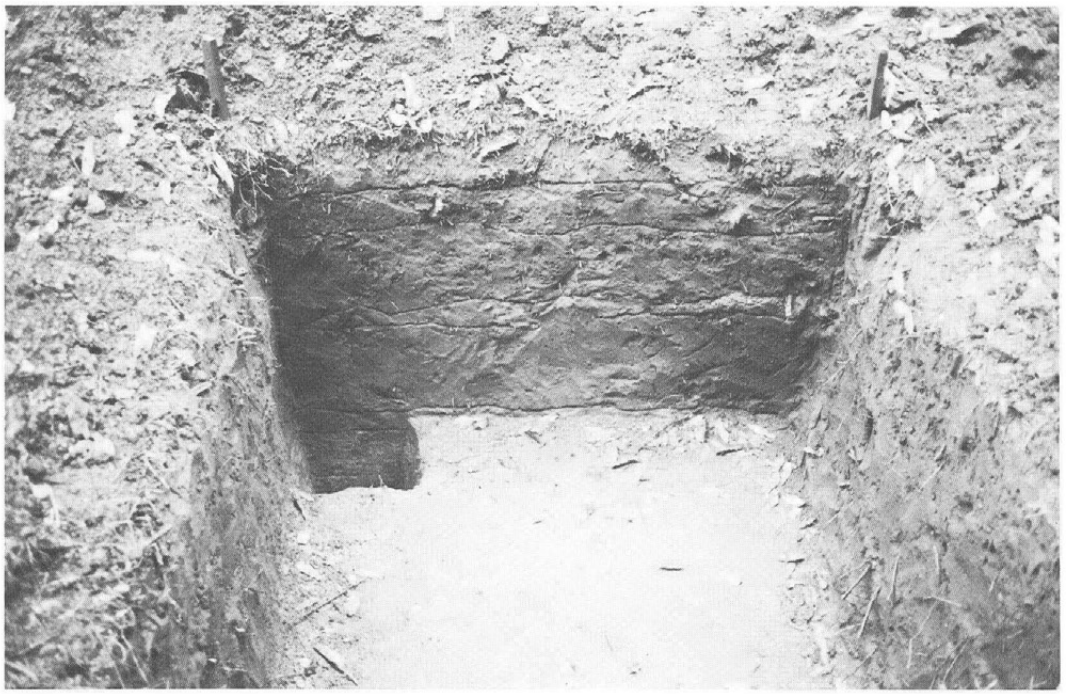
図　　版

図版1　遺跡全景

遺跡地遠景（北側から眺む）

遺跡地遠景（東側から眺む）

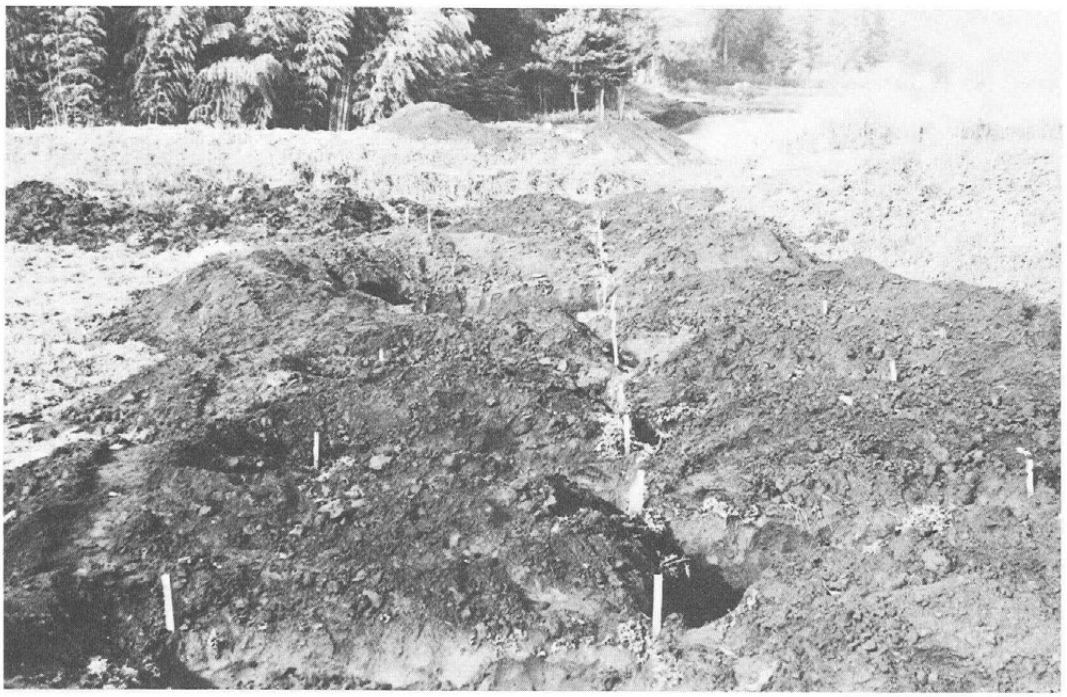
図版2 土　層



土層

土層

図版3　グリッド発掘状況

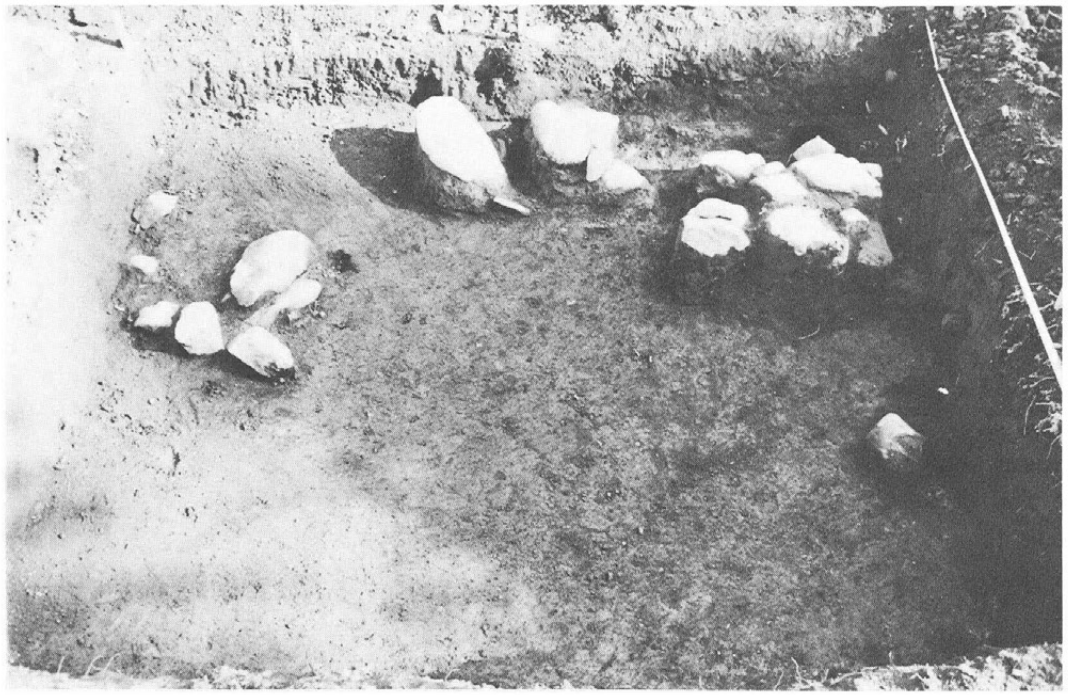


Ⅲ区グリッド発掘状況

Ⅳ区グリッド発掘状況

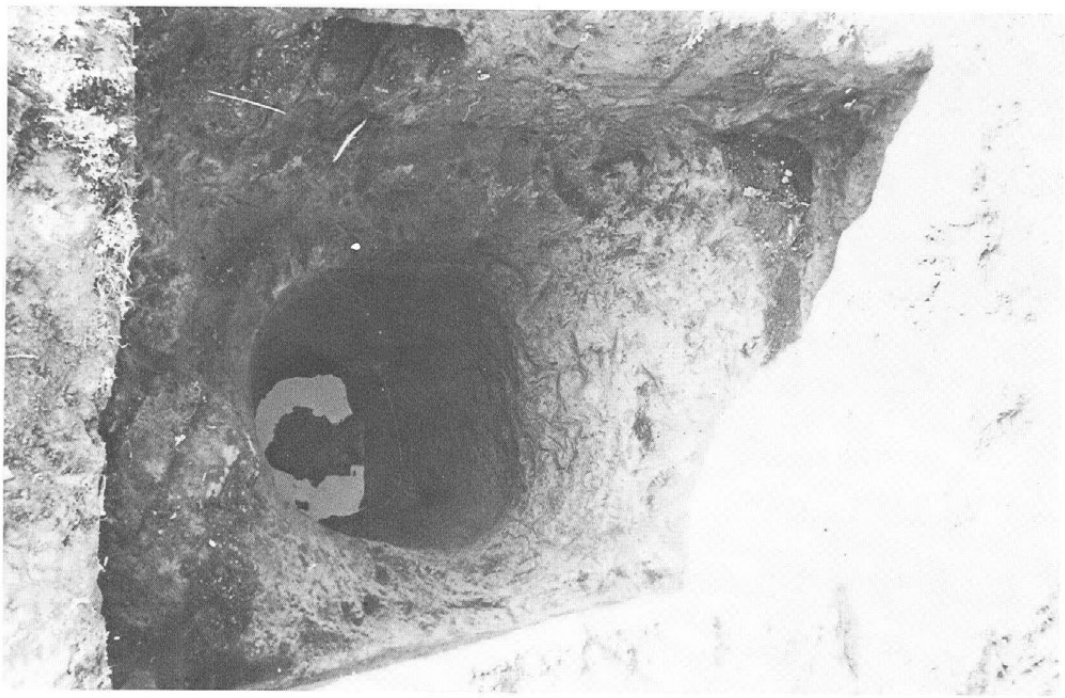
図版4　遺構

第1・2号ロームマウンド



配石址

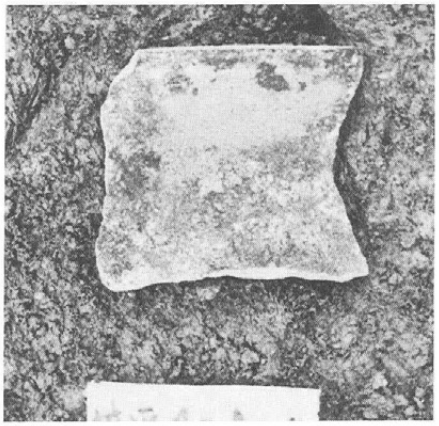
図版5　遺　構



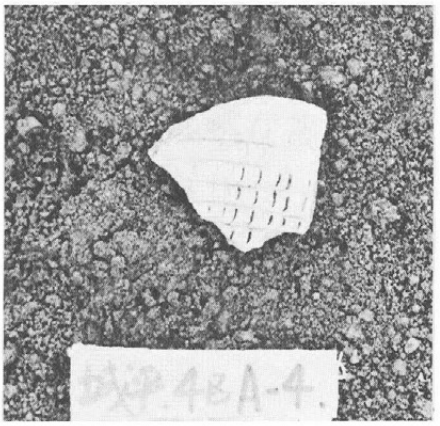
井戸址

井戸址壁面

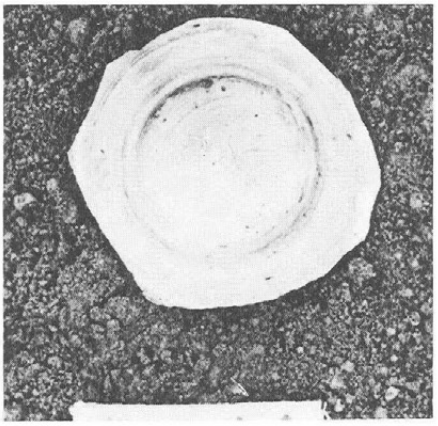
図版6 遺物出土状況



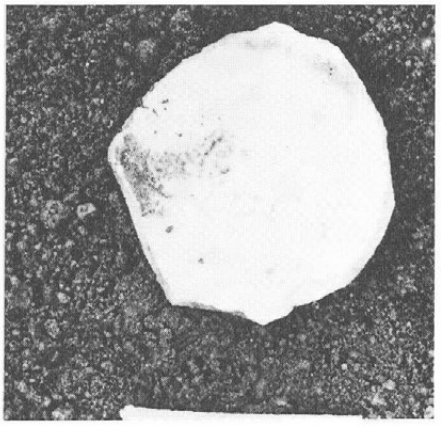
内耳土器出土状況



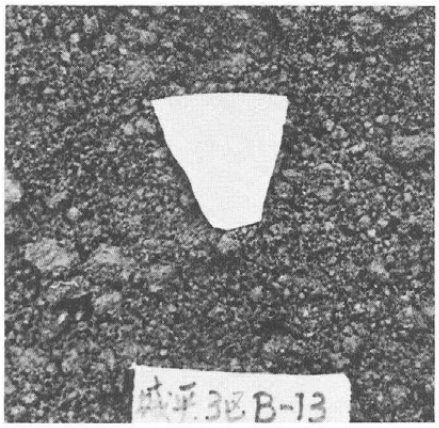
陶器出土状況



陶器出土状況（下面）



陶器出土状況（上面）



陶器出土状況

鉄器出土状況

図版7　出土遺物

出土内耳土器

出土陶磁器

図版8　出土遺物

出土陶磁器

出土石器

宮林遺跡

目　次

目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（5）

第1節　発掘調査の経緯……（5）
第2節　調査の組織……（6）
第3節　発掘日誌……（6）

第Ⅱ章　層　　位……（8）

第Ⅲ章　遺　　構……（11）

第Ⅳ章　遺　　物……（11）

第1節　土　　器……（11）
第2節　石　　器……（12）

第Ⅴ章　まとめ……（13）

挿　図　目　次

第１図　土層柱状図……（８）
第２図　土層柱状図……（８）
第３図　地形及びグリット配置図……（９）
第４図　土器拓影……(11)
第５図　石器実測図……(12)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　土　　層
図版３　グリット発掘状況
図版４　遺物出土状況
図版５　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしています。伊那市においては，西箕輪，西春近，伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。

本年度は船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和56年８月31日　長野県教育委員会文化課指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和57年５月18日　夜，ますみが丘公民館にて関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員が地主に対し，遺跡発掘調査の意義を説明し，調査に協力をお願いする。同夜は地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月４日　夜，ますみが丘公民館に於いて，前回５月18日に説明した旨を地主が納得できるように丁寧に解説する。前回同様に，同夜も地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月15日　夜，ますみが丘公民館にて，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席して，地主側に同意を求める。同夜地主の同意が得られる。

昭和57年６月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が船窪遺跡・城畑遺跡に該当する５人の地主宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

昭和57年６月30日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和57年８月26日　山本会所にて，城平・宮林・山の根遺跡に該当する地権者に説明を行う。同夜，地主の承諾を得る。

昭和57年10月25日　地主の承諾をいただく。この承諾書をいただく時に地権者の要求をできるだけ受け入れるようにこころがけた。具体的には農作物の収穫をおえてから発掘調査を開始すること。また，現況復帰の時にできるだけ耕作土を上において，下の土と混合しないようにする等々のことであった。

（飯塚政美）

第2節　調査の組織

宮林遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	赤羽映士	伊那市教育委員長	
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長	
〃	石倉俊彦	〃	社会教育課長
〃	柘植晃	〃	社会教育課長補佐
〃	武田則昭	〃	社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃	社会教育主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	日本考古学協会会員
〃	小木曽清	宮田村考古学友の会会長
〃	小池孝	日本考古学協会会員

第3節　発掘日誌

昭和57年11月26日　晴　本日は城平遺跡の作業を午前中で終了し，午後より宮林遺跡へ入る。この遺跡は城平遺跡より南へ行った地点にあり，南は白山沢川に面している。現況は山林となっており，草木が茂っていたのでそれの伐採をし，それを一定の場所に運ぶ，大木を切るわけにいかないので大きな木と木の間を利用してグリットを設定する。グリットは1辺を2m×2m，面積4m²と決める。呼び方については南から北へ1～16，東から西へA～Fとする。

昭和57年11月27日　晴　昨日設定したグリットを掘り進めていく。現況は昨日述べたようであるので，規則的な掘り方はとうてい無理であるので，その場合に応じて掘り進めていく。この地区は西からの押し出しが何回もあったとみえて，何層にもわたって砂や礫を含んだ土層が堆積していた。

遺物は縄文中期土器片が出土した。この土器片は流れてきたものとみえて，破片の周囲が摩滅していた。

昭和57年11月29日　昨日に引き続きグリット掘りを西側，北側へと進めていく。するとグリット設定地区の中央部付近より楕円押型文が出土した。これらをよく観察してみると，土器のなかに繊維が混入しており，押型文土器の最終末と判明した。破片の回りは丸くすりへっており，西から流

発　掘　風　景

出したものとわかった。以上の状態であったので周囲を拡張し，綿密な記録や調査ができるような措置をとった。

昭和57年11月30日　午前中雨，のち晴，午前中は雨のため土器洗浄，注記を行う。午後はグリット掘りを進めていく。

昭和57年12月１日　晴　押型文土器の出土した付近をより拡張して遺物収集に努力したが，押型文土器の出土は本日何もなかった。大般の状況が判明したので，南側より押めもどしを実施する。

昭和57年12月２日　晴　押型文土器出土付近一帯の拡張を進めると同時に下へも掘り下げローム層が発見される。この層まで表土面から２m位あった。

昭和57年12月３日　晴　グリットの埋め戻しを全面にわたって行う。全測図の作製，断面図の作製

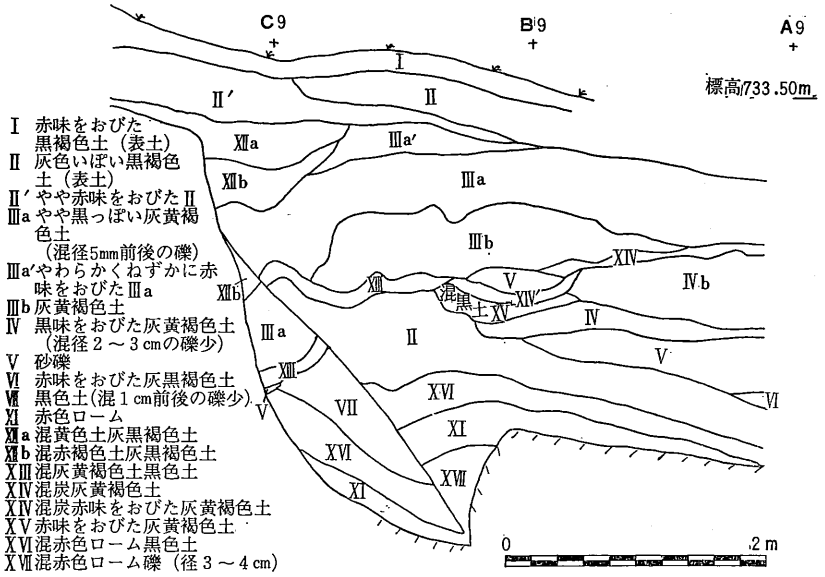
昭和57年12月～昭和58年２月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和58年３月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）

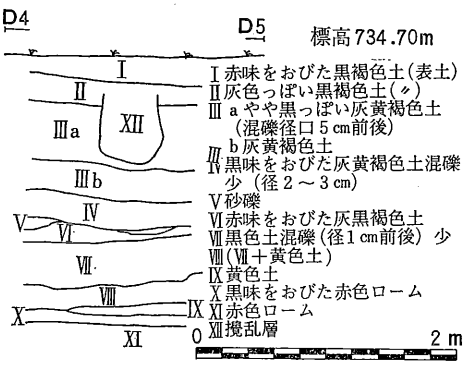
第Ⅱ章　層　　位

本遺跡地の層序関係は西側山麓地帯の押し出しが強く，押し出しによって流出した土砂によって形成されていた。従って層位も数多く，地層を諸条件によって分類してみると，第１図のように19層にも及んでいる個所がみられる。

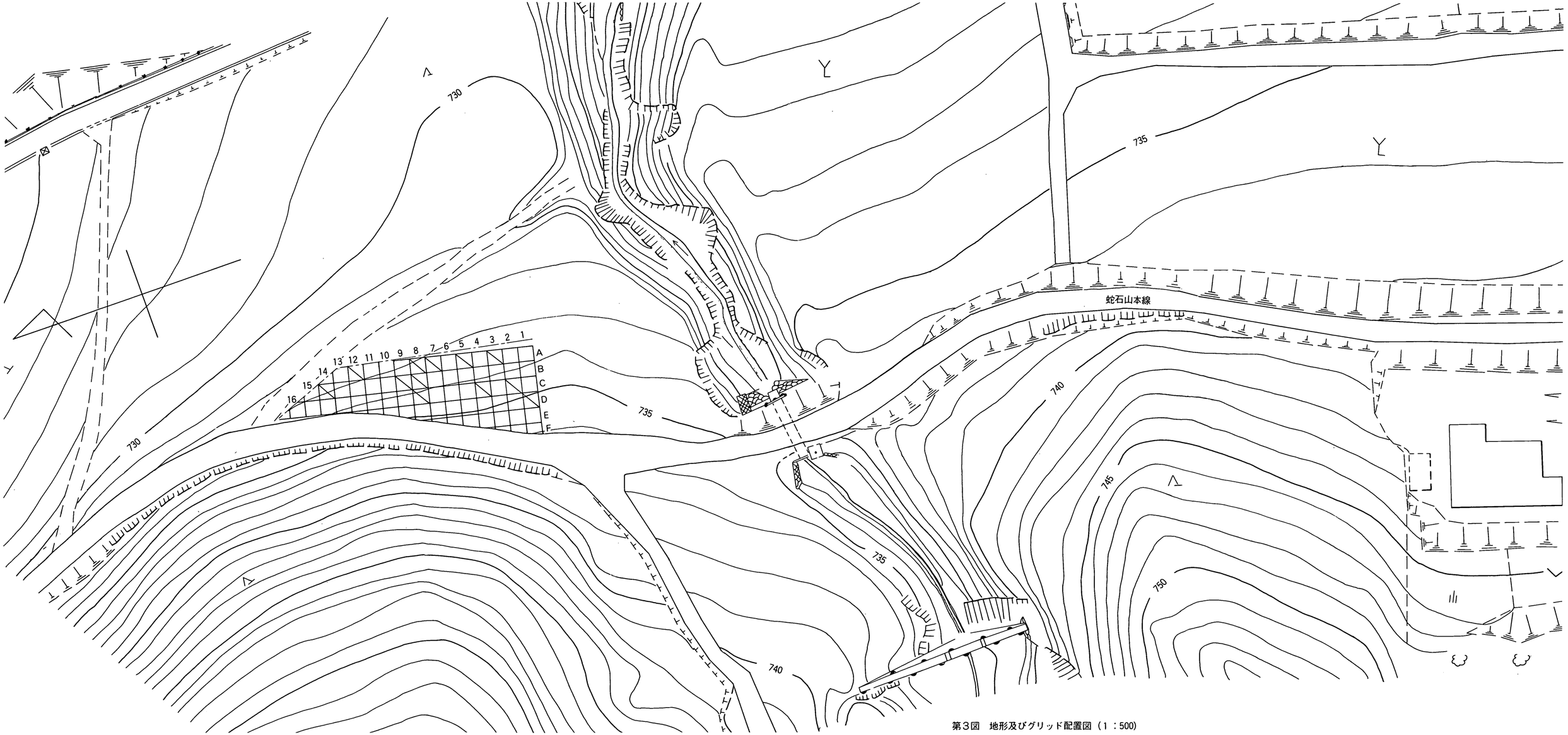
これらの層はいつの時代に堆積したかは不明である。付近の地質関係で注意する点として，遺跡地の南側にある白山沢川は良く氾濫する川とみえて，各所に砂防沿堤がつくられていた。これと関係することであるが，発掘地点の南側は保安林に指定されている。このことはいかに荒れる川であるかを物語ってくれる。



第1図　土　層　柱　状　図



第2図　土　層　柱　状　図



第３図　地形及びグリッド配置図（１：500）

第Ⅲ章　遺　　構

今回の発掘調査地区では遺構は何も発見されなかった。この理由としては限られた範囲の調査だったためである。限られた範囲の調査の割りには遺物が出土した。したがって流れ込んだ遺物と思われるが，周辺には遺構の存在はかなり高いものと思われる。

第Ⅳ章　遺　　物

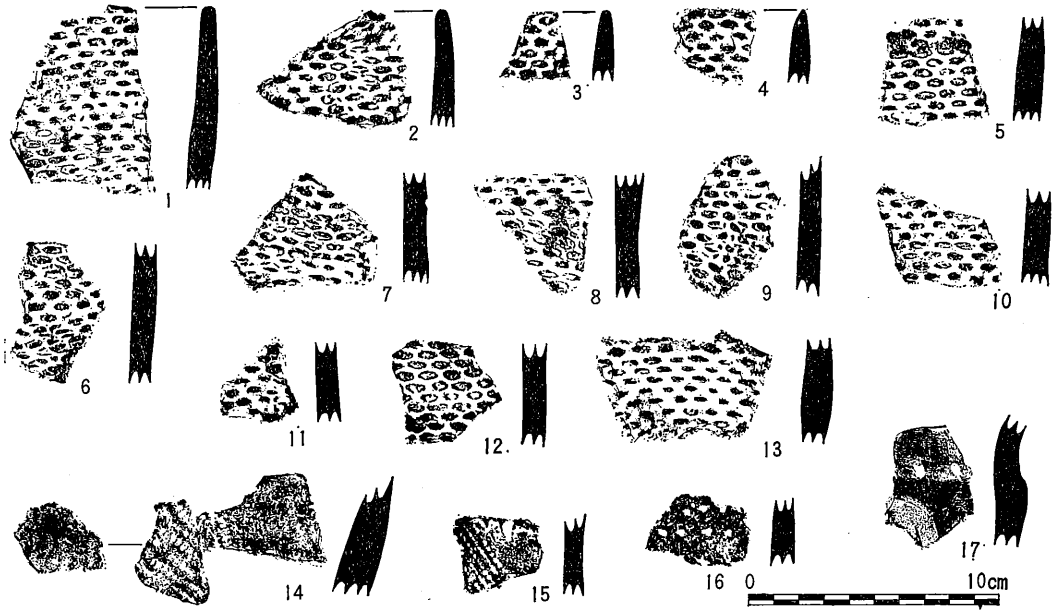
第1節　土　器（第4図，図版5）

（1～13）は楕円押型文の一群である。この一群の破片全てに多量の繊維を含んでいる。したがって押型文土器のなかでも最末期に位置づけられよう。

（1～4）は口縁部破片であり，（1～2）はわずかに内反気味，（3～4）はわずかに外反気味を呈している。（1～3）の口唇部若干丸味をもち，（4）のそれは内側にそがれている。

色調は全般的に黒褐色あるいは茶褐色を帯びていた。

（14）は外面に絡縄帯文様のみられる土器である。色調は赤褐色を呈し，焼成は極めて悪く，胎土中に多量の雲母や繊維を含んでいる。関東の子母口式併行期の土器と考えられる。



第4図　土　器　拓　影

(15) は細かな斜縄文が施されている土器片である。胎土中に微量の繊維，長石，雲母を含んでおり，明赤褐色を呈している。縄文前期前半に位置づけられると思われる。

(16) は無文地に円形竹管文を押捺した土器である。色調は赤褐色を呈し，焼成は中位で，多量の長石や石英を含んでいる。縄文前期後半諸磯Ａ式の一派と思われる。

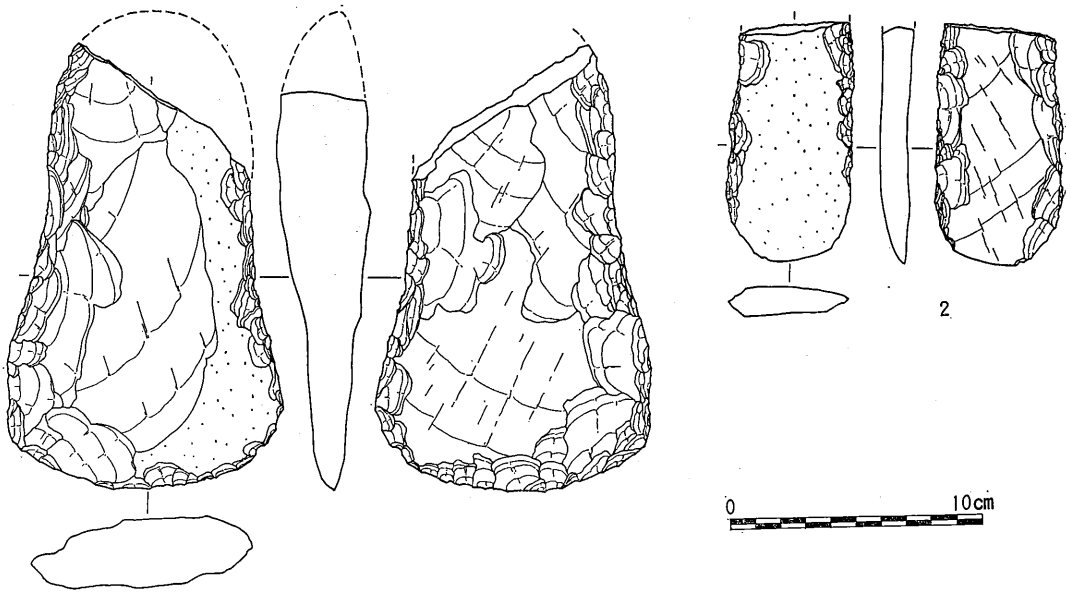
(17) は無文地にヘラけずりの沈線や，ヘラ先による刺突文を加えてあるもの。色調は明茶褐色を呈し，焼成は良好で，多量の長石や石英を含み，それが，表裏面に露出している。

（飯塚政美）

第２節　石　　器（第５図，図版５）

今回の発掘で出土した石器はわずかに２点であり，その内訳は２つとも打製石斧であった。(１) はＣ８グリットより出土し，大型で部厚く，剝離も石器周囲に丁寧に行われており，打製石斧としては優品である。上部は欠損している。形態的には撥形に含まれ，重量がかなりある点からして伐木用に使用したものと思われる。石材は粒子の荒い砂岩である。縄文中期のものと思われる。

（２）はＢ８グリットより出土し，小型で薄く，剝離も一部分に及んでいるにすぎない。上部は欠損し，短冊形に含まれている。石質は粒子の荒い砂岩である。縄文中期のものと思われる。



第５図　石　器　実　測　図

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の発掘調査結果はさんさんたるもので遺構は何も発見されなかった。その理由としては，前に述べた様に限られた範囲だけの調査だった為であると思う。

遺物は縄文式土器片17と，縄文時代の石斧２点の出土があった。これらの内訳をまず土器から述べていくことにする。押型文土器は13片あり，全て楕円押型文で，多量に繊維を含んでいる。以上のことからして，押型文でも最も新しい時期に位置づけられるのであろう。

子母口式土器片の出土は伊那市内でも数少なく貴重な資料となろう。その他，縄文前期前半の黒浜式や，縄文前期後半の諸磯Ａ式，縄文中期後半の加曾利Ｅ式が出土している。

石斧はいずれも打製石斧であり，１つは撥形，１つは短冊形を呈していた。以上，遺物について述べてきたが，これらは全て出土層位が砂層質の様な流入土であり，土砂と一緒に埋没した可能性が強い。従って遺跡の密な地は西方の山麓地帯に開がっていることと思われる。

（飯塚政美）

図　　版

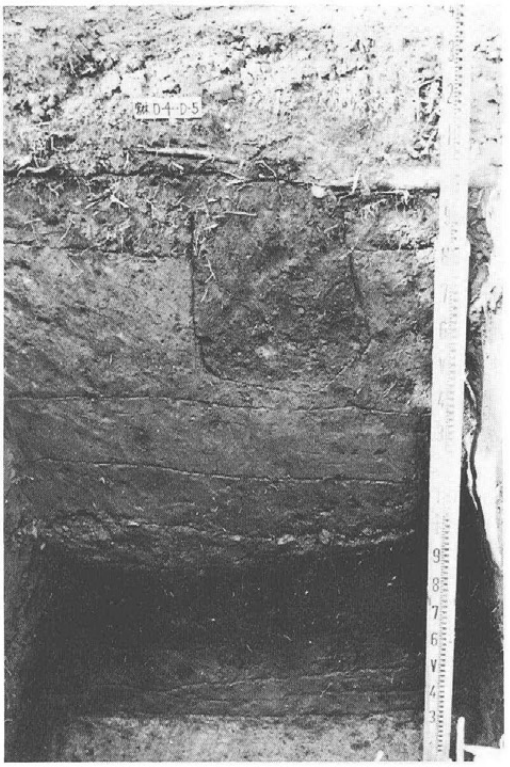
図版1　遺跡全景

遺跡遠景（北側より眺む）

遺跡遠景（南側より眺む）

図版2　土　層

土層



土層

図版3　グリッド発掘状況

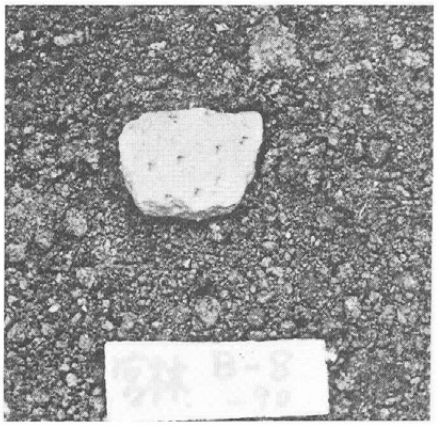
グリッド発掘状況

グリッド発掘状況

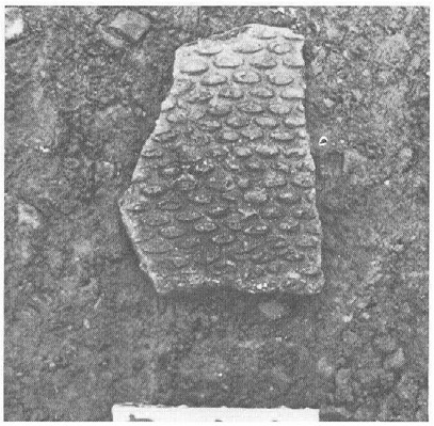
図版4　遺物出土状況

土器出土状況

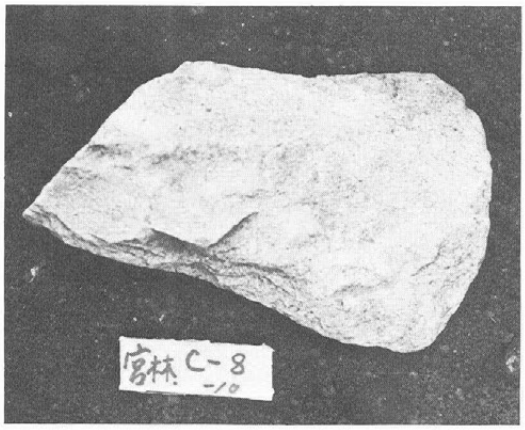
土器出土状況



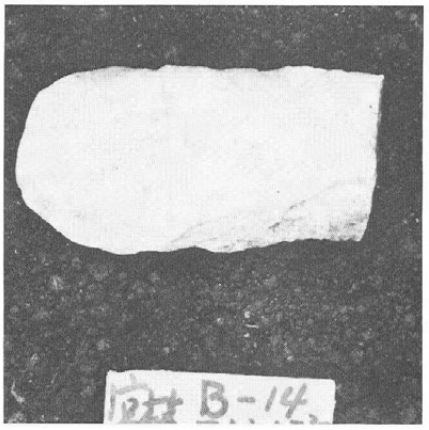
土器出土状況



土器出土状況

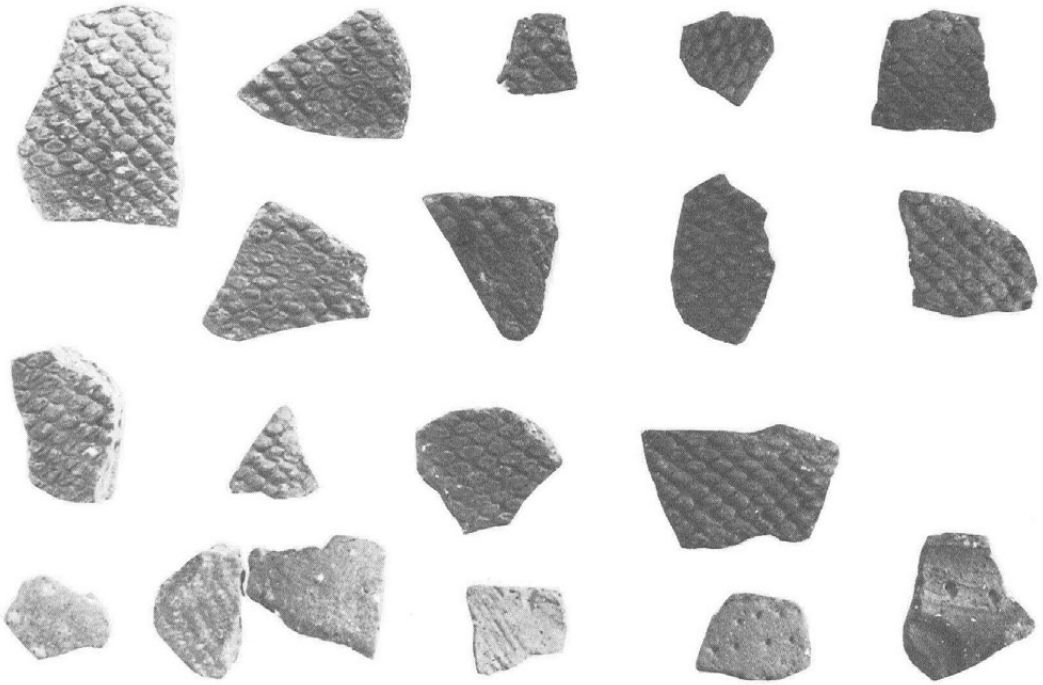


石器出土状況

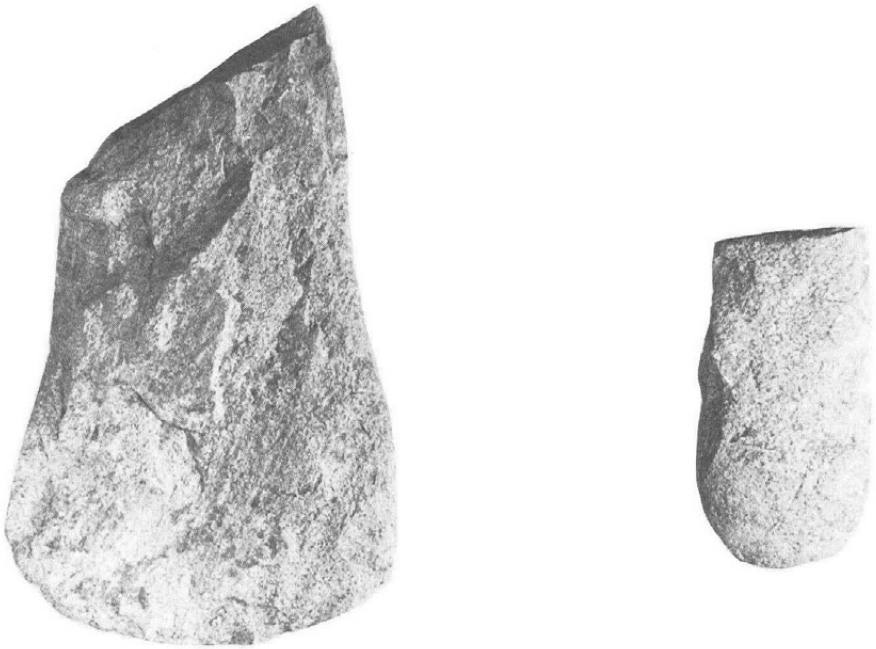


石器出土状況

図版5　出土遺物



出土土器



出土石器

山の根遺跡

目　次

目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（5）

第1節　第1次発掘調査の結果……（5）
第2節　第2次発掘調査の経緯……(25)
第3節　第2次発掘調査の組織……(25)
第4節　第2次発掘調査日誌……(26)

第Ⅱ章　層　　位……(28)

第Ⅲ章　遺　　構……(31)

第Ⅳ章　遺　　物……(34)

第1節　土　　器……(34)
第2節　石　　器……(34)

第Ⅴ章　ま　と　め……(35)

挿　図　目　次

第１図　１・６号住居址実測図……（７）
第２図　２・３号住居址実測図……（８）
第３図　４・５号住居址実測図……（９）
第４図　土器実測図及び拓影……(10)
第５図　土器実測図……(11)
第６図　３号住居址土器実測図及び拓影……(12)
第７図　４号住居址土器実測図及び拓影……(13)
第８図　４号住居址土器実測図及び拓影……(14)
第９図　土器実測図……(15)
第10図　土器実測図……(16)
第11図　５号住居址土器実測図……(17)
第12図　土器実測図及び拓影……(18)
第13図　６号住居址土器実測図……(19)
第14図　６号住居址土器実測図……(20)
第15図　６号住居址土器拓影……(21)
第16図　土器実測図……(22)
第17図　土器実測図及び拓影……(23)
第18図　土器実測図及び拓影……(24)
第19図　土層柱状図……(29)
第20図　土層柱状図……(31)
第21図　地形及びグリット配置図……(32)
第22図　土器拓影及び石器実測図……(34)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　土　　層
図版３　土層及びグリット発掘状況
図版４　遺物出土状況及び出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　第1次発掘調査の結果

山の根遺跡は昭和47年10月9日～11月1日にかけて中央自動車工事事業に伴なって，緊急発掘調査が実施された。その調査の主体となったのは長野県教育委員会であった。

この発掘調査によって検出された遺構及び遺物を「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―伊那市西春近―昭和47年度，日本道路公団名古屋支社，長野県教育委員会刊」によって述べると次のようになる。今回は遺構及び遺物を簡略にかいつまんで記してみることにする。

(1)　縄文中期の住居址と遺物

1号住居址―東西4m25cm×南北4m20cmの円形竪穴住居址である。炉は方形石囲炉であったと推測でき得るが，数カ所にわたって，炉縁石が抜き取られた痕跡が認められる。炉壁には湿気を防ぐために，渦巻文様の加曽利E式土器片を一重に貼ってあった。

6号住居址―東西5m，南北5m50cmの規模を持つ円形竪穴住居址である。炉は方形石囲炉であった。炉縁石はかなりの熱を受けたとみえて，赤く変色し，ひびが入っていた。加曽利E式の土器が多数出土している。

(2)　弥生後期の住居址遺物

2号住居址―東西3m95cm，南北5mの胴張長方形プランの竪穴住居址である。炉は二重の埋甕炉である。外側のは胴以下は欠損し，内側のは底部がない。炉の土器は弥生後期中島式のものである。

(3)　平安時代の遺構と遺物

3号住居址―東西4m43cm，南北4m23cm，の隅丸方形の竪穴住居址である。カマドは東壁の中央付近にあり，石組粘土カマドであり，100cm×89cmの規模を持つ。遺物は土師器杯，灰釉椀，灰釉皿，土師器甕が出土している。

4号住居址―4m40cm，3m90cmで隅丸方形の竪穴住居址である。カマドは東壁中央に接してあり，石組粘土カマドである。遺物は土師器甕，土師器杯，須恵器瓶，鉄製の鋤先が出土している。

5号住居址―4m48cm，3m45cmの隅丸方形竪穴住居址である。西壁中央に接するところに石組粘土カマドが構築してあった。遺物は国分期土師器壺，甕，土師器杯，須恵器杯，須恵器瓶口，銅製椀が出土している。

7号住居址―3m45cm，3m40cmの方形竪穴住居址である。カマドは東壁にあり，石組粘土カマドであるが，支脚石もほとんど崩れ，天井石も床面に落ちて，粘土だけが，わずかにもりあがっている。遺物は土師器甕，土師器杯が出土している。

その他遺構・遺物としては竪穴2基，ピット群1，土壙2，ピット列1が検出されている。遺物は内耳鍋，天目，諸磯C式土器，刀子，土錘，鉄釘，打製石斧，環状石斧が出土している。

第１次調査結果のまとめを簡潔に記すと下記のようになる。

山の根遺跡は前述したように地域住民にとっては耕作時にしばしば土器や石器が発見され，古くから知られた遺跡であった。縄文前期の土壙１，縄文中期住居址２，土壙１，弥生後期住居址１，平安時代住居址４，竪穴１，時期不詳のピット群と竪穴１，ピット列１等々の遺構が発見された。

縄文前期終末期の土壙は伊那市内でもその発見は数例しかなかった。この土壙内より出土した土器は朝顔花状に開いた深鉢型土器であり，諸磯Ｃ式に編年づけられると思われる。この土器は当時の人達にとっては極めて貴重品だったとみえて，口縁直下に２つの補修孔があけてあった。

１，６号住居址は掘り込み面が軟弱なため，遺構検出は完全ではなかった。１号住居址の炉は土器敷，摺鉢状であり，当時，この地は湿気を帯びていたことが窺える。

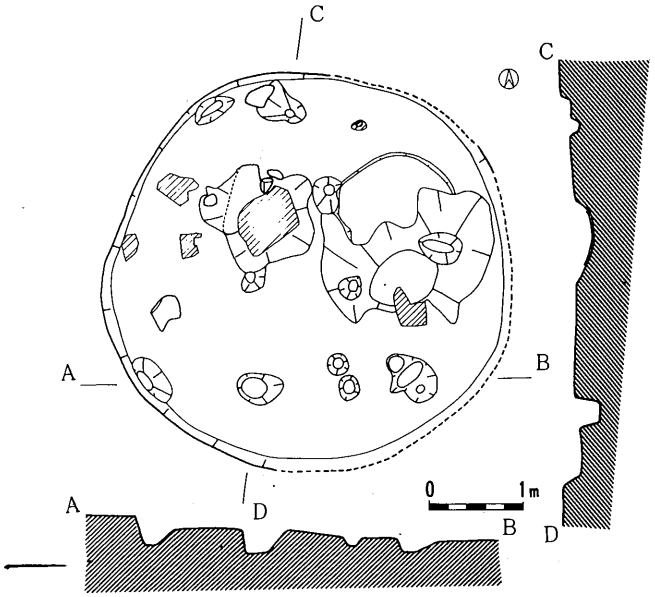
弥生後期の住居址は，床面上に集石が散在しており，住居址廃絶後の所作と思われるが，現段階では，伊那市内では発見例が少なく，結論づけまで到達しない段階である。

平安時代の遺構としては，４軒の住居址が発見された。住居址の形態は前述したように一般的なものであった。注目される遺物としては鋤先，刻字土器，窯印らしい刻印，５号住居址出土の銅鋺口縁は当時の使用階層及び流入経路について大きな問題であろう。祭祀時だけに用いられ，また東山道を通って入ってきたものと思われる。

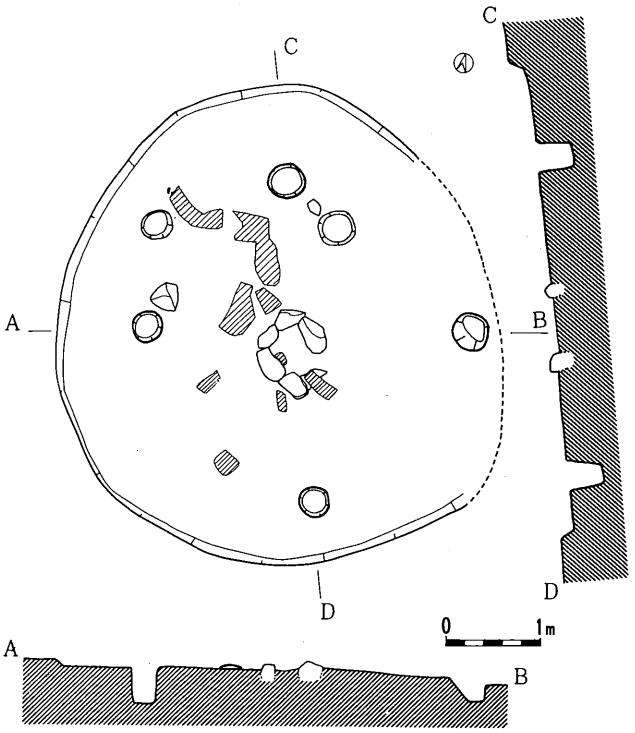
ピット列，ピット群は確かではないが，中世の遺構と思われる。

遺構外出土の遺物として縄文早期土器片，縄文晩期土器片がある。早期土器片の文様は表裏に条痕を持ち，口縁付近内外面に粗大な爪形文を施してある。これらは東海地方に派生した縄文早期末葉の粕畑式に比定できえよう。縄文晩期の土器片は数少ない。文様は口縁に平行する太めの沈線をめぐらすもの，貝殻条痕を施すものが主であった。

遺跡の北側に諏訪神社があり，この神社の本殿は諏訪宮大工二代立川和四郎作といわれ，現在，伊那市建造物指定文化財に指定されている。この神社は鎌倉時代に勢力を誇った小井弓氏の氏神として発生したと考えられている。この報告書で前述した城平遺跡とともに山の根遺跡一帯は中世城館の一角を担っているのではないかと推測される。

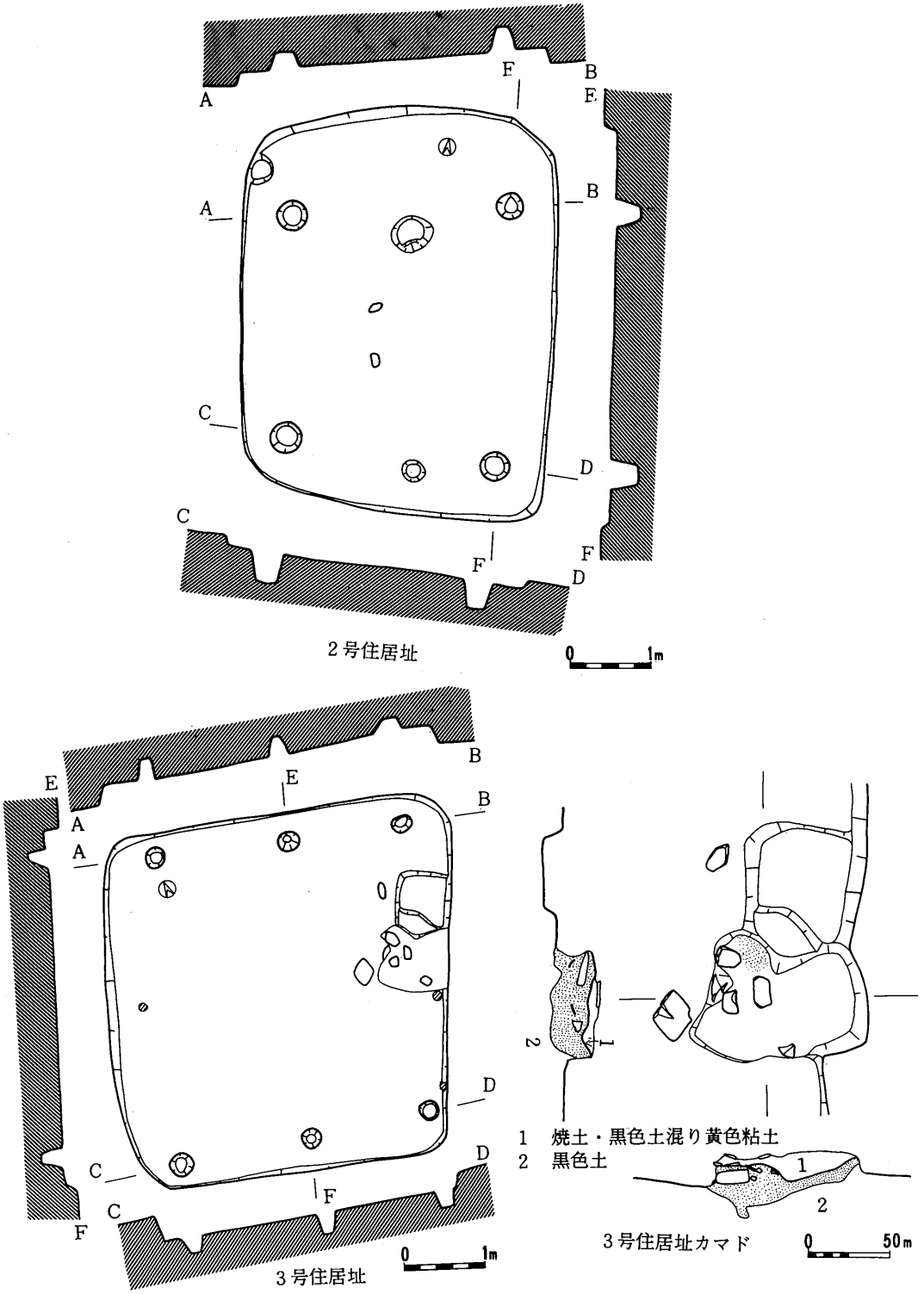


1号住居址

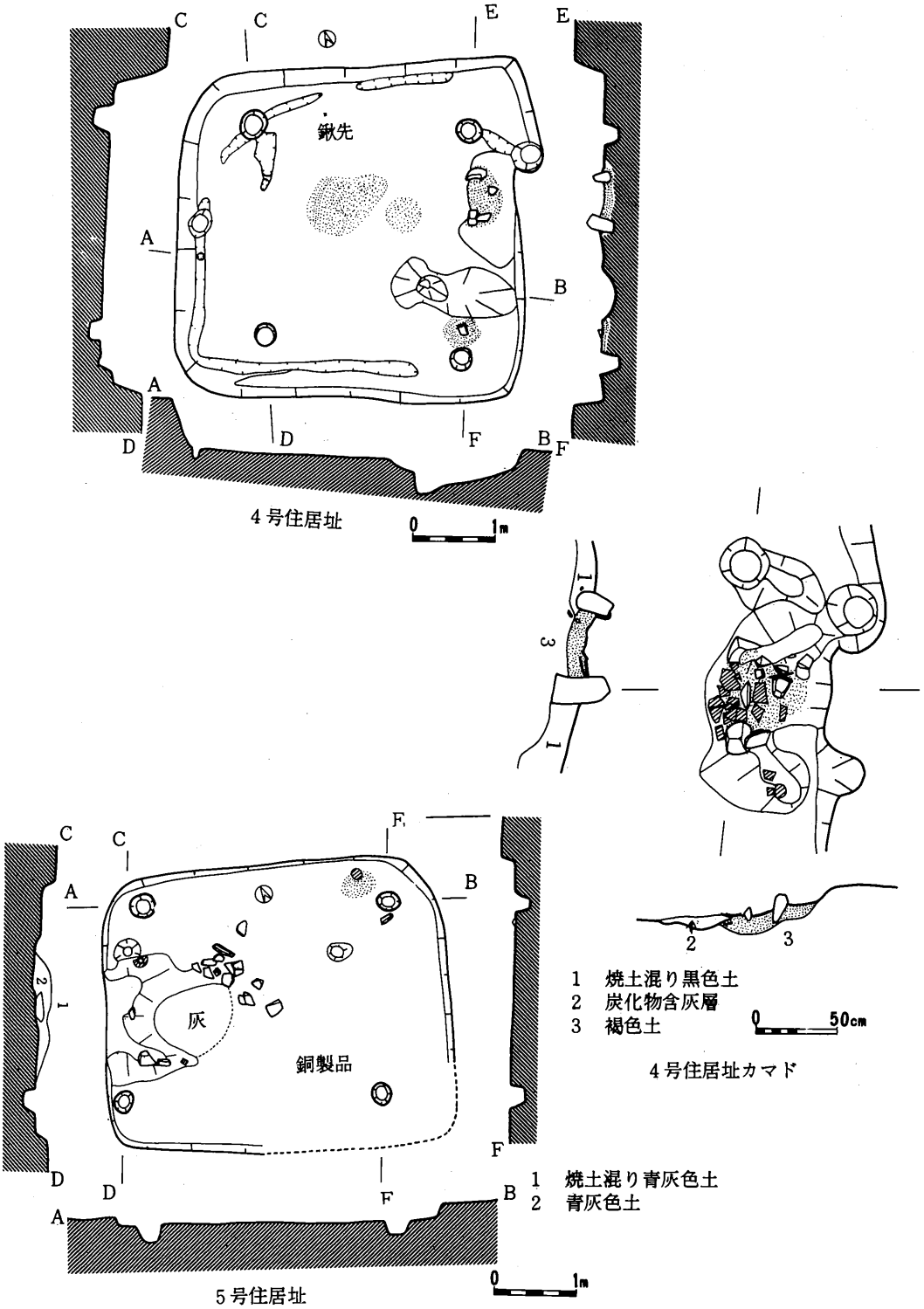


6号住居址

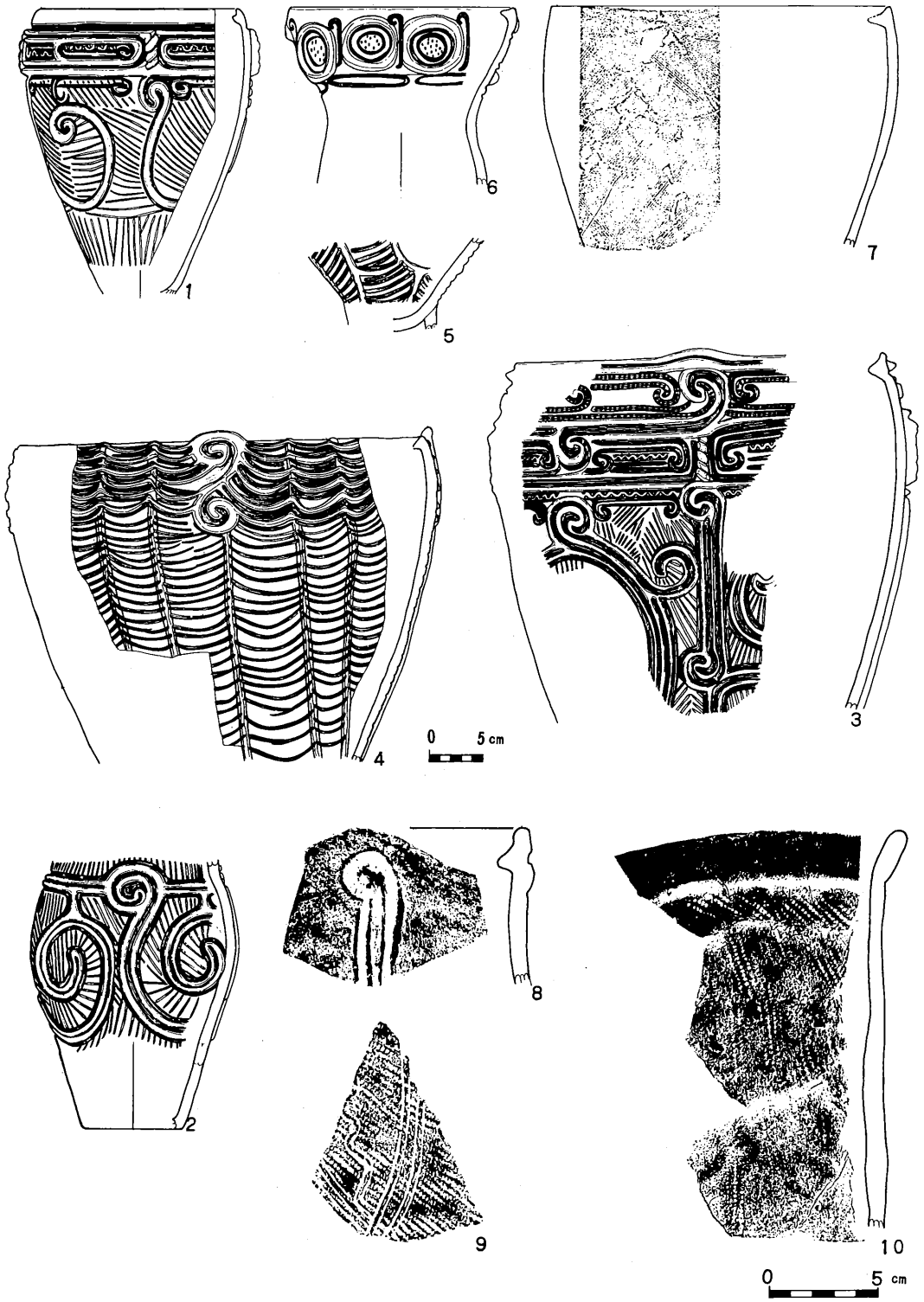
第1図　1・6号住居址実測図（1：80）



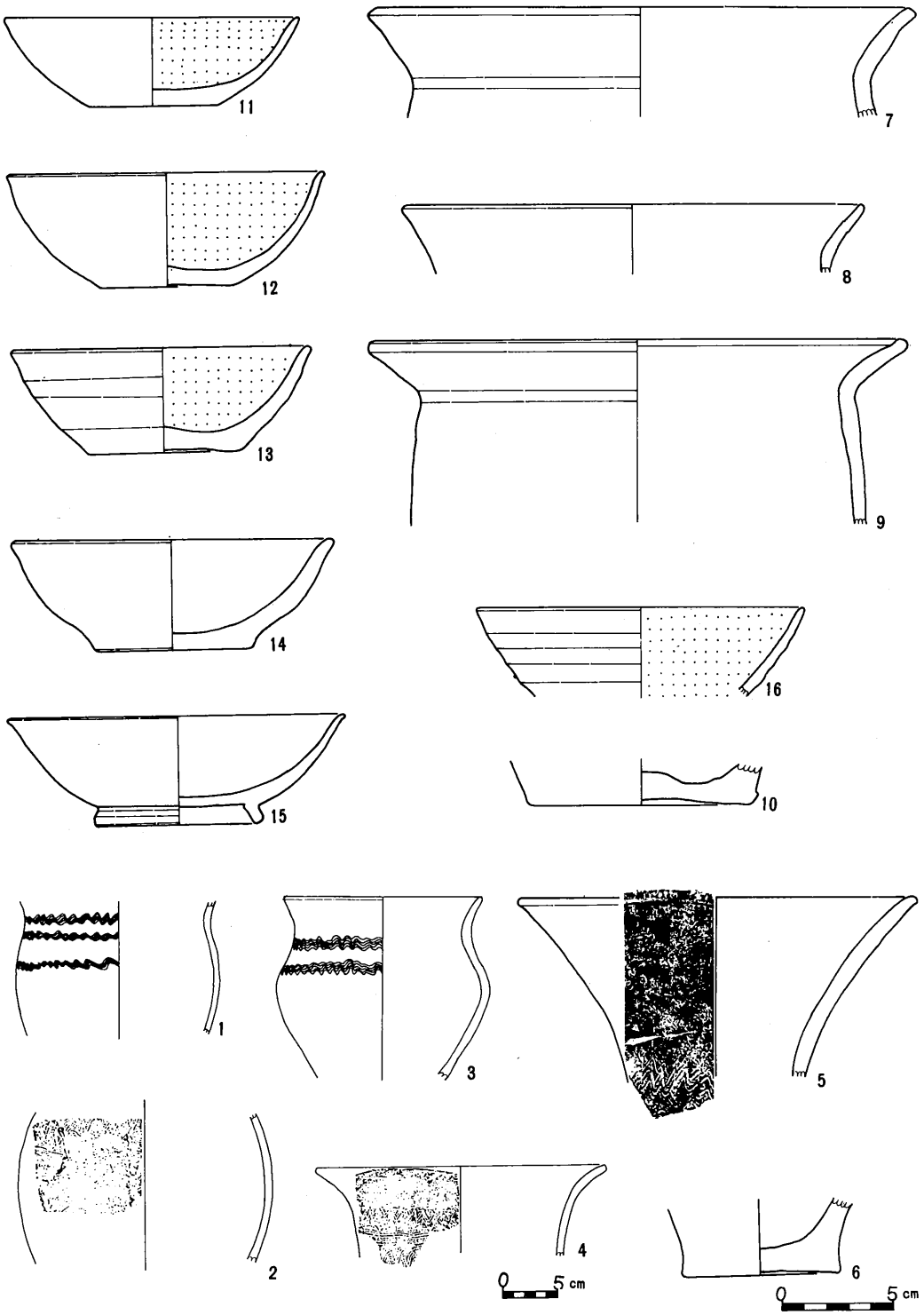
第2図　2・3号住居址実測図（1：80）



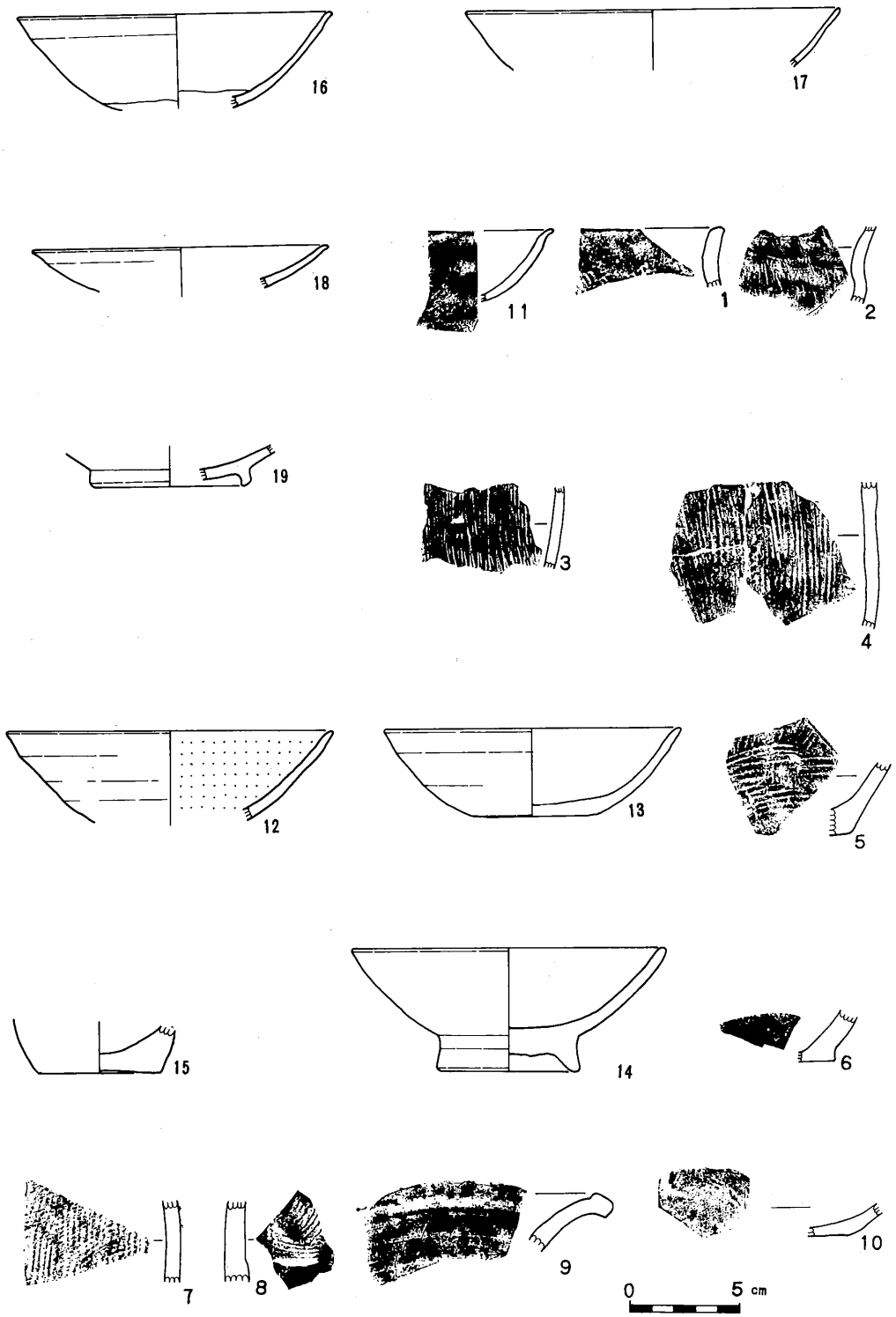
第3図　4・5号住居址実測図（1：80）



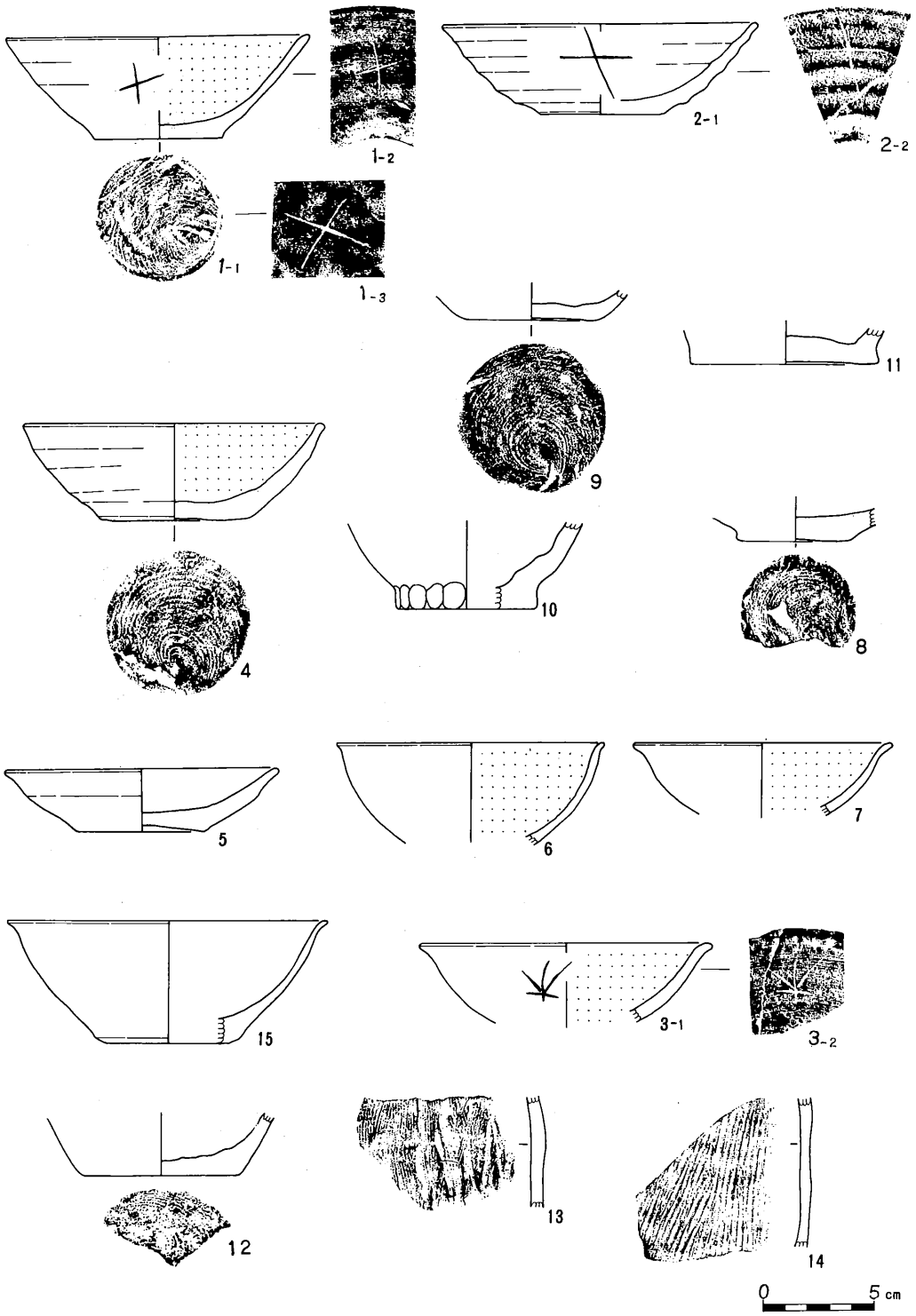
第4図　土器実測図及び拓影（1：3，1～7　1：6）（1～7　1号住居址，8～10　6号住居址）



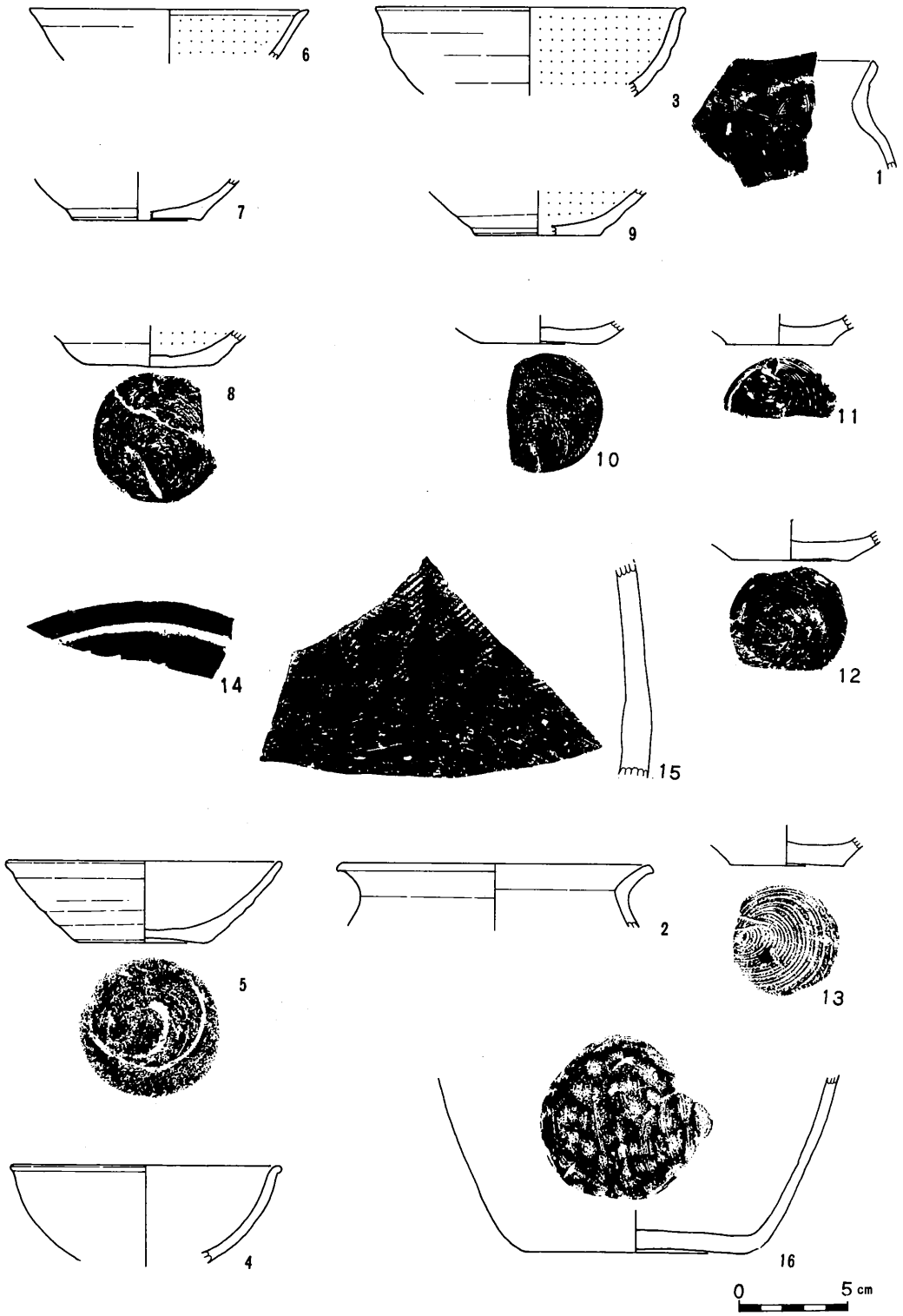
第5図　土器実測図（1：3）（1～6　2号住居址，7～10・15　5号住居址，11～14・16　4号住居址）



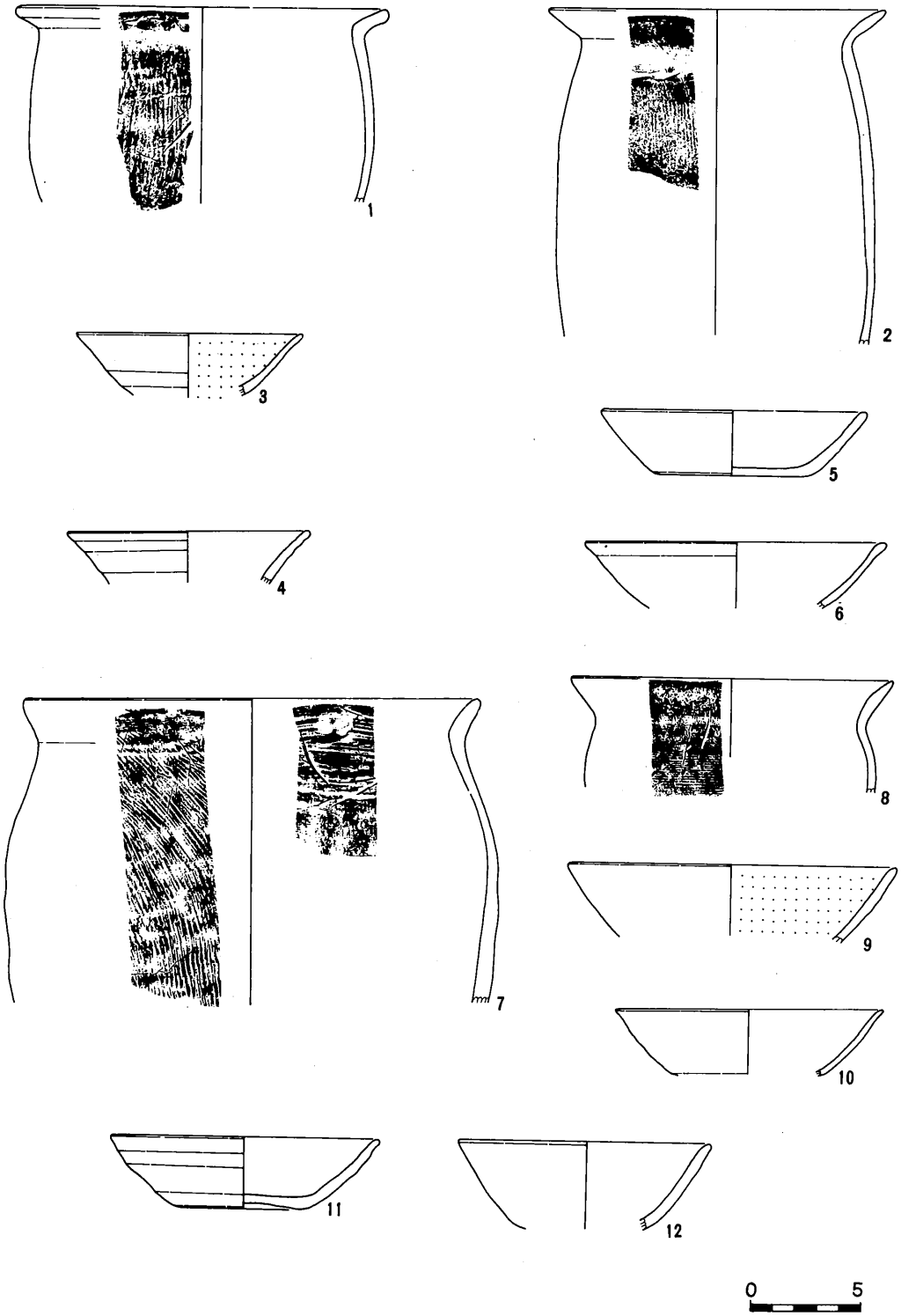
第6図　3号住居址土器実測図及び拓影（1：3）



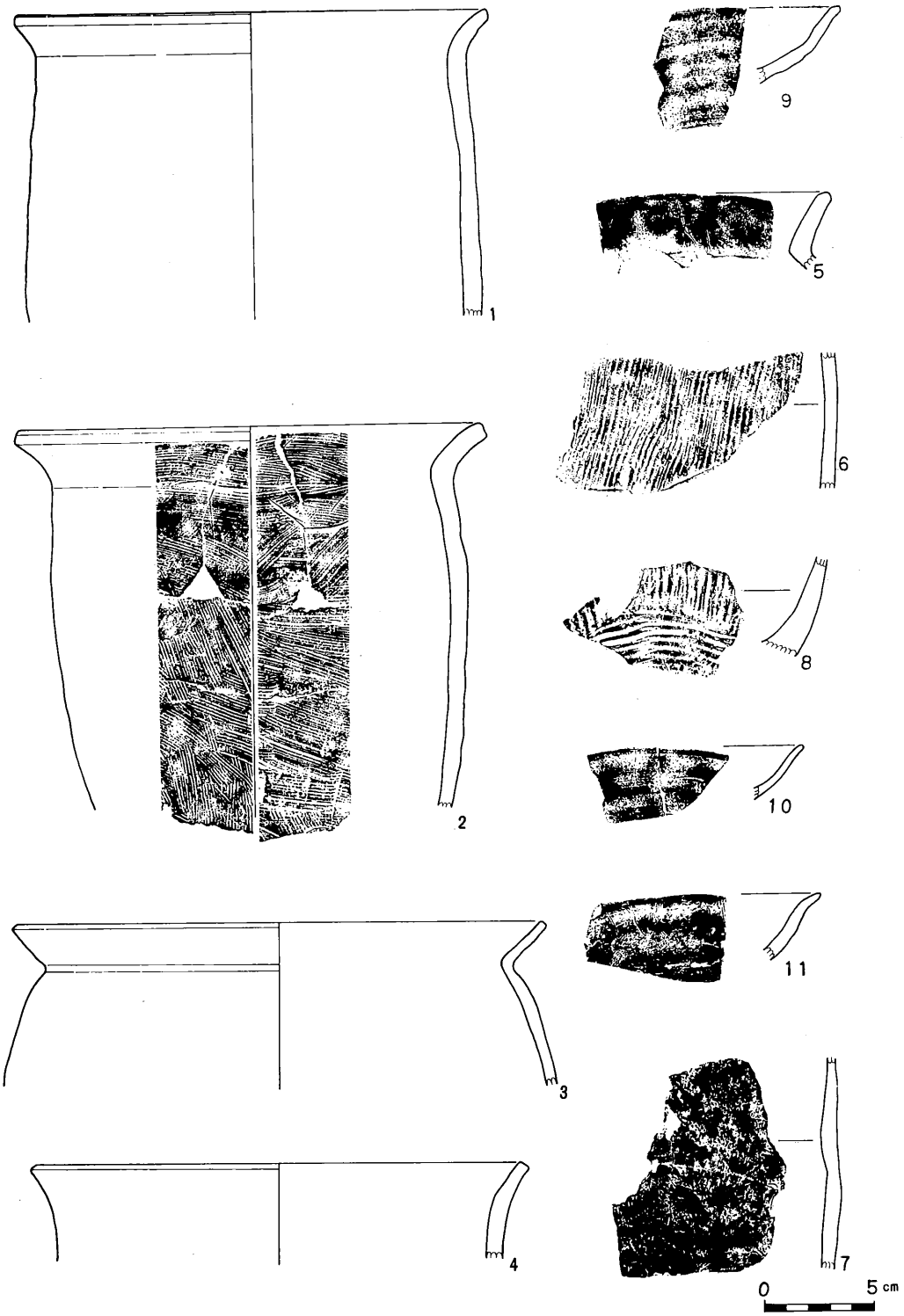
第７図　４号住居址土器実測図及び拓影（１：３）



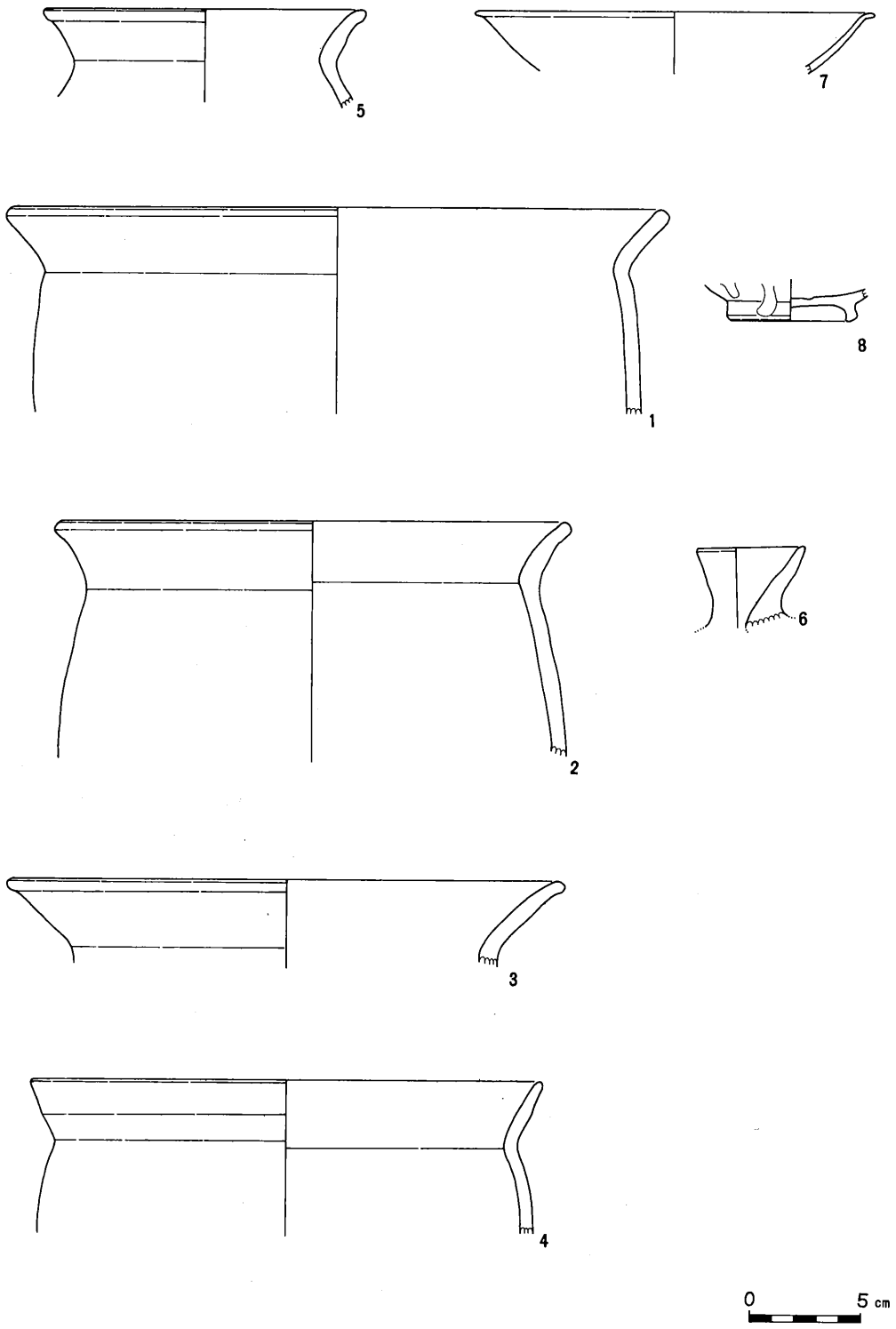
第８図　４号住居址土器実測図及び拓影（１：３）



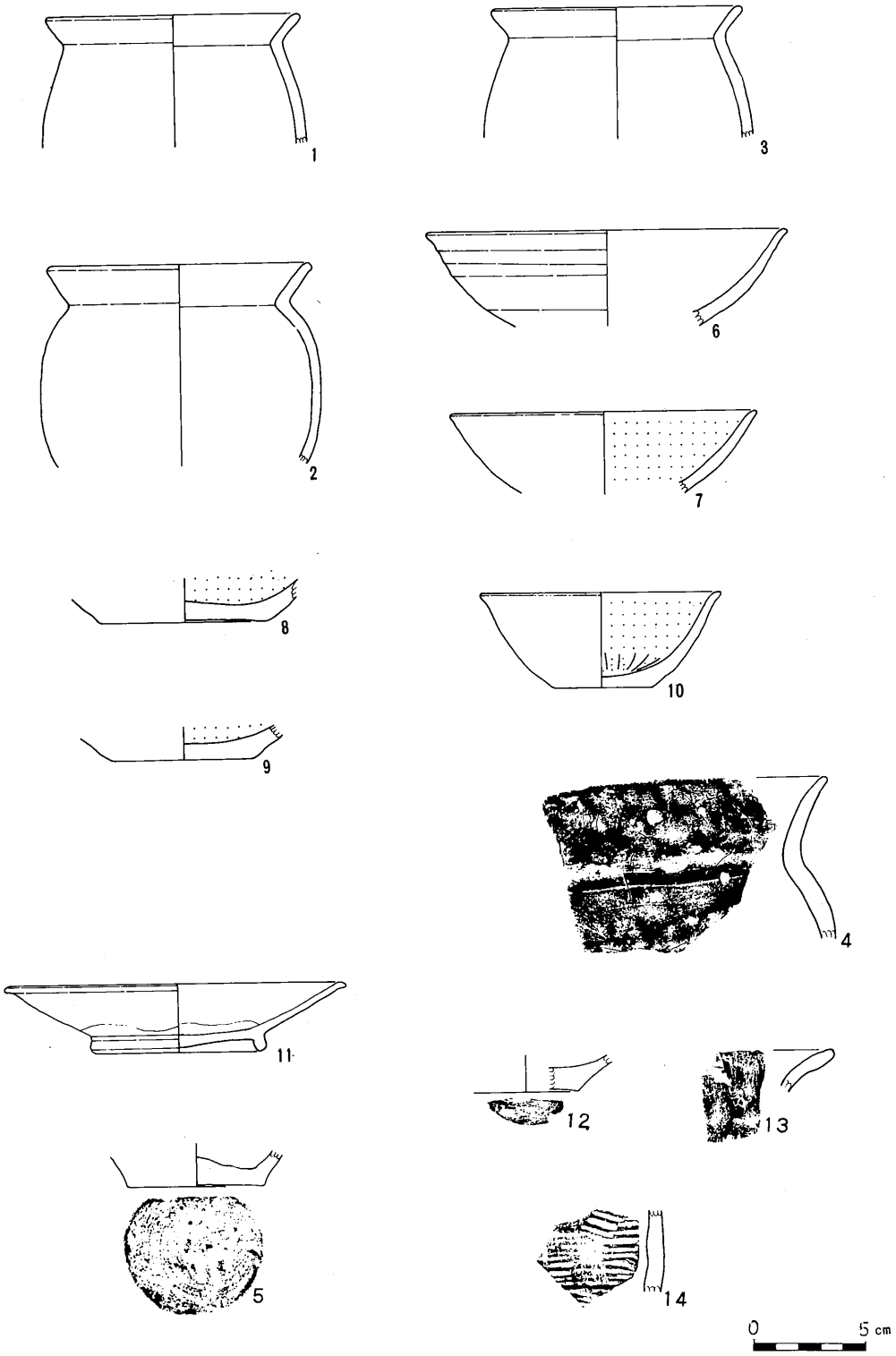
第９図　土器実測図（１：３）（１～６　４号住居址，７～12　５号住居址）



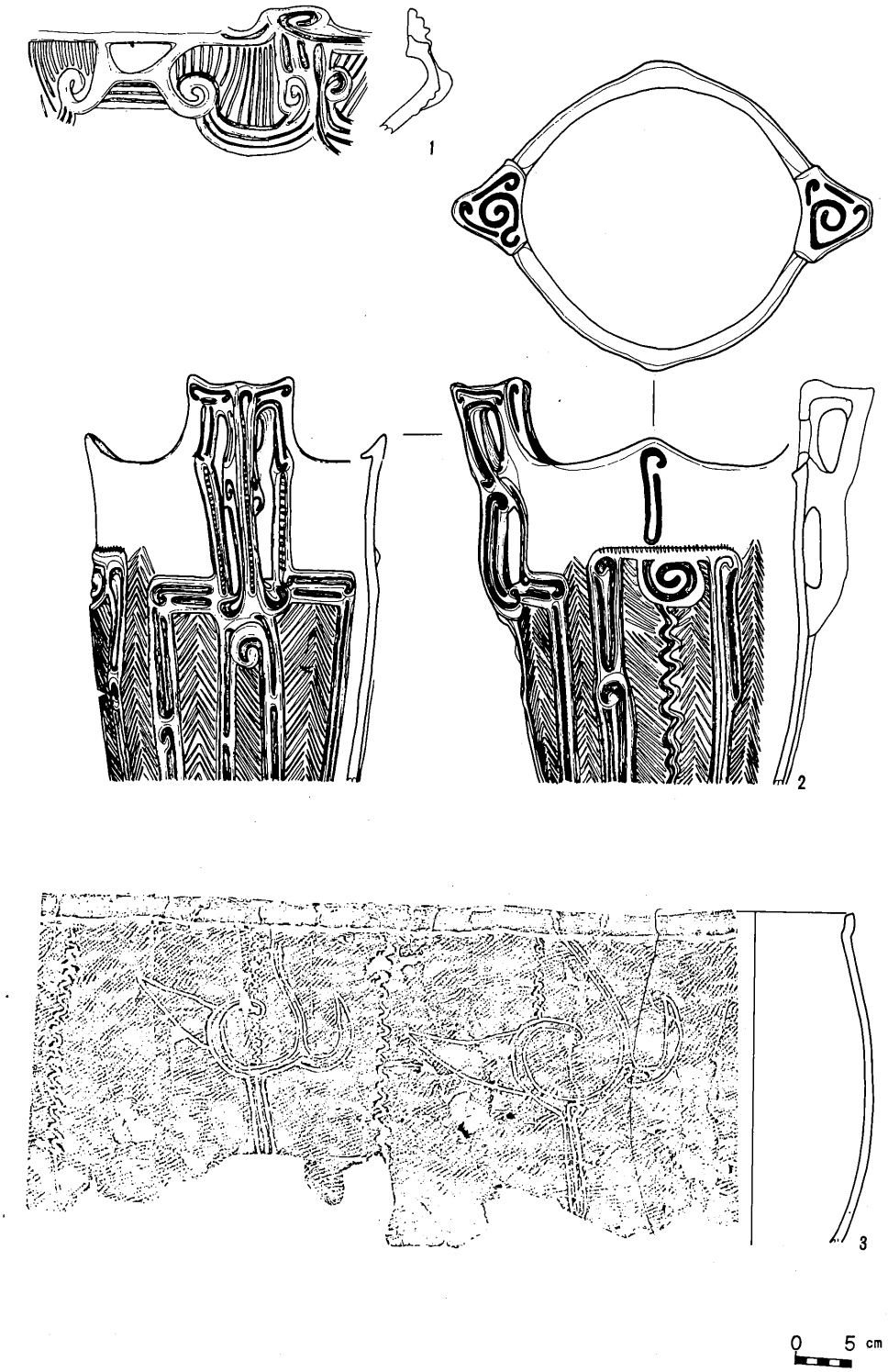
第10図　土器実測図（1：3）（1～4　4号住居址，5～11　5号住居址）



第11図　5号住居址土器実測図（1：3）



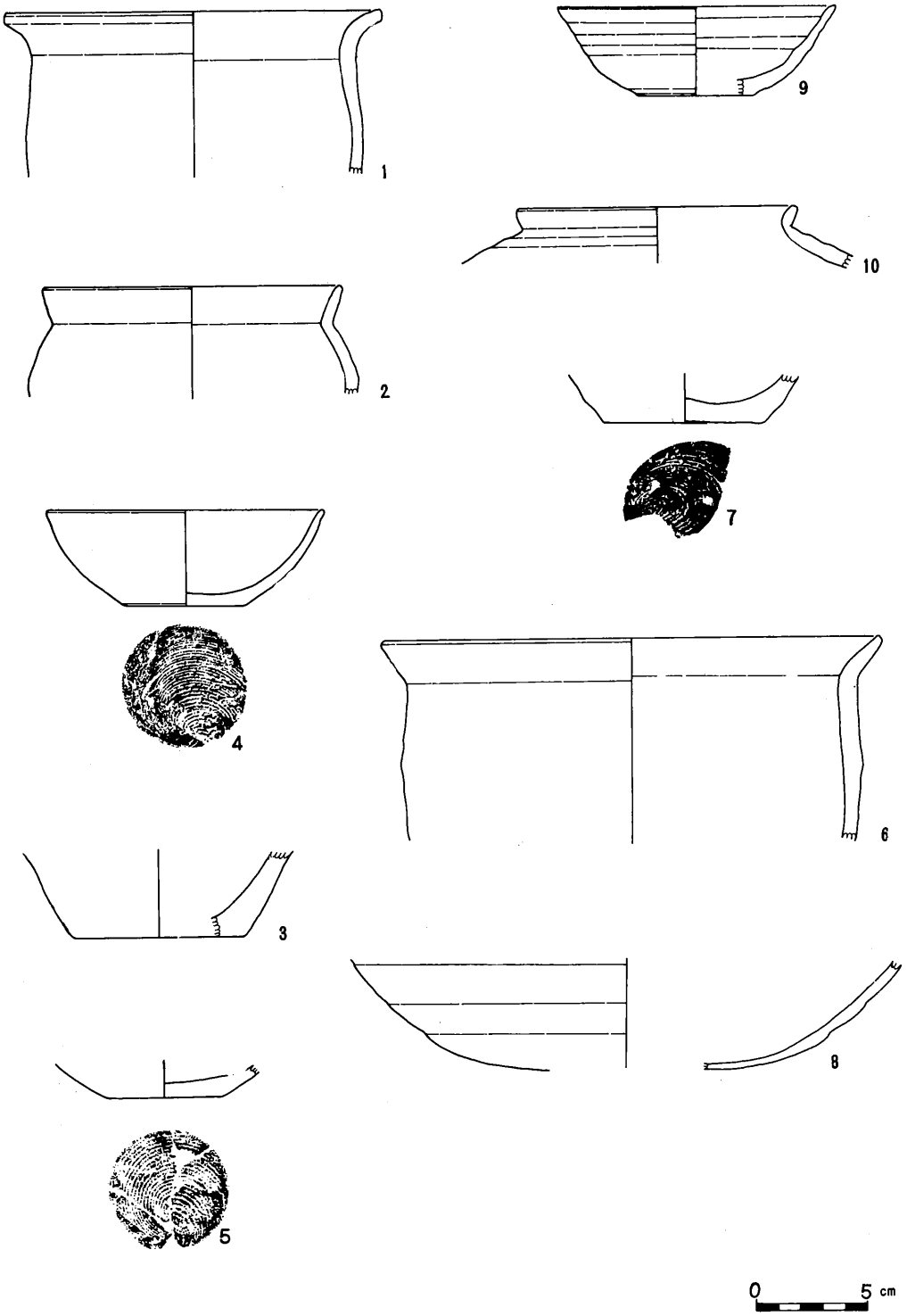
第12図　土器実測図及び拓影（1：3）（1～11　5号住居址，12～14　2号竪穴）



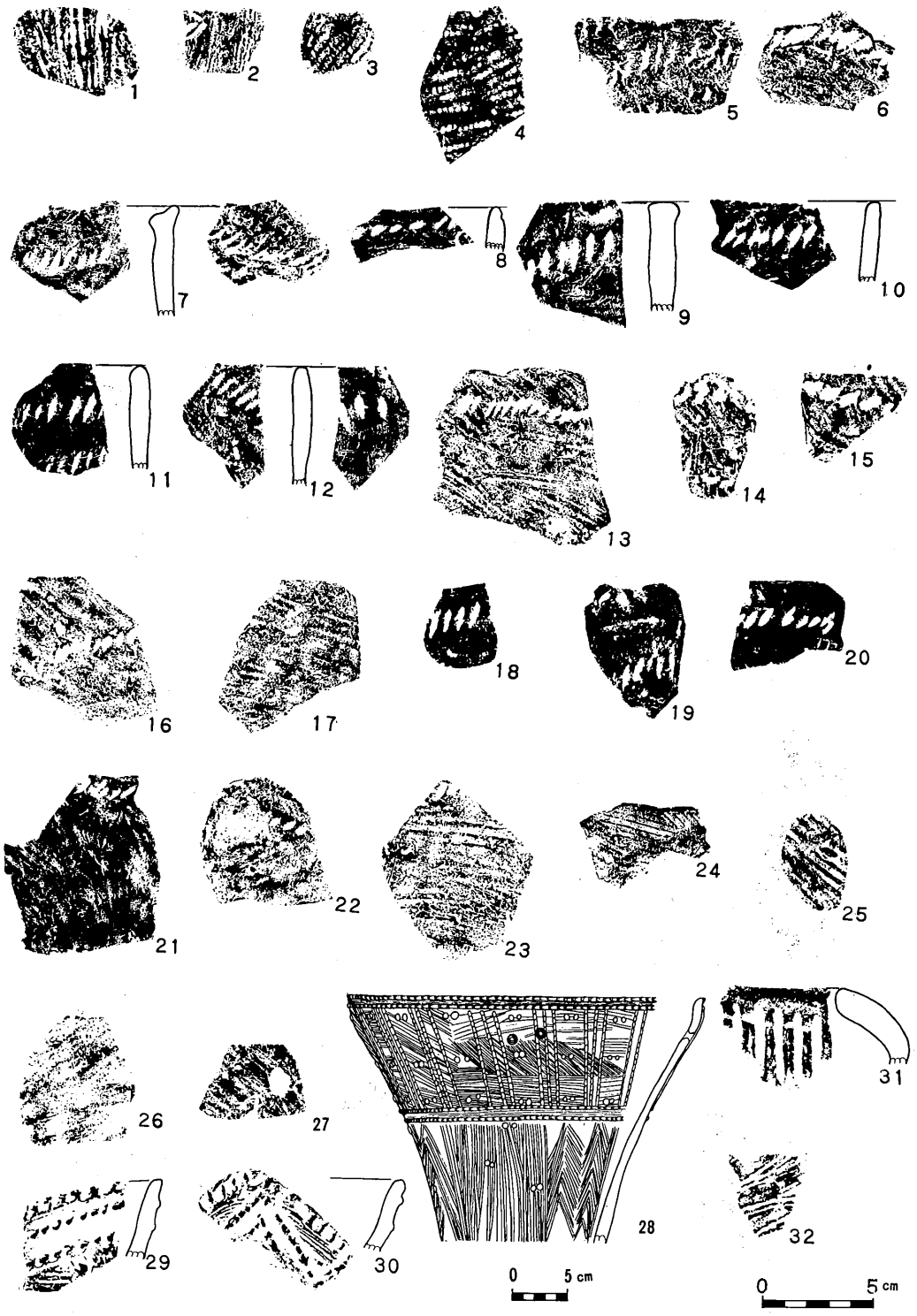
第13図　6号住居址土器実測図（1：6）

第14図　6号住居址土器拓影（1：3）

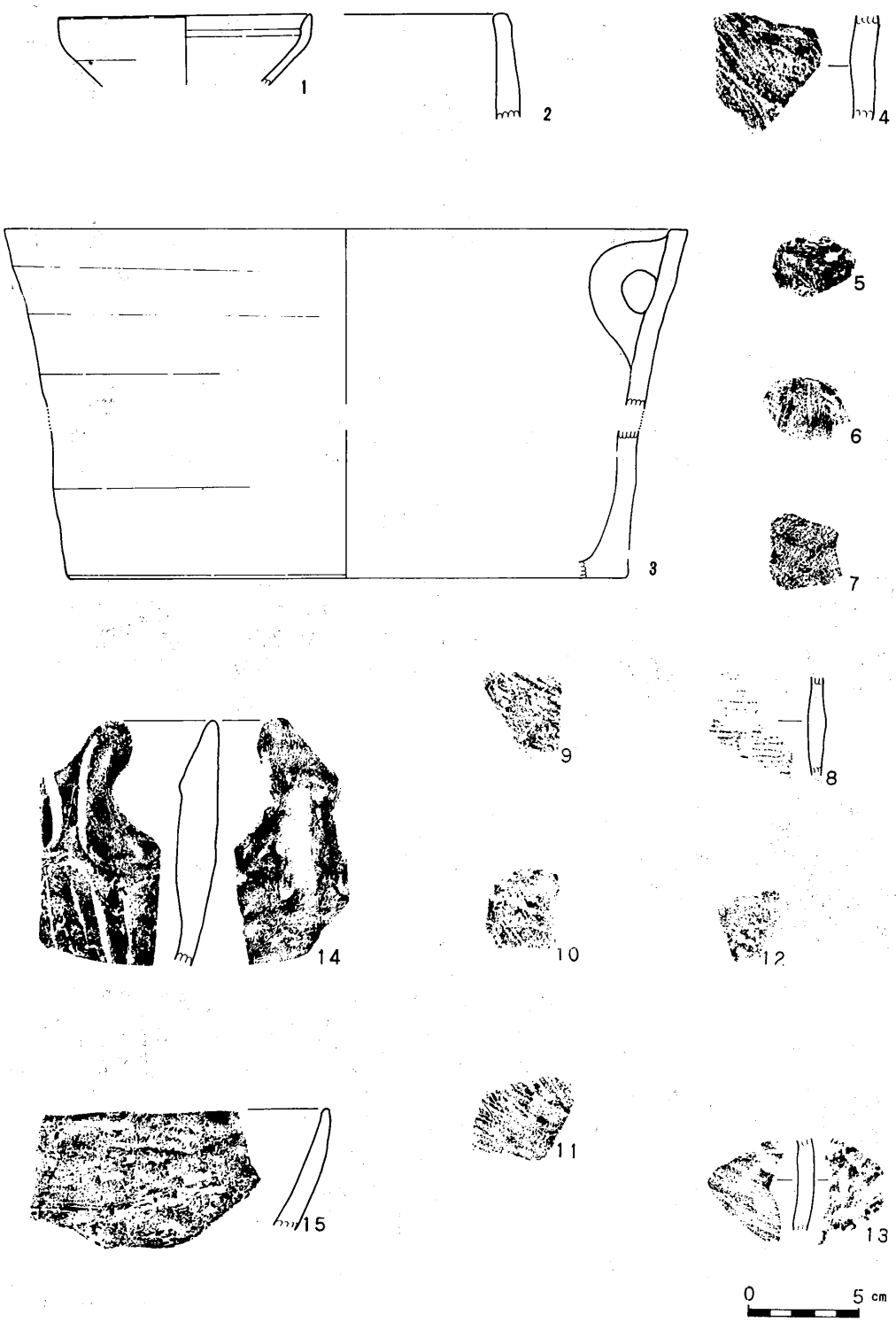
第15図　6号住居址土器拓影（1：3）



第16図　土器実測図（1：3）（1～5　7号住居址，8～10　その他）



第17図　土器実測図及び拓影（1：3，28　1：6）（31・32　1号住居址，
28　2号土壙，1～27・29・30　その他）



第18図　土器実測図及び拓影（1：3）（1・2　ピット群，3～15　その他）

第２節　第２次発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしています。伊那市においては，西箕輪，西春近，伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。

本年度は船窪遺跡，城畑遺跡，城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和56年８月31日　長野県教育委員会文化課関指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和57年５月18日　夜，ますみが丘公民館にて関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員が地主に対し，遺跡発掘調査の意義を説明し，調査に協力をお願いする。同夜は地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月４日　夜，ますみが丘公民館に於いて，前回５月18日に説明した旨を地主が納得できるように丁寧に解説する。前回同様に，同夜も地主の同意は得られなかった。

昭和57年６月15日　夜，ますみが丘公民館にて，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席して，地主側に同意を求める。同夜地主の同意が得られる。

昭和57年６月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が船窪遺跡・城畑遺跡に該当する５人の地主宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

昭和57年６月30日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和57年８月26日　山本会所にて，城平・宮林・山の根遺跡に該当する地権者に説明を行う。同夜，地主の承諾を得る。

昭和57年10月25日　地主の承諾書をいただく。

第３節　第２次発掘調査の組織

山の根遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢　一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽　映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三沢　昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉　俊彦	〃　社会教育課長
〃	柘植　晃	〃　社会教育課長補佐

調査事務局　武田　則昭　　伊那市教育委員会社会教育係長
　〃　　沖村喜久江　　〃　　社会教育主事

発掘調査団

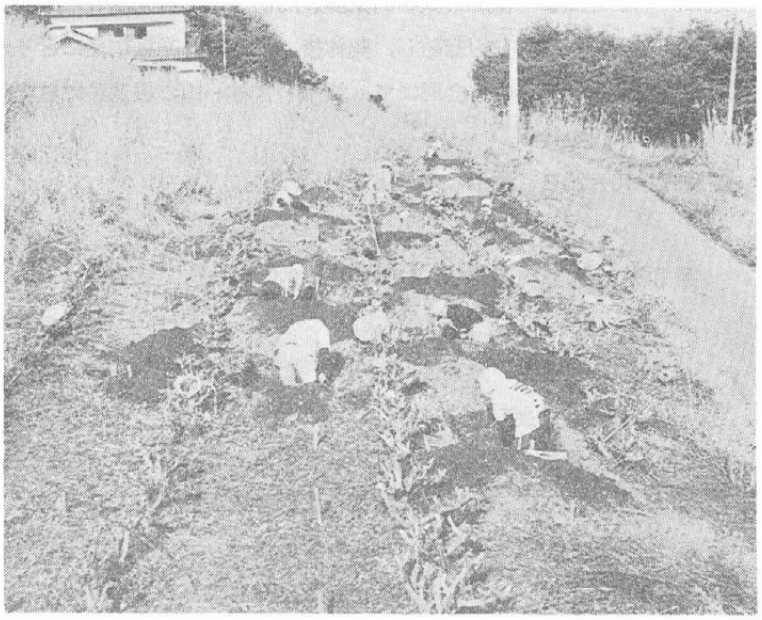
団　　長　友野　良一　　日本考古学協会会員
副　団　長　根津　清志　　長野県考古学会会員
　〃　　御子柴泰正　　〃
調　査　員　飯塚　政美　　日本考古学協会会員
　〃　　小木曽　清　　宮田村考古学友の会会長
　〃　　小池　　孝　　日本考古学協会会員

第4節　第2次発掘調査日誌

昭和57年12月4日　晴　本日より山の根遺跡の発掘調査に入る。発掘調査予定地区内は過去数年間にわたり荒らしたとみえて，雑草があり，先が見えない程であった。このような状態であったために，作業の順調なる進行を考慮にいれて，雑草と，桑切りを実施し，そのあと，切った桑と，刈った雑草を数カ所に集める。さらに現場を丁寧に清掃しておく。朝の霜が厳しくなってきて，冬将軍が刻一刻とせまってくるようである。

昭和57年12月6日　晴　昨日，清掃してきれいになった発掘現場にグリットを設定する。グリットは通常のように南から北へ1～32東から西へA～Hと決める。1辺は2m×2mとする。グリット設定が終了次第直に掘り始じめる。A1より掘り進めていく。耕土は浅く，礫層が何回にもわたって堆積していた。場所によっては掘るのにスコップは歯がたたず，ツルによって下へ掘り進めていく。このような仕末であるので作業進行は悪かった。

昭和57年12月7日　晴　本日は寒風が吹きすさび，それが肌に浸み，悲愴な一日であった。さらにグリット掘りを北へ，北へと進めていく。地層の状態は北へ行くほど，礫の大きさが小さくなる模様であり，何層にもわたる礫層の間にサンドイッチ状に黒土層が認め



発　掘　風　景

られた。

昭和57年12月8日　晴　グリットを北へ，北へと掘り進めていく。地層の状態は山麓の堆積にしては割合に統一性が保たれて堆積しているようであった。12月も中旬にさしかかろうとしているが，ここ数日間は晴天の日が続きそうであると，天気予報で報道していた。現場で労働するもの達にとってはありがたいことである。周囲の山々を夕日が赤く染めて，その光景は誠に美しく，しかも鮮明であった。

昭和57年12月9日　晴　グリット掘りを北へ掘り進めていく。一応，本日で予定された面積を掘り進めていく。掘ったグリットの面をセクションがとれるように整形する。

昭和57年12月10日　晴　本日は前日同様セクションがとれるように壁面の清掃を行う。発掘風景，遺跡地の全景，掘り上げたグリットの全景をそれぞれ写真撮影する。グリットの壁面は礫が多いためにサラサラしており，思ったよりきれいに仕上がらなかった。

昭和57年12月11日　晴後雨　断面の清掃や断面図作製のために掘り足りなかったグリットを一定の面まで掘り下げる。午後は雨が降ったので作業中止

昭和57年12月13日　晴　セクション図の作製，全測図の作製，セクションの写真撮影終了，現況復帰のため，掘ったグリットを重機にて埋めもどしを行う。

昭和57年12月14日　晴　セクション図の作製，セクションの写真撮影を行う。グリットを重機にて埋めもどしを実施する。明日の作業進行のために道具のあとかたづけをする。

昭和57年12月15日　晴，グリットを重機にて埋めもどしをする。本日で現場作業を終了するためにテントをこわし，発掘器材をまとめ，トラックにて伊那市考古資料館へ運搬し，整理・整頓しておく。

昭和57年12月18日　現場の点検を行う。

昭和57年12月～昭和58年2月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

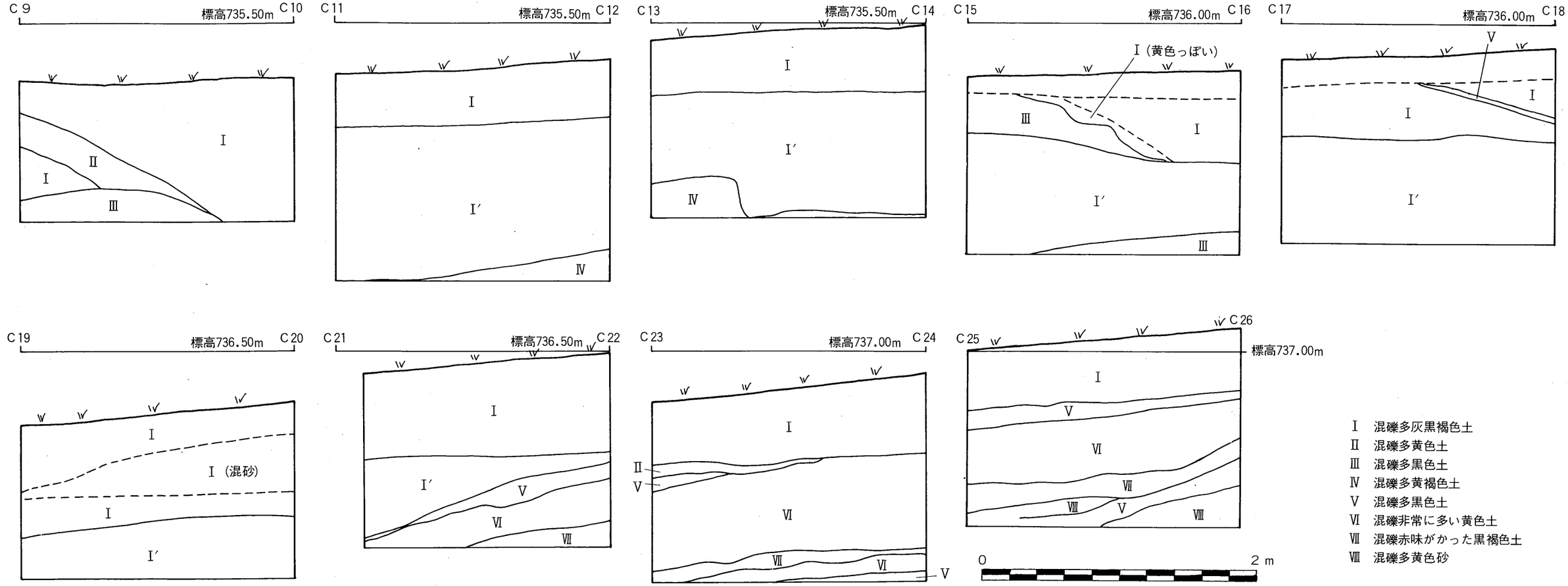
昭和58年3月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）

第Ⅱ章　層　　位

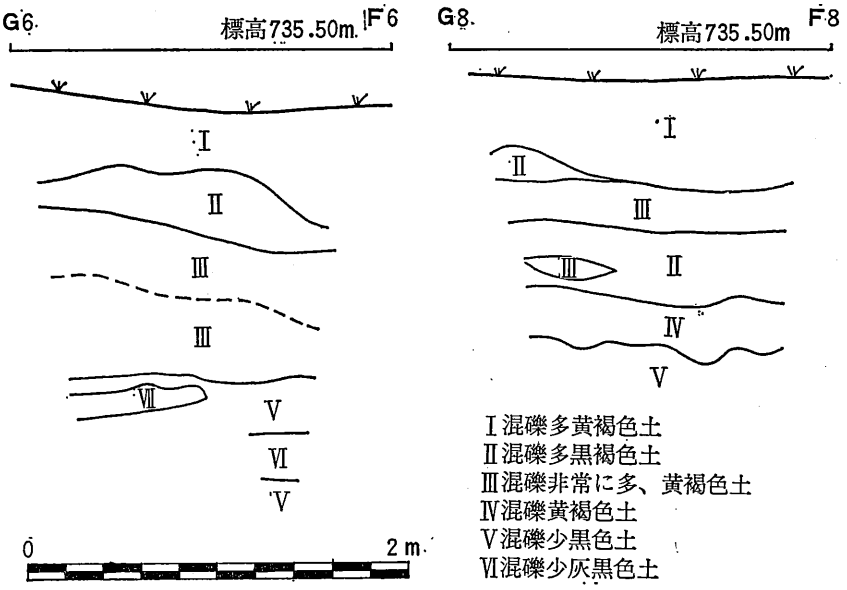
山の根遺跡の地層は西方山麓線よりの押し出しが強く，また，何回にもわたって堆積したとみえて，礫混じりの状態が多い様相を呈していた。地層の堆積状況はその押し出しの強弱によって厚くなったり，薄かったりしている。

現段階で表土面より１m40cm位掘ったわけであるが，まだ礫混じりの層が下位まで堆積しているように推測できる。今までに掘り下げた土層は上から混礫多灰黒褐色土，混礫多黄色土，混礫多黒色土，混礫多黄褐色土，混礫多黒色土，混礫非常に多黄色土，混礫赤味がかった黒褐色土，混礫多黄色砂であった。

全般的にみて，礫は小さ目であり，しかも長い間流れてきたとみえて，角がとれて丸味を呈していた。


C 9
標高735.50m
C 10
C 11
標高735.50m
C 12
C 13
標高735.50m
C 14
C 15
標高736.00m
C 16
C 17
標高736.00m
C 18
I（黄色っぽい）
C 19
標高736.50m
C 20
I（混砂）
C 21
標高736.50m
C 22
C 23
標高737.00m
C 24
C 25
C 26
標高737.00m
0
2 m
I　混礫多灰黒褐色土
II　混礫多黄色土
III　混礫多黒色土
IV　混礫多黄褐色土
V　混礫多黒色土
VI　混礫非常に多い黄色土
VII　混礫赤味がかった黒褐色土
VIII　混礫多黄色砂

第19図　土層柱状図

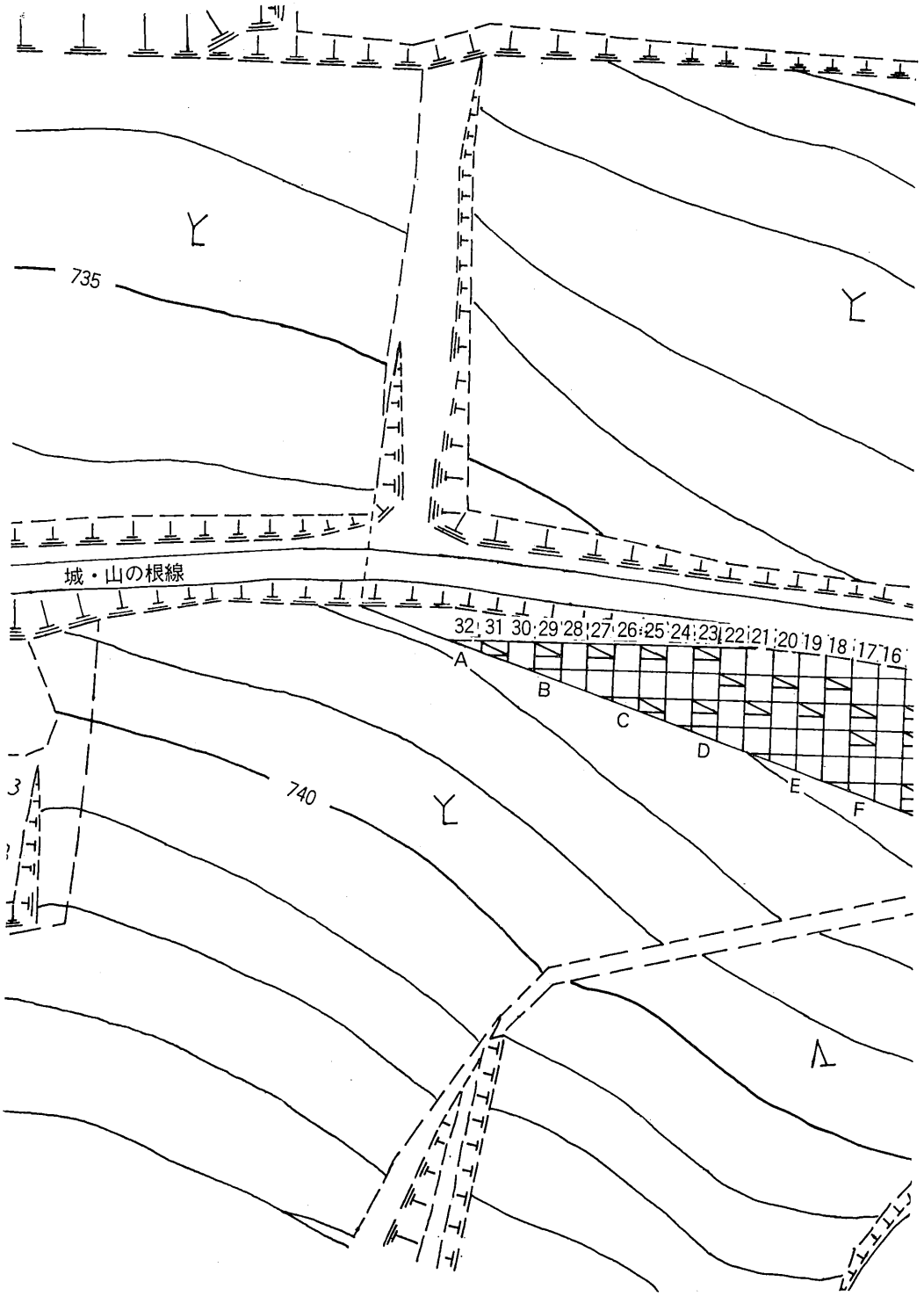


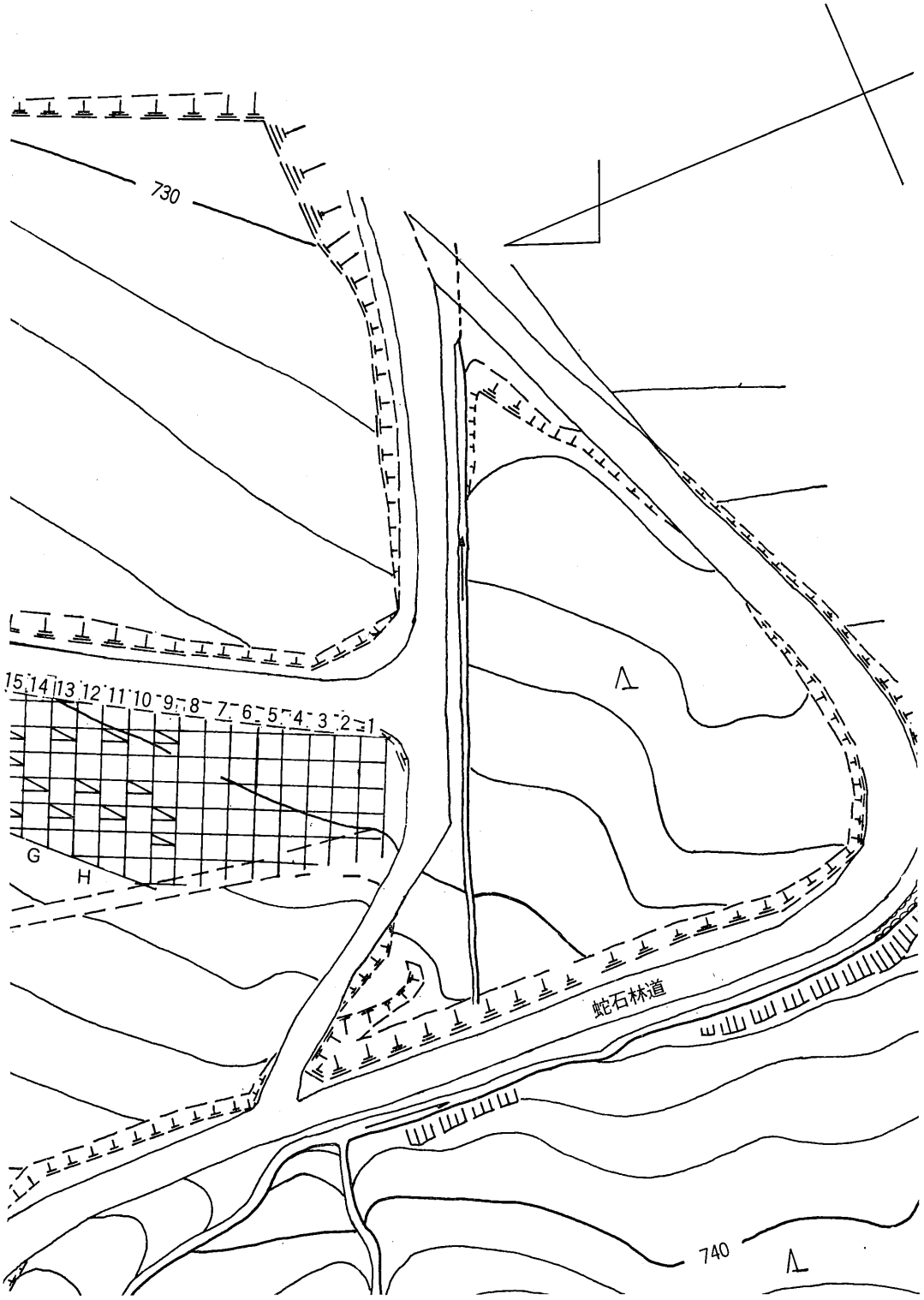
第20図　土 層 柱 状 図

第Ⅲ章　遺　　構

今回の発掘調査では限られた用地内の発掘であったために遺構は何も検出されなかった。今回の発掘地点より東へ約100m行った所に現在，南北に中央高速自動車道が通っている。昭和47年度に中央高速自動車用地内を発掘調査を実施した。その成果については先に述べた通りでありました。従って，この地域を広範囲に発掘調査を実施すれば多くの遺構及び遺物が検出されることはまちがいないと断定できる。

（飯塚政美）


735
城・山の根線
32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
A
B
C
D
E
F
740


730
15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
G
H
蛇石林道
740

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器（第22図，図版4）

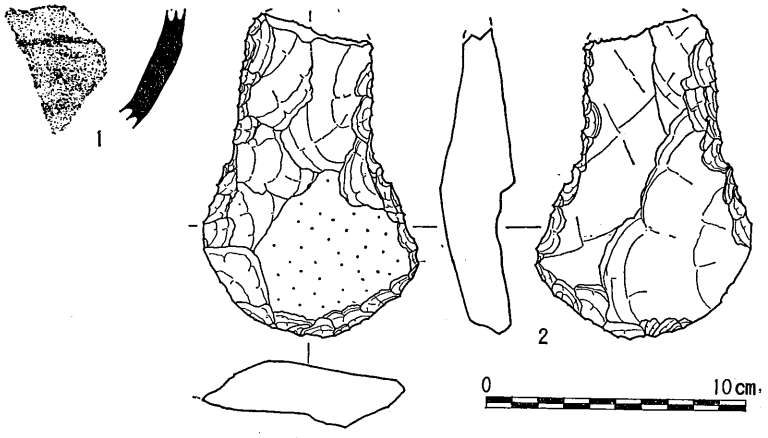
本土器はE17グリットより出土した胴部付近の土器片であると思われる。文様は無文地であるが，器の表裏面にわずかに横位擦痕が入っている。色調は明黄褐色を呈し，焼成は悪くて内面はボロボロしている。

胎土中に長石粒がみられる。縄文中期の土器と思われる。

第2節　石　　器（第22図，図版4）

本石器はC9グリットより出土した。下端部が極端に開く撥形の打製石斧であり，頭部は欠損している。硬砂岩の自然石を何回も打ち欠いて調整したものとみえて，刃部の調整も丁寧にしてある。縄文中期頃に位置づけできよう。

（飯塚政美）



第22図　土器拓影及び石器実測図

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の発掘調査は調査地区が限定されていたために，遺構の検出は何もなかった。付近の地形，及び歴史的背景からしてみて，もう少し，広い範囲の調査が可能であったならば、多くの遺構・遺物が検出されたことはまちがいないと思われる。その裏付けとして，第１次発掘調査結果で記したように昭和47年度に実施した中央道発掘調査には前述したような多くの遺構・遺物の検出をみた。

今回の発掘では土器，石器がそれぞれ１点ずつ出土している。双方とも縄文中期に位置づけられる。土器は無文であって，細分した形式は不明である。石器は硬砂岩を利用した打製石斧で撥形を呈し，上部は欠損している。　（飯塚政美）

図　　版

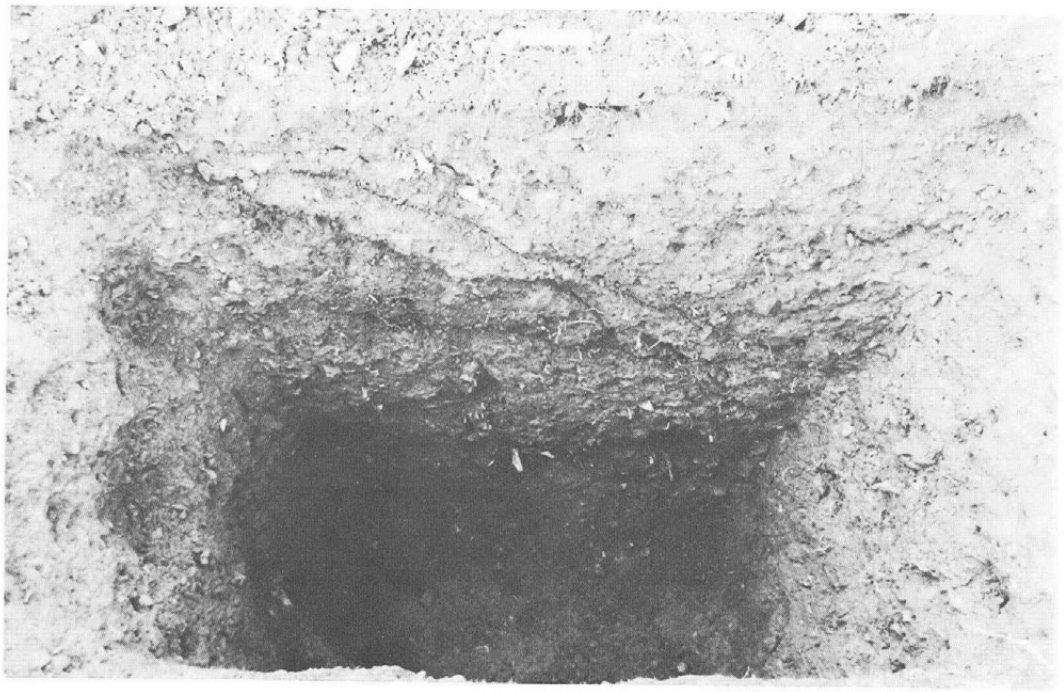
図版1　遺跡全景

遺跡地遠景（南側より眺む）

遺跡地遠景（北側より眺む）

図版2 土層

土層



土層

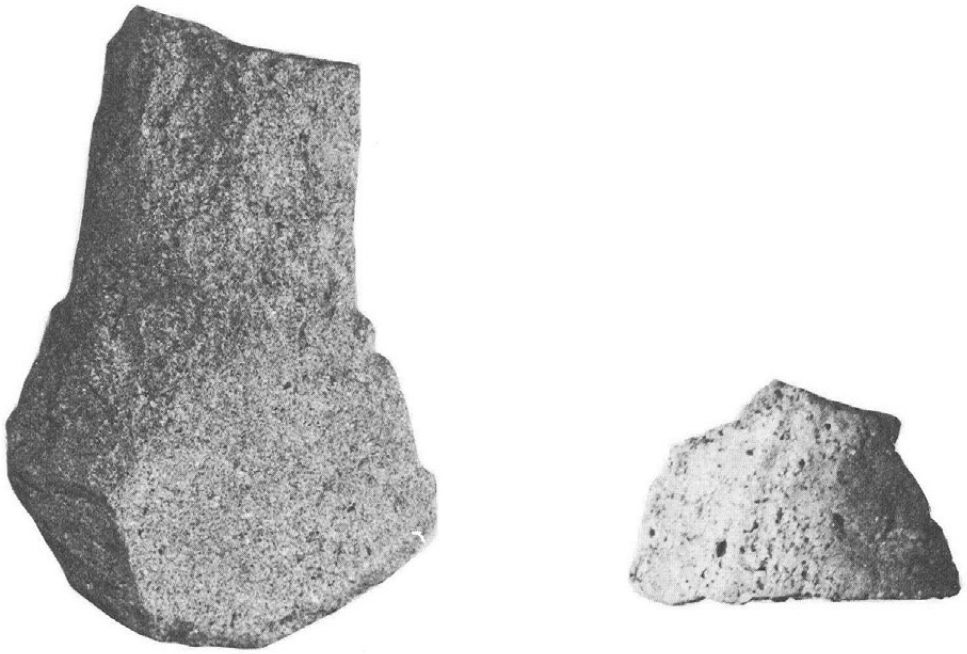
図版3　土層及びグリッド発掘状況

土層

グリッド発掘状況

図版4　遺物出土状況及び出土遺物

土器出土状況



出土遺物

船窪・城畑・城平
宮林・山の根遺跡
——緊急発掘調査報告——

昭和58年3月15日　印刷
昭和58年3月17日　発行
発行　長野県伊那市教育委員会
印刷　ほおずき書籍株式会社